
ぬるい恋愛

美位矢 直紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬるい恋愛

【NZコード】

N5325D

【作者名】

美位矢 直紀

【あらすじ】

誰の為の恋なのか？何の為の愛なのか？時に自虐的に、時に卑怯に、理想の女性を追い続ける“涼介”。譲れない理想とは？人の心に届く情熱とは？10年前に別れた恋人への思いを引きずつたまま、恋愛という、人間にとつて必要不可欠な領域を泳ぎ回り、しかしどんな時も自分が傷付かない道を選ぶ涼介の「ぬるい恋愛」「情熱」という、理想というmelancholyの行方は・・・。

1・・・・魔(アハラ)へ心(温書也)

1・・・・嘯（ひやぶ）く心

1・嘯く心
うそぶ

（こ）のまま暫く付き合ひの事も出来る・・・来週振られようと思えば
それも出来る・・・。）

涼介はハンドルから手を離し、瞼を閉じていた。
(ほんと腐った野郎だ・・・。)

まゆみの気持ちなど丸で考えず、まゆみの心を踏み躡る場面だけ
を“いけしゃあしゃあ”と考えている自分のぬるい心に嫌気が差し
た涼介は、心中でそう吐き捨てた。

（・・・今朝あんなに強い日差しで起こされたつてのに・・・。）
自分の醜い算段から逃避する様に、涼介は目の前に重く広がるミ
ディアムグレイの低い空に視線を投げ出した。

車は旧10号線からバイパスへ合流する交差点の最前列で信号待ちをしていた。

青く光っていた歩行者用信号は点滅を始めていた。

（・・・・・。）

視界の隅に入り込んで来た青色の点滅に一瞬目を向けた涼介は、
再び瞼を閉じた。

（・・・両方とも駄目だ、今日別れよつ。）

アクセルを踏み込む前に結論を下した涼介の心は、空の色と同じ
位鈍よりとしていた。

（・・・涼介、何考えてんだろ・・・。）

綺麗な姿勢で助手席に座り、涼介が創る会話の無い空間を心地良

く受け入れているまゆみは、時折澄んだ瞳を涼介に向け、この先ずっと涼介から貰えるだろう愛情に寄り添つて行く自分の未来を想像していた。

「俺、雨とデブ嫌いなんだよ。」

二人の間に続いていた沈黙を画する涼介の最初の言葉は、優しさとは無縁の、自身の感情をそのまま口にする事に吟味も躊躇いも無い安易な自己主張だった。

「・・・私も雨は好きじゃない。」

「なんかデリカシー無いでしょ？ 雨もデブも。」

「・・・ひどい人ね。」

「・・・でも好きでしょ？」

「・・・自信たっぷりね。」

「でも、好きでしょ？」

涼介はまゆみを一度も見る事無く同じ言葉を淡々と重ねた。

「・・・。」

涼しく核心を突く涼介の意地悪な問い掛けに、まゆみは恋心を更に心地良く捩じ伏せられ、涼介の横顔から視線を外せなかった。

「・・・軽くメシでも食つとこつか。」

予想外に車の流れが滞っているバイパスを嫌つた涼介は、会話の脈絡を無視し、再び安易な自己主張をした。

「うん・・・。」

「渋滞避けよ。」

「・・・うん・・・。」

まゆみは穏やかな表情で涼介を見つめていた。

(・・・何あんな事言つちまつんだ・・・駄目だな俺は・・・。
くそつ、仕方ない・・・。)

涼介は再び自分を吐き捨てた。そして吐き捨てた自分を庇護し、開き直り、横顔に刺さり続けるまゆみの視線に笑顔を向けた。

「・・・。」

まゆみは涼介の笑顔に満面の笑みで答えた後、満足した様にゆっくりと街並みに視線を変えた。

「・・・・・。」

涼介はまゆみが残した意味有り気な余韻に、暫くまゆみの横顔を見つめさせられていた。

(・・・恋愛ってのは夢とか希望とか、情熱とか理想とか、そんな様な物を振り翳してゐる内は空回りするだけかも知んないな・・・)
正面に向き直った涼介は自分の傲慢な素性を棚に上げ、まゆみの意図的な行動に心の中でそう嘯いた。^{うそぶく}

車内は静かだった。

まゆみはサイドブレーキの辺りに雑然と重ねられているCDを一枚一枚手に取っていた。

(・・・家まで送つてくなら西公園降りた辺りだし、駅迄なら食後の車の中だな・・・。)

涼介は視界に捕らえているファーストフード店迄の距離を流麗に縮められない事に少し苛立ちながら、まゆみに別れを告げる場面を考えていた。

まゆみは中央区の唐人町に住んでいる博多の女性だった。涼介の住む小倉とは都市高速道路、九州自動車道と繋いでも70分近くの距離があった。

「ミスチル、好きなの？」

CDの中から“Mr. children”を見つけ出したまゆみは、無邪気な笑顔を涼介に向けた。

「・・・そうだね。」

涼介は前を向いたまま笑顔を作った。

「何か意外だね・・私もミスチル好き。」

まゆみはそう言つて嬉しそうにCDをプレーヤーに差し込んだ。
(・・・降つて来たな・・・。)

涼介はまゆみの言葉を拾わず、フロントガラスに姿を現した雨に

心の中で舌打ちをした。

涼介は一人の女性を傷付ける事の重大さを真摯に受け止め、同じ過ちを一度と繰り返すまいとする自戒の心を然も当たり前の様にずっと等閑にしたまま、まゆみに切り出す別れ話のタイミングと、別れを告げた後、まゆみが車から降りる迄に交わすだろう言葉の選び方や使い方と向き合っていた。

まゆみは微笑を滲ませていた。

10月19日の日曜日、午後3時過ぎ、小倉市街へ繋がるバイパスは渋滞が始まっていた。

雨粒は街の至る所で弾け合い始めていた。

車内には“Mr. children”のメロディと、この先ずつと交わる事は無いだろ? 一人の思惑が漂っていた。

「・・・ぬるいな。」

邪魔な雨を拭うワイパーのスイッチを入れた時、涼介は心の声を思わず口にした。

「えっ? 何か言った?」

「・・・いや、何でもないんだ。」

涼介は正面を向いたまま努めて自然にそう答えた後、まゆみと一度視線を交わし、ドリンクホルダーのボルビックにゅっくりと手を伸ばした。

1・・・・恋（「ハヤシ」）へ心（後書き）

「ぬるこ恋愛」を読んでいただき、ありがとうございます。

アフオリズムとシークансスを意識しました。

「恋愛」を取り巻く男女の心理の中に在る、ぞんざいた部分を追求出来ていれば幸いです。

2・・・耽(ふけ)る前夜(前書き)

2・・・耽(ふけ)る前夜

2・耽る前夜

(多分女性は親密になると何でも話せる間柄になりたいと思うんだ
ううな・・・。しかし男はどうなんだろ?、何も話さなくても分か
り合える関係になりたいって思つてゐるんじゃないだろうか・・・。
いいのかな、それでお互い・・・。自分はどうなんだ?・・・)
ベッドの中でそんな事を考えていた涼介は、ゆっくりと首を右側
に動かした。

同じベッドの中で、まゆみが眠つていた。

(realismとromanticism・・・communication
and conversationか・・・。)

涼介は視線を天井に戻し、胸の上に置いてあつた両手を頭の下で
組んだ。

(喋りたい女と会話したい男・・・つて、誰かが言つてたな・・・。)

涼介の自問自答の対象はまゆみだけではなく、過去、縁のあつ
た女性にも向けられていた。

(何だか色々喋つてる彼女に、優しいつもりで適当に相槌を打つて
た彼が“んな事どうでもいいじゃん”みたいな素振りをどつかで見
せちゃうと、“もう私の事あんまり好きじゃないのね”か、“聞い
てよ、折角喋つてんのに!”の、どっちかだもんな・・・・・・・
悲劇のヒロインと遠くを見つめる詩人・・・三つも四つも喋つてん
のに何も語つてない女と、一つだけで三つぐらい語りたい男・・・。)

涼介は恋愛における男女の相互理解という普遍の命題を他人事のように捉え、耽っていた。

「ふーっ・・・・。」

涼介は大きな息を一つ吐き、体を起こした。そして枕元の煙草に手を伸ばし、火を付けた。

（・・・何でこんなに寝顔つて優しいんだろう・・・・。）

涼介は燻る煙越しにまゆみを見つめていた。

まゆみは左肩を下にし、涼介に体を預ける様にシーツに包まっていた。ラブホテルの間接照明は、そんなまゆみの素顔と滑らかな腰のラインを美しく涼介に届けていた。

（・・・まゆみのせいじやないんだよな・・・・何も悪い事なんかしちゃいないし・・・・。）

涼介は心中でそつ咳きながら、通り過ぎて行つた女性を思い出していた。

（・・・ほんと、綺麗だよな・・・・。）

涼介は左の指先で長く延びている煙草の灰を一度灰皿に落とし、再びまゆみを見つめた。

（・・・女性つて素晴らしいな・・・・。）

涼介は、明日、別れを切り出すかもしないまゆみの寝姿に、男性が女性を守ろうとする行動の原点は、実は意外とこんな瞬間にあるのがかもしれないと考えていた。

10月19日の日曜日、午前2時を回っていた。

二人の体が離れて1時間近くが経っていた。

ベッドのコントロールパネルの横で、セブンスターが空になつていた。

涼介は鼻持ちならないナルシスティックな美意識の下、男女の恋愛感情を耽り、女性を褒め称える事に因つてまゆみへの罪悪感から逃れ様としていた。

3・・・・サイトとの出会い系

3・サイトとの出会い系

松岡まゆみと佐久間涼介という、32歳と34歳の、世間の常識として分別と良識を備えている筈の一人は、携帯電話のメール機能を利用した“出会い系サイト”という、男女の間を取り持つ現代最強の手っ取り早い武器を使い、2カ月程前、暑さのピークを迎えたまま終りそうな8月に知り合っていた。

“恋人を見つける”というテーマの下、携帯電話やパソコンのメール機能は、過去、男女が経験した事の無い特殊な会話方法として独特で絶大な利用価値と効果があった。しかしその利便性故に恋愛関係を生む為の苦しみや決心は、常に曖昧なまま進展する形となっていた。

本来、恋愛を成就させる為に乗り越えなければならない障害は、相手に対する一生懸命な気持ちで克服していた。畢竟、そんな一生懸命さの中には勇気や誠実さという、人の心を動かすエネルギーが充満し、第三者をも納得させるだけのパワーがあつた。だからと言って出会い系サイトで出会う男女にそのパワーが無いとは言わないが、男女が心を通わせる為の普遍的なプロセスを省略、超越出来る出会い系サイトの性質上、その量は減少し、質は落ちていた。

出会い系サイトは得てして文字の量や質に制約があった。その現実は一面識も無い者同士が相手の文字を頼りに思いを巡らせ、タイムリーな感情を画面に集約しようとした時、言葉と態度では伝えられそうな微妙なニュアンスを制約内で簡潔な文字に置き換えられたり事が多々あった。それは相手の真実を模索する場面で遣り切れな

い苛立ちを抱かせる事となつていて。しかしその苛立ちは、相手に送信する全ての感情や情報がコントロール出来る事を利用者に気付かせる事にも繋がり、恋愛に貪欲で孤独を嫌う男女の相談窓口として、或いはストレスを発散するツールとしては絶大な威力を發揮していた。

出会い系サイトで知り合う男女は例外無くお互の素性を理解する事を急いでいた。出会い系サイトを次々と検索していれば、自身の望む理想に近い個人情報をいくらでも抽出出来るからだった。それは恋愛という行為からは切り離せなかつた筈の、気持ちの逡巡や時間や手間を省くという、恋愛に対して自己中心的で殺伐とした合理性を追求する男女を増やす事となつていた。

恋人が欲しいと願う男女にとって、出会い系サイトの機密性や利便性は、その代償として世代に因つては備わり様のない危機回避能力を要求していた。微笑ましい出会い系や危険な巡り合わせ、結婚や犯罪は、結果としてその能力に準じていた。

方円の器に従い、色んな器に因つてその相を変える水の様に、出会い系サイトを利用して恋愛を求める男女は、“出会い系サイト”という器に心理を合わせていた。それは利用する人の価値観一つで、幸福にも不幸にも出会える事を意味していた。

涼介は食品会社に勤めるサラリーマンだった。

涼介の勤める食品会社は食材の流通だけではなく、イタリア料理を提供するレストランの運営を事業の一つとし、直営店は元より、80年代前半からフランチャイズ店を含めたレストラン事業を全国展開していく。そして90年代に入る前には時流にも乗り、レストラン事業は会社の中心的部門に迄成長していく。

2年前の2001年4月、涼介は神奈川県横浜市関内にある本社企画開発部から、福岡県北九州市小倉にある北九州支店企画開発部に転勤し、主任から課長代理に昇格していた。

小倉は涼介の地元だった。

涼介は育った街の高校を卒業後、神奈川大学に進み、そのまま横浜で今の会社に新卒で就職し、当時のバブル景気に煽られ、存分に仕事も遊びもこなし、恋愛に於いても、神様が全ての人に満遍なく与える掛け替えの無い出逢いを経験していた。

涼介は横浜での15年間で“涼介”という人格やライフスタイルを構築させていた。その事実は、例え小倉が涼介の地元と雖も、小倉という街に簡単に解け込めない体质を涼介に齎していた。

涼介は小倉に戻つて来たにも拘わらず、日々の生活の中で俗に言う“じやん言葉”を使い続けていた。しかし涼介のその行為は地元で叩き上げられた取引先の担当者や小倉に二店舗ある直営レストランの店長に、“地元のくせに”という苛立ちを呼び込み、“郷に隨えない気障な奴”という烙印を押される事に繋がってしまった。そして涼介に絡み付くそんな揶揄は、当然の様に仕事上の関係者に吹聴され、人伝に誇張され、“仕事も満足に出来ない奴”という尾鰭までも付く事となり、レストランでアルバイトをしている学生からも好奇の目で見られる様になっていた。しかし涼介はそんな噂でストレスを溜める程自分の仕事に不真面目ではなく、誰かに媚びる事もなかつた。

涼介は自分が新参者であり、役職上、目の上の社員に冷徹な指示を出している事を理解していた。故に仕事を進める上での摩擦やアクシデントには寛大だつた。しかしプライベートでインディビジュアルな欲求が満たされない、欲しい物や求める物が満足や充実に届かない、そんな小倉という街と横浜の間にある耐え難いギャップには

正に“新参者”として苛まれ、その度に街の全てに心を閉ざし、追い込まれ、多大なストレスを溜め込んでいた。そして諦めにも似た遣り切れない苛立ちを抱え込み、虚脱感と鬪い、心に嘗て経験した事の無い様なネガティブな気持ちを抱き、地元で管理職として仕事を続けて行く事の意味を自身に問い合わせ掛け続けていた。

涼介は小倉に戻つて以来ずっと、生活のモチベーションを高いレベルで維持出来た横浜での生活を渴望し続けていた。それは涼介の心中に、覚悟を決めて置かれた現実に身を溶け込ませるという選択肢が存在しない事を意味していた。実際、涼介は北九州支店に転勤して来た10ヶ月後、降格を覚悟の上で横浜本社に戻るべき稟議書と、新規事業への参入に関する企画書を本社人事部の部長と直属の部長に提出していた。

涼介は叶わぬ夢など無いと自身に言い聞かせていた。しかし人事異動の3月は淡々と過ぎ去り、4月に入る前、企画書の件など無かつたかの様に新入社員教育の責任者という役割を支店長より直々に命令されていた。

涼介は日頃から無口だった。そしてそんな涼介を取り巻いている現実は更に涼介を無口にさせ、人付き合いを御座なりにさせ、孤立させていた。

2002年の春、涼介が籍を置く企画開発部には四人の新人が配属されていた。全員北九州市内にある大学を出ていた。その中に岡部恭子がいた。

恭子はエレガントなスリーセクションレイヤーにタイトなダークスースを瀟洒に着こなす、決して柔らかいとは言えない目元が印象的な女性だった。

恭子は新入社員研修と、現場教育を兼ねた例外なき6ヶ月間の店舗実習を終えた後、涼介とペアを組んで取引先に出向く事が多かつた。

恭子は涼介を慕っていた。涼介は恭子に、将来リーダーとして人を引っ張る素質がある事を感じていた。

ペアという性質上、二人は時間を多く共有していた。休日でもお互いの自宅にあるパソコンにてデータを送信し合っていた。それはある意味必然、一人の間に仕事以外の会話を増す事となつていた。そして恭子は何時の頃からかその会話に因つて、更に涼介に惹き付けられていた。

二人は一度ベッドを共にしていた。

初めてのセックスは恭子が入社した年の1~2月、ペアを組んで2ヶ月が過ぎていた取引先の忘年会の日だつた。そしてその次の日、涼介は出会い系サイトのアドレスを自分の携帯電話にブックマークしていた。

きっかけはセックスの翌日、恭子から頻繁に送信されて来たメールの中に在つた。

恭子にとつて涼介とのセックスは画期的な出来事だつた。その事実は、まつたりと甘い内容のメールを涼介に何度も送信させる事となつていた。そしてそんなメールの中の一つに、恭子は占いサイトのURLを貼り付けてあつた。

涼介は恭子のメールに丁寧に付き合つてはいたが、占いのサイトまで几帳面に開く程恭子のメールに入り込んではいなかつた。それよりもその占いサイトの広告欄に、兼ね兼ね興味を持つていた出会い系サイトの入り口が慎ましく巧みに貼り付けられてあつた事の方が、涼介にとっては恭子とのセックスよりも画期的な事だつた。

涼介は出会い系サイトを一度閲覧したいと思つていた。しかしそのサイトが援助交際を希望する書き込みに毒されているのならば意味が無いとも思つていた。アクセスしても出て来る結果は大学時代に通つていたテレクラと同じで、一頗り遊んだ後は虚無感に支配されるだけだらうと、自身の行為の美化と甘い性根の弁護を先回りさ

せていた。されどそのサイトの一ページ目には、眞面目な交際を希望する男女に出会い系を提供するという、涼介の予期していなかつた言葉が書かれてあつた。その真つ直ぐなコンセプトだけを穩やかな明朝体で表現した飾り気の無いキヤツチコピーは、出会い系サイトを利用する女性の不埒な誘い文句を閲覧する事で自慰し、嘲笑し、憐憫する事を準備していた涼介の、ある意味期待を裏切つていた。

涼介の邪な好奇心は、その出会い系サイトに自身を登録する事を戸惑う理性を凌駕していた。結果的に下らない出会い系サイトだつたとしても、小倉での生活からは永遠に得られないだろう刺激を、少しは与えて貰えるかもしれないと思つていた。

恭子との一度目のセックスは最初のセックスから2週間後、仕事納めの日だつた。二人は部内の飲み会を終えた後、二次会を別々に抜け出していた。

恭子の中では、すでに涼介は相愛の彼氏だつた。

2003年を迎へ、涼介の携帯電話が受信する恭子からのメールはプライベートなもので占められ、仕事帰りに一人で食事に行く回数も増えていた。

涼介は恭子の気持ちに気付いていた。しかし涼介は加速度の付いた恭子の思いを、反発し合う磁石の様に一定の距離を保ちながら跳ね返していた。そしてその磁力を自己都合で自在に変化させ、仮に三度目のセックスがあつたとしても、そこには愛情など無いという暗黙の了解を介在させようとしていた。

涼介には恭子の恋愛感情を、上司と部下の間で繰り返される単純接触に端を発した錯覚であり、セックスはその錯覚に気付くまいとする、倒錯した感情の終着点だったという結末へ軟着陸させなければならぬ理由があつた。涼介はこの年も本社企画開発部へ新規事業展開に関する企画書を提出し、人事部には本社復帰希望書を提出していた。

涼介が選ぶ行動の動機は、全て小倉という街に対して溜め込んだストレスにあつた。そしてそのストレスは、恭子と、恭子という媒

介者がいなければ辿り着けなかつた出会い系サイトを、涼介のプライベートに組み入れた形となつていた。

涼介は生活環境の膠着と、投げ遣りな自分に対する愛着と、理想に対する執着の摩擦によつて生じた粗悪な情熱で恭子を取り込み、鬱積している自身の美学の捌け口として、不安定な情緒を救つてくれる女性として、恭子を冒涜していた。

涼介にとつて恭子は、自身のプライドを守れる“いい女”でしかなかつた。

2003年3月、人事異動名簿に名前が無かつた事に落胆していいた涼介は、各部署に正式な異動辞令が出た二日後、支店長から一通の公式書簡を受け取つていた。一通は新規事業展開に関する企画調査を継続せよという指示書だつた。そしてもう一通は、本社企画開発部への復帰希望について、酌量の余地はあるが根拠薄弱であり正当性に欠けるという趣旨の回答書だつた。

涼介は気付かぬ内に体裁だけを取り繕うチームリーダーに成り下がつていた。そしてその事実がチームに軋轢を生じさせている事を会社に見抜かれていた。実際、涼介は一通の公式書簡とは別に、所属する企画開発部の部長から一通の指導書を渡されていた。そこには欠落した協調性への注意と、中間管理職として持つべき責任感についての訓戒が記されてあつた。

涼介は自身の心が荒み、利己主義に走つてゐる事に気付きながらも敢えてそれを無視し、理想の扉を強引に抉じ開ける為にチームと個人を使い分け、横浜本社復帰を勝ち取るうと結果を出し続けていた。しかしストレスにもがき苦しんでいる涼介には、仲間に対する思い遣りの欠片も無い不純で不誠実なそんな行動に、人の心を動かす説得力など無いと氣付く心の余裕は無かつた。

涼介は自分を見失つていた。そして自分を取り戻す術を見つけられないまま、インディビジュアルな理想だけを滾らせ、自己都合だけで小倉という街に擦り寄り続けていた。

4・・・重ねる洞察

4・重ねる洞察

(2時半か・・・。)

腕時計を外し、コントロールパネルの横に置いた涼介は、ベッドの中で再び考え始めていた。

眠れない涼介の隣で、まゆみは寝息を立てていた。

涼介は初めて出会い系サイトのJIRIを開いた日から9ヶ月近くの間、様々な女性とメールで会話を重ね、対面を重ねていた。大阪から博多に出張で来ていた女性も居れば隣町の主婦も居た。顔を合わせて30分後にはラブホテルに入っていた女性も居れば、メールで会話をしていた本人ではなく、その女性の友達と食事をした事もあつた。或いは画像を交換した後に連絡が取れなくなつた女性や、待ち合わせの約束をした前日に送られて来た画像を見て、その後の受信を拒否した女性も居た。

涼介にとってまゆみは、ラブホテルで一夜を共にした五人目の女性だつた。食事だけで終わつた女性を含めれば、まゆみは七人目の女性だつた。

(どんな形でも、初めて会つた時の雰囲気つてのは重要なファクターなんだよな・・・。)

涼介はベッドの中で考えていた。

メールで出会いを求める女性は、メールの中では明らかに恋をしていた男性を初めて視覚で捉えた時、その男性の仕草の端々に出て

来る癖やセンスが何れ位自身の感受性を刺激し、何れ程の好印象となつて心にインプットされるかに因つて恋心に“けり”を着ける事が出来た。しかし“感受性”には雰囲気や表面的な物腰という、その印象を幾らでも操作出来てしまつ抽象的な概念に直感的に反応してしまう性質があつた。ある意味人間の業でもあるそんな直感は、概ね性的欲求を満たそうとする潜在意識に支配され、曖昧で主観的な判断を下している事が多く、メールで男性と出会おうとする女性の直感や、その直感を導き出す感受性は、更にその傾向を顕著にしていた。

出会い系サイトに恋の仲介を依頼する女性の多くは、手に入れ様と決めた男性に絡み付いているリスクを予測し、的確な判断を下す為の理性を心の隅に追いやる事が好きだつた。しかし心の隅に追いやつた筈の理性の中に在る、完全に放棄する事など出来ない自己防衛本能が、自分の前に現れた男性を受け入れ様と決めた気持ちが正解なのかどうか、時間の経過に因つて違つた側面を見せるかもしれない男性の言動を事ある毎にチェックしていた。しかし短い時間の中で二人の相性に答えを出そうとする無理な洞察は、恋愛対象を見極める能力の未熟さを自分に気付かせる事となつていた。されどそんな事實を認めたくない女性のぬるい自尊心は、自己防衛本能の恩恵を受ける為の柔軟性に欠けるゆるい理性をかばう為に、洞察の矛先を現実から未来へと徐々に切り替え、二人が創るであろう微笑ましい想い出を先回りし、自己防衛本能までも説き伏せ様と画策していた。それは理想を追求する為に乗り越えなければならない困難な命題に対峙するよりも、自身が持つ恋愛觀の再構築をし、恋愛という行為の中にある未知の喜怒哀樂を享受する事の方が大切だと信じ様とする、ある意味種類の違う、女性の生理的な部分に存在している、もう一つの自己防衛本能の働きでもあつた。

出会い系サイトを利用する女性の自尊心にへばり付いている“ずるい”主觀は、居心地の良い答えを幾らでも導き出せる場所を探す

事に長けていた。その場所は恋愛の理想を夢想する事が満喫出来る“恋愛観”と言つ山の稜線に存在していた。同時にその場所は、自身の一連の行動を社会の常識に流れ込ませる時に、最終的な検証をしなければならない分水嶺でもあった。

女性の殆どは自らの意思で出会い系サイトに分け入ったにも拘らず、殆どの女性は恋人になるかもしない男性と知り合った直後、馴れ初めが“出会い系サイト”だという、身の回りの人達に女性としてのプライドを傷付けられ兼ねない、事ある毎に揶揄されるかもしれない、自分の身に一生付き纏う事になるかも知れないそんな事実を、ある意味“時効”だと割り切れる日が来る迄隠し続けて置きたいと思っていた。故にそんな女性は、例え“恋愛”と言う山の稜線で恋愛関係を満喫している最中であっても、自己保全を強かに考えているゆるい理性に従い、一人が密やかに下山出来るルートを確保しておこうと躍起になっていた。更に万が一 下山ルートを間違い、二人の馴れ初めが公になり、好奇の目が自分に向けられた時の為に、都合の良い言い訳や身に漂わせる哀愁、或いは開き直る為に必要な処方箋を自尊心に持たせる準備もしていた。

ぬるい恋愛には心の何処かに必ず疚しい部分があつた。その疚しさは血液の様に体中を駆け巡り、マスメディアが声高に叫ぶサイトの危険性や、サイトが街中に氾濫させている甘い香りを放つイメージ広告、そして身近な同姓から伝え聞く、誇張された美しい体験談に反応しようとする好奇心をサポートしていた。そしてそんな女性の疚しさは、出会い系サイトは理想の男性と知り合う為のものだとする主觀が、詰まる所社会の倫理から認知されないのならば、刹那の悦楽に溺れてもいいとする、何処か付け焼刃的で、その場凌ぎの感を否めない自虐的で独善的な理屈を成立させる準備もしていた。そんな女性の御都合主義的思考の組み立ては、恋愛に限らず、生きて行く上で人ととの繋がりがある以上、人生の何時か何処かで必ず自分の態度や言動を省みる事となる、“自己中心”を野放しにしている主義に原因があつた。

女性は潜在的に24時間自分の事を偏愛していた。結果、必然的に生まれる自己中心主義に、ある意味“妙味”すら感じていた。そしてそんな女性の何処までもゆるく、ぬるい理性には、例えば自分の恋愛を“物語”として仕上げる事に対する恐縮の概念など毛頭無かつた。

（強かなのは・・俺じゃないのかもしないな・・・。）

涼介は心の中でそう呟いた。

出会い系サイトを泳ぐ女性の中には、理想の恋人を探すという可憐な目的を途中で快楽に差し替え、メールに費やした時間の対価を貪欲に求める人も居た。そんな女性は立ち止まって振り返れば見える筈の正しい行先に褒美は無いと決め付けていた。そして立ち入った出会い系サイトの中で、誰にも言い訳が出来ない、恋愛という言葉を口にする事すら恥ずかしい孤独な場所迄行き着き、そこで快樂を貪る事に独自の正当性を見出していた。

出会い系サイトを泳ぐ女性の欲望には限りがなかった。メールといつ手軽な飛び道具を使い、感動する様な出会いを経験する事も、恋する事で発見出来る従順で素直な自分も、そしてその恋に美しく付随して欲しい魅力的なセックスも、愛される事で感じる優越感や握れる主導権も、そしてその愛にも付随して欲しい熱く燃えるセックスも、更には裏切りや偽りや割り切りも、それらは何時か必ず、しかしその気になれば何時でも意のままに体感出来という、女性にはそういう権利が許されていると信じる事にも貪欲だった。

（・・・全部欲しいんだろうな・・・。）

涼介は眠る事を諦めたかの様に洞察を重ねていた。

“恋愛”が持つ性質上、バランス感覚は重要だった。しかし自身の値打ちを信じる女性程、出会い系サイトで知り合った男性と初めてデートをした時、譲れない価値観を常に前面に押し出し、しかもその価値観を押し売る事に時間を費やし、その時に男性が見せる所作ばかりを気にし、一人の間に流れる空気を硬くしている事が多かつた。

恋をしようとする男性は、女性の想像力を凌駕する程の洞察力を意外と働かせていた。そして男性は女性を彩る神秘的で抽象的な部分に惹かれる生き物だった。故に魅力と称されるものを努力して身に付け、自分には值打ちがあると自負している女性が振り翳す理想や情熱は、男性の“恋愛”には余り重要ではなく、寧ろ邪魔になつていた。

(・・・恋愛で自分を守っちゃいけないんだよ・・・)

涼介は自問自答していた。

“恋”はどんな形で、どんな状況で始まつても区別も差別も無かつた。それ故に“愛”は、その人間の本質を晒した。

5・・・・判断の手順

5・判断の手順

(・・・まゆみの掲示板、少し冷めた感じのいい女を想像させる言葉が並んでたな・・・)

涼介の回顧と洞察は、10月19日、午前3時を過ぎたラブホテルのベッドの中で、密度と速度を増していた。

クールなロマンチスト、嫌い？

プレゼントされるなら、シャネルのイヤリングより
プラダのサンダルの方がいい人、センス合うかも！
よろしく！

30代前半・172cm・59kg・A型・魚座

涼介は出会い系サイトを利用し始めて以来、軽さを全面に押し出した、誠実とは無縁の文章を意識してずっと掲示板に載せていた。そして涼介は日々移り変わる女性の掲示板に、自分と同じ様な感覚の文章を見つけては申し込みメールを乱打していた。

はじめて。

私はプラダと、やっぱりヴィトンが好き。
それと、クールなロマンチストって
どんな人なんだろう。

メールから届いた最初のメールは、涼介のモチベーションを上げていた。

涼介が女性にばら撒いた、何処かふざけた様な“ノリ”的軽い申し込みメールに対する返信は多かった。しかし涼介は、その殆どが相手に対する要求や自身の持つ“魅力”と称される部分をいきなり報告して来ている事に辟易していた。

まゆみは会話の流れを守り、文章の“間”をセンス良く使っていた。涼介はそんなまゆみの簡潔なメールに魅力を感じ、親近感を抱いていた。

涼介はまゆみと交すメールでの会話に力が入っている事に気付いていた。涼介にとってその事実は、全く予期していなかつた嬉しい誤算だつた。そして涼介はその誤算が導く楽観の下、まゆみと何か会う事になつても、二人の間に流れる空氣に違和感は無いだろうと憶測していた。

(でも違つたんだよな・・・)

過剰な自問自答を繰り返している涼介の体の中は、まゆみを肯定したいとする血流と否定したいとする血流がぶつかり合っていた。

(最後の砦だつたんだよ今夜が・・・まゆみとの関係・・・)

涼介はまゆみと知り合つた日から今日迄の3ヶ月間を大切に丁寧に抱え込んでいた。しかし結局はゆみとの恋愛の進退をセックストに委ね、そしてそのセックスから溯つて相性を吟味するという物哀しい判断の手順を、何時もの様に実行していた。

涼介は女性に対する慇懃無礼さを象徴しているかの様な独善的で高慢な世界観の下、まゆみとの恋愛を主觀的論理で紐解こうとして

30代前半・160cm・A型・双子座

いた。その行為は自分に忠実でありたいと願う自己陶酔者の特徴でもあった。

二人は接触を重ねる度、お互いが見せ合う自然な素振りに込められているだらう意図を激しく探し合っていた。電話口では心理を読む事に神経を使い、食事では物腰を確認し続け、酒では素性を見抜こうとしていた。

涼介はまゆみと接触する時間が累積するにつれ、まゆみの一挙手一投足に対し、言葉にする程重要ではないが、やり過ぎには奥歯に物が挟まつた様な微妙な不快を感じていた。

まゆみが涼介に放つ恋愛觀は、女性として譲れないプライドをちらつかせる事から始まっていた。涼介はメールでの会話ではそんな気配すら漂わせていなかつたまゆみの言動に、電車の吊り革に掴まつていてる女性のコートを飾るファーの毛先が、座っている自分の鼻先で優雅に揺れている様な、悪気のない分許してしまわざるを得ない鬱陶しさを感じていた。

涼介はまゆみの事を、捨て切れない香りを持つ、プレゼントされた趣味の少し違う香水の様だと感じていた。そしてその香水を使う為には、自分が培つて来たセンスを少なからず無視する必要があると思っていた。

涼介は何時の頃からか、過去、出会い系サイトで知り合つた女性達と同じ様にセックスを最終的な判断材料とすべく、まゆみに対する振る舞い方を変える決断をしていた。しかしまゆみはそんな涼介の思惑を見抜いているかの様に、セックスの持つ意味を涼介に対する言動の端々に鏤めていた。

まゆみにとってセックスは、相手に対するあらゆる要求をストレートに伝える事が解禁される行為であり、結婚という現実に一人が迷わず突き進む事を誓う行為だった。

涼介はセックスに困つてまゆみとの間に予期せぬ化学反応が起り、深く結び付き、まゆみという人格に対する妥協の数が減る事を願っていた。

涼介が自身の体中に発した、一人の付き合いで結論を出すのはセックスの後でも遅くはないという伝令は、まゆみに対しても機能し始めていた。そしてそんな涼介の明確な目標は、研ぎ澄ました話術や包容力となつてまゆみの心を的確に惹き付けていた。

まゆみは涼介の誠実さと強引さが同居するエスコートや意表を突破アプローチに、過去に経験のない新鮮さやときめきを感じ、心を開いても大丈夫だと確信出来る迄の判断の手順に、例外を加えるべきかどうか戸惑っていた。

まゆみは、涼介が放つ魅力という不可解な快感に心を揺らしていた。

まゆみは穏やかで滑らかな、そして時折その言動を理解する事に困難な“涼介”という概念の圧力に、自身の持つ理想の輪郭や将来に対する思いを上手く伝えられないと錯覚させられていた。そしてそれ以上に“涼介”という一男性を、一度と出会えない紳士だと錯覚させていた。

まゆみと涼介が持つている情熱の色は同じだった。しかしその質は、混じり合う事のない水と油の様だった。

(・・・・・)

涼介はベッドの上で上半身を起こした。

「最低だな。」

思わず声を出してしまつた涼介は、“はつ”としてまゆみを見た。まゆみは眠っていた。

「ほんと最低だよな・・・。」

涼介はまゆみの穏やかな寝顔を見つめながら、まゆみの耳に届か

ない微かな声でそう呟いた後、ベッドからそつと抜け出し、ラブホテルに入る前にセブンイレブンで買つて置いたブラックの缶コーヒーを冷蔵庫から取り出し、冷蔵庫の上でビニール袋に入ったままになっていたセブンスターを抜き出し、ソファーに投げ出されてあつたバスタオルを裸の下半身に巻いた。

(・・・・・。)

涼介はブラケットの僅かな明かりを頼りに、煙草に火を付けた。
センターーテーブルの上に置かれたまゆみの腕時計の針は午前3時25分を指そうとしていた。

(・・・・・。)

涼介は煙草を燻らせながら視線を一度まゆみに向け、ベッドとは違う方向に歩き始めた。

まゆみは姿勢を変える事無く眠っていた。その事実は、まゆみの張つていた予防線がセックスを最後の判断材料にしようといふ、陰湿で冷酷な涼介の計算に切り刻まれた事を意味していた。

6・・・・理想の嘆き

6・理想の嘆き

(・・・・・。)

涼介はドレスルームの中に居た。

涼介にとってセックスは、自身の系譜を創る本能の様な、温かい家庭を作る為だけに嘗まれる無味無臭で独善的な作業の様な、次世代に繋げたい野望の為に組み込まれたスケジュールの様な行為ではないという美意識があつた。

(・・・悦んで貰える様な、悦ばせたくなる様な、お互いそんな裸でありたいし、時折嘘や演技をして欲しいし、奮い立つ様なたまんな表情や動きも欲しいし、大胆になれる会話も大切だし・・ずつと愛せる、馴れ合いになんない様な努力をしてみたくなる・・しようと思える・・意表を突いたりとか・・波長の合った・・陶酔とか満足をお互いが差し出せる・・・はあつ・・・。)

涼介は鏡に映る自分の姿に愛想が尽きた様な溜息を吐き、思いを心に落とす事を止めた。

「・・・愛なんだよな・・・。」

涼介は俯き、自分に一言そう吐いた。

涼介は何時か必ず同じ理想を持つ女性と出逢えると思っていた。そしてその女性が持つ情熱を守りたいと強く思っていた。しかしそれが愚にもつかない詭弁ではないかとも思っていた。

(愛つてなんなんだろう・・・。)

涼介はカラソのレバーをゆっくり押し、静かに落ちる水で煙草の火を消した。

(・・・欲しい時に無いのは何時も愛と灰皿だよ。)

涼介は消した煙草を見つめ、想い描く理想と現実をシニカルに言葉で掛け合った。

(・・・・・。)

涼介は一気に缶コーヒーを飲み干した。そして空になつた缶の中に濡れた吸殻を入れ、寝付けない顔に張り付いた疲れを取る為に顔を洗つた。

(愛があれば温かい家庭と最高のセックスが約束されるんだろうな・・・。)

涼介は顔を洗いながら心でそう呟いた後、壁に取り付けられたステンレスのバーに掛かる、ラブホテル独特のリネンの匂いがするフエイスタオルに手を伸ばした。

「・・・大袈裟なんだよ。」

涼介は鏡に映り続ける自分にそう吐き捨てた。そして顔を拭きながら心の汚れも拭き取りたいと思っていた。

ベッドに戻つた涼介を露出したまゆみの柔らかい背中が迎えていた。

まゆみは寝返りを打つていた。

(・・・・・。)

涼介は腰の辺り迄ずり落ちていたシーツをまゆみの肩までそつと引き上げた。

(・・・ヒッチの相性ってあるよな・・・。)

涼介はベッドの傍に立つたまま、まゆみの寝姿を見つめていた。そしてセックスの相性という、一人の女性と今後の人生を共に構築していく上で、世間では上位に位置付けられるとは思えない不謹慎な項目で、まゆみとの関係を否定する理由を脳の右から左へ伝達していた。

(もう駄目なんだろうな・・・。)

体をベッドに横たえた涼介は、ぼんやりと天井を見つめていた。

(・・・昇天ないのは辛いな・・・。)

涼介はまゆみとの結論を、心を軋ませながら客観していた。

(俺の恋愛つて何なんだろう・・・。)

涼介は体を捩り、ベッドに潜り込む前にコントロールパネルの横に置いたセブンスターに右手を伸ばし、箱から抜き出した煙草を持ったまま、また仰向けに戻った。

涼介という人格には、未だ情熱や理想や、理性や協調がバランス良く共存していなかつた。その事実は結論としてそうせざるを得ないという、守るべき穏やかな生活を意識的に形作り、与えられた環境や掴み取つた家庭を保全しようと懸命になる事が現実を生き抜く為のささやかな知恵であり、その為に支払つた犠牲に執着しない事も知恵であり、それが人間に与えられた生存本能の一つである事を涼介が理解出来ていなかった。

涼介はこの人と生涯一緒に居るべきだという、五感と六番目の感覚に響く決定打を放つてくれる女性を欲しがつていた。無条件に恋し、愛し、叱り、許し、何時までも新鮮な気持ちで居られる女性を欲しがつていた。ある意味それも人間が持つ本能の一つだつた。しかし涼介は恋愛を重ねる度、その思いには無理があるのでないかと薄々感じてもいた。しかしそれでも涼介は、自身が持つ、女性に対する正直で純粹な欲求を自ら否定する事の虚しさを嫌つた。取り巻く状況や計画や打算に則り、自分を偽り、第三者の意見に耳を貸し、好きになろうと努力して、心を後から追い着かせる様な、そんな情熱を経由しない恋愛では、守らなければならぬ愛が守るべき愛に変わり、そしてその時に誓つだらう愛を生涯貫く信念に、何時か必ず揺らぎが生じると頑なに思い込んでいたが爲だった。

(・・・未だ見ぬ女性が理想なんだよ・・・。)

涼介は再びベッドの上で上半身を起こし、そう嘆いた。

(美的感覚や知性か・・・。スマートで尊敬出来る、美しくてキレのある女性に憧れてんだろうな、多分・・・畜生・・・。)

涼介には望む愛を妥協無く勝ち取りたいという願望があった。しかしその願望に因つて現実から逃避し続けている、ストイックでもクリエイティブでもない、性質の悪いインディビジュアリストそのものになつてゐる自分を哀れんだ。

(・・・何でこんな風になつちまつたんだろうな・・・。)

涼介はそう考えながらコントロールパネルに左手を伸ばし、エアコンを切つた。

眠れない涼介にとつて部屋の空氣は冷たく、乾き過ぎていた。

(・・・ぬるいな・・・。)

涼介は隣で眠るまゆみが寝苦しくなつて目を覚ますかもしれない事を無視し、過去の恋愛を振り返えろうとしている自分の為に環境を整えた事を嘆いた。

(勘弁してくんないんだな・・マキ・・・。)

涼介は更に、自分の理想だつた女性にも嘆きを入れた。

(恋は厚かましくなきや出来ないし、しかし本当の恋は厚かましいやつには出来ないんだよな・・・ふうつ・・手に負えないガキと一緒にだな、まったく、マキ以来・・・。)

涼介はそう考へながらベッドに横たわつた。そしてまゆみに背を向ける形でシーツに包まり、枕に深く頭を埋めた。

「マキか・・・。」

涼介は溜息を吐く様に一人の女性の名前を口にした。

マキという女性は、涼介が嘆く理想の原点だつた。そして涼介は心に刻まれてゐるマキといつ原点を、今でも愛していた。

(・・・・・。)

涼介はマキとの想い出を手繕り寄せ始めていた。

エアコンの切れた部屋には更なる静寂が訪れていた。

涼介が吸おうと箱から取り出していた煙草は、長さを変えないまま灰皿の横に転がつていて。

(・・・何時だ?・・・。)

涼介は眩しさを嫌う様に寝返りを打った。

涼介は完全に閉まつていなかつたカーテンの隙間から入り込む長方形の強い日差しで起こされていた。マイナスイオンから程遠いと思われる空氣の動かない部屋の中で、涼介の頭から膝あたり迄だけに太陽の光が降り注いでいた。

涼介には眠つた実感が無かつた。ずっと自身の恋愛を考えていた様な感覚が頭に残り、疲労感が体を支配していた。

(・・・・・)

涼介は時間を確認しようと右腕を上げたが、そのまま右腕をコントロールパネルの所まで伸ばし、置いてある筈の腕時計を探つた。

(8時か・・・・)

涼介は長方形の日差しが当たらない位置まで体をずらし、灰皿の横に転がつていた煙草に火を付けた。

(昨日は何時ぐらいに寝たんだろう・・・・)

体を仰向けて戻した涼介が気だるく吐き出した煙は、部屋に入り込む光のラインの部分だけ鮮明に漂つていた。涼介はその煙の形をぼんやり見ながら、昨夜呑み込まれ掛けた想い出の続きを手繰り寄せ様としていた。

(マキか・・・・)

涼介は新しい恋愛の始まりや終わりに、心を必ずノックする女性の名前を心で呟いた。

ベッドの上に象られた長方形の日差しは強さを少し増していた。

煙草の煙は、より鮮明に浮き上がつていた。

涼介はマキの事を鮮明に思い出していた。

「おはよ。」

煙草の先に長く伸びた灰を灰皿に落とすと体を捻つた時、その声を涼介は肩越しに聞いた。

「・・・おはよう。」

まゆみの声に不意を打たれ、一瞬にして現実に引き戻された涼介は、出来るだけゆっくり振り向いて朝の挨拶を返したが、その言葉

も顔も硬い事に気付いていた。

涼介はまゆみの存在を忘れていた事に動搖していた。

「・・・早いのね。」

まゆみは照れくさそうに、恥じらいと充実が同居している柔らかな瞳でそう言つた後、シーツを引つ張り上げながら体を涼介の方に初々しく近づけた。

涼介にはまゆみのその行為が、存在を否定されまいとする心叫びの様に見えていた。

「・・・まあね。でも、また寝ると思つ。」

涼介はまだ動搖していた。

「そうなの？」

まゆみの返事に深い意味はなかつた。全てをさらけ出した後のさり気ない自然な反応だつた。

「・・・だね。」

涼介はまゆみを深く見つめるしかなかつた。

「・・・もう。」

まゆみは恥ずかしさと寝起きの顔を隠す様にシーツを更に引き上げた。

(・・・参つたな・・・。)

涼介は煙草を消し、深い息を一つ吐いた。

まゆみにとつては、涼介に全てを投げ出して迎えた初めての朝だつた。涼介にとつては、まゆみに対する“けじめ”をぞんざいに出来ない事実を突き付けられた朝となつていた。

7・・・・最初のデート

7・・・・・最初のデート

7・最初のデート

“トゥルルルルル・・・トゥルルルルル・・・”

涼介は待ち合わせ場所に向かうタクシーの中でもゆみに電話を掛けた。

「・・もしもし・・・お疲れ・・・ごめんな・・もう少しで着くから。・・・了解。・・・それじゃ。」

涼介は8時の待ち合わせに30分程遅れそうだった。

“ピッ。”

まゆみは電話を切った後、直ぐ目の前に迫った涼介との最初のデートに、心臓の鼓動を体中に響き渡させていた。

(・・・・・)

まゆみはティラウンジのソファから立ち上がった。

グランドハイアット福岡のロビーは、まゆみが期待していた静けさと落ち着きを裏切る程の人で溢れ、ざわついていた。

まゆみと涼介の最初のデートは9月6日、土曜日の夜だった。

二人はセンスを試す様な、想像力を駆使させる様なメール交換を続けながらお互いを探り合い、写真を交換し、声を確かめ、想像力を落ち着かせ、リラックスし、会いたい気持ちとスケジュールを一致させる迄に2週間近く掛けていた。

(・・・・・)

まゆみはグランドハイアット福岡のアトリウムで自分の居場所を探しながら涼介を待っていた。

キャラナルシティを構成するグランドハイアット福岡を待ち合わせ場所に指定したのはまゆみだった。

(あのままテイラウンジに居れば良かつたな・・・。)

5分先の行動を決められないまゆみは、緊張と不安と、ある種不思議な孤独を感じながら行き交う男性をさり気なく見てしまった。

まゆみは待ち合わせ時間の10分前に、グランドハイアットに向かうタクシーの中で涼介からのメールを受信していた。しかし容赦無く迫り来る涼介との初対面に緊張で神経を高ぶらせていたまゆみは、そのメールをメールのキャンセルだと思い込み、開く事を躊躇つていた。

覚悟を決めたまゆみがタクシーを降りる前に開いたメールには、“30分ぐらい遅れるから”という、遅刻を連絡する文字が刻まれてあった。

落胆に支配されつつあつたまゆみの心は、再び心地良い緊張感に包まれると共に、自身の独り善がりを苦笑いで片付けられる程落ち着きを取り戻していた。そしてその落ち着きは、涼介が現れる時間が来る迄の間、テイラウンジのソファでアイスティという、ずっと憧れていた“待ち方”を選ばせていた。

まゆみはテイラウンジを優しく囲むグランドハイアットの気品が好きだった。何時の頃からか、何時か必ず最愛の彼氏との待ち合わせ場所に使いたいと思っていた。

テイラウンジからは三階まで吹き抜けている巨大なガラスの壁越

しに、色彩鮮やかな甘いカクテルを解き放ち続けている様なキャナルの噴水が見えていた。まゆみはその噴水を緩やかな曲線を描き込んだカラフルな壁で包み込んでいる、情緒を刺激するオペラの劇場の様な巨大な空間が好きだつた。そしてその傍に架かる洗練された石橋からグランドハイアットへ渡り来る最愛の彼氏を、穏やかに見つめ続けながら待つてゐる時の充実感を味わつてみたいと願つていた。

まゆみは心に宿る幸福の形に浸つていた。実らせたい恋の輪郭が見えて来た時にだけ享受出来る至福の時間だつた。しかしそんなまゆみのささやかな満足感に突然幕を引く様に、まゆみがテーブルの上に置いてあつた携帯電話は、最小にしていた着信音の意味が無い程ガラス面を弾く音を強く響かせて遠慮なく震え始め、まゆみを一気に現実に引き戻していた。

反射的に携帯電話をテーブルから拾い上げたまゆみは、画面を確認した後、暫く手の中で振動をそのままにしてしまつていた。

メールではない涼介の予期せぬ一撃は、まゆみの膝の上で震え続け、まゆみの体を硬直させるには充分な威力があつた。

気持ちを整理出来ないまま携帯電話の震えを止めたまゆみは、恋愛に心の準備や思惑は通用しない事を痛感していた。

まゆみは目の前の物が何も見えなくなる様な緊張に襲われていた。そして涼介と会話を交すまゆみの声は当然の様に震えていた。

まゆみは涼介との待ち合わせを取り巻く30分位の間に、何度も感情を乱高下させていた。その原因は全てまゆみの揺れる恋心にあつた。

まゆみは大切な用事を思い出した人の様に、慌てて席を立つていた。テーブルの上に残されたアイスティはその量を殆ど変えず、グラスに汗をかいていた。

「どうも。」

涼介はドライバーにそう答えて、ビジネスセンタービルに店舗を構える福岡シティ銀行の前でタクシーを降りた。

まゆみに“遅れるから”というメールを送信して40分が過ぎていた。

涼介がその日仕事を切り上げる事が出来たのは7時30分を回った頃だった。社内に残っている同僚に退社の挨拶をし、何時もなら会社が借り切つている七階フロアから地下一階の駐車場迄向かうエレベーターを一階で降りていた。

涼介がテナントビルのエントランスを出た時に見た腕時計は7時45分を指していた。

涼介は落ち着いていた。まゆみへ送信する、待ち合わせに遅れる旨のメールを作りながら、取引先に商談にでも行く様な雰囲気で歩いて5分の距離にある小倉駅へと向かっていた。

在来線の改札を通り過ぎ、小倉駅北口にある新幹線の自動券売機に向き合う迄に涼介はメールを送信していた。その文面には、慣れた足取りで立ち止まる事無く淡々と改札を抜け様とする涼介同様、感情の起伏などなかつた。

涼介は小倉＝博多間を繋ぐ新幹線の概念が好きだった。時刻表を気にしなくてもいい発着本数や、その距離を20分で繋ぐ利便性だけでなく、その20分間という絶妙な間合いの中にある、独特な静けさが与えてくれる孤独や孤高が好きだった。

涼介は博多駅からグランドハイアットへ向かうタクシーの中で無造作にまゆみに電話をしていた。

涼介は何分後かにまゆみと初対面するという現実を前にしても緊張感に包まれる事は無かった。まゆみの顔はメールで送信されて來ていた。会話もしていた。何よりも“出会い系サイト”での出会い

に慣れている事実が大きく作用していた。しかしその慣れは恋愛に対する冒瀧なのではないかと、心の何処かに居るもう一人の涼介からの一問い掛けを生む事にもなっていた。

涼介には答えが出せなかつた。しかし涼介はこの2週間、曲りなりにも恋をしていた。

タクシーを降りた涼介は福岡シティ銀行の脇からキャナルシティのメインアプローチを抜け、人で溢れているクリスタルキャニオンやスター・バックスを横目で見ながら、緩やかな曲線で構成された通路を歩いていた。

通路にもカラフルな色を放つ噴水を眺める人が溢れていた。

(・・・・・)

涼介はグランドハイアットへと繋がる石橋の前で歩く速度を緩めた。

石橋の上も人で溢れていた。ガラスの向こうに映るペストリーブティックやバーも人で溢れていた。

(・・・・・)

涼介は銀色に重く鈍く光り構えるグランドハイアットの重厚なドアを視界に据えたまま、予期せぬ賑やかなキャナルシティに気持ちを重く鈍く光らせながら石橋に足を乗せ様としていた。

涼介は雑多や混雜に身を置く事が苦手だった。

(・・・・・土曜の夜のキヤナルに来る事はもう無いな・・・・・)

涼介はまゆみとの最初のデートのドアを開ける前に、心の中でそう呟いた。

(・・・・・)

涼介は音も無く閉まろうとしている重厚なドアを背に立ち止まり、洗練された空間を眺めていた。

アトリウムの空氣は乾いていた。

(・・・・・)

涼介はゆっくりと歩き始めた。

ティラウンジでは落ち着いた物腰の人達が思い思いの時間を過ごしていた。

エレベーターの前では若いカップルが談笑していた。

フロントに掛けられた時計は8時35分を指していた。

(・・・・・)

涼介はアトリウムの中央でシンボリックに聳える大理石の柱の10M程手前で立ち止まつた。

涼介の視界には、思い思いの場所へ歩く人達が映り込んでいた。しかし涼介の視線は、大理石の柱を背にして俯くまゆみを捉えていた。

(・・・・・)

涼介は初めて捉えたまゆみの全体像を受け入れていた。そしてまゆみと交した2週間分の会話が無駄では無かつた事に満足しながら、二人の間にある距離をゆっくりと縮め始めた。

「どうも。」

「！・・・・・。」

まゆみは突然体を貫いた声に驚いて振り向いた。

「・・・・・。」

まゆみは息が届く距離に写真のままの涼介が居る事に膝を震わせていた。

「今晚は。」

涼介は言葉の出て来ないまゆみに笑顔でそう挨拶を続けた。

「・・・涼介さん！」

まゆみは涼介を瞳に大写しにしたまま、思わず叫んだ。

「・・・初めまして。」

涼介は笑顔のままそう言った。

「・・・涼介さん・・・。」

まゆみは緊張に因つて叫んでしまつた事を取り消そうとするかの様に、もう一度涼介の名前を口にした。

「『めん、遅れたね。』

涼介はまゆみを驚かせた事を察し、爽やかな声で少し戯けた表情を作つた。

「・・・・・。」

まゆみは近過ぎる涼介との距離に、痛む胸も視線も普通に戻せないまま涼介を見つめ続け、挨拶をする事すら出来ないでいた。

「『めんな。』

涼介はもう一度謝つた。しかし今度は真摯な態度で心を届けた。

「・・・・・。」

まゆみは涼介の視線から逃れる様に少し俯いた。

「・・・・初めまして。」

涼介は俯いたまゆみを茶田つ姫たつぶりに覗き見上げ、再び戯けた感じでそう言った。

「・・・・初めまして・・・。」

まゆみは涼介の仕草に、やつと笑顔で答えた。

「どうも。」

涼介は穏やかな笑顔を見せていた。

「・・・・来ないかと・・思つちゃつた・・・。」

まゆみの表情には柔らかさが戻っていた。

「来るわ。」

「・・・・・。」

まゆみは涼介を見つめていた。

「お腹空いてる、よね?」

「・・・・うん。」

二人は初めて会った場所で暫く語り合つた後、肩を並べてアトリウムを歩き始めていた。

「何処に行く？」

「じゃあ・・・私に任せて・・・くれる?」

涼介が見せる気遣いや気さくな振る舞いは、まゆみに普段通りに喋る勇気を与えていた。

「了解。」

涼介はまゆみに対する期待に、顔を綻ばせていた。

「ありがと。」

まゆみは照れながら顔を綻ばせていた。

まゆみは涼介の第一印象が幾ら良くとも、最初のデートで見せる涼介の一拳手一投足を注意深く観察しようと心に決めていた。しかしその動機は、涼介との恋愛を受け入れる事を出発点とした、結果に因つて結論を変える事のない、ある意味不謹慎な優越感に浸りたいと願う心に端を発していた。

涼介は曲りなりにも恋をしていたまゆみとの2週間と、今、目の前に居る“まゆみ”という女性を重ね合わせていた。

「美味しいよね、こここの料理。」

まゆみは目の前に居る涼介が期待を裏切る人ではないと思い込んでいた。

「そうだね。」

涼介の心はときめきを欲しがっていた。まゆみが持つ得体の知れない創造的な何かが、自身の五感から心に伝達される事実を欲しがつていた。

「此処、よく使うの?」

「うつん、一度だけ来た事があるの。」

まゆみは心で育てていた幸せのイメージ通り、“アロマーズ”に涼介を誘い、キャナルから吹き上がる噴水に手が届きそうな席で、店内に背を向けていた。

「そう。」

「・・・ね、ワインは何時も白なの?」

「そうだね。・・・嫌いだった？」

「ううん、そうじやないけど・・・お肉いっぴ頼んじゃったから。」

「なるほど。」

「・・・ね、涼介さんは博多によく来るの？」

「涼介“さん”は止めようよ。」

「そう?・・・でも・・・。」

「初対面じゃないんだし。」

「えつ?・・・」

「そんな感じだつて事さ。」

涼介はそう言って笑顔を投げた。

「んーと、・・・じゃあ・・・涼介。」

まゆみはそう呼べる事の嬉しさを顔に滲ませていた。

「・・・・・・。」

涼介は笑顔を作っていた。

「・・・あつ、そうそう、わつきの質問。答え聞いてないつー!」

「ん? 何だつたつけ・・・僕があなたの事好きかつて事?」

「えつ?もう!・・・」

「好きだよ。」

「・・・もう・・・。」

天井が高く開放感のある店内に心地良くなっている氣品や、センスが薫る料理は二人の会話に明るいリズムを与えていた。

「ごめんごめん、よく来るよ、博多にも支店があるからね。でも此処のレストランは来た事無かったなあ、キヤナルには取引先があるからグランドハイアット結構使うんだけどね。」

「そなんだ・・・。」

まゆみは笑顔だった。

「他にも沢山いい店知つてそうだね。」

「そんな事ないよ・・・。」

まゆみは微笑を心から湧き出しながら明るく否定した。

「・・・・・。」

涼介はまゆみを見つめていた。

「・・・？」

まゆみは涼介が見つめる理由を田で問い合わせた。

「髪、綺麗だよね。」

「えっ、本当！？・・・ありがと・・・。」

まゆみは滲ませ続けていた微笑の上に嬉しさを溢していた。
まゆみは涼介をクールな自信家だと思っていた。メールや電話で話す涼介に、会話の切り出し方も物事の考え方もある種嫌いで否定したい部分を感じていた。しかしまゆみは、今夜涼介が見せている人懐っこい一面や聰明な立ち居振る舞いに、心の隅にずっと忍ばせ続けるつもりでいた涼介への猜疑心を、好奇心に変えようとしていた。

涼介はまゆみに悟られないギリギリの所で気を使っていた。時に大胆に、時に謙虚に、そしてたまに自分の出来の悪い部分を晒す事で、まゆみに付け入る隙をとれていた。

涼介は明らかに一人の空間を演出していた。それは涼介が描く今後の展開に必要な作業でもあった。

「出ようか。」

「うん。」

まゆみの涼介に対する恋心は、過去の男性との比較に因つて具体的になろうとしていた。涼介もまゆみを生涯忘れられないだろう女性と比較していた。

「ご馳走様でした。」

アトリウムで待っていたまゆみは、レストランから出て来た涼介に丁寧にお礼を言った。

「美味しかったね。」

涼介はまゆみに対するお礼を、そう表現した。

「うん。」

まゆみの笑顔に曇りはなかつた。そしてその笑顔は、ほんの2時間前、涼介に見せていた笑顔とは明らかに違つていた。

グランドハイアットを出た二人は、キャナルの噴水が連なるスター・コードを左に見ながらゆっくりと歩いていた。

まゆみは涼介を左肩に感じながら、並んで歩いて欲しいと思つていた。

涼介はまゆみの少しだけ後ろを歩きながら、さり気なくまゆみを観察していた。

まゆみのナチュラルカールは、その毛先にフェミニナリティを漂わせ、白いカットソーの首元に光るシルバーのネックレスを包み込む様に揺らしていた。指輪は無かつた。左腕にはエレガントなドレスウォッチが光り、ストレッチパンツとスクエア・トウのパンプスは黒く、バッグはPRADAだった。

(・・・絶対負けないのにな・・・)

まゆみはキャナルを彩る噴水や、中庭で身を寄せ合うカップル達に触発された様に心の中でそう呟き、涼介に寄り添つた。

まゆみは涼介と腕を組んで、もっとゆっくり歩きたいと思つていた。そうすれば中庭の主役を勝ち取れると直感していた。

「キスしようか。」

「えっ！」

涼介の不意を打つ言葉にまゆみは慌てた。

「キスしようよ。」

涼介は歩きながら、まゆみの方を見る事無くもう一度誘つた。

「・・・こんな・・所で？・・・。」

まゆみは複雑な心で、歩き続いている涼介の背中にさう言った。

「そうだよ。」

涼介は振り向いてまゆみの歩を止めた。

「だつて・・・。」

まゆみは食事中から涼介とのキスを想い描いていた。しかしまゆ

みの台本では、キナルシティの中庭は涼介に凭れ掛かり、優越感に浸りながら綺麗に立ち去る場所だつた。

「だつて・・・何？」

涼介の優しい声は少し意地悪だつた。

「えつ・・・だつて・・・、此処で？」

まゆみは涼介を深く見つめた。

まゆみは拒否している訳ではなかつた。出会いたその日に交わすかもしない甘いキスは当然想定していた。しかし涼介を見つめるまゆみの瞳は、今夜一度も不意を打つた涼介に対するさやかな抵抗と、この状況だからこそ涼介の心を驚撃みにしてしまえる筈の、可愛い仕草や素敵な言葉を探し出せない自身の未熟さに落胆する心の内を覗かせていた。

「じゃ、止めとこう。」

涼介はそう言つて、まゆみから視線を離した。

「・・・・・。」

まゆみは涼介を見つめ続けていた。

噴水を照らす甘い照明と、グランドハイアットの客室に灯る優しい光が、まゆみの瞳に艶を『えていた。

(えつ！…)

まゆみは一瞬の出来事に慌てた。

まゆみは揺れる心を涼介に伝える前に唇を攫つかっていた。

涼介は心地良い香りが通り過ぎる様な優しいキスをまゆみに贈つていた。

(えつ！…)

まゆみは再び慌てた。

“止めとこう”と言つた直後、当たり前の様に唇を重ねていた涼介は、まゆみに瞳を閉じ忘れさせる程の速さで再びまゆみの唇を奪つていた

深く、長いキスだつた。

まゆみは羞恥心を忘れ、観念し、“揺れ”を止められた心と溶け

てしまいそうな体を涼介の意思に預けていた。そしてまゆみは自身の戸惑いや抵抗が涼介に取つては違う次元の物なのだと、絡み合う唇から悟らされている事を感じ取つていた。

周りの目を気にしない涼介のキスは、まゆみの願い以上に二人を中庭の主役にしていた。

(・・・・・)

まゆみは胸の鼓動が痛いと感じていた。そして乱れた呼吸を元に戻す為に、歩きながら大きな息を夜空に向かつて吐き出した。

頭上には、二人に覆い被さる様な建物の僅かな隙間から月が見えていた。

中庭に佇む人達は、まゆみと涼介に好奇の目を向けていた。まゆみは涼介に絡まり、隠れる様に歩きたいと思っていた。

涼介はまゆみが手を伸ばしても届かない位置に背中を置いていた。まゆみは普通に歩き続ける涼介の背中に追い付く事も、喋り掛け事も出来ないまま、少し顔を赤らめて涼介の後を追つていた。

「博多駅までお願ひします。」

キヤナルシティを出た涼介の歩き方や行動には迷いが無かつた。そしてその淡々とした行動の答えは、乗り込んだタクシーの中で、ドライバーに告げる形としてまゆみに伝わる事となつていた。

「・・・最終、間に合うよね？」

キス以来、まゆみが涼介に語り掛けた最初の言葉は、甘い余韻に浸れる会話を望んでいた自身の心とは裏腹の、涼介の“博多駅”という言葉に反応してしまつた問い掛けだった。

「全然大丈夫だよ。」

涼介は左を向き、笑顔を投げた。

(何であんな事言つたんだろう・・・)

まゆみには涼介の瞳が、甘え方を知らない不甲斐無い自分を責めている様に見えていた。

(何か喋んなきや・・・。)

まゆみは涼介の落ち着いた雰囲気に焦つていた。

「・・・あの・・・(えつーー)・・・。」

涼介は、“場”的空気を変え様と喋り始めたまゆみの唇を静かに塞いだ。

まゆみの心は、キャナルシティの中庭で交したキスの時とは違つた意味で複雑に揺れていた。

まゆみはタクシーの中でキスをされながら、今夜は涼介にもつと会話ををして欲しかつたと思っていた。涼介の優しい笑顔や他愛の無い話がもつと欲しかつたと思っていた。しかしまゆみは思いの外強く長い涼介のキスに因つて段段と思考能力を奪わっていた。そして涼介に対する自分の“ちっぽけ”な望みなど、もうどうでも構わないと思つてしまふ程体温を上げていた。

まゆみは熱く火照る体から、自身が望む恋の形にこだわる事の無意味さを知らされていた。そしてまゆみの体は自意識とは掛け離れた部分で涼介のキスに熱く答えていた。

「・・・長過ぎたかい?」

「・・・ばか・・・。」

まゆみは艶やかな瞳で涼介を見つめ、誰にも聞き取れない様な声でそう言つた。

タクシーの中のキスで、涼介は今夜まゆみに三度不意を打つていった。その事実は、涼介という男性を深く知る迄まゆみが心中に張り巡らせて置きたかつた最後の防護壁を、着実に解かし始めていた。

(・・・・・。)

まゆみは博多駅がもう少し遠くにあつて欲しいと思っていた。そしてまゆみは熱く火照つた心と体を元に戻せないまま、タクシーの中で涼介が創る沈黙に従つていた。

まゆみは、足を組んでシートに深く凭れて街を眺めている涼介を“するい”と思っていた。同時にまゆみは、心を搔き乱し続ける涼

介から放つて置かれる事に快感を探し始めていた。

「・・・・・。」

まゆみは我慢し切れず、涼介の横顔を見つめた。

まゆみの瞳には涼介の横顔が上品に映っていた。無理をして演出している風でも、もてあそ玩んでいる風にも、まゆみの瞳には映つていなかつた。サーモンピンクのシャツの首元をラフに開き、外したネクタイをスーツの胸ポケットに無造作に突っ込んでいる気障な姿は、逆にまゆみの心に強烈な独占欲を湧かせていた。

まゆみは今日のデートで見続けて来た涼介の一挙手一投足をスタイリッシュと「前向きなイメージ」で括るうとしていた。それは一気に恋に落ちてもいいとする心が導き出した、ある意味一人の今後に覚悟を決めた結論でもあった。

「今日は有難う。」

涼介はまゆみに対する感謝の言葉で沈黙を解いた。

フロントガラスの先に博多駅が見えていた。

まゆみは穏やかな涼介の声に、切なさで体を締め付けられていた。

「じゅらこそ・・・。」

まゆみの声は消え入りそうだった。

「本当は自宅近くまで送りたかったんだけど・・さ。

「ううん、いいの・・最終間に合づの?」

「大丈夫だよ。」

「新幹線?」

「そうだよ。・・・唐人町だつたつけ?」

「うん。」

「運転手さん、この後唐人町ま・・」

「ううん、いいの、私も此処で降りる。」

まゆみは涼介の言葉を遮った。

「・・・そう。」

涼介はそれ以上何も喋ろうとはしなかつた。

「じゃね。・・・気を付けて帰んなよ。」

「涼介も気を付けて帰つてね。」

二人の最初のデートが新幹線の改札の前で終わろうとしていた。涼介は11時21分の終電5分前に改札を抜け、歩きながら振り向き、まゆみに軽く手を上げた。

笑顔で手を振り返すまゆみの胸には、張り裂けそうな程涼介が溢れていた。

まゆみは背を向けた涼介を田で追つていた。

涼介は階段を昇ろうとしていた。

まゆみは小さくなる涼介の背中をずっと田で追つていた。離れていく一人の距離に漂う空気は紛れも無く恋人同士の重さを含んでいた。

8・珠玉の過去

8・珠玉の過去

(・・・・・。)

涼介は煙草を吸える一号車の窓側で考えていた。

湿った心に情熱という火を付ける為に、涼介は恋愛の理想と“まゆみ”という一人の女性との現実を何度も何度も心の中で擦り合わせていた。しかし心の中から取り出したい好きという気持ちと、好きになろうとする気持ちとは、幾ら擦り合わせても斑なく混じり合う事はなかつた。

(何が不満なんだ・・俺は一体何を望んでるんだ・・素晴らしい女性じゃないか・・・この出会いを恋の始まりだとして、愛が生まれて育つ様な事をやるべきなんじゃないのか?・・・。・・・じゃあ何故キスなんかしたんだよ・・・彼女にしたいって思つたからだろ?・・・)

涼介は左手で玩んでいた携帯を開いた。

新規メール作成 宛先 まゆみ

お疲れ。

食事の時に僕は恋に落ちた。

路上のキスで少年に戻った。

タクシーの中で大切にしたいときめいた。
改札の前で、まゆみが恥ずかしがりそうな
エッチをワイルドにしたいと思った(笑)。
じゃ、また。

おやすみ。

サブメニュー 編集 戻る 111：27

（・・・これでいいのかよ・・・いや、これでいいんだよ・・・。）
涼介は圧力で軋む窓の外で緩やかに流れる町の灯りに焦点を合わせられないでいた。
(ときめいた、か・・・。)

涼介はメール画面に田を落とした。そして送信ボタンを押し、携帯電話の電源を切った。

「相変わらずぬるいな。」

涼介は自身の行動を自虐的な客観で振り返り、切り捨てた。それは美化され続ける珠玉だった日々を思い出す為のルーティンの様にもなっていた。そして小倉駅に着く迄の20分間といつ、絶妙な間合いと独特な静けさが与えてくれる孤独の中で、涼介はまた何時もの様に“マキ”という理想の原点を振り返ろうとしていた。

梅雨明けを知らせ様とする雷雨が、バブル景気の香りが残る元町を激しく叩き付けていた。

1991年、横浜に夏が来ようとしていた。

「お疲れさん！」

「お疲れです。」

「おつ、今昼飯か？」

「はい、今日ラスト迄なんです。」

勢い良く休憩室に入つて来た店長は、食事中の涼介に「一、二言葉を投げて窓の方へ歩いて行つた。

外は滝の様な雨が降っていた。遠くで雷が碎ける音も聞こえてい

た。

4月、レストラン事業を全国展開している食品会社に大学新卒で入社していた涼介は、関内にある本社の企画開発部に配属され、その年の6月1日から現場での接客サービスのノウハウ、関連業者との取引形態、パートやアルバイトのシフト調整や商品管理システムを研修する為に、元町にある直営レストランで勤務していた。

涼介が研修に出向いたレストランは、雰囲気の良い、美味しいイタリア料理を提供する店として人気があった。石川町や元町商店街で働く人達や地元の人からも、ランチやディナーを気軽に堪能出来る店として愛されていた。

「すげえ雨だな。」

店長は一階にある休憩室の窓から裏通りを見ながら涼介に言った。

「そうですね。」

涼介は箸を止めて返事をした。

「もう仕事には慣れたか?」

「はい、大丈夫です。」

涼介は元町店で1ヶ月半を過ごしていった。

「そうか。」

店長は外を見たまま満足そうに頷いていた。

「佐久間、明日バイトが三人入るから、よろしくな。」

店長は自分のデスクに戻りながら、落ち着いた声で涼介にそう言った。

「色々教えてやつてくれ、それが佐久間の為にもなるから。椅子に深く腰を下ろした店長は、そう付け加えた。

「はい、分かりました。」

「頼むぞ。」

店長は涼介に期待していた。

「はい。」

何時もなら夕日が差し込んでいる筈の窓の外は夜の様に暗く、街路樹は強風で乱舞していた。

涼介は残りの賄いを黙々と胃の中に搔き込んでいた。
雷のフラッシュが時折音もなく窓を明るくしていた。

(やべえやべえ。)

取引先との電話応対で朝礼に少し遅れた涼介は、昨日の店長の言葉を思い出しながら、小走りで列の一番後ろに付こうとしていた。
朝礼は店長の何時もの訓示が終わり、フロアスタッフのアルバイト募集で採用された三人の女性の簡単な自己紹介が始まっていた。

(マジかよ・・・。)

採用されたスタッフが全員女性だとは思っていなかつた涼介は、列の一一番後ろで彼女達をチラッと見た後、そう心の中で呟いた。

(やり難いよなあ・・・。)

涼介は顔を俯きがちにさせながら、彼女達が働き易い様にサポートして行くにはどうしたらいいかを考え始めていた。

“じゃ、どうぞ。”

(・・・・・。)

涼介は顔を上げた。それは店長が最後に残った女性に挨拶を促す声だったが、涼介はその声が自分に向けられたかの様に反応し、その女性に視線を向けた。

“山崎マキです。宜しくお願ひします。”

(・・・・・。)

涼介はマキの顔をじっと見つめていた。

“・・・はい、始めてですけど、早く仕事を覚えて・・・”

(・・・・・。)

涼介は店長と一緒に言葉を交わしているマキから視線を外せなかつた。

涼介は雷に打たれていた。一人の女性が放つ、全てを焦がす雷の様な強い力に体を縛られ、胸を射抜かれ、呼吸を止められていた。

(・・・・・)

涼介はマキを強烈に見つめ続け、その瞳はマキの姿を全身に取り込み続けていた。

涼介は一瞬にして恋に落ちていた。
想像を遙かに越えた一目惚れだった。

(・・・・・)

涼介は瞬きを忘れ、挨拶を終えたマキを見つめ続けていた。

山崎マキは山手に在るフェリス女学院大学の二年生だった。19歳の半ばを迎えた、細身で、少し日焼けした肌に艶やかなショートの黒髪と奥一重の大きな瞳が印象的な女性だった。

マキはスケジュールの空いた時間を上手く利用して働いていた。
ランチタイムの時だけもあれば、ティータイムからラスト迄働く事もあった。

マキに仕事を教える涼介は充実を感じていた。
マキは仕事を教わる涼介に対して屈託がなかつた。

涼介はマキの全てが好きだった。呑み込みの早いクレバーな仕事振りも、媚を売らないスマートな言葉も、仲間同士で交わすエッチな話題にもセンス良く付き合うバランス感覚も、時折見せる茶目っ気や、たまに誰にも融合しないクールな思考も、自信と不安が混在する主語のない会話も、そしてそんなマキのベースとなっている大らかさに、涼介は魅力を感じ、舞い上がり、心を揺さぶられ続けていた。

涼介はマキと出逢って、恋愛に求める理想という不確定要素の多い概念を初めて具体的に認識していた。

マキは予感していた。

一人が出逢つた朝、マキは涼介の純粹で力強い視線を心にしつかりと感じていた。マキはそんな涼介の視線に込められた思いを、何時か必ず全身で受け止める事になると予感していた。

マキも涼介に一目惚れをしていた。マキが自身の心に結論付けていた“予感”という感覚は、言葉も交した事のない男性を恋する事に躊躇う心が、自身に対して最大限譲歩して導き出した言い訳に過ぎなかつた。

引き付け合う二人の恋心は、取り巻く全ての人に対する優しさや思い遣りという前向きな感情となつて発散されていた。一つの出逢いに因つて引き出された健全な精神は、理屈や定義ではない、人間として誰もが持つている“愛”という概念の本質を一人に見つめさせる機会を与えていた。そしてその愛は、お互いを見つめ合う“恋”という激しい感情と融合し始めていた。

マキと涼介は、そうなる事が当然の様に8月の頭には恋人同士となつていた。

二人は、人生の中で一度は無い様な相思相愛といつ、誰もが一度は描き求める理想の下で、尽くる事のない愛情を注ぎ合おつとしていた。

「・・・終つちまつなんて・・・」

涼介は新幹線の中で、過去の恋愛を今更ながら嘆いた。

涼介の心の中で封印され続けているマキとの想い出は、樽の中で熟成されるワインの様に、長い年月をかけて極上の風味を付けていた。そしてそのワインは、昔、最も愛した恋人を思い出す時に感じる切ない色ではなく、今でも愛しい人を想う時に感じる哀しい色を付けていた。

（付き合つて直ぐだつたんだよなあ、車無かつたし、買うつもりだよつてマキに言つたら、ヤツ、セリカが好きだつて言つもんだから結局セリカになつちまつてさ、參つたなあ、あの時は・・・。

・・・ そうだよ、八月に下田まで泊まりに行つたんだよ、そのセリカで・・・。・・・ プライベートビーチの雰囲気良くてさあ、ビーチパラソルの中でマキがサンオイル塗つて、黒のビキニがたまんなくて、寝たふりしながらチラチラ見てたんだけど、ヤツは俺が寝てるつて勘違いしててさあ、そつと俺のサングラス外してキスしやがつたんだよ・・・。束ねた髪、色っぽかつたなあ・・・。あれ以来だよ、マキの着替えとか小物が俺ん家に増えて来たのは・・・。

石川町の駅裏にある炭焼き屋にもよく行つたなあ・・・。ヤツのバイトがラスト迄の時は必ず行つてたもん。仕事中、廻りの皆さんにバ

レない様にサイン送つてさ・・・。擦れ違う時なんか“タワーレコードで待つてるね”ってヤツが耳元で囁いてさ・・・。

ベイブリッジの上でキスした事もあつたなあ・・・。十月だつたかなあ・・・。思い切つて車停めて、橋の上に降りて夜景見たんだよなあ・・・。

そうそう、会社の飲み会でよく冷やかされてたんだよ・・・。“お前達付き合つてんのかよつ！どうよ山崎！ そうなの？なあ、佐久間、言つちやえよ、俺、山崎の事好きなんだからさあ”とか酔つた先輩に言われちゃつて、一緒に居た皆からも集中攻撃されたんだよな・・・。飲ませてたもんなあ、調理場の人達なんかに“彼氏いんの？いないの？やっぱ佐久間なの？”とかしつこく突つ込まれちゃつて、冷々しながら見てたもん・・・。あの時は俺も会話に入つて行けなくてさ、ただ飲むばっかで、しかしよく耐えてたよ、ヤツ・・・。・・・ そう、その後だつたんだよ、トイレに行つた筈のマキが戻つて来ないもんだから心配になつちやつて覗きに行つたら、通路の横に隠れてやがつてさ、ガバッつて抱き付いて来て、“来てくれると思った”だもん・・・。まったく意地らしくて可愛くて、抱きしめて思わずキスしちやつたもんなあ・・・。

風に戸惑う 弱気な僕
通りすがるあの日の幻影
本当は見た目以上
涙もらい過去がある

止めど流れる 清か水よ
消せど燃ゆる 魔性の火よ
あんなに好きな女性に
出逢う夏は一度とない

Southern all stars

“ TSUNAMI ” by

涼介は本牧一丁目にワンルームを借りていた。マキは根岸が実家
だった。

仕事先のレストランがある元町と一人の家は一本の道路で繋がっ
ていた。

涼介にとってマキとの恋愛は、ロケーションまでも人生の中で一
度は無い様な珠玉だった。

(・・・・・)

涼介は流れ去る町の明かりに、珠玉の過去を顧み続けていた。

(・・・そう言えば最初のクリスマス、あいつ、俺の部屋でずっと
待つてくれたんだよなあ・・・。残業終つて、店から持つて帰つ
たケーキとシャンパンを“ただいま”つて渡して、“どうか行く
?”つて聞いたら、“何処にも行かない”つて笑つて、“ねえ、
座つて”つて、俺をソファー代わりにテレビ見始めちゃつてさ・・・
。

あの時の月も忘れないなあ・・・正月休みだったかなあ、寒

い夜だつたんだよなあ・・・俺ん家からビデオショップ迄歩いて行つてさ・・・ヤツは俺の左腕を抱え込む様にぴたりくつついててさ・・・。綺麗な月が出てたんだよ、“寒いね”とか言い合いながらさ・・・。まったくほんと、昨日の様だよ・・・。

中華街で一人だけのお疲れさん会もよくやつたなあ。あの時はチャーミングセールが終つた次の週だつたんだよ、俺が思いつきり酔つちゃつて、ゲームセンターでUFOキヤツチャー意地になつちやつて、だつてマキがビーサンの片方一発で取つちゃうもんだからさ・・・。“いねえな、何処行つたんだ？”つてキヨロキヨロしてたら、ヤツは道路の向かい側にあつたベンチに座つて、アイス食いながらビーサン履いた足を振つてたな・・・。まったく小癪だつたけど、可愛かつたなあ・・・。)

座席に深く凭れ、頬杖を付いている涼介の顔は穏やかだつた。

(・・・俺が四月に本社へ戻つた時、ヤツ、何だか悲しがつてたんだよなあ・・・。“本社つて言つても関内なんだからそんな顔すんなよ”とか、“こまま一緒の職場に居るよりは健康的じゃん”とか言つてさ・・・。俺ん家だつたなあ、あの時・・・。)

人は誰も愛求めて闇に彷徨う運命

そして風まかせ。oh, my destiny涙枯れるまで

見つめ合つと素直にお喋り出来ない
津波のような侘しさに I know...怯えてる - Hoo...
めぐり逢えた瞬間から魔法が解けない
鏡のような夢の中で
想い出はいつの日も雨

“ TSUNAMI ” by

(12月27日なんだよなあ、マキの誕生日……。最初の誕生日は俺ん家だつたし、だから一度田は最高のクリスマスと誕生日にしようつて約束してたんだけど、小っちゃな事で揉めてさ、何だか二十三日の夜に俺とどつかの女性が関内のBARで飲んでたつて、美由紀に見られちゃつてたんだよな……。“何でそんなBARで二人なの！？”って、あんなに機嫌の悪いマキを見たのは初めてだつたな……。最高のイヴにしようつてしてた日にだもん……馬車道のレストランで、ディナー用のローソクがテーブルの上で燃えて、もう直ぐアペリティフが来るつて時だつたんだよ……。“同僚の相談に乗つてただけだよ！”って言つてんのに全然信じて貰えなくてさ……。“帰る！”とか言い出しちゃつて、こつちもマジになつちやつて料理そつちのけで一から詳しく述べてさあ……。ヤバかったよなあ、あの時……。その後山下町にあるヤツのお気に入りのBARに連れてかされてさあ……。言わされたんだよ、“愛してるつて”。“ごめんなさい”つて……。“私はもつと愛してんだから”つて。おまけに“今日は酔うからね”つて。何だか怒った様な、してやつたりの様な、そんな顔してたなあ。今思えばヤツの計算通りだつたのかなあ……。)

涼介の胸は想い出に捩じられ、締め付けられていた。

(クリスマスの次の日に一人でプレゼント買いに行つたんだつたあ……。“まーだ買つてなかつたの！”とか言いながら嬉しそうでさ……。……雨降つてたんだよ、ヤツの傘小っちゃくて、“俺、雨嫌いなんだよ”って言つたら、“私は雨もリョウも好きよ”つて、まったく普通の顔しやがつたままでさ……。しかしあの時はヤツの方が一枚上手だつたんだよ……。ポールスミスのピーコートだよ……。紺がいいつて……。懐かしいなあ……。前から欲しがつてたやつだつたんだよなあ……。ほんとヤツの方が上手でさ……。店から出て来ないんだよ……。“どうしたんだろう”つて戻つたら、左手で俺の袖口掴んで右手をハンガーに伸ばして、“これ、着て”だもん……。“ねつ”つてさ……。嬉しそうに俺の手を引っ張つて

レジまで持つて行っちゃったもんな、あいつ・・・。“私、ステン

カラー好きなの。リョウ、似合うよ”ってさ・・・。

・・・最初のクリスマスの時もヤツが意表を突く様にペアリング

買って来てたしな・・・。

時計を右腕にする様になつたのもヤツなんだよな・・・。下田の
帰りに“やっぱ右だよね”って、ヤツが右腕に付け替えたのがきっ
かけだし・・・。その時初めてヤツも右腕に時計してんの気付いて
さ・・・まったく・・・。)

愛が終わり 目醒める時

深い闇に 夜明けが来る

本当は見た目以上

打たれ強い僕がいる

泣き出しそうな空眺めて波に漂うカモメ
きつと世は情け oh , sweet memory 旅立ち

を胸に

人は涙見せずに大人になれない

ガラスのような恋だとは I know ... 気付いてる , H

oo...

見も心も愛しい女性しか見えない
張り裂けそうな胸の奥で
悲しみに耐えるのは何故?

“ TSUNAMI ” by

Southern all stars

(ザ・ヨコで祝つたマキの誕生日、最高だったなあ・・・。内緒に

してたんだよ、前の日に誕生日は俺ん家でいいねって言つたら、ち
ょつとムスッとしちやつてわ・・・。・・・喜んでたなあ・・・窓
の外はランドマークから大桟橋から真下は山下公園だし、氷川丸も
ベイブリッジもキラキラ光つてて、マリンタワーまでさ、何だか新
鮮に見えたもの・・・ルームサービスでシャンパン頼んでさ・・・
でもケーキ忘れちゃつてたんだよな・・・しょーがねえーなあみ
たいな感じで買いに行つたなあ、一人でコンビニまで、ピース売り
のやつ・・・ローソクもワンパック買つてわ・・・ケーキにヤツが
ローソク一本ずつ立てて、“大好きなりョウと迎える一度目の誕生
日っ！”とか言つちゃてさあ・・・醉つぱらつて、明るくなつて、
素直になつて・・無邪氣でわ・・・。・・・忘れらんないよ、まつ
たく・・・。）

9・・・・ぬるい代償

9・ぬるい代償

見つめ合つと素直にお喋り出来ない
津波のような侘しさに—I know...怯えてる、Hoo...
めぐり逢えた瞬間から死ぬまで好きと言つて
鏡のような夢の中で
微笑をくれたのは誰？

好きなのに泣いたのは何故?
思い出はいつの日も…雨

“ TSUNAMI ” by

Southern all stars

(ふう・・・。)

マキの事を思い出し続けながら新幹線を降りた涼介は、出そうになる溜息を我慢し、柔らかく息を外に逃がした。
深夜だといつのに、ホームには残暑を物語る生ぬるい夏の風が渡っていた。

涼介の周囲には、足早に歩く人が溢れていた。

(何であんな風になつちまつたんだろう……結婚するのが当たり前で、安心してたのかな……)

涼介は会社のあるテナントビルの通用口から階段で地下に降りながら、そんな事を考えていた。

(……マキが一番大切な気が持て、伝えてるつもりでいい気になつちやつてたんだろうな……)

地下駐車場に繋がる鉄の重い扉を開けた涼介は、車のキーを取り出そうとしていた。

(……確かにマキの事……深く考えずに遊んじゃつてたし……)

涼介はハザードランプを点滅させた。

「……ぬるかつたな。」

車に乗り込む前に、涼介はそのまま自分に投げた。

(……)

涼介は自分の恋愛の行き着く先を照らさうとする様に、ヘッドライトを点けた。

深夜の地下駐車場にエンジンのアイドリング音が響いていた。
(しかしマキに対する気持ちはあるくなかったぞ……)

涼介はハンドルを握ったまま、マキとの事を考え続けていた。

“ドン”……

ハンドルを叩いた音が一度、鈍く車内に響いた。

(……何を今更そんな自己弁護してんだよ……)

涼介は深い溜息の後、そのまま自分に吐き捨てた。

(……何処に行きたいんだよ……)

駐車場出入り口のシャッターを開き、車を路上に放り出す前に、

涼介は更にそのまま吐き捨てた。

涼介は何時か何処かでマキと必ず再会出来ると信じていた。故に涼介は自分に割り振られた恋愛の現実を見据えて前に進むより、過

去を振り返り続ける事の方が重要なだと信じていた。しかしマキとの距離は、マキを思い出す度に確実に遠くなっていた。

（・・・本当にまた会えると思ってんのかよ・・・会ってどうすんだよ・・・でも会わなきや駄目なんだよ・・・）

涼介は虚無感と戦っていた。そしてその虚無感はマキへの想いを打ち負かそうとしていた。しかし涼介は、更に強く自分に忠実であり続け様ともしていた。

（・・・・・。）

涼介は車を走らせながらコンソールボックス辺りを弄り、サザンオールスターズのCDを探した。

涼介の中には、新幹線に乗り込んだ時からずっと、サザンオールスターズの曲が流れ続けていた。

（・・・運命・・宿命・・・辛いもんだな・・・。）

涼介は考えていた。世の中を牛耳る無常の現象と、人間の意思を超えた力を持つ運命や宿命という、考え方一つでその後の人生を善悪どちらにでも曖昧に誤魔化してしまった命題を考えていた。

モノレールの高架を抱え上げる様に真っ直ぐ伸びている大通りは、昼間の渋滞が嘘の様に涼介の運転する車を走らせていた。

涼介はマキの幻影を追い求める様にアクセルを踏み続けていた。

ザ・ホテル横浜でマキの21歳の誕生日を祝つた次の年、社会人3年目を迎えていた涼介は、新たに培われた人脈の下、所属する企画開発部の飲み会や他の部の会合、同僚や取引先の女性社員がセッティングする合コンに誘われるまま全て参加する日々が続けていた。

仕事や環境に対する慣れが生んだ涼介の心の余裕は、時間を都合する手順を覚えていた。しかしその事実は、同時にマキに対して幾

許かの不誠実があつても対処や説得が出来るという、不埒な余裕まで心に同居させる事となつていた。

マキは涼介に寛大だった。

涼介は一人の関係に危機的状況など無いと“たか”を括り、大好きなマキに甘えていた。

マキは涼介との幸せな結末を常に想い描いていた。

涼介はマキとの間に幸せな結末が来る事を当たり前だと捉えていた。

生活を自分中心に回していた涼介は、就職活動という理由で、マキがアルバイトを7月に辞めていた事に暫く気付かないまま元町店出入りしていた。

マキはレストランで涼介と同じ時間を共有出来ない事実の重さに耐えられなくなっていた。

涼介はマキの強がりを見抜けないでいた。そして一人の時間を後回しにしていた。しかしマキは涼介に明るく振舞う事を怠る事は無く、責める事も無かつた。

夏を迎える様としていた。

マキは不安と期待と、時間を持つて夏を待つていた。

マキは夏が好きだつた。

二人の恋は夏に始まつていた。

マキは夏が二人の局面を変えてくれると信じていた。悲しい事など想像出来なかつた、出逢つた年の8月に戻れると信じていた。

涼介のマキに対する慢心は、10月に多摩プラーザにオープンするレストランの開店準備で多忙だという理由だけで、マキとの時間を等閑にさせていた。

マキは涼介の夏の休暇を待つていた。

涼介の夏は仕事が優先されていた。

マキは同じ時間軸を持つ異性や大学の友人達に、大学生活最後の夏を満喫しようと数多く誘われていた。

マキは持てた。マキを取り巻く異性の中には、涼介の存在を知り

ながら積極的にアプローチして来る者も居た。

マキの涼介に対する想いは揺れていた。そして不安を隠す為の明るさを目立たせながら、気丈に耐えていた。

マキは空白のままのカレンダーを携えたまま、涼介を振り扱う事が正解なのかもしれないと考え始めていた。しかしマキは結局、涼介との予定が決まらない夏のカレンダーに、涼介以外の予定を落とす事は無かつた。

マキとしては暑くて長い夏、一人の間には電話越しの会話が増えていた。電話口の涼介は淡々と然も当たり前の様に仕事に追われる日常を口にしていた。マキは“愛してる”という素直な心情を言葉にする事が出来ないまま、涼介からの“愛してる”を待っていた。マキは涼介の部屋へ行きたい気持ちを行動に移せない日々を送っていた。

涼介は一日の終わりに5分だけでもマキが部屋に居て欲しいと、自分勝手な願望だけを日々膨らませ続けていた。

夏が終わる頃、マキは夜中に一度だけ衝動的に涼介の部屋へ言った事があった。涼介は留守だった。途方に暮れたマキは自宅に戻つて涼介からの電話を待つよりも、涼介の部屋で涼介自身を待つ事を選んでいた。されどマキのその選択は、一人歎息を付いて涼介の好きな歌を何度も口ずさみながら、涼介を待ち続ける夜を過ごす結果となつていた。

秋が来ていた。

10月、マキがカレンダーに記入した“涼介”的名前は二度だけだつた。

二人は出逢った頃の様に“好きだ”という気持ちを上手く伝えられず些細な喧嘩を繰り返していた。そしてその喧嘩には、恋愛を成就させる為の弊害と成り得る“慣れ”が生まれていた。

“慣れ”はその場を上手く切り抜ける要領を一人に与えていた。しかしその代わりに“思いやりといつ愛情”を妥協する気持ちも一人に与えていた。

涼介は一人の現状を樂觀していた。

マキは一人が築き続けて来た恋愛そのものに疑問符を付け様とする弱氣な心に苦しんでいた。

「・・・あいつ、今どんな生活してんのかなあ・・・。」

涼介は運転しながら呟いた。

（子供いんのかなあ・・・あいつの事だからバリバリ仕事してんだ
ろうなあ・・・はあ・・・・。）

涼介は視線を遠くに置いたまま、溜息を一つ吐いた。

「もう10年なのに・・・やべえなあ・・・。」

涼介は脱力感に襲われていた。

（・・・あの広告代理店にまだいんのかなあ・・・。）

涼介はそれでも“あの日”に戻るうとしていた。

二人の恋愛は、三度目のクリスマスを迎える前に終止符が打たれていた。

夏が過ぎた辺りから涼介が誘う一人のデートは何時も喧嘩の後だつた。

11月の半ば、一人で過ごす時間や愛情を淡々と流そうとする涼介の態度にはつきりと文句を言ったマキに、涼介は何時もなら見せない様な投げ遣りで醜い悪態を吐いていた。

涼介にとってマキの言い分は図星だった。涼介の直観的で受動的な態度を、マキは理性という真偽を識別するナイフで整然と抉り取っていた。それはある意味、マキの涼介に対する心からの愛情だった。そしてその愛情は、涼介にマキへの想いを見失ってしまってい

た事を後悔させるには充分な威力があった。

涼介は醜い姿を見せた事に対する罪悪感を日々募らせていた。

マキは涼介に言い様の無い切なさを感じ始めていた。

11月の終り、涼介は反省している気持ちを伝える為にマキを仲直りの食事に誘っていた。しかしそれにも拘らず涼介は、マキが望む二人の時間に悉く首を横に振っていた。

12月を迎えていた。

仕事の都合に因つてマキとのデートを何度も何度も押し流していた涼介は、その都度電話でマキに謝っていた。しかし涼介と出来るだけ長く一緒に居たいとするマキの心は、電話を通して聞こえる涼介の自戒や反省の言葉の端々に、自分を中心として行動を組み立てている感情を透かしていた。

結局、一人の仲直りの日は12月一回田の日曜日迄ずれ込む事となっていた。それは涼介にとって遅く、マキには遠過ぎた。

涼介は少しだけ不安な気持ちを抱えていた。しかし涼介の心の中に燃る傲れる感情は危機感に無頓着だった。

涼介は夏以来続いている二人の感情の食違いを、恋愛中、必ず何度か訪れる筈の倦怠期の様な物だと捉えていた。だとしたら二人の関係は何れ元に戻つて、更に絆が強まる筈だと考えを結んでいた。

涼介は自身の中にある粗雑な感情を、時間の流れのせいにしていた。そしてその流れに、柔軟で謙虚な気持ちを保てない、鼻持ちならない自信という舵の無い船を浮かばせ、マキを乗せていた。

マキは涼介に流されまいと諭つていた。

12月12日の夜だった。

「寒いなあ。」

本牧の裏通り、涼介はマキのお気に入りの店まで歩きながら呟いた。

待ち合わせ場所は涼介の自宅から程近い“司”だった。

涼介はマキと出逢う前から“司”に通っていた。マキはそんな涼

介に連れられ、初めて“司”に来た時、一瞬にして“司”を好きになっていた。

「雪でも降んじゃねえか？・・・」

涼介はブルゾンのポケットに両手を突っ込んだまま四つ角を右に曲がり、月を探した。

涼介は50M程の、車一台がやっと通れる筋に入っていた。その筋の中央辺りに、一箇所だけ明るく光る場所があった。

「まさか満席って事は無いよな・・・」

そう呟いた涼介の耳に、筋の先に在る本牧通りを走る車の乾いたエンジン音が届いていた。

「こんばんは！」

涼介は暖簾をくぐり、檜の引き戸を開け、カウンターに背を向けていた板さんに声を掛けた。

「はい、いらっしゃい！・・おつづ！いらっしゃい！久し振りだねえ！」

声の主が涼介だと分かつた板さんは嬉しそうにそう言った。

「今日は一人かい？」

板さんは涼介に向かつて続け様にそう聞いた。

二人は常連になっていた。週に何度も通っていた頃もあった。

「いえ、後で来ます。」

「そうかい、じやあ奥だね、・・はいー名さん座敷つ、ビール持つてつて！」

板さんの声は軽やかに店内に響いた。

「・・・・・。」

涼介は変わらない板さんの元気な声に会釈して座敷に向かつた。

「うめえーーー！」

座敷でマキを待つ時は何時もそうだった様に、涼介は一人で先にビールを流し込んだ。

「うめやよ。」「

涼介はビールを一段と美味しく感じていた。そして半年近く前に同じ場所で頻繁に感じていた幸せを思い出していった。

「さて、と。」「

涼介はメニューを広げた。

「はーい、いらっしゃい！久し振りだねえ！奥に『居るよっ』…」

涼介の耳に、板さんの声が届いて来た。

(・・・・・)

涼介はメニューを見ながら顔を緩ませていた。

「お待たせーつ！」

「おう、お疲れ！」

涼介は存在感たっぷりに田の中に飛び込んで来たマキを綺麗だと感じていた。

「待った！？」

「いや、俺も今来たばかりだよ。」

マキの笑顔は涼介の心を根こそぎ出逢つた頃に引き戻していた。

「そう。」

座敷に上がったマキは、マフラーを解きながら笑顔を弾けさせていた。

「何飲む？」

涼介は聞いた。

「・・・相変わらず、やるじゅんって感じだねつ。」

マキはコートを脱ぎ、嬉しそうに涼介を見つめながら素直な気持ちを口にした。

「何言つてんだよ・・・何にすんの？」

「もう生頼んで来ちゃつた。」「

マキの笑顔には屈託が無かつた。

涼介は3週間振りに見るマキの姿にときめいていた。田の前には初めて逢つた日を思い出させるマキが居た。そして涼介は、ときめ

きの中に存在する得体の知れない“何か”から、忘れ掛けていたものを見い出す様に命じられていた。

マキは涼介を見た時、涼介を愛している事を改めて気付かされた。しかしまキは、涼介にとつて最良の女性は自分ではないのではないかと思う気持ちを振り払えずについた。それは涼介を信じる気持ちを何度も打ち負かされ、涼介を愛し続けて行く自信を完全に取り戻せない心が、これ以上深い傷を負つまいとする防衛本能を働かせているせいでいた。

「・・・広告代理店に就職が内定したんだってな、美由紀から聞いたよ、おめでとう。」

「ありがと。」

マキは嬉しそうに照れた。

「お待たせっ！」

生ビールを持つた板さんが座敷に上がろうとしていた。

「マキちゃん、ちょっと見ない間に一段と綺麗になつたねえ。」

「えーっ、そんなあ・・・」

「いやいや綺麗だよ・・・」

板さんはマキにそう言つた後、涼介の方を向いた。

「あんた、マキちゃん大切にしなきや罰当たるよつ・・・羨ましいねえ、まったく・・・じゃ、「ゆづくり！」

板さんは機嫌が良さそうだった。座敷を出る前に一人に見せた笑顔がそれを物語つていた。

「板さんがビール持つて来るなんて、初めてじゃねえーか？」

「そうだっけ？」

二人は顔を見合わせた。

「・・・マキの事が好きなんだよ。」

涼介はそう言つて自分のグラスにビールを注げりとした。

「あら、嬉しい・・・私つて、やるじやん。」

マキはおどけた。

「ああ、ほんとにやる・・・」

マキは涼介が喋り終わらない先に、グラスに注がれたビールを横取りして飲み始めた。

「おいおい、生来てんじやん。」

「美味しーっ！」

「・・・まつたく。」

涼介は困った笑顔でマキを受け入れていた。

「注文決ましたら呼びなっ！」

姿の見えないカウンターから板さんの声が聞こえて来た。
「はーいっ」

マキは答えた。

「・・・じゃ、乾杯だね。」

マキはそう言って涼介のグラスにビールを注ぎ始めた。

「・・・・・。」

涼介は優しい瞳でマキを見つめていた。

「よしぃ。」

マキは両手で持っていたビールをテーブルに置き、ジョッキを右手に持った。

「じゃ、乾ぱ・・」

「ねねっ、もうだいぶ飲んじゃってる?」

マキは涼介の言葉を遮り、ジョッキを差し出す前で身を乗り出した。

「・・いや、これで一杯目だよ。」

「そつか、いい感じだねっ。」

「いい感じだねって、な・・・

「乾杯っ！」

マキは涼介のグラスを鳴らした。

「まったくお前ってヤツは・・・。」

涼介は笑っていた。

「・・・・・。」

生ビールを飲みながら、マキの瞳は涼介に微笑み掛けていた。

「美味しいーっ！」

「な、美味しいだろ？俺と居ると。」「うん。」

マキは笑つた。

「あれ？・・・素直じやんか。」「でしょー！」

マキは久し振りに見る涼介の笑顔に、涼介の全てに因つて何物にも代えられない時間を貰つていた事を思い出していた。

「久し振りだね、ここに来るの。」「

「そうだよな、来てなかつたもんな。」「

涼介はマキの作るリズムに心地良く包まれていた。

「・・・久し振りだね。」「

差し向かつている涼介に、マキはもう一度、今度は少し真面目な声でそう言った。

「ん？」

「・・・私達。」「

「・・・そう？」「

涼介はマキの問いに対し、過去はそれ程重要ではないという意思表示をした。

「逢いたかった？」「

マキは無邪気にまた身を乗り出し、涼介に顔を近づけて悪戯っぽい上田使いでそう聞いた。

「もちろんだ。」「

「・・・逢いたかった？」「

マキは楽しそうに意地悪くもつ一度聞いた。

「決まつてんじゃない！」「

涼介は茶目っ氣を見せるマキをきつく抱きしめて、“ありつたけ”的愛情を何度も何度も伝えたい衝動に駆られていた。

「お待ちどうさまでした。」「

身を乗り出していたマキは仲居さんの声に反応し、体を元に戻し

た。

「うわあ、美味しそう！」

運ばれて来た料理はマキの大好きな物だった。

「ありがと、食べたかったんだあ、キンキの煮付けと焼き揚げ。
「だろ！・・・だと思つて先に注文しといたんだよ。」

二人は三週間分の想いを素直に晒していた。そして夏以来、二人の心に積み重なったままの嫌な思い出を、一つずつ笑い飛ばしていた。

マキはずっと笑顔だった。

涼介はマキの笑顔に愛しさを感じていた。そして出逢った日からずっと、マキの笑顔が強い自分を作る原動力になっていた事を思い出していた。

涼介は直感していた。今、マキに“愛してる”と、言葉で心を伝えるべきだと直感していた。しかし同時に涼介は、その直感を静観出来る程、一人の間に充実した時間が流れている事実を客観していた。

マキは待っていた。マキは自身の心を覆う暗雲を吹き払う、涼介の力強い言葉を待っていた。大好きな人から貰いたい、最高の響きを持つ、愛し続ける自信を取り戻せる、一生大切にしたい言葉を待つていた。

マキはずっと笑顔だった。涼介にはマキのその笑顔が、一人の恋愛に憂いなど無く、深い絆が解ける訳がないと思い込ませる程美しく映っていた。

「ははっ、何だよそれ。」

「いいじゃん、そんな事もあんのっ！」

二人の間には他愛の無い会話が続けていた。

マキは笑顔のままだった。

涼介はマキの笑顔に、マキへの想いを形にする事を躊躇い始めて

いた。

涼介は今夜マキに、半年近く続いた二人のぎくしゃくした関係を反省するつもりだった。そしてもう一度、この場所から新たに始めるかと言つつもりだった。しかし涼介は何の憂いも無い様なマキの生き生きとした素振りに、会話を止めて迄マキを愛している事を眞面目に伝えるよりも、このまま喋り続ける事が正解なのかもしないと感じ始めていた。そしてそんな涼介の心に巢食う、けじめに對する横着な感情は、マキの気持ちを察する努力や、二人の未來の為に自身が決心して来た事を心の隅に葬るうとしていた。

一人の間には会話が続いていた。

マキは相変わらず、ずっと笑顔のままだった。

涼介はマキが見せる仕草に神経を研ぎ澄ます事を止めていた。そして自身が持つ手前勝手な自信を再び振り起こし、マキとの大切な時間をこのまま押し流そうとしていた。

ぬるい姿だった。

涼介はマキへ贈るべき永遠の愛を心で握っていた。しかしその思いを紐解かず、表現する事にもがこうとせず、意を決する事に目を背け、愛情に無二の価値を付ける情熱を注ぎ惜しんでいた。

マキは涼介に力強く心を駆掴んで欲しいと思つていた。求める前に奪つて欲しいと願つていた。

涼介は考えていた。そして涼介は、今夜マキに実行出来ない優しさや思いやりの代償が、計り知れない物ではないといつ結論を出そうとしていた。

(・・・まあ、いいか・・・。)

涼介は心底愛する、守るべきマキに伝える大切な一言を封印し、生涯で最後かもしれない崇高な直感という感覺を心の隅に葬つた。

マキの瞳には涼介の楽しそうな姿が映つていた。

マキは、愛する涼介ならば必ず会話の何処かで涼介らしい愛情表現を見せてくれると信じていた。それ故にマキは涼介のどんな些細な愛情表現でも、不变という付加価値を付け、それを至福の瞬間と

して、全身で素直に受け止める為の感情のピークをずっと維持していた。しかし涼介はマキの機嫌を伺う様な取り留めの無い話で時間を潰し、マキが望んでいない愛想を振り撒き続けていた。

マキの瞳には涼介の楽しそうな姿が映り続けていた。
マキは涼介の笑顔に、最良の女性はあなたでは無いという結論を突き付けられているのではないかと思い込み始めていた。そしてその思いは、マキの全身に失望という、心から取り出す予定の無かつた感情を徐々に伝達していた。

マキの瞳には涼介の喋り続ける姿が映っていた。

(・・・リョウ・・・)

マキは空しい結末に耐える為の勇気に火を点け様としていた。
マキは冷静になつてはいけない場面で情熱の灯を消していた。そして断腸の思いで失望をナイフに変え、涼介への愛を永遠に誓う筈だった感情をゆっくりと削り始めていた。

マキはずつと笑顔だった。しかしマキの心には宴の後の様な、誰に慰められても微動だにしない物哀しさが溢れ出していた。

「ほんと美味しいね、此処の料理。」

「だよな。・・・熱爛頬む?」

「・・・うん。」

「やっぱ日本酒だよな。」

涼介はマキにそう言つた後、隣の座卓を片付けに来ていた仲居さんに声を掛けた。

「んーと、それじゃ・・・」

涼介はメニューを見ながら仲居さんに注文を始めた。

「ふう・・・。」

マキは涼介に気付かれない様に天井に向かって息を一つ吐いた。

「・・・はい、それでお願いします。」

涼介は仲居さんにそう言つてメニューを閉じ、グラスに残つていたビールを飲もうとしていた。

マキは涼介を見つめていた。

二人の間には、会話の休憩の様な時間が流れていった。

涼介にとつては何でもない、極普通の穏やかな沈黙だった。

マキにとつては、もう後へは引けない沈黙だった。

「・・・此処に来ると何時も食べ過ぎちゃうんだ。」

「分かるよ、それ・・・でかさ、俺達にピッタリの様な気がしないか?此処。・・落ち着くしさ・・・。・・・そうそう、今年のクリスマスなん・・」

「スマスなん・・」

「別れたい?」

「ん!?・・今何ってった?」

「・・・別れたい?」

「おいおい、何だよ突然。」

涼介は面食らっていた。

「別れたい? ?」

「・・・どうしたんだよ急に・・・酔つてんのか?」

「・・・酔つてないよ・・・。」

マキは首を横に振りながら涼介に優しい笑顔を向けた。

「・・・あのさ、別れたい訳ないじゃない。」

涼介はマキの突然の問い掛けに、何をどう処理すればいいのか困惑していた。

「・・・・・・。」

マキは黙つていた。

「・・・・・・。」

涼介は喋る言葉が出て来なかつた。

「・・・別れよっか。」

マキは自分が作つた沈黙に責任を持つ為に、思いを言葉にした。

「お待たせしました。」

座敷の入り口で仲居さんの声が聞こえた。

「・・・あのおさあ、マキ、本氣で言つてんの?」

「お酒来たよ。」

「お酒来たよ。」

マキは笑顔で会話を止めた。

「…………」

涼介はマキを見つめていた。

「…………」

マキは熱燗を座卓の上に置いて去がりつゝある仲間たちで会話をした。

「…………」

「…………」

マキは涼介に徳利を差し出した。

「…………マキ、冗談だよな？」

「…………〔冗談なんかじゃないよ。」

マキは座卓に置かれたままになつている涼介のお猪口に日本酒を注ぎながら、柔らかい顔でそう答えた。

「…………ねえ、何で突然そんな事いうの？…………訳分かんねえしてか、何か俺の事試してんのか？」

涼介は少し語気を強めてそう言った。

「…………」

マキは涼介を正面で見つめていた。

「…………」

涼介はマキの視線から逃げる様に煙草に手を伸ばした。

「…………終りにするなら、今だよね。」

「今だよねって、なあ、マキ、おかしいぞ、お前…………」

涼介の口は訴えていた。

「…………」

「そうだよ。」

涼介の声に力が入った。

「…………それだけ？…………」

マキは、二人の恋愛を終りにしたくないという想いを瞳に込めて涼介を見つめていた。

「それだけ？」

「…………なんだ……。」

「…………」

「・・・ああ・・・それだけだよ。」

「・・・・・。」

マキは肩から息を逃がした。

「・・・・・。」

涼介は俯き加減で煙草の煙を一つ吐いた。

「・・・じやあ・・・別れよ。」

「じゃあ別れよってさあ・・・本当に本氣で言つてんのか?」

混乱で舞い上がった涼介の心は埃のように漫然と体の中を漂い、自身を落ち着かせる事に精一杯だった。当然、マキの瞳の中にあり切なる想いを洞察する事など不可能だった。

「・・・本氣だよ。」

マキは笑顔に乗ろうとする哀しさをざわざわの所で押された。

「・・・どうしちゃったんだよ、お前・・・。」

「・・・・・。」

マキは涼介のその問い掛けには答えず、座つたままマフラーを巻き始めた。

「・・・勘弁してくれよ・・・。」

涼介はマキへの愛情を言葉にする事が出来ないでいた。

「・・・なあ、マキ・・・。」

涼介は今夜が一人の未来を決める大切な夜だと直感しておきながら、一度心の隅に葬つた“愛してる”の言葉を蘇生させて取り出す事が出来なかつた。

涼介は唯、マキを目で追つていた。

マキはコートを着終わろうとしていた。

「・・・・・。」

涼介は煙草の火を消した。

「・・・・・。」

マキは席を立つ前に涼介を深く見つめながら、言葉で愛を伝えて欲しいと心で縋つた。

「・・・・・。」

涼介は黙つて俯いたまま、また煙草に火を点け様としていた。

「・・・・・。」

マキは涼介の無言に、滲みそつになる涙を耐えていた。

二人はほんの少しだけ意地を張っていた。マキは来年から始まる未知の環境に飛び込む前に、今夜涼介に一人の間に何ヶ月も続いた嫌な流れを断ち切つて欲しいと願つていた。涼介は今夜、幸せを育む為に乗り越えなければならなかつた最大の壁を傍観してしまつていた。マキはごく僅かだけ結論を急ぎ、涼介はごく僅かだけ素直になる事が出来なかつた。

涼介は煙草を燻らせていた。

マキは耐えていた。

二人は些細な自己主張で、愛という名のもとに同じ方向を見つめ合い続け、無二の人生を一人で構築して行く為の転機を遺り過ごそうとしていた。

「・・・・・。」

涼介は愛するマキに、今、伝えなければならない大切な言葉を口にするより、その切なる想いを今夜どの場面から切り出しても構わなかつた事を振り返つていた。

涼介は愛を甘く見ていた。

マキは愛の深さを決め付けていた。

「・・・・・じゃあ・・・ねつ。」

マキは笑顔を振り絞つて席を立ち、一人の間に続いていた長い沈黙を区切つた。

「じゃあねつて、マキさあ・・・。」

涼介は立ち上がつたマキを媚びる様な瞳で見上げた。

「・・・・・。」

マキはゆつくつと踵を返した。

「・・・・・。」

涼介は言葉を選んでいた。

「・・・・・。」

マキは背中に汗をかくくなる辛い気持ちを堪えていた。

「…………」

涼介は黙つたままだった。

「…………」

マキは振り返えらなかつた。

(・・・じやあねじやねえよな・・・まつたく・・・)

涼介はマキへの愛情を怠け、情熱を出し惜しみ、マキを呼び止める事もマキの後を追う事もせず、煙草の煙を吐き出しながら心でそう呟き、お猪口に残つていたぬるい日本酒を飲んだ。

「何があつたの？」

何も言わず飛び出して行つたマキを心配していた板さんは、支払いを済ませ様とレジに来ていた涼介に立ち入つた。

「いや、別に、何でもないです・・・。」

涼介は笑顔を作れなかつた。

「そつ・・・なら、いいんだけど・・・。」

板さんはマキの涙を心に仕舞つた。

「じつじつさまでした。」

「・・・あいよつ、有難うございました。」

「どうも。」

涼介は会釈した。

「…………」

板さんは店を出て行こうとする涼介の背中に、何かを云えたい視線を送つていた。

「ふーっ・・・。」

檜の引き戸を閉めた涼介は、はつきりとした息を夜空に向かつて一つ吐いた。

(・・・クリスマスまで何とかなるかなあ・・・。)

涼介は月を探しながら心の中でそう呟き、自宅へ続く本牧の裏通

りを歩き始めた。

「・・・大丈夫だよな・・・。」

涼介は冷たくなつて来た両手をポケットに突つ込み、自分自身にそう問い合わせ、再び頭上を見渡した。

月の出ていない、寒い夜だった。

涼介は何時かの寒い冬の夜、青く澄んだ輝きを放つていた月の光に照らされ、マキと寄り添いビデオショップまで歩いた時の二人の蜜月を振り返り、切ない気分を追い払おうとしていた。

「・・・大丈夫大丈夫。」

涼介は見えない月に向かつてそう言つた。それはマキの決心を見み縊び、マキとの恋愛をぬるく楽観している証でもあった。

“司”でマキが涼介に背中を向けた夜から一週間が経つていた。しかし涼介は暮れ行く年の中で仕事に追われている現実を盾に、マキへの連絡を怠つていた。自宅に散らばるマキの洋服や下着、化粧品やアクセサリーが、その位置を変える事無く存在感を示している事も、涼介に見当違ひのぬるい余裕を持たせる事となつっていた。

あの夜、愛するマキに素直な気持ちを伝えなかつた事は大きな誤りだつたと涼介は氣付いていた。しかしその後、マキに心を寄せる事を逡巡し続いている事実の方が、より致命的だという事には涼介は気付いていなかつた。

涼介はクリスマスを一人で過ごした。そして涼介は、一つの年が終わろうとしている賑やかな街に身を委ねる度、大切な女性を無くしたのではないかという、ずるい焦りを感じ始めていた。

涼介はマキを惜しみなく奪わなければならぬ事を理解しているにも拘らず、その情熱を自分で自在に組み立てた都合の良い運命論に凌駕させ、懸命で健気な姿をマキに見せる事を美しいとしなかつた。そんな涼介の愛情を都合良く運命に依存する流儀は、愛は情熱を乱舞させ、形振り構わず遮二無一掴み取るものでは無く、受身の

形を貫く概念に美学を見出していた。そこには守るべき女性を守るべき時に守れない、自意識過剰な男の醜いナルシズムがあった。

涼介は年が明けて暫く経つた頃、取引先から会社へ戻る途中の関内駅で美由紀に会った。

美由紀はマキの親友であり、涼介は美由紀と親しくしていた。

「佐久間さん！」

美由紀は涼介の後ろ姿に声を掛けた。

涼介はその声に気付かず、改札を出ようとしていた。

「佐久間さん！？」

美由紀は真顔で一度目の中を出した。

「・・・おう、久し振りだね、元気？」

涼介は歩く速度を緩めながら自分を呼ぶ声の方へ徐に振り返り、相手が美由紀である事に顔を緩め、美由紀が目の前に走り来る迄待つた後、落ち着いた声でそう言つた。

「元気いじやないですよー！マキと全然逢つてないんですかー！？」

美由紀は挨拶を省いて迄、事の重大さを声に乗せた。

「まあ・・・ね。

涼介は少したじろいだが、まだ落ち着いていた。

「まあねって、別れるんですか！」

美由紀は鬼気迫る声と顔で核心を突いた。

「・・・別れるつ・・・

「マキは本気だったんですよー・・・何で？・・・この前私ん家でめちゃめちゃ泣いたんだからー！」

美由紀の叫び声は構内に響いていた。

「・・・・・・。

涼介は美由紀の声に乗つたマキの事実に、言葉にしようとしていたマキへの思いを心に押し戻されていた。

「何でなんですか！・・・佐久間さん！・・・何でなんですか！・・・

「・・・・・・。

美由紀の強い瞳に涼介は天を仰いだ。

「・・・リョウのお陰で優しくなれるんだよって、リョウが居るから強くなれるんだよって・・私・・何時もそんな話聞かされてたのに・・・この前突然私ん家に来て・・・あんなマキの姿初めて見たんだからー！」

「・・・・・・・」

気持ちを畳み掛けて来る美由紀の姿に、涼介は喋る言葉を失つていた。

「何で電話ぐらいしてあげないんですか！？」

美由紀は更に訴えた。

「・・・・・・・」

涼介は美由紀の直情に心を切り裂かれ様としていた。

「ねえ！何で！？」

「・・・・・・・」

涼介は美由紀を直視出来なくなつていた。

涼介は心中で眠らせていたマキへの深い想いを、突然美由紀に荒々しく叩き起されていた。そして目の醒めた“マキへの愛を玩ぶ自分”という人格に鏡を向けられ、その中に映り込んでいる軟弱な心を正面から見つめさせられていた。

「・・・・・・・」

美由紀は瞳で涼介を叩いていた。

「・・・・・・・」

涼介は喋れなかつた。美由紀から向けられた鏡には、言い訳の一つも探せない、情けない自分の心が晒されていた。

北風の強い午後だつた。

美由紀は木枯らしの様な風に髪を乱されながら訴え続けていた。涼介はコートの裾を翻弄られながら、立ち竦んでいた。

美由紀は涼介に、“マキは本気だつたんですよ！”と何度も叫んでいた。そして“何でそんなひどい事するんですか！”と食い下がつていた。最後には“マキに電話してあげて下さい！”と懇願して

いた。

(・・・・・)

涼介は街へと消えて行つた美由紀の残像を、暫くその場所からずつと見ていた。

涼介の胸は張り裂けていた。

街路樹の落ち葉が涼介の足元で舞つていた。

(・・・・・)

涼介はマフラーを巻き直し、ゆっくりと歩き始めた。

(・・・・・)

気持ちを立て直せないまま歩いている涼介の視線の先に、駅の入り口に立ち並ぶ公衆電話があつた。

涼介の頭上にはミディアムグレイの空が重く広がつていた。

北風は街を乾かし続けていた。

涼介の瞳は公衆電話を捉えていた。

(・・・・・)

立ち止まつている涼介の中には、マキへ捧げるべき“愛して
る”という魂の声が湧き上がつていた。

北風は街を乾かし続けていた。

(・・・・・)

涼介はステンカラーコートの襟を立てた。そしてコートを慈しむ
様に両手をポケットに入れ、公衆電話に背を向けた。
駅に向かつて足早に歩く人達が涼介の横を通り過ぎていた。
歩道の落ち葉は時折激しく舞い上がつていた。

涼介は情熱を曝け出す自分を美しいとせず、不埒な美学を貫き、
ナルシズムを忠実に守つた。それは同時に涼介が育むだらう今後一
切の愛に対しても、人として誰もが潜在的に持つている、愛に対する

直情的で無骨な感情を永遠に封印する事も意味していた。

(・・・・・。)

涼介は北風に抗う様に歩きながら、2年前のクリスマス、コートをプレゼントすると言い出した時のマキの笑顔を思い出していた。涼介は最愛の女性に心だけは手前勝手に摺り寄せていた。しかし涼介にはそんな自分のぬるい行動の代償が、計り知れない悔恨の情となつて今後ずっと胸を支配し続ける事になるなどと、夢にも思つていなかつた。

ドキドキする様な恋をしたいけど
思い通りに運ばない時は
夕暮れの風 吹かれると何故
切なくなつたり思い出したり
今ならやり直せるかもしけりだけど
言い出せる筈なくて

“ごめんねなんて 絶対言わない私でも
“好き”とあなたは言つてくれたのに
後悔をずっと想い出に そつとしてる方がいい
忘れないでいい
もし またやり直せる時が来たら
同じ過去は繰り返さないよ

“PACIFIC SHORE HOTEL” b
y SECTION S .

マキもクリスマスを一人で過ごしていた。12月27日の誕生日も一人で過ごしていた。寂しくて、遣り切れなくて、誰彼の区別無くCDを聴き続ける夜もあつた。

マキはあの夜、“別れよつか”と言つた事をずっと後悔していた。

“ サヨナラ ” なんて言わなきゃよかつた
何時でもあなたのからのコール待ち続けてた
だけど季節が変われば必ず何かに逢えるよ
過ぎた時も今も大切にしたい

何時か素直になれたら 大切な物見えると
信じ続けるけど

“ サヨナラ ” なんて言わなきゃよかつた
何時でもあなたからのコール待ち続けてた

TEL “ PACIFIC SHORE HO
TEL by SECTION S .

マキはあの日以来、電話の前から動けない夜が増えていた。受話器を握り締め、ダイヤルをプッシュし掛けた事もあった。しかしマキは出逢った頃の様に素直になれないまま孤独と戦っていた。

マキは涼介を信じていた。例えそれがどんな形でも、ほんの僅かな時間であっても、涼介が愛情を必ず自分の元へ届けてくれると信じていた。第三者から見れば苛立ちを覚えそうな、そんなつまらぬ拘りが唯一の正解だとマキは信じていた。

だけど季節が変われば必ず何かに逢えるよ
過ぎた時も今も大切にしたい

キラキラ季節は短か過ぎたけど
想い出ばかり今でも溢れてくる
夜が長くて 眠れなくて
片付けたアルバム何度も何度も見る

近過ぎる過去だから 傷がまだ痛むけど
いい恋してたと思う

“サヨナラ”なんて言わなきゃよかつた
何時でもあなたからの「ホール待ち続けてた
だけど季節が変われば必ず何かに逢えるよ
過ぎた時も今も大切にしたい

“PACIFIC SHORE HO TEL” by SECTION S.

マキは就職する広告代理店の東京本社勤務が決まっていた。住居も会社が寮として借り上げているマンションの一室を使う事が決まつていた。

新しい年が明け、入社の為の身辺整理を始めて以来、マキは入寮を決めた事を悔やみ、入寮をキャンセルすべきかどうかを悩んでいた。

マキは涼介との間に残されている筈の絆を感じていた。寮は恵比寿にあった。入寮しなければならない3月も近く迄来ていた。マキは涼介に寄り掛かりたい想いを心から溢れさせながら、横浜を離れる事実が、涼介との絆に絶望的な溝を作るのはないかと恐れていった。

マキは涼介の事を一度と出逢えない最高の恋人だと思っていた。そして涼介との結婚をずっと願っていた。マキはあの日“司”で涼介に背を向けた時からその想いをより一層強くしていた。故にマキはその想いを伝えられないまま環境が変わり、生活が変わり、人間関係が新しくなる事で、涼介への愛情を何時か心の隅で梱包してしまうかもしれない自分の行動を先回りし、責めていた。そこには明るくて大らかなマキとは別の、微妙に恋愛に臆病で、恋に戸惑い、愛を躊躇う、見た目より涙もろくて強くないマキが居た。

山手の丘には桜の季節が来ていた。元町に続く坂道には春の息吹が満ちていた。商店街には新しい気持ちを充実させている人達の笑顔が弾けていた。

涼介は塗り変わる景色の中で、失った女性の大きさに今更ながら気付いていた。朝起きて眠る迄、そして夢の中迄も、全てに於いて最高の時間をマキが与えてくれていた事に気付き、胸を捩じられていた。

マキは新たに始まつた生活の至る所で涼介と過ごした最後の夜を振り返つていた。そして涼介に翳してしまつた半熟のままの恋の駆け引きを、絶対にやつてはいけない事だったのだと後悔していた。二人は紛れも無く掛け替えの無い最高の出逢いをしていた。しかし最高の出逢いを最良の出逢いに変えて行くには一人は若かつた。世界で一番で、一生で一人の人だと、形振り構わず素直な思いをぶつけ、お互いの心に不变の愛を誓うには一人は若かつた。主観的で情熱的な恋と、自己犠牲さえ厭わない愛を重ねて恋愛を成立させるには、一人は若かつた。

涼介の部屋には、マキの物がそのまま残つていた。
寮での一人暮らしが始まつたマキの部屋のクロゼットには、涼介からプレゼントされたピーコートが掛けられていた。
二人の結末を、若氣の至りという言葉だけで片付けるには、余りに無情だった。

(・・・・・)

涼介は信号待ちの間にCDを止めた。

左ウインカーの点滅音が車内を優しくノックしていた。

助手席のガラス越しには、涼介の自宅があるマンションが見えて

いた。

「・・・逢いたい。」

涼介は呟いた。

あれから10年が過ぎていた。マキに“別れよっか”と切り出された日から一度も逢わないまま10年が過ぎていた。

2年前、転勤で小倉に戻る為の荷造りをしていた時に、涼介はマキの荷物を処分する事が出来なかつた。

涼介には捨てられなかつた。

涼介にはそれが全てだつた。

(・・・・・)

涼介は駐車場に車を滑らせ、エンジンを切つた。

フロントガラスのずっと先に青く輝く月が出ていた。

涼介は美しいその月と、何時か本牧の路上で、マキと一人寄り添つて見上げた月を重ねていた。

10・依存の副産物

10・依存の副産物

受信トレイ

0 : 12	<未開封>	エリカ	2003 / 09 / 07
0 : 05	<未開封>	まゆみ	2003 / 09 / 07
23 : 36	<未開封>	まゆみ	2003 / 09 / 06
20 : 17	<開封>	岡部恭子	2003 / 09 / 06
20 : 04	<開封>	まゆみ	2003 / 09 / 06
:	:	:	

(.)

涼介は自宅の在る八階で止まろうとするエレベーターの滑らかな感覚を含図に、眺めていた受信トレイの画面を閉じた。

涼介は車を降り、駐車場を歩きながら携帯電話の電源を入れていた。そしてエントランスでエレベーターを待つ間、受信メールを確

認する為にセンターへの問い合わせを済ませていた。

(・・・・・。)

涼介は田の前に長く延びている室内共用廊下に遠慮がちに靴音を響かせ、右手に持ったままだったキークースの鉗を玄関ドアの前で弾き、鍵をシリンドラーに差し込んだ。

(長い一日だつたな・・・。)

受信していたメールを開く事無くエレベーターを降りていた涼介は、心中でそう一言呟き、外気より少し温度が低いホールの明かりを点け、一人暮らしには広過ぎるリビングに向かい、上着をソファに投げた後、「コーヒーをドリップする為にキッチンへ行つた。マンションのキッチンには少し大き過ぎるガラスのダイニングテーブルの上に置いてある電話から、ファックスされた紙が一枚滑り出でていた。メッセージが録音されている事を知らせるランプも点滅していた。

(・・・・・。)

涼介は冷蔵庫に並ぶボルビックを一本取り出し、一口唇に当て、残りをコーヒーメーカーのカップに注ぎ、テーブルの上に出しつ放しだつた少し深煎りのコーヒー豆を粉碎し始めた。

(・・・・・。)

涼介は漂うコーヒーの香りに自宅に戻つて来ている事を実感していた。そしてその実感にもつと深く浸る為に、粉碎したコーヒー豆をペーパーフィルターに移し、コーヒーメーカーの電源を入れ、自分に宛てられた全ての連絡に背を向けて、バスルームに向かつた。

「ぬるいな・・・。」

涼介は歩きながら、直視すべき恋愛を育てる事に不得手な、自身の“やわ”な恋愛体质を嘆いた。

(もう一度だけ逢わせて欲しい・・・。)

例え残酷な現実が待つていようと、涼介はマキとの再会の場面を常に意識し、思い描いていた。そして世の中に偶然など無いと信じている涼介に、必然としてマキとの再会を神様が贈ってくれるの

ならば、その場面を丁寧に受け取り、心に絡まり続ける一つの恋愛にけじめを付けたいと思っていた。

(・・・勝手だな・・・。)

涼介はユーティリティの壁に張り付いた鏡に向かい、自分の表情に滲み出でているしみつたれた心を見つめ、そう吐いた。

シャワーから出て来た涼介はドリップの終つていたコーヒーをマグカップに入れ、ミルクを落とし、ダイニングテーブル用の椅子とは別に一脚だけ置いてある、銀黒の皮で覆われた背凭れの大きいエグゼクティブチェアに座り、ノートパソコンの電源を入れた。

パソコンには魚町店と紺屋町店の店長から、冬季限定デザートのサンプル画像5枚と、恭子から新商品の開発に関する会議用資料が送信されて来ていた。

(・・・今やつとかなきや・・だな・・・。)

涼介は、ほんの2時間前迄一緒に居たまゆみではなく、マキに馳せた想いの余韻を区切つた。

ダイニングの明かりは眩しい程に涼介を照らしていた。
リビングに敷かれたコルクの床には、涼介の影が長くはつきりと象られていた。

涼介はコーヒーを飲みながらサンプル画像を一枚一枚液晶に映し、各画像に対しても書き込まれているコンセプトを客観的に吟味しながら、コメントを添付する作業を始めていた。

(こんなとこかな・・・。)

涼介は煙草に火を点け、まだ一杯分程度保温されていたコーヒーをカップに注ぎ、チェックを終えた画像を各店舗に送信した。

9月7日、日曜日の午前1時30分を回っていた。

(ふーっ・・・。)

涼介は思考のスイッチを切り、椅子の背凭れに深く体を沈めた。

(・・・そうだ、もう一通あつたんだ・・・。)

ベッドに潜り込む事を考えていた涼介の頭は、突然誰かから何かを指摘された様に一瞬我に返った。

涼介は体を起こし、恭子から送信されて来ていた会議用資料を開く為にマウスを握った。

(・・・・・)

涼介は会議用資料に目を通しながら、まゆみとの食事中に恭子から受信していたメールの内容を思い出していた。

(・・・・・)

涼介は時計を見た。そして頭の中から消していた全ての連絡に目を通して置くかどうか考えていた。

ファックスは恭子からだつた。受信時間は“20・55分”と刻印されていた。紙面は取り急ぎ確認する必要の無い折込み広告の配布表と販促備品の発注書だつた。そして紙面の余白には、まゆみとの食事中に届いたメールよりもストレートに、涼介の居場所を知りたがっているメッセージが添えられていた。

(・・・・・)

涼介は煙草を消し、コーヒーを飲み干した。

涼介は留守番電話の相手も恭子だらうと思つていた。

(・・・寝よう・・・)

涼介は恭子からの会議用資料に一通り目を通した後、パソコンの電源を切つた。

マウスの横には、投げ出されたままの携帯電話があつた。

(・・・・・)

涼介は携帯電話を見つめていた。

受信メール

涼介って誰にでもそんなコト言つてるんでしょう？？（^—^）
すごく慣れてる感じ…

でも今日会つて涼介とゆっくり話してよかつた
思つたより自然で優しい感じがしたよ（^—^）

私も好き

まゆみ 2003/09/06 23:36

受信メール

もうすぐ家につくよ（^—^）

涼介はまだだよね？

今日は楽しかった

ありがとう（^—^）

まゆみ 2003/09/07 0:05

受信メール

リョウくん リョウくん 応答せよ…！

ごめん！！ エリカ酔つてるーつ！ f^—^；

ねつ リョウの家に遊びに行つてもいい??（^—^）

エリカ 2003/09/07 0:12

（・・・・・）

涼介の意思是エリカから届いていたメールに反応しようとしていた。

涼介はエレベーターの中で開いた携帯電話の受信メール一覧に、エリカの名前があつた事はしつかり認識していた。そしてエリカからのメールを開いてしまえば返信したくなるだろう事も認識していた。しかし涼介はエレベーターの中で未開封のままメール画面を閉じていた。それはメールの送信者が例えエリカであつても、今夜はこのまま誰とも接する事無く眠りに就きたいとする気持ちの表れだった。しかしきつかけはどうであれ、涼介は今夜見るつもりの無かった。

つた受信メールをベッドに入る前に開いていた。案の定、その事実はエリカへの返信を明日に持ち越してはいけないと考える涼介の神经を刺激していた。

長い一日だった。

涼介の心は疲れていた。

(・・・・・)

涼介はエリカへ返信するメールの文面を明確にイメージ出来ないでいた。

涼介はチエックを終えた画像を各店舗に送信し、煙草に火を点けた時点で切つてしまつた思考のスイッチを再び入れ直してみてはいたが、自身の心に妥協無く、思考を言葉として表現する事に戸惑っていた。

(・・・・・)

涼介は左手に持つていた携帯を閉じた。

涼介はエリカに返信する文面に、生半可な安い言葉を簡単に並べてしまうかもしれない可能性を良しとしなかった。

涼介は疲れていた。

(・・・・・)

涼介はダイニングの明かりを消した。

明かりの無くなつたリビングの壁は、ブラインドの隙間から入り込む街の光で美しく照らされていた。

(・・・・・)

涼介は描き出された様に重なる何本もの横縞の光を暫く見つめていた。そしてエリカが今何処で何をしているのかをぼんやりと考えていた。同時に、パソコンに送信されていた恭子からの会議用資料の余白に“また食事に誘つて下さい”と書かれてあつた事を、ふと思いついていた。そしてまゆみがメールに載せていた“誰にでもそんなコト言つてるんでしょ”という言葉を、まゆみから引き出す事になつた自分の言葉を思い出そうとしていた。

(12 時半か・・・。)

涼介は電話の液晶画面に目をやっていた。

昼過ぎに目覚めた涼介は、条件反射の様にダイニングテーブルにあるパソコンの前に座り、目の前の景色に焦点を合わせず、漫然と煙草を吸いながら氣だるい頬杖を付いていた。

(・・・・。)

涼介は立ち上がり、バスルームへ向かった。

リビングの窓に掛かるブラインドは、外が良い天氣である事を示す様に反射し切れない日差しを膨らませていた。キッチンのダイニングテーブルの上では、消え残つた吸殻の細い煙がガラスの灰皿の中で立ち昇つていた。そしてその隣に在る電話は、メッセージの録音を知らせるブルーの光を昨夜からずっと点滅させていた。

部屋中に心地良いコーヒーの香りが漂い始めていた。

オープンレンジからはパンを焼くタイマーの音が聞こえていた。

(・・・・。)

シャワーを済ませた後、食事の準備をしていた涼介は、視界から排除出来ない光の点滅に観念した様に電話のメッセージ再生ボタンを押した。

“もしもし、岡部です。課長代理、留守なんですか？…留守ですか？…ひょっとして誰かと居たりしてつ！…ごめんなさい、明日の会議の件でお電話しました。資料はメールで送つてますので宜しくお願ひします。”

(・・・・。)

涼介は食事の準備を中断する事無く背中でその声を聞いていた。

食事中涼介は、まゆみとエリカにメールを送信する為に、二人と交わした送受信記録を何日か前迄遡つて読み直していた。

昨夜涼介は最終の新幹線の中でもゆみに強烈な殺し文句を送信していた。そしてそのメールに対してもゆみから届いた一通の返信メ

ールには、好きな男性に対して従順に成り行く心情が映し出されていた。

(・・・・・。)

涼介は食後のコーヒーを飲みながら、まゆみに安心を感じて貰つ為のメールを考えていた。

送信メール

メール遅れたね、ごめん。

週末空けといて、会いに行くから。

まゆみ 2003/09/07 13:15

涼介はまゆみにそうメールを送信した。

新規メール作成 宛先 エリカ

昨日は悪かった。

もう寝ちゃつてZZZ・・・たんだよ、あの時間。

ごめんな。

今日は忙しいんだろう?

仕事頑張れ!

じゃ、また(^ー^)

サブメニュー 編集 戻る 13:22

(こんな感じかな・・・。)

涼介は心でそう呟いた後、エリカにメールを送信し、煙草に火を点けた。

涼介の小手先は割と纖細だった。テンションの違う文面を使い分けられる事が器用だとは言えないが、始まつたばかりのまゆみと、その存在が少しずつ自身の生活に溶け込み始めているエリカへ、異なる人格を躊躇いや罪悪感の存在を自由に操りながら言葉をばら撒

く決断力には長けていた。そこには優しさとは掛け離れた、自分だけへの忠実に妙味を感じている涼介の姿があった。

エリカと涼介の出会いは、まゆみと知り合つ以前、涼介が出会い系サイトにストレスの発散を依存する為に、飾り気の無い短い言葉を残している掲示板に片つ端からアプローチを掛けていた6月だった。

エリカは涼介のぶっきら棒な申し込みに、唯一メールを返信した女性だった。

エリカは小倉北区に住んでいた。涼介はその事実が判つたメール交換の直後、エリカと会う事になるだろう。“その日”を確實に迎える為に、送信するメールの文面が独り善がりにならない様、細心の注意を払う事を徹底して自分に言い聞かせていた。

エリカは仕事も小倉北区内だった。それ故に存在する共通の話題は二人のテンションを上げ、交換するメールは古くからの友達の様な心地良いリズムを携える事となつていた。

涼介は差し出されたシチュエーションに老獴だった。メール交換の中で一人の間に生まれたリズムに、涼介は付き合い始めたばかりの恋人同士の様なメロディを付けた。そして涼介はそのメロディの端々に、二人を繋いだ赤い糸の存在を鏤める事を忘れなかつた。^{ちりば}

二人はメールで知り合つた6日後にセックスをしていた。そして二人はセックスが終つた後に訪れる、お互が持つ素直な部分を晒し合い易いベッドの中で、自身の本当の姿を伝え合つていた。

エリカはオレンジのカジュアルカールとローライズのジーンズが似合う、細身の体に可愛さと色氣を纏わせているスタイリッシュな女性だった。

エリカは美容師の免許を持っていた。働いている美容室は魚町にあつた。

一人は頻繁にメール交換をし、週に一、二度食事をしていたが、セックスフレンドという領域を越える事は無かつた。しかし次第に涼介の自宅でくつろぐ事が優先され始めた頃、二人はお互いの気持ちを覗きたい衝動を隠せなくなっていた。

一人は予期せず生産された副産物の様な自身の恋心に気付いていた。しかしそれでも一人は、約束事の無い曖昧な夏を尊重しようとしていた。

エリカと涼介のセックスの相性は合っていた。お互い軽い気持ちで始まつた分、二人はセックスを自由に大胆に楽しんでいた。

エリカと涼介は、お互いの個性が創り出す一人の時間に居心地の良さを感じていた。涼介は案外エリカと結婚しているかもしないと、苦笑いを交えながら考えている時があった。エリカは涼介の外見が一目惚れする程の理想の男性だつたら、彼女になりたい為の代償として、自分らしさが消えていたかもしれないと思つ時があつた。

エリカは束縛も干渉もせず、物事を達觀している様な涼介の冷めた雰囲気に魅力を感じていた。

詰まる所エリカの夏は涼介を中心に回っていた。それはある意味立派な恋の始まりでもあつた。

(いい天気だなあ・・・。)

涼介はバルコニーに両肘を置き、街の景色を眺めていた。
(・・・掃除しなきやあだな・・・。)

涼介は携帯電話を充電器に差込み、リビングへ向かつた。

涼介はバルコニーに両肘を置き、街の景色を眺めていた。
空気を入れ替える為に開け放たれた窓から、強い日差しと街の雑音が部屋の中に流れ込んでいた。

(・・・1時半か・・・忙しい時間帯なんだろうな・・・。)

腕時計から視線を外した涼介は、まゆみよりも、美容室で働くエリカの姿を想像していた。

11・11・一人の独善

11・二人の独善

芳野エリカは携帯電話が持つあらゆる機能を使い熟す女性に見受けられる芸術的な処世術を備えていた。その処世術には楽しい方向に貪欲に流れ行く事や、不安定な足場を華奢な思考でも臆さずに歩く事、自分の置かれている状況を前向きに捉える事などが必須項目として織り込まれてあつた。

9月19日金曜日の夜、エリカは涼介のリビングに居た。
センターテーブルの上では、エリカが買つて来た白ワインが空になっていた。

エリカは取り敢えず目前に居るまんざらでもない男性に、自身を委ねる事に対する葛藤に意味を持たせる事を良しとしていなかつた。そんなエリカの潔さや大らかさは、結果的に自身の行動や判断に満足出来る時間を男性から勝ち取つていた。

(・・・・・)

エリカは絨毯の上でうつ伏せに体を伸ばし、甘いフレッシュエルを食べながらファッショニ雑誌を見ていた。

金曜日、珍しく仕事を定時に上がつていたエリカは、自宅へ帰る様な普通さで涼介の家に涼介より先に“帰宅”していた。

Tシャツとカラフルなスパッツに履き替えてリラックスしている

エリカの顔は、ワインのせいで少し赤みを帯びていた。

「エリカさ、実は俺の事かなり好きだろ？」

涼介はキッチンでパソコンと向き合つたまま、何の脈略も無くエリカに話し掛けた。

「うん。リョウは？」

エリカはファッシュョン雑誌のページを捲りながらあっさりと肯定し、姿勢を変えないままそう聞き返した。

「・・・んー、あんまり好きじゃないかな。」

涼介はパソコンと向き合つたままだった。

「あ、そう。・・・シャワー浴びて来る。」

エリカは涼介の方を向いて大袈裟に驚いた表情を作り、少しふくれた顔をして立ち上がった。

「了解。」

涼介は穏やかな表情でキーボードを叩いていた。

「ねつ。」

涼介は突然耳元で聞こえたエリカの声に振り向いた。

「好きなくせにつ。」

涼介の背中に忍び寄つていたエリカは、人を窘める時の笑顔でそう囁き、涼介の右の頬にキスを一つ残して踵を返した。

（・・・いいセンスしてるよな。）

涼介はしなやかで張りのあるエリカの後ろ姿に見惚れながら、エリカの振る舞いに降参を意味する含み笑いを浮かべ、心中でそう呴いた。

エリカは涼介が時折見せる意地悪なジョークを絶妙なセンスで切り返していた。涼介はそんなエリカに接する度に、心から勝手に滲み出て来てしまうエリカへの愛しみで、残して置きたい心の自由を自ら奪い取つている事を感じていた。

（・・・・・。）

涼介はエリカにまた一つ恋心を刺激された事実に酔つていた。しかし涼介はエリカがユーティリティに入つた直後、音も無く猛烈に

頭を回転させ始めていた。

(・・・今しかないな・・・。)

涼介は少なくとも30分はエリカがリビングに戻つて来ないだろうと思つていた。

涼介はテーブルの上に投げ出していた携帯電話を手に取り、エリカとの心地良い時間に区切りを付けた。そして限られた時間の中で自らが描いたシナリオをミス無く実行する為に、まゆみに気持ちを集中させた。

(・・・・・。)

涼介は自分の行動を嘲りながら、まゆみに送信するメールを作り始めた。

まゆみと涼介は9月6日のグランドハイアット福岡での初デート以来会つていなかつた。しかしその後続いている二人のメール交換は、頻繁ではないが客観的には恋人同士そのものの間合いと内容があつた。そう言つ意味では、今夜、このタイミングで涼介がまゆみに連絡を取つて置く事は、涼介の考えるまゆみとの今後の展開に必要な段取りだつた。

涼介にとつてまゆみの住む博多はある意味遠かつた。新幹線に乗れば20分の距離だつたが、車を使えば高速道路に乗つても1時間は掛かつた。新幹線の最終が11時21分という時間も涼介には中途半端に思えていた。普通に考えれば恋人同士の間にある障害としては些細な事だつた。しかし涼介はそんな他愛も無い外的要因だけで“恋人”との関係を等閑にしていた。

原因是エリカだつた。

涼介はまゆみとの初デート以降、意識的にまゆみとエリカを天秤に掛けていた。そしてその天秤は常にエリカの方へ傾き、当然明日の土曜日も明後日の日曜日も、まゆみの気持ちを配慮した行動を計画するよりも、エリカと過ごす事を優先したいと思う方へ傾いていた。

(・・・・・。)

涼介はバスルームの方を気にしながらまゆみにメールを送信した。

送信メール

会いに行くのはやっぱり週末なんだけど、
明日も日曜も仕事でバタつくと思うから
27日じゃないと無理かもしない。

辛いけじわ。

まゆみ

2003/09/019

11:05

まゆみからの返信は早かった。

受信メール

忙しいのね。

私の事キレイになつた? (^ー^)

まゆみ

2003/09/019

11:08

涼介の対応も早かつた。それはエリカがシャワーから戻つて来る前に、自ら起こしたアクションを完結させなければならないとする妙な焦りにあつた。そしてその焦りは、今迄まゆみに見せて来た涼介らしいクールさや切れ味には程遠い、単にドライで、ぬるい役者が舞台で演出の意図を履き違えて演技している様な文章を作らせていた。

受信メール

(^ー^) (^ー^) 嫌いになつた方がいいの?

今日は疲れちゃつた(ーー、)。
もう寝ちゃつてもいいかな?

明日T.E.Lするよ。

おやすみ(^ー^)

リョウスケ 2003/09/019

11:14

(・・・・・)

まゆみはベッドから抜け出し、部屋の明かりを点けた。

まゆみは煌煌としたシーリングライトの下で、涼介から届いた味
気無い一方的なメールをずっと田で追っていた。

まゆみと涼介は9月12日の金曜日午後7時、博多駅の新幹線改札口で待ち合わせをしていた。

当日の午後3時過ぎ、まゆみの元に急な仕事が飛び込んで来ていた。そしてその仕事はデートの時間が迫るに従つて忙しさを増していた。

まゆみは仕事で押し流される時間の合間に、泣き出したくなる気持ちを押さえながら何度も何度も現況の報告を涼介にメールで送信していた。

自身の仕事の性質上、まゆみの事情が理解出来る涼介は、まゆみからの最終的な連絡を社内で待つ主旨のメールを、午後7時を少し過ぎた頃に返信していた。

まゆみも涼介も、予定通りならば一人で食事をしている金曜日の夜に予定外の仕事をこなしていた。

二人は待つっていた。

約束の時間から2時間が過ぎた頃、まゆみはこれ以上涼介を待たせる訳にはいかない切実と、終る気配の無い仕事という現実の狭間で決断をした。そしてまゆみは断腸の思いで涼介にデートのキャンセルを電話で伝えた。

まゆみは涙が混じつている様な声で涼介に謝つていた。涼介は何時もより明るく、そして優しく励ます事を忘れなかつた。

その夜まゆみは、ぶつけ所の無いストレスを抱え込んだまま涼介とメールだけの会話を重ねていた。

まゆみは9月12日以降、涼介との接触がメールと電話だけという現実に悶々とした日々を送っていた。

(・・・・・)

まゆみはベッドに座り、涼介から届いたメールをじつと見つめた後、ほんの何分か前、自分が涼介に送信した、精一杯明るく振舞つたつもりのメールを読み返していた。

まゆみは必ず会えると信じていた今週末を待ち詫びていた。しかし、今度は涼介の都合で、その今週末のデートが流れ様としていた。

まゆみは9月12日、デートをキャンセルした日からずっと、心を抉る様な不安に纏わり憑かれ、心に充満する寂しさと切なさで食事が咽喉を通らない程涼介に想いを募らせていた。

まゆみは、今、不意に涼介に電話をしても繋がらないだろうと思っていた。それは過去何度かあった今夜と似た状況の夜に、涼介の携帯電話が直接留守番センターに繋がるだけの虚しい体験をしている事に起因していた。

まゆみには涼介が、今、何をしているのかが心配でも、どうしようも出来なかつた。故にまゆみはそんな事實を女性に突き付ける事が、涼介の恋人に対するスタンスなのだと強引に思い込もうとした。またそうしなければ、涼介とは恋人同士という間柄で括れない現実を冷静に見据えてしまいそうな自分が居た堪れなかつた。

まゆみは一人の関係が良い雰囲気で続いている事を信じていた。しかし会える時間が余りにも少ない事実には悲観していた。

ある意味滑稽ではあつたが、まゆみは涼介に対する搖れる想いの落とし所を抽象的で焦点のぼやけた洞察で強引に乗り切り、無理矢理気持ちを落ち着かせる事で何と無く大人の女性で在り続けよう

していた。そんなまゆみの恋愛に不慣れな所作は、過去の恋愛の中に居た、純粋で真面目な男性の行動を基準にしている事を象徴していた。

(・・・・・)

まゆみは携帯電話を枕元にある充電器に差し込み、部屋の明かりを消した。

明日の土曜日は朝一番で大切な契約があつた。まゆみは何時もよう早く出社する手筈になつていた。

まゆみは今年の4月に独立開業したばかりの設計事務所の経理を任せられていた。社員はまゆみと一級建築士が一人居るだけだった。

まゆみはそんな社員構成と仕事の性質上、休日を返上して経理以外の仕事をする事も多かつた。

(・・・・・)

まゆみは瞳を閉じる事が出来なかつた。

まゆみの脳裏には、涼介の声と顔が溢れ続けていた。

設計事務所の社長は鈴木周五郎という男だつた。

まゆみは以前勤めていた建設会社の同じ部署で、長い間直属の上司として一緒に仕事をしていた鈴木周五郎に“俺の仕事を手伝ってくれ”と口説き落とされ、今の仕事に従事していた。

鈴木周五郎は独身だつた。仕事の出来る、恰幅の良い、笑うと曰が無くなる37歳の真面目な自信家だつた。

鈴木周五郎は1月に辞表を提出し、まゆみはその2カ月後に退社していた。

鈴木周五郎が在籍中に画策した独立の為の根回しや取引先に便宜を図つて貰おうとする強引なやり口は、会社から反感を買い、部下達との軋轢を生んでいた。

鈴木周五郎が退社した後、まゆみは後を追う様に会社に辞表を提

出していた。

まゆみは反感を買っていた。そして当然の様に一人の関係に好奇な噂が飛び交う事となっていた。

仲の良かつた同僚達も妬みと共に後味の悪いゴシップを流していた。

まゆみは前の会社に新卒で入社して以来、ずっと上司で在り続けている鈴木周五郎の存在感に圧倒されていた時期があった。その時期はまゆみが女性としても社会人としても発展途上を自覚していた頃と重なっていた。結果としてまゆみは行き過ぎた尊敬の念と、男性であれば勘違いしていまいそつた無邪気な姿を鈴木周五郎に振り撒く事となっていた。

鈴木周五郎は素直で従順なまゆみを部下として評価するよりも女性として評価していた。そしてその評価に恋心を加え、将来を共にする女性だとと思い込む事に時間を掛けなかつた。

実際、まゆみと鈴木周五郎との間には体の関係があつた。

まゆみは恋愛感情が最初に脳裏を過ぎらない男女の関係が、鈴木周五郎との間で成立してしまつた事に違和感を覚えていなかつた。ある意味その事実は社内でもまゆみに向けられていた誹謗や中傷を冷静に受け流す余裕を生んでいた。同時にまゆみは一つのきっかけで豹変する人間の姿に、自分らしく生きる事の難しさを痛感させられていた。

まゆみは社内の噂に苛立ちを覚える事無く会社を辞めていた。そして鈴木周五郎について行く事が自身に取っては良い選択だったのだと納得していた。

送別会はささやかな物だつた。寿退社ではないまゆみに纏わる噂に対して、会社は最低限の儀礼だけで区切りを付ける事を選んでいた。

(・・・・・)

まゆみは眠れなかつた。

まゆみはベッドの中で、切ない想いしか与えてくれない涼介に強く抱きしめられたいと願う心と、それは叶わない夢なのかもしけないと思ひ心に苦しんでいた。そしてその苦しみは、数時間後に仕事で顔を合わせる鈴木周五郎に対する態度を、涼介と出会う前迄の様に戻して置きたいとする気持ちを浮き上がらせていた。

(・・・・・)

まゆみは枕元にある携帯電話に手を伸ばして、“R”という名で保存してあるメール送受信履歴のフォルダを開いた。

まゆみは結婚の為の恋愛ではない、ドラマのヒロインが燃える様な恋愛の末に享受する最高の結婚を夢見ていた。

(・・・・・)

まゆみは“R”的履歴を遡っていた。

まゆみにとって涼介はドラマの中に出で来る王子様だった。鈴木周五郎は現実を生き抜く為に必要な、掛け捨ての保険の様な存在だった。

暗い部屋の中で、まゆみの顔だけに携帯電話の液晶画面が作る光が溢れていた。

(・・・・・)

まゆみはある意味自分の置かれた状況に陶酔していた。そしてその履歴に浸つっていた。

まゆみはある意味自分の置かれた状況に陶酔していた。そしてそんなまゆみの心に在る涼介とは異質の独善は、取り敢えず鈴木周五郎に掛けている保険を何時でも貯蓄型に替えられる様、その手続きを頭の中で終わらせ様としていた。

(寝なきや・・・・・)

まゆみは、“おやすみ”と涼介に今夜送信した最後のメール迄履歴を読み戻した後、心の中でそつまき、ナイトテーブルに置かれた充電器に携帯電話を差し込んだ。

まゆみは自分の恋心の有り方を整理出来た満足感を顔に浮かべ、シーツに包まっていた。

光の消え残る携帯電話のサブ画面は、“9月20日(土) 02:05”と液晶を浮かび上がらせていた。

12・理想との呼応

12・理想との呼応

「失れーいっ。」

濡れた髪にタオルを巻き、体にはバスタオルを巻いて、歯ブラシを銜えたままリビングに戻つて来たエリカは、ソファーに座り、センターーテーブルに足を投げ出してテレビを見ている涼介を、そう言いながら仰々しく跨いで窓際のドレッサーに向かつた。

(・・・・・)

涼介はエリカのその行為に反応する事無くテレビを見ていた。

(・・・あれ?・・・・・)

涼介が見せる何時もの様な“反撃”を期待していたエリカは、ドレッサーの上に置いてあつたトートバッグの中から携帯電話を取り出す素振りに紛れて“ちらつ”と涼介を見た後、肩を窄めた。

「・・・元気い?」

受信と着信のチェックを終えたエリカは携帯電話をトートバッグに戻し、銜えた歯ブラシを手に取り、“意味深”な笑顔を浮かべながら涼介の横に擦り寄り、そう言つた。

「・・元気だよ。」

涼介はテレビから視線を外さず、穏やかに返事をした。

「そつ・・・・。」

エリカは素つ 気無い涼介に“何だかつまんない”という意思を言葉と顔に出し、再び歯を磨き始めた。

涼介は安堵していた。

涼介は悪戯にエリカを無視している訳ではなかつた。まゆみとのメール交換を思惑通り終え、予定通り隣にエリカが居る事の心地良さを、もう少しだけ“一人きり”で浸らせて欲しいと思つていただけだつた。

エリカは涼介に戯れ付きたいと思つていた。そしてエリカは、誘いに乗つて来ない涼介に何かを企み始めていた。

(・・・よしつ！)

エリカは歯磨きを止めた。

「ねえ、リョウ。」

「・・・？」

涼介はエリカの方を向いた。

「！・・・おいおい・・・。」

涼介はエリカにされるがまま、エリカの体中から漂う良い香りに包まれていた。

「ははつ。」

エリカは涼介の顔を見ながら笑つた。

エリカは涼介に抱き付いて、涼介の顔中にキスをしていた。

涼介の頬や唇は歯磨き粉だらけになつていた。

「お前なあ・・・。」

涼介は優しい瞳でエリカを怒つた。

「じゃあねえ・・・。」

エリカは涼介に包まつたまま、弾ける様な笑顔で涼介の顔に付いた泡を楽しそうに指でなぞり始めた。

「・・・・・。」

涼介は諦めた様な笑顔で、エリカの悪戯を受け入れていた。

「ははつ・・・逃げろっ！！」

エリカは一頻り涼介の顔で遊んだ後、そう言つて涼介から飛び上

がり、ユーティリティに戻つて行つた。

(・・・ほんとまつたくつて感じだな・・・。)

涼介はソファーの上で戯れ付いて来たエリカの残像を心で眺めていた。

(・・・さて、と・・・。)

ソファーを立ち上がつた涼介の心には、まゆみとのメール交換が思惑通り運んだ事の安堵感と、味わい深いエリカを独占している心地良さが充満していた。

「うわっ、びっくりした！！」

鏡の前に張り付いてフェイスケアをしていたエリカは、突然開いたドアに振り返つた。

「・・・そう？」

涼介は無表情でそう言った後、エリカに話しかける事も歯磨き粉だらけの顔を拭う事もせず、ユーティリティの中で飄々（ひょうひょう）と裸になろうとしていた。

「・・・・・・。」

エリカは涼介が見せる淡々とした行動の中に潜む、そうせざるを得ない様な圧力に、仕方無く再び鏡と向き合つた。

涼介が動く度、二人の肌は何度か触れ合つていた。

エリカは鏡に顔を近づける程、後ろに居る涼介に対して無防備になる自分の姿勢を敏感に意識していた。

鏡には涼介の裸が映つていた。

エリカはバスタオルを体に巻き付けているだけだった。

「エリ、お前やっぱ可愛いよ。」

涼介は鏡に映るエリカに向かつてそう言つた。

「！・・・・・。」

この後起くるかも知れない涼介の強引な行動を想像し、胸を高鳴らせ、体を熱く火照らせていたエリカは、突然発せられた涼介の言葉に“ドキッ”としながら鏡に映る涼介を見つめた。

(・・あれ？・・なーんだ・・・・。)

エリカは明るく落胆した。

涼介はエリカに優しく語り掛けた後、エリカの感情を全く無視するかの様にバスルームに消えていた。

(ちょっと期待してたのにな・・・。)

エリカは自分の照れた顔を鏡に映していた。

涼介の行動はエリカの期待を無視し、エリカを少し落胆させていた。しかしエリカは時折涼介がさり気なく見せる、恋人同士でなければ出来ない様な鈍感を装った意地悪が好きだった。そしてそれに一喜一憂させられている自分が気に入っていた。

「そんなん、あつたり前じやん！」

心地良い緊張から開放されたエリカは、自分でもびっくりする程の明るさでバスルームの折れ戸を派手に開け、涼介を覗き込む様にそう言った。

「何だ、もう一回入んの？」

涼介はシャワーを顔に浴びせながら振り向かずそつとぼけた。

「入んじゃないよ。」

エリカは可愛い猫が飼い主に戯れる様な姿でそう言った。

「それにも随分遅い返事だつたな。」

涼介はシャワーを止め、シャンプーを手にした後、一瞬エリカに笑顔を見せた。

「・・・・バーヒーたてどこか？」

エリカは活き活きとしていた。

「・・・・・。」

涼介は背中に感じるエリカの存在に、泡だらけになりつつある髪から右手を離し、親指を立てた。

「じゃあ後でね！」

エリカのその声には、躍る心が乗っていた。

(・・・ほんと可愛いやつだな・・・。)

涼介は心中でそう呟きながら、呼応し合つ一つの心に理想を見

ていた。

エリカのたくし上げられたままのTシャツから綺麗な胸が出ていた。足首にはシルクの黒いパンツとカラフルなスパッツが一緒に絡まっていた。涼介はそんな格好のまま横を向いて膝を抱える様に眠ってしまったエリカにそつとシーツを掛け、ベッドを抜け出した。（可愛いよな、まったく……）

涼介は寝室のドアを開ける前に振り返えり、心の中で呟いた。

（・・・エリカのかな・・・。）

キッチンの明かりを点け、コーヒーをドリップする準備を始めていた涼介は、煙草を燻らせながら心でそう呟き、守るべき愛を考えていた。

エリカの見せる反応は涼介が思い巡らすイメージネーションに敏感に呼応していた。エリカの感情を表す言葉やその声、涼介が意地悪をしても、焦らしても、笑わせてみても、強引でも、不意を突いても、エリカは感受性の輝きを失う事無く、涼介が期待する以上の表現力で表現し、涼介を魅了していた。

涼介にとつてエリカとのセックスも申し分なかつた。

（きつとしうなんどううな・・・。）

涼介は煙草を消し、コーヒーをマグカップに注いだ。

エリカは涼介の求めるものを多く持ち、涼介が描く恋愛の形を多く具現していた。

（・・・・・。）

涼介はキッチンに漂うコーヒーの香りに包まれながら椅子に深く背を任せ掛けた。そしてダイニングテーブルに投げ出されたままになっていた携帯電話をぼんやりと見つめた。

涼介は遠くを見ていた。見つめている携帯電話が震む程、遠くを見ていた。

涼介はマキという失った理想を思い出していた。同時に理想とい

う概念を再検証させてくれる力の力を顧みていた。

(・・・・・。)

涼介は姿勢を変える為に瞳を動かした。

(・・・ふうつ・・・。)

涼介の瞳には焦点の合ったキッチンの光景が戻つて来ていた。

(・・・・・。)

涼介は徐おもむりに左手を伸ばし、携帯電話の電源を入れた。

受信メール

やすみ

まゆみ 2003/09/19 11:57

(・・・・・。)

涼介は画面を見つめながら、遠くを見ていた。

(・・・寝よ。)

涼介は再度ぼんやりと遠くを見つめ続けそうになる前に携帯電話を閉じ、立ち上がった。

照明が消えたキッチンの中、ダイニングテーブルの上で携帯電話の光だけが消え残っていた。

携帯電話の液晶画面には“9月20日(土) 02:05”という表示が浮かんでいた。

13・対角の感覚

13・対角の感覚

(・・・・・)

9月27日の土曜日、まゆみはハイアット・リージョンシー福岡に向かうタクシーの中で、3週間振りに会う涼介との一度目のデートに少し緊張していた。

まゆみが涼介に抱いていた不安は、毎日涼介とメールで会話をしていたという現実に因つてかなり緩和されていた。更に鈴木周五郎というもう一つの現実が、まゆみの不安定な気持ちの支えになっていた。

(・・“社長は止めてくれ”・・か・・・・)

まゆみは緊張を少しでも紛らわす為に、涼介に会えない間、鈴木周五郎と行つた食事の時の事を振り返つていた。

まゆみは涼介と会うタイミングを外し続けていた3週間の間に、鈴木周五郎と四度食事を行つていた。一度目は“仕事の打ち合わせがしたいんだ”と言われて無理矢理呼び出されていた。二度目は残業していたまゆみの仕事を手伝つた後、“食事に行こう”と誘われていた。三度目と四度目も何かに託けてはいたが、鈴木周五郎が強引な事に変わりは無かつた。

(涼介ならあんな誘い方しないんだろうな・・・)

涼介に会う前に涼介との恋愛を肯定して置きたかったまゆみは、ある種独特な落ち着きや雰囲気のある涼介の仕草に思いを馳せながら、涼介と鈴木周五郎を同じ土俵で比較していた。

まゆみは鈴木周五郎の事を嫌いな訳では無かつた。しかしまゆみの心を牛耳る独善的な思考は、涼介で間違いないとしたい為に鈴木周五郎にどんな役でも買わせる事となつていた。

(いい人なんだけどな・・・)

まゆみは心を落ち着かせていた。それは同じ土俵で涼介と鈴木周五郎を戦わせた結果からではなく、涼介を横綱に見立て、鈴木周五郎を露払いに見立てた自分に満足したからだつた。

(ふう・ふう・・・・・)

ハイアット・リージェンシー福岡の前でタクシーを降りたまゆみは一つ息を吐き、待ち合わせ場所に向かつて歩き始めた。

(・・・・・ふう・・・・・)

まゆみは一階にある“ル・カフH”の前でもう一つ息を吐いた。
(今日も待つのかなあ・・・・・)

まゆみは時間を確認した。

腕時計は涼介が指定した場所の前で7時20分を指していた。

(10分前か・・・・・)

まゆみは期待と不安で心をざわつかせていた。

「いらっしゃいませ。・・・」
「森内致します。・・・禁煙席でよろしいですか？」

店内のエントランスで立ち止まつたまゆみに、黒のスーツを瀟洒に着こなした男性が優しく声を掛けた。

(・・・・・いえ・・・・・)

まゆみは煙草を吸わなかつた。

「かしこまりました。」

(・・・・・)

まゆみはその男性に会釈をし、後を追つた。

「じゃあ、それでお願いします。」

まゆみはそう言ってメニューを閉じた。

壁際の席に案内されていたまゆみは、ホールスタッフに勧められるまま、聞いた事の無い名前のカクテルを頼んでいた。

(・・・・・)

まゆみは緊張していた。それは店内を見渡す落ち着きの無い瞳に出ていた。

(・・・・・)

まゆみは携帯電話で時間を確認した。

(やつぱり今日も待つかなあ・・・)

まゆみはそう思いながら、自分が居る場所の対角に連なる窓ガラスの向こうを眺めていた。

(・・でも・・何だか・・リョウらしいな。)

まゆみは視線を店内に戻し、不安を打ち消す為に意識して強くなろうとした。

店内には夜空に鏤められた星を見に行きたくなる様な音楽が流れていた。それぞれのテーブルには、“楽しい”という声が聞こえて来そうな男女の笑顔が溢れていた。

(・・・雰囲気いいなあ・・・涼介って何時もこんなお店使うのかなあ・・・。)

まゆみは店内の落ち着いた景色を心に取り込みながら、涼介が選んだ店を好きになろうとしていた。

(ふう・・・・)

まゆみは再び窓の向こうを歩く人影に涼介を探した。膝の上では携帯電話が玩ばれていた。

「お疲れ。」

「……。」

まゆみは不意に掛けられたその声に驚き、振り向いた。

「うわっ！……。」

涼介を見上げるまゆみの瞳は瞬きを失っていた。

「お待たせ。」

涼介は爽やかだった。

「えつ！？・・・居た・・の？・・・。」

「いや、来たばかりだよ。」

涼介は爽やかだった。

「・・・びっくりしちゃった・・・。」

「そう？・・・いいじゃない、たまには。」

涼介は本来現れるべき筈の方向とは違う角度からまゆみに声を掛け、鳥が静かに舞い降りる様にまゆみの対面に座ろうとしていた。

「・・・いつも驚かせるのね・・・。」

まゆみは頬を朱色に染め、正面に座った涼介にそう言った。

「・・トイレに行つてたんだけど途中電話が入っちゃってさ、戻つて来たら見覚えのある女性の後ろ姿があつたからね・・・いいタイミングだつたんじやない？・・・あ、どうもありがと。・・それじゃあね、ビールを。」

一つ隣の席に置いたままだつた煙草とメニューをスタッフが気を利かせて持つて来てくれた事に気付いた涼介は、まゆみとの会話を止め、お礼を言い、メニューを広げる素振りも見せずに飲み物をそのままのスタッフに頼んだ。

「・・・・・。」

まゆみは予測不可能な涼介を見つめていた。

涼介がハイアット・リージェンシー福岡の“ル・カフェ”を使うのは三度目だつた。最初は今年の2月、保険会社に勤める25歳の女性と来ていた。一度目は6月の終わり頃、中洲のクラブに勤める23歳の気さくな“博多っ子”だつた。そしてその二人共、出会い系サイトで知り合つっていた。

「決まつたかい？」

涼介は笑顔とメニューを広げてまゆみの前に差し出し、煙草に火を点けた。

「・・・うん・・・・」

「お待たせしました。」

料理を決め兼ねているまゆみの前に、スタッフが真っ赤に染まつたロンググラスのカクテルを置いた。

「ご注文はお決まりですか？」

続け様に涼介の前にビールを置いたスタッフは、一人に尋ねた。

「・・・・・・」

涼介はまゆみを待っていた。

「・・・・・・」

まゆみはメニューと向き合っていた。

「もう少し待つて貰えますか？」

涼介はまゆみの意思を尊重する為に、スタッフにそう告げた。

「かしこまりました。」

「すいません・・・・・」

まゆみは去り行くスタッフに会釈をした。

「・・・じゃ、乾杯しよう。」

涼介は煙草を消した。

「うん。」

「それ、何て言うの？」

「・・分かんないの。」

「なるほど。」

涼介はグラストップに派手な飾りとフルーツが溢れる程盛られているカクテルの名前を、まゆみが知らない事に“ほつ”としていた。

「じゃ、乾杯。」

涼介は自分のグラスを持ち上げた。

「・・・・・・」

まゆみは持ち上げ難そうにロンググラスを触っていた。

「・・・・・・」

涼介はまゆみを見つめる瞳の温度を下げながら、待っていた。

二人は流暢に言葉を放ち続けていた。

涼介は饒舌の端々で、まゆみを困らせたり、怒らせたり、笑わせていた。

まゆみは涼介が見せる予期しない新たな姿に楽しく裏切られ、満足し、気持ちを高揚させていた。

(・・・やっぱり違うのかな・・・。)

涼介は今夜、まゆみの素性を探り出す為に自分の“間”を放棄していった。そして折に触れ、話題の決定権や会話の結論をまゆみに譲っていた。

「涼介って呼んで良いつて言つたよね？」

まゆみは、すでにそう呼び続けている事実をわざと横に置いて、あらためて問い合わせた。

「いいよ。」

「・・嬉い・・・。」

「そう?」

涼介はまゆみとの会話に、一人で何かを構築したくなる様なモチベーションが生まれて来ないを見つめていた。

「・・・結構飲んじやつた・・・。」

まゆみは甘えた声で、涼介からの優しい言葉をねだつた。

「そう?」

涼介は、溶ける様な声で呟いたまゆみのその言葉に優しい笑顔を向けながら、まゆみが望んでいる“涼介”を装い切れなくなる前に店を変えるべきだと直感した。

「うん・・・。」

まゆみは充実感を表情に浮かべていた。

「・・・出ようか。」

涼介は更に優しい笑顔をまゆみに向けながら、雰囲気を無視し、自分の揃れた思いが露呈する危険を避ける為に直感を即決した。

「・・・うん・・・。」

もう少しこの店で“涼介”を感じていられると思っていたまゆみは、少し意外だという表情を浮かべながらも、涼介に従つた。

「・・・・・。」

涼介は静かに立ち上がり、ある意味一人の付き合いに結論を出せるセックス迄のプロセスを強かに考え始めていた。

「お待たせ。」

涼介はまゆみにそう声を掛け、ハイアット・リージェンシー福岡の車寄せで待機しているタクシーに迷わず向かつた。

「・・・・ご馳走様でした・・・。」

先に“ル・カフェ”的外に出て、食事代の支払いを済ませ様としている涼介の姿をドアガラス越しに眺めていたまゆみは、涼介の後ろを追う様に歩きながら、“あの人と知り合いなの？”と、さり気なく質問をぶつけるタイミングを計っていた。

涼介は“ル・カフェ”を出る前に、近寄つて来た若い男性スタッフと親しげに一、二言葉を交わしていた。まゆみはその姿をドアガラス越しに見ながら、涼介のプライベートを全て知りたいとする思いを強烈に焼き立たせていた。

「シーホーク迄お願いします。」

涼介はタクシーにまゆみが乗り込んだ事を確認し、ドライバーにそう告げた。

(シーホーク？・・・涼介って意外と“べた”かも・・・。)

最初のデートの時と同じ様に、シートに浅く座り直し、足を組んだ涼介をまゆみは横目で見た後、そう連想した。

(・・・ひょっとして懶^{わざ}とクールにしてるのかも・・・まさかデートコース調べてて、マニアカル通りだつたりして・・・。)

続け様にまゆみはそう連想し、隣に居る涼介からは窺^{うかが}い知れない一面を想像しながら、その一面に“可愛い”と微笑み掛けた。

「最上階のバーに行つてみようよ。」

涼介は落ち着いた声をまゆみに向けた。

「・・うん。」

まゆみは一人の立場が一気に入れ変わり、主導権を手元に引き寄せられるかもしれない晴れやかさに心を躍らせていた。

タクシーはホテルオークラ福岡の前を通り過ぎ、西中島橋を渡ろうとしていた。

涼介は右手で頬杖を付き、雑踏を眺めていた。

「知り合い？」

まゆみの心は、涼介に対する好奇心を唐突に口に出せる程余裕が生まれていた。

「誰と？」

「さつき話してた人。」

「・・・何度か行つてるからね、顔覚えててくれたんだよ。」

「そうなんだ。」

まゆみは微笑んでいた。

「・・・どうしたの？」

涼介はまゆみの微笑みの訳を聞いた。

「え？・・・いや、そうだつたんだつて思つて。」

「・・知り合いの方が良かつたの？」

「そうじゃないけど・・・。」

「・・けど？」

「・・・いいの、ちょっとと聞きたかっただけだから・・・。」

まゆみの心の余裕は、涼介がどんな女性と何度も来たのか、強烈に知りたい直情を押し殺せる程になっていた。

「そう。」

「・・・・・。」

まゆみは含み笑いを窓の外に向けた。

「デートで使つたのは今日が初めてだよ。」

涼介はまゆみを見ずに、そう嘘を吐いた

「えつ？」

まゆみは涼介の言葉に含み笑いを消され、涼介の方に振り向く事を強制された。

「そういう事が聞きたかったんじゃなかつたの？」

涼介は笑顔をまゆみに向けていた。

「そうじやないけど・・・。」

まゆみは少し困っていた。

「・・・シー ホークのバー 行つた事ある？」

涼介は一度視線をまゆみから切り、もう一度まゆみを見つめ、話題を変えた。

「・・・一、二回行つたかも・・・。」

「そう・・・。」

涼介は笑顔を見せていた。

「・・・。」

まゆみは質問の意図を理解していた涼介に混乱していた。

(・・・駄目だな、俺は・・・。)

涼介は街並みに視線を変え、嫌味な自分の心を責めた。

タクシーは昭和通りで渋滞に巻き込まれていた。

歩道には瞬間の様に人が溢れていた。

「ね・・・。」

涼介は徐々に座り直し、真顔でまゆみを見た。

「・・・。」

まゆみは再び指摘されるかもしぬない団星に構えた。

車内にはエンジンのアイドリング音だけが響いていた。

スマートガラスではないタクシーは、どの角度からも後部座席の様子が良く見えていた。

まゆみは、最初のデートの時と同じ様に惜しみなく唇を奪われていた。

(・・・ぬるいな・・・。)

涼介はまゆみを捩じ伏せる長いキスで、自身の嫌味な部分に蓋を

している事に辟易していた。

(まだかよ・・・。)

心中でそう呟く涼介の前を、タキシードを来たスタッフが歩いていた。

二人は35階フロアに堂々と構えているバーラウンジの長い店内を、途中幾つもの心地良さそうなソファー席を通り過ぎ、俯瞰すれば海に向かつて矛先を突き付けている様に見えるだろう、シーホークホテルの先端部分に向かつて延々と歩いていた。

「どうぞこちらに。」

スタッフは涼介に向かい、丁寧にそう言った。

(辿り着いたつて感じだな・・・。)

涼介は、その側面を窓ガラスに貼り付けている様な座り難そうな椅子と、車のハンドルぐらいしかない、頬杖も付けそうにない丸いテーブルが置かれた場所に案内された事に白けていた。

「飲み物お決まりになりましたらお呼び下さい。」

スタッフはそう言つて、メニューをテーブルの上に置いた。

涼介は会釈しただけだった。

「綺麗ね。」

まゆみは夜景を見ていた。

「・・・そうだね・・・。」

涼介は悶々とした気持ちを抱えたまま、無難な笑顔で夜景に目を向けた。

「涼介って口マンチストなのね。」

「・・・そう・・・かな?」

ある種紋切り型の言葉でまゆみからそう評された涼介は、自嘲気味の声で否定も肯定もしなかった。

「そうだよ・・・だつてこんなとこに連れて来るんだもん・・・。」

まゆみは微笑んでいた。

(・・・ロマンチストか・・・。)

涼介は無難な笑顔を作れているかどうか気になっていた。

涼介は望む望まないに閑わらず、シーホークの最上階から見える夜景と雰囲気をまゆみに贈ろうなどとは思っていなかつた。

「・・・でも、女性にとつてはそっちの方が嬉しい。」

喋らない涼介にまゆみは微笑を重ねた。

「・・・・・。」

涼介は、無難な笑顔を作れているかどうか、気になっていた。

真下に見える砂浜には小さな波が寄せていた。正面には背の高いビルが何棟か並んで建つていた。

(・・・もう新鮮な驚きやときめきは無理なんだろうか・・・。)

涼介はシーホークの最上階から見える夜景を眺めながら、横浜や東品川で享受して来た珠玉の夜景を思い起こしていた。

涼介は“夜景”を通して想い出と現在を戦わせるという自虐的な賭けに出でていた。そしてそんな傲慢な自分の態度を觀照すれば、詰まる所当然の様に“現在”が賭けに負け、全てに於て想い出を越える事は無い“現在”という現実が身に染みる筈だと思つていた。そうすれば“現在”を象徴するまゆみへの想いに丁寧さが生まれ、まゆみの全てをもつと大切にしようとする筈だと思つていた。

(・・・・・。)

涼介は揺れ動こうとしない自分の心を客觀していた。そして自分の行動が正解だったのかどうかを考えていた。

涼介は多くを望み過ぎてている事を理解していた。受け入れるべきは目の前の現実だという事も理解していた。更に無い物ねだりは現実逃避者の烙印を押される事も理解していた。

まゆみは涼介を真似る様に夜景を見ていた。

涼介はずつと窓越しの夜景に顔を向けていた。

「お決まりですか？」

一人のスタッフが、二人の様子を伺っていたかの様なタイミング

でテーブルの傍迄来ていた。

「決まつた？」

涼介は我に返つた。

「・・・・・。」

まゆみは開いていたメニューにゆっくり目を向けた。

「・・・すいません、もう少し待つてください。」

涼介にそう言われたスタッフは、必要以上の笑顔を一人に見せ、席を離れた。

「・・・決まつたかい？」

涼介の声は優しかつた。

「んーと・・・、じゃあ、時が止まる様なカクテル。」

何度もメニューを捲り直していたまゆみが、突然顔を上げてそう言つた。

「・・・そう・・・。」

涼介はまゆみに返すべき言葉を探せなかつた。

涼介はまゆみが放つた言葉と、その言葉に添えられた笑顔に、ある意味完璧に心を揺さぶられ、降参させられていた。そしてシーホークのバーだけでなく、まゆみにも白け様としていた。

（多分あの店でもそんな事をスタッフに言つたんだろうな・・・。）

涼介は“ル・カフエ”でまゆみが飲んでいたカクテルを思い出していた。

まゆみは微笑を涼介に投げ掛け続けていた。

「了解。」

涼介はまゆみのセンスを受け入れる事も、太刀打つ事も出来ず奈落の底へ落ち行く自分の心に鞭を打ち、笑顔でそう答えた。

「・・・・・。」

まゆみは嬉しそうに黙つていた。

二人の間には、重さの違う空気が流れていた。

「・・・・・。」

涼介は笑顔のまま喋らないまゆみにどうする事も出来ないまま左

手を上げ、スタッフを呼んだ。

「じゃあ彼女にはアルコールの少ない甘くて綺麗なカクテルを。それと、マイヤーズをウイルキンソンで割つて下さい。」

涼介は思惑通り賭けに負け、“現在”が身に染みていた。しかし涼介はまゆみの全てを大切にしようとする気持ちを湧き立たせる事無く、“現在”を冷静に受け止めていた。

14・矛盾と混沌

14・矛盾と混沌

（・・・ここに最上階でこんなにクールになるなんて、やっぱり思つたより普通の人なのかもしれない・・・ホテルに誘う言葉でも探してるのでかな・・・それとも、もうここにホテル予約してるのかも・・・）

まゆみは涼介が喋らないのはBARの雰囲気に圧倒されているからだと洞察していた。同時にもつと不思議な人であつて欲しい欲望に駆られていた。

（だつたら今夜誘われても上手く断ろう。そして最高のタイミングで、次は小倉に行くから泊めてねつて可愛く言つてみよう・・・）
まゆみは涼介が握つていた恋愛の主導権が今夜自分の手中に收まる確信し始めていた。そしてその思いは、ポツポツと何かを喋る涼介に“意味深”な笑みを投げ掛けさせていた。

（時間余っちゃったな・・・）

涼介は全てに何かが足りない事に失望していた。

（俺が悪いんだな・・・原因は俺だ・・・）

涼介は物哀しい捨て台詞を心の中で吐きながら、何週間か後に迎えるだろうセックスの為だけに、過去に経験の無い憂鬱な気分で世間話をまゆみの前に置いていた。

「・・・・」

涼介は自分の心と言動に辻褄を合わせられないまま煙草に火を点

け、席を立つタイミングを見計らっていた。

（これからどうするのかな・・・）

まゆみは会話の中で、涼介の心の中を見計らおうとしていた。

一人の会話にリズムは無かつた。

お互いのグラスは空になつていた。

恋愛に順序など無いと考え、道無き道を這いずり回り、時に恋愛をゲームの如く捉え、人に言えない様な経験を幾度となく重ねて来た涼介という名のエゴイストは、路肩に綺麗な花が咲き乱れている遊歩道を散策する様な、健全な恋愛のスタイルを貫こうとしているまゆみに歩み寄り、心を開く事を諦めていた。

「・・・行こうか。」

涼介は煙草を消した。

「・・・そうね。」

まゆみは此処から先が勝負だと思っていた。

まゆみは涼介から何時、何処で、どんな形で魅力的なアプローチをされても、或いは癖のある言葉を投げ掛けられても、しかつりキヤッチし、期待を持たせた優しい言葉で涼介を宥め、駅まで送つて行く心の準備を終えていた。

「・・・・・」

涼介はテーブルの上のセブンスターをポケットに仕舞つた。

「・・・・・」

まゆみはハンカチをバッグに仕舞つた。

涼介はシーホークのBARで一人が共有したのは時間だけだったと、自嘲気味に振り返りながら席を立つた。

まゆみは涼介がこれから先どんな行動を取るのか、期待しながら席を立つた。

涼介は何処か緊張している様な雰囲気を体に漂わせ、ずっと無言で歩いていた。BARの長いフロアを歩いている時も、エレベーターの中でも、シーホークホテル一階の広いエントランスを歩いてい

る時も、涼介は何も喋らなかつた。

まゆみは余りにも長い涼介の沈黙に緊張し始めていた。それでもまゆみは涼介が切り出す最初の言葉を上手く拾う為に、集中力を切らす事無く涼介の隣を歩いていた。

「博多駅までお願ひします。」

シー ホークの B A R を出て、涼介が最初に語り掛けたのはタクシードライバーだった。

「！？・・・。」

涼介の後にタクシーに乗り込んだまゆみは、突然舞い降りた今夜一度目の混乱に、シートに腰を落ち着けられなかつた。

涼介は小倉に帰ろうとしていた。

まゆみは涼介の心の行方を完全に見失い、慌てていた。

（・・・ひょっとしてこのまま帰えるつもりなのかな・・・。）

まゆみはシー ホークホテルのロータリーから遠ざかって行くタクシーの中で、自分の思い込みに不意を打たれていた。

（涼介って私が思うより真面目な人なのかもしない・・・。）

まゆみは涼介の穏やかで落ち着いた横顔に焦つていた。

「・・・普段休みの日は何してる？」

涼介は至極自然な声でまゆみにそう問い合わせた。

「！・・・えつと、そうね、音楽聞いたりとか・・かな。」

二人の間に続いていた沈黙を破る最初の言葉が、まさかそんな質問だとは想像すらしていなかつたまゆみは、辛うじて笑顔を浮かべてはいたが、瞳では笑えていなかつた。

（どうしよう・・・。）

まゆみは焦つていた。

まゆみは涼介が切り出した他愛も無い問いに答えた事で、博多駅にタクシーに向かわせた涼介の真意をさり気なく確認出来た僅かな“間”を外していた。

二人の間には、30分も経てばその内容を忘れてしまいそうな会話が続いていた。

(どうしよう・・・。)

まゆみは今夜自分なりに割り出して来た涼介像が、波に浚われる砂浜のオブジェだった事を認識しながら、涼介との会話の端々で、“涼介”という人格の再構築を必死に試みていた。

(ほんとにどうしよう・・・。)

まゆみは涼介を掌握するどころか、恋愛の主導権に触れさせずら貰えていない事にも気付き始めていた。

32歳独身というまゆみの現実は、多くの男性と簡単に接する事が出来る出会い系サイトをまゆみに泳がせていた。そして今迄の生活を続けていれば巡り会う事は無かつただろう涼介という人間に出会わせ、恋をさせていた。しかしその恋を愛に昇華させて行く時に必要な、男性に対するまゆみの洞察は余りにも幼な過ぎていた。

(ねえ・・涼介・・キスして・・お願い・・・。)

まゆみは根拠の無かつた自分の予測に今更ながら縋つた。

(ねえ・・お願い・・・。)

まゆみは、今、此処で涼介にキスをされて救われたいと思つていた。

まゆみの予測では、タクシーの中は涼介が突然真顔になり、最初のデートの時の様にキスをして来る場所だった。

まゆみは自己矛盾を混沌と心に抱えていた。そして懇願と挑発を瞳に携えて涼介を見つめていた。

二人は新幹線の改札に向かう階段を昇つていた。

「じゃあ次は小倉で待つてるから。」

「うん・・・。」

まゆみは、タクシーの中でそんな話をしていた事を思い出していた。

「時間経つの早いな。」

「・・・そうね、ほんと早いよね・・・。」

「もつと一緒に居たかつたんだけどさ。」

「うん・・でも、今度小倉ですつと一緒に居れるじゃない・・・。」

「まゆみは何かに焦っていた。」

「本当に昼間から来る予定なの?」

「だつて・・・一緒に映画とか見たいし、それに涼介がどんな街に住んでるのか見てみたいし・・・小倉って行つた事がないの、だから。」

「俺、実はあんまり昼間にデートした事がないんだよね。」

「だからいいんじゃない!公園とか歩いてみよつとー。」

「そうなの?それは勘弁してよ。」

「いや!」

「まゆみは何かに焦つていた。」

「・・・ま、いいけど。」

「そつそつー、ビデオ借りて見るつていうのもいいよー。」

「昼間つからーハロビ?」

「もう!」

「まあ、それもいいな、煙草も吸えるし、エッチしたくなつたらすぐ出来るし。」

涼介は立ち止まり、そう言つてまゆみに微笑み掛けた。

「もう。」

「エッチしたいでしょ?」

「もう、何でそういう事いうのー!」

一人は改札口の横にある券売機の前で向かい合つていた。

「だつて、ずっと一緒に居たいって事はそういう事でしょ?..」

「もう、意地悪・・・。」

「・・・ちょっとここつち来てみ。」

涼介はまゆみの肩に手を掛け、改札口前の人溜まりから通路の死角にまゆみを誘つた。

「何? ?」

まゆみには涼介が何を考えているのかを考える余裕がなかつた。

「キスしたい?」

「えつ!」

「キスしたくない?」

「・・・でも・・やだ・・こんな所で・・・。」

まゆみは混乱していた。

涼介は真つ直ぐまゆみを見ていた。

向かい合う二人の横を、家路を急いでいるだろう人達が歩いていた。

まゆみは躊躇いを赤く染まつた顔に出しながら、視界に入つてゐるだろう通行人をまるで気にしていない今の大胆な涼介と、タクシ一の中でキスを強烈に懇願していた瞳にまるで気付かなかつた涼介が、紛れも無く同一人物だという事実に怖さを感じていた。

「・・・・・。」

涼介は優しい瞳で、真つ直ぐまゆみを見つめていた。

「・・・・・。」

まゆみは俯いていた。

「・・そう。・・じや、止めとこ。」

涼介は時間を動かした。

(もう・・・・。)

涼介の心を掴んでいない事に焦り、切なく軋むまゆみの心は、置み掛けで来る涼介の意地悪に対し既に焦がす物が無かつた。

「・・・・・。」

涼介は困惑しているまゆみの瞳を無視し、まゆみの両肩に手を乗せた。

「・・・・・。」

まゆみの耳には周囲の雑音が届かなくなつていた。激しく脈打つ鼓動だけが耳に届いていた。

二人の傍を、家路を急ぐ人達が歩いていた。

二人の傍を、家路を急ぐ人達が歩いていた。

涼介は音も無くまゆみの唇を滑らかに奪っていた。

まゆみは、涼介の大胆な行動は愛があるからだと自身に言い聞かせていた。

「…………」

まゆみは涼介の唇が遠ざかつた事を確認する為にゆっくりと目を開けた。

涼介は優しい笑顔を浮かべていた。

「…………」

まゆみは肩から力を抜く事を許されなかつた。そして立つて居る事を諦めたい程、胸の鼓動に全身を支配されていた。

まゆみは涼介の笑顔に誘われるまま微笑もうとした時、再び唇を奪われていた。

深くて強いキスだつた

まゆみは焦げ尽くしていた自分の恋心が、涼介の野性に因つて跡形も無く溶かされ様としている現実を傍観していた。そして今夜二人で過ごした時間の全てに於て、何一つ自分の意志で涼介の心を動かした物は無いという真実をはつきりと悟らされていた。

新幹線改札口の正面に掛かる時計は11時15分を指していた。

「じゃ。」

「気を付けてね。」

改札を抜ける涼介にまゆみは軽く手を振つた。

改札を抜けた涼介は、まゆみの瞳に映る自分の姿を小さくさせ続けながら、その声に振り向いて左手を軽く上げた。

涼介の背中を見つめるまゆみの瞳は、明らかに愛しい人を見送る輝きを放つていた。

「…………」

涼介はもう一度振り向き、まゆみに軽く手を振つた。

まゆみは嬉しそうに手を振り返した。

離れ行く二人の距離に漂う空気は、紛れも無く恋人同士の重さを

含んでいた。

(最低だな・・・。)

まゆみに背を向けた涼介はそう吐き捨てた。それはまゆみとの最初のデートを焼き写したかの様な今夜の自分の行動に向けられていた。

15・素直さの放出

15・素直さの放出

(・・・・・。)

涼介は一等車の窓側で煙草の煙を吐き出していた。

(今別れたばかりなのに・・声が聞きたいや・・電話しちやおつかな・・・。)

涼介と奏でる未来を夢見る乙女心に体中を支配されているまゆみは、自宅へ帰るタクシーの中で、脳裏に焼き付いた涼介の残像に語り掛けていた。

(何あんな風にやつちまうんだろう・・・・・これで結婚するから金貸せって言つたら詐欺師じやねえか・・・。)

トンネルに入った新幹線の窓に映つている、虚脱感を漂わせた気障な男の姿に涼介の心は語り掛けていた。

(・・・前のは嬉しい事一杯書いてくれたメールが直ぐ来たんだけどなあ・・・。)

例え一瞬で終つたとしても、恋愛の主導権を涼介から奪いたいと
切なく願つまゆみは、自ら動くべきかどうかを迷つていた。

「しょうがない。」

涼介はそう呟いて携帯電話を取り出し、メールを作り始めた。

「しょうがないなあ・・・。」

自分が考える恋の駆け引きで、恋愛の主導権を一度だけでも涼介
から奪う事を諦められないまゆみは、そう呟いた。

（・・・・・。）

涼介は新幹線の中でメールを送信し、携帯電話をワイヤーシャツのポ
ケットに仕舞つていた。

（10分以内に必ず来る・・・。）

まゆみは携帯電話を握つたままタクシーに揺られながら、涼介か
らの連絡を待つていた。

送信メール

お疲れ^ ^

明日俺ん家から仕事に行つて欲しいんだ。
逢いたい。

12：30には家に居るから。

エリカ

2003/09/27 11:35

(・・・・・)

涼介は一度仕舞つた携帯電話を取り出し、素直で正直な気持ちを打ち込んだ画面を見つめていた。

博多発最終の新幹線が到着した小倉駅のホームは、家路を急ぐ人並みが続いていた。

涼介は携帯電話を左手に持つたまま、ホームを歩く人の流れに身を任せながら、恋を知ったばかりの中学生の様な気持ちでエリカからの返事を待っていた。

涼介は今夜これから更に続く“今夜”を、エリカにずっと隣に居て欲しいと思っていた。

涼介は会社のあるテナントビルの地下駐車場から車を放り出す時も、ずっと左手に携帯電話を握つたままだつた。

(しかし土曜の夜なんだよな・・・。)

涼介は運転しながら、エリカが何処で遊んでいようと必ず連絡が入ると信じ、そしてそれが良い返事だと信じ、明日一人で食べる朝食の食材を買う為に、自宅近くにある行き付けのセブンイレブンではなく、堺町にある24時間営業のスーパー・マーケットに寄ろうとしていた。

(頼むから電源だけは入れといてくれよ・・・。)

涼介は右手だけでハンドルを操作しながら何かに縋つていた。同時にエリカからの連絡が何時、どんな形で入つて来ても対処する事を考えていた。

涼介はエリカが望むなら、例えそれが明け方だつたとしても迎えに行くつもりだつた。

(・・もう20分も経つてんのかよ・・・。)

涼介はエリカにメールを送信した時間と、現在の腕時計の針の位置を確認し、最悪、エリカに電話を掛ける事を考えていた。

(・・・！。)

その振動は、不意打ちとなつて涼介の左手から胸に伝わつた。

(・・・・。)

涼介は気持ちが一気にポジティブになつて行く感覚を脈々と体に走らせながら、メールの相手が誰なのか確認したい逸_{やは}る気持ちを押さえ、冷静を装い、目の前に見えているスーパーマーケットの入り口附近に取り敢えず車を路上駐車させ様と、ハザードランプを点滅させた。

(・・・・。)

涼介は縦列駐車をする為に後ろを見ながら、未だ安心出来ない現実が存在している事実に、装つた冷静を解除出来なかつた。

(イエスでもノーでもいいから、お願ひだからエリカであつてくれ。
・・。)

涼介は受信したメールを開く前に、久し振りに目に見えない“何か”に祈つていた。

受信メール

おつかれ っ！

いいね、それ

今日は何やつてたの？？

エリはさつきまで仕事だつたんだ（‘一、
後輩のカットモ_デルしてた（+一+

髪変わつたよ 色も

シャープウルフのミニハイアム&アッシュ（^—^-

ハズカシ f^—^ ;かも

じや、先にリョウんち行つてるね
おなか空いちゃつた！何か食べにいこ！（^—^）

エリカ

2003/09/27 11:55

(・・・・。)

涼介は瞳をメール画面に釘付けたまま顔を綻ばせていた。

エリカのメールは涼介が伝えたかった情熱を理解していた。そして涼介への愛情を照れながらも伝えていた。

(・・・ そうか、ヤツは飯を食つてないのか・・・。)

涼介は目の前のスーパー・マーケットに何故か感謝しながら、自然と湧き出る想いをメール画面に伝達し始めた。

送信メール

(^ー^)

髪型変わった！？

また一段と可愛く&色っぽくなつたって訳だね。

やるじやん(^ー^)

メシはさ、俺が何か作るよ。

家でビールを“クイツ”つてのはどう？

エリカ 2003/09/28 0:04

エリカは今が旬だつた。時代を力強く生き抜く為の術^{すべ}を自身の体中に覚え込ませるかの様に、仕事も遊びも恋愛もタフにこなしていた。

エリカが操る術の中には、例えば好きな人との関係が恋人同士なのかどうか曖昧な時期であつても、“私たち別れよ”と明るく切り出せる様な、ある種独特な自己完結の感覚が組み込まれていた。エリカの持つそんな感覚は、時代を嘆く大人達にしてみれば“無知で世間知らず”であり、自由の意味を履き違えている幼稚な行動だと決め付けられ兼ねなかつた。しかしその感覚は、大人達が多感な時に過ぎて来た時代の儀式やお世辞に合理性や利便性を感じない世代の、退化している様で実は進化し続けている、生き抜く事に対しての抑圧に惑わされまいとする素直な情熱かもしれなかつた。涼介はそんなエリカが創り出す、客観的には魅力としか言い表せない素

直さに、恋愛に関する神経が束になつてている部分を強く刺激された
いた。

(・・・・・。)

涼介は装う必要の無くなつた“冷静”を穏やかに身に纏まとい、返つて来るだらうエリカからの返事を待つ事の心地良さを満喫していた。車内にはスーパー・マーケットから放たれる光が助手席迄届いていた。そしてその光は助手席に置かれた携帯電話を浮かび上がらせていた。

(・・おつと、早いな・・・。)

涼介は携帯電話を光らせ、振動させている相手がエリカだという事に疑いを持つていなかつた。

受信メール

ウンウン！

ビール飲みたかつたんだ（^—^）

じゃ、待つてるね！

エリカ 2003/09/28 0:08

(・・・・・。)

涼介は合鍵の存在にも改めて感謝していた。そして涼介は合鍵の持つメリットを最大限享受した様な至福に浸つていた。

やつと夏本来の暑さを取り戻していいた8月最後の金曜日、二人はたまに顔を出す焼肉店で夕食を取るうと魚町アーケードを歩いていた。

「合鍵作つてよ。」

エリカはそう言って涼介を見上げた。

ザボビル前の歩行者用信号は赤だつた。

一人は歩く速度を緩めていた。

エリカは組んだ腕を解かないまま涼介の返事を待っていた。

二人の正面には、大きな鍵を象った広告看板が夜空を突き刺さす様に飾られ、ネオンの光で輝いていた。

「いいよ。」

涼介は広告看板を見ながらそう言った。

「やつたあ！・・・じゃ、行こ！・・・」

エリカは嬉しさを体中に走らせていた。

エリカの足取りには迷いが無かつた。

涼介はエリカに左手をぐいぐい引っ張られながら、アーケードの中を少し早足で歩かされていた。

「やつたねっ。」

エリカは出来上がった合鍵をキーケースに掛けて、嬉しそうに涼介の目の前で揺らしながらそう言った。

キーショップを出た二人は、ゆっくりとアーケードを歩き始めていた。

「お前はあの店で合鍵を何本作ったんだ？」

「・・・ナイショ！・！」

エリカはそう言って涼介の腕に組み付いていた。

「・・・なるほど。」

涼介は笑っていた。

「ね、和食にしよ。」

「何だよそれ・・・日本酒飲みたくないちまたのか？」

「うん！」

(・・・・・)

エリカに連れられて合鍵を作った時の事を思い出しながら軽やかに運転していた涼介の胸は、恋愛に必要不可欠な“ときめき”を充満させていた。

助手席では食材の入ったビニール袋が揺れていた。携帯電話も助手席で揺れていた。

涼介は車の振動を心地よく全身で受け止め、エリカに思いを馳せていた。それはまゆみとのデート中に余儀なくされていた自己嫌悪が闇に葬られている事を意味していた。そしてその事実は涼介が自分らしくある為に培い、常に纏っていたスマートな雰囲気を涼介に呼び戻していた。

(長いのか短かいのか、不思議な夜だな・・・。)

涼介はビニール袋を左手に提げ、自宅マンションの駐車場を歩きながら、“時間”という、それを感じる人間の心一つで、その長さがどうにでも決まる概念に翻弄されていた今夜を振り返っていた。

「魔力持つてるよな。」

涼介は約束の時間を15分程過ぎている事を腕時計で確認した後、そう呟いて愛しい女性が待っている部屋に急いだ。

(ん？・・・。)

涼介はその振動を、マンションのエントランスで感じていた。
(誰だろう・・・。)

涼介はワイヤーシャツのポケットの中にある携帯電話に手を伸ばさず、歩く事も止めず、エレベーターの前でメールの送信者であつて欲しい女性の顔を頭の中に並べ始めた。

(・・・・・。)

涼介は血流を思考回路に送り込みながら、メールを開いた。

今どのへん??

エリカ

2003/09/28 0:44

(・・・参ったな・・・。)

涼介は、ぬるい算段をしていた自分に対する言い訳とも取れる思
いを口にした。そして涼介はその算段の対象として頭に並べていた
女性から逃れる様に、エレベーターに乗り込んだ。

(しかし最高のタイミングだな・・・。)

涼介は、ある意味自分の醜い素性を再認識させてくれたエリカに
だけは、誠実で素直な自分を放出したいと思っていた。

(・・・・・。)

涼介はキークースから鍵を取り出し、玄関ドアの前で立ち止まつ
ていた。

涼介はインターホンを押すべきかどうかを考えていた。

「お帰りっ。」

「お疲れ。」

内側から開いた玄関は、エリカの弾ける笑顔と、外気より少し暖
かい空氣を涼介に届けた。

「どう? 髪。・・・変? ? ? ? 」

エリカは涼介のサンダルを突っ掛けたままポーズを取った。そし
て茶目っ氣たっぷりにその場で一回転した。

「・・・ やるじゃん。」

「良かつたあ!」

エリカは喜んでいた。

「似合つてるよ。」

「うれしつ。」

二人は玄関ホールに立つたまま会話で戯れ付いていた。

「・・・ そうだなあ、そっちの方が透明感のあるキャラクラ系つて

感じかな。」

「あら？ 壊めといて喧嘩売んのね。」

「違うさ、最近のキャバクラは可愛いくてお洒落で上品な奴しか働けないんだぞ……ん？ ……」

涼介はエリカの瞳に力が入っている事に気が付いた。

「……何時行つたの？」

「……さつき。」

「また口説いたんでしょ？」

「口説きやしないけど……ホテルに誘われたかな。」

「あーそう、ふーん……うわっ、何作んの！？」

エリカはもつと何か言いたそうな顔で涼介を見ていたが、そんな事はどうでもいいかの様な変わり身の速さで、涼介の持つビニール袋を覗き込んだ。

「…………」

涼介はそっとビニール袋を床に置いた。

「ねえ、何つ……ぐん……」

「…………」

涼介はしゃがみ込んでいるエリカの両腕を掴んでゆっくりと体を起こし、エリカが喋れなくなる程強く抱きしめた。

「…………くる…………しよーつ…………」

エリカの右の踵は浮き、左足は爪先が揺れ、左の頬は涼介の胸に埋もれていた。

涼介はエリカの髪から洩れる上品な香りに抱かれていた。

エリカの足から離れたサンダルの片方は、涼介の足元で裏返しに転がっていた。

「くるしーつ。」

エリカはそう言いながら涼介の背中を叩いた。

「ごめんごめん。」

涼介は腕を解き、我に帰つた。

「もーつ。」

エリカは少し口を尖らせていた。

「ごめん、悪かつたよ・・・。」

「・・嬉しいんだけど・・強く抱き過ぎだよ・・・。」

エリカは幸福感を敢えて隠す様な瞳で涼介を見上げた。

「エリ。」

「・・・?」

「お詫びにキスしてよ。」

「何それ、ビーカー事!?」

「やなの?」

「やだ。」

「あ、そう・・・。」

涼介はそう言つて、エリカに優しいキスをした。

涼介はエリカを抱きしめながら魅力的な女性だと改めて思つていた。

エリカは涼介のキスに、心をときめかせていた。

「何か結婚してるみたいだね。」

エリカはダイニングテーブルの上に食材を並べながらそう言つた。

「それってプロポーズして欲しいのかな? ある意味。」

リビングでネクタイを外そうとしていた涼介はそう答えた。

「ははっ、それってプロポーズしたいのかな? ある意味。」

「・・別に。」

「あら、残念。」

エリカは涼介に笑顔を向けて、肩を少し窄めた。

「・・・エリ、俺達相性いいと思つ?」

涼介はエリカの居るキッチンへ歩きながらそう言つた。

「いいよ。」

エリカは素直だった。

「・・だつて、さつきメールが来た時嬉しかったもん。リョウに逢いたいなあつて思つてたんだよ、何してんのかなつて。そしたら来

たじやん。うわっ、こんな事あるんだ！って。・・・あー、リョウ

も今私の事考えてくれてるんだなあつて、嬉しかったもん。」

エリカは食材を包装しているビニールを丁寧に剥がしていた。

「・・・・・。」

涼介はエリカの横顔を見つめながら、自分が恋や愛を考えた時に使つ多くの表現より、その深さも厚さも、重み迄凌駕しているエリカの言葉に心を揺さぶられている事を実感していた。そして素直と言うのはこういう感情を指すのだと気付かされていた。

「だつてさ、さゆりに仕事終つたら御飯食べに行こうって誘われてさ、それに今日は何時もエリを指名してくれる・・何だつけな、メルローズで店長してるつて言つてたかな・・結構イケメンなんだけど、その人から飲みに行こうってしつこくメール入つて来るし、どうしようかなあ、お腹空いてるし、どっちに行こうかなあつて考えててさ・・後10分リョウのメール遅かつたら、会えなかつたかもだつたんだよ・・取り敢えずさゆりには何とか言つてリョウくん家に来ただけどね。」

シンクで食材を洗い始めていたエリカは、独り言の様に喋つていた。

「サンキュー。」

「うわっ、びっくりした！」

エリカは真後ろに居た涼介に思わず身を翻した。

「お疲れ。」

涼介はそう言つてグラスに注いでいた白ワインをエリカに渡した。

「・・ありがと。」

右手でグラスを手にしたエリカは、左手で胸を押さえ、笑つた。

「しかしそのイケメン君と飯を食つてる途中だつたとしても、15分後には会えたろ？」

涼介は態^{わざ}と得意げにそう聞いた。

「・・・どうかな・・・。」

エリカは微笑んでいた。

「・・・それじゃ、乾杯って事で。」

涼介は穏やかな表情でエリカの右手にグラスを近づけた。

「了解つ。」

エリカはそう言ってグラスを鳴らした。

「了解？」

「・・たまにはいいじゃん・・リョウの口癖が移ったんだよ。」

エリカは笑っていた。

「なるほど。」

涼介は邪な物が何も無い、素晴らしい時間をエリカから享受している事に微笑みながらグラスに口を付けた。

「・・・美味しいね。」

「だな。・・・なあ、エリ、バルサミコとオリーブオイルをよく混ぜてくんないか。」

「OK！」

「ガーリックライスはいらないよな？」「食べる食べる！」

16・奔放な融合

涼介はソファーを背凭れにし、エリカは涼介をクッション代わりにし、二人は縦に重なっていた。

（本当にエリカと結婚すんのかもしないな・・・。）

涼介は食後のゆったりとした時間の中、足を投げ出してテレビを見ているエリカの髪を手櫛で梳かしながら、ふと、そんな事を考えていた。

（・・・・・。）

涼介は考え始めていた。

涼介は“出会い系サイト”という世の中に溢れるデジタルコンテンツを柔軟な姿勢で吟味しようとせず、先入観だけで評価を下してしまう、ヒエラルキーの中で生きる事を強いられた世代が、恋愛を見つける手段に善悪など無いと考える捌けた世代の行動力に嫌悪感を抱き、抽象的な懐古主義的論理だけを頭ごなしに振り翳す事の不条理を考えていた。

（・・・一昔前迄は外出しないと恋に出逢えないのが主流でさ、その流れは永遠に変わんないんだろうけど、それが全てで、本流だとする世代の経験の押し売りは、新しい価値基準を無意識に模索している世代に、げんなりとした温度差を感じさせちゃうんだよな。例外もあるけど、世の中は何時の時代も多数派が作り出す結果からの逆算で道理が成り立つてると訳だし・・・。）

時代は人に逞しく生きる事を強要し始めてんだよな・・・どんな

恋愛にもリスクはあるし、当事者同士の心一つでビリにでもなっちやう訳だしさ……。

・・・恋愛は車の運転に似てんのかもしないな・・・ほつとくと故障しちゃうし、気を付けててもトラブルに巻き込まれちゃったりするし・・・しかしさ、恋愛には保険が無いんだよ、まあ、ある種保険みたいな物を掛ける事は出来んだけど、結局それは恋愛を冒涜する方の保険だし、それって相手の心を切り刻む裏切り行為だもんな・・・。

恋愛の正解は一つじゃないし、百組居れば百通りの正解がある訳だから、一人で百回恋愛すりや百回ともある意味正解かも知んないしさ・・・。まあ、結局どの正解も永遠に不安定なんだろうけど、出会い系サイトが廃れて行く事は考え難いな・・・。）

涼介はエリカの髪を何となく梳かしながら、心中で漫然と独り言を続けていた。

「きやはははーっ！」

エリカは涼介を背にテレビを見ながら笑っていた。

「・・・・・・」

涼介はエリカの奔放な愛情に包まれている事を実感していた。

涼介は携帯電話やパソコンを媒介して成り立つ、合理的に恋愛や快樂を追求出来る商品は、恋愛が人間としての本能であり、生きる上でテーマである限り、計り知れない魅力が必要する側に存在し続けると思っていた。そしてその商品が流行り物ではなく、人間の心理に根付いた本物であるとするならば、近い将来何らかの形でそんな商品に法律で枷を嵌めたとしても、趣向を変え、或いは地下に深く潜り、逆に希少価値という、無い物をねだらうとする人間の欲求に付け入る付録を付け、今以上に媚薬の香りを漂わせながら生き続ける事は確実だとも思つていた。

「きやははーっ！さまあーず面白いよねー！」

「だよな・・・さまあーず好きなの？」

涼介はエリカの問い掛けに、具体的な現実に呼び戻された。

「うん。・・あと中居君。」

「やるじゃん。」

「リョウも好きなの?」

「そうねえ、いいねえ、大竹。あいつは好きだなあ。」「ふーん。」

「まあ～ずはバカルディの頃から好きだよ。中井君はさあ、バラエティのMCやらせたら、今、N○2だな。」「・・トップは誰?」

「今田耕司って知ってる?」

「ふーん、やるじゃん。」「・・・誰が?」

「中居君と今田君。」

「俺じやあないのかよつ!」

「ははつ、そつれて三村?」「どう?」

「似てねーっ!」

振り向いていたエリカはそう言つた後、体を元に戻し、左手に持つていた食べ掛けのプレッツェルを涼介の顔の辺りに差し出した。
「・・・・・。」

涼介は手を使わずに銜えたプレッツェルの先でエリカの左の頬を突付き、エリカをもう一度振り向かせた。

涼介は両端からプレッツェルを食べ合うという、恋人同士でもなかなか出来ない様な恥ずかしい行為を平然とエリカに試みた後、甘いキスを楽しみ、続け様にエリカを困らせ様としていた。

「なあにい・・もう・・やらしい・・・・・感じちゃうじゃん・・・・。」

涼介の左手は、エリカの右の胸を優しく掴んでいた。

「もう・・やーだつ・・てば・・・。」「エリカはそう言って体をくねらせた。

涼介はエリカからその言葉をもつと引き出そうとするかの様に、

右手もニットの中に入れた。

涼介の右手はエリカのブラをずり上げ、エリカの柔らかい左胸は涼介の思いのままになっていた。

「照れ……る……。」

エリカは瞳を潤ませて涼介を見つめていた。

涼介は左手もニットの中に入れ、唇をエリカの耳元に寄せた。

「あっ……」

エリカは涼介が走らせる刺激に耐え様と、テレビの方に投げ出していた両足を体の方に引き寄せた。

エリカの両腿にフィットしているウールのスパッツは、エリカの綺麗な足を、より長く見せていた。

涼介はエリカの震える様な吐息で本能に火を点けられていた。

エリカは涼介に胸を晒され、仰け反らされていた。

「……。」

涼介は右手をエリカの敏感な部分に伸ばした。

「ああ……。」

エリカは両腕を涼介の首に回し、潤んだ瞳を涼介に向け、恥ずかしさを吹つ切る為にキスをせがんだ。

エリカは涼介のキスに因つて体中に潤いを増していった。

涼介はキスに因つて滑らかさを増したエリカの体を優しく攻めていた。

二人は理性を解き放とうとしていた。そして情熱のあり方を大胆に堪能しようとしていた。

捲れあがつたニットとブラの直ぐ下で、エリカの胸が美しさを放つていた。

エリカの左の足にはスパツツとパンツが絡まつたままだった。目を閉じているエリカの唇は薄く開き、甘く切ない声を漏らし続けていた。

明るいリビングでの、奔放な時間だった。

小瀬で生意氣を言う時のエリカとは違う純なエリカが、涼介に体を激しく突かれていた。

センターテーブルの上には、一人で作った食事と白ワインが少しずつ残っていた。

テレビの中では“さまあ～ず”が笑っていた。

重なり合う二人の横でエリカの携帯電話が震えていた。

二人は秩序やルールを越えて融合していた。

リビングのブラインドは、外の暑さを物語る様な強い日差しを受け止め切れず、光を部屋の中に孕ませていた。

(・・・・・。)

12時前に目が覚めた涼介は、今朝エリカがドリップしただろうコーヒーをダイニングで飲みながら新聞を開いていた。

エリカは時間の限られた朝を象徴するかの様に、寝室のナイトテーブルやリビングの至る所にアクセサリー やグルーミング道具を置いたまま出掛けっていた。しかし昨夜、食後そのままだったセンター テーブルの上の食器類は綺麗に片付けていた。

エリカは程よく息の詰まらない気遣いの出来る、自立という感覚を上手く表現出来ている女性の特徴を備えていた。例外なく男性はそんな特徴を持つ女性に愛しさを募らせた。当然涼介も、エリカに対する愛情という尊敬の念を日々大きくしていた。

(さてと・・・?・・・。)

涼介はシャワーを浴びようと立ち上がったが、視界に捉えた予期せぬ物に体の動きを止められていた。

涼介はシンクの横で逆さまに重ねられた食器類の傍に、居なくなつた主を探しているかの様に光を屈折させているリングを見つけていた。

(・・・あいつらしいな・・・。)

涼介はリングを手に取り、慌しかつただろう今朝のエリカの姿を

瞳に浮かべていた。

シャワーを浴び終えた涼介は、部屋の空気を入れ替える為に全ての窓を開け放っていた。

青い空は高く吹き抜けていた。ベランダから流れ込む風は日差し程重くなく、秋が直ぐ近く迄着実に来ている事を告げていた。

受信トレイ

11:20	<未開封>	まゆみ	2003/09/28
8:45	<未開封>	エリカ	2003/09/28

(・・・・・)

涼介はコーヒーメーカーに残っていたコーヒーをマグカップに入れた後、何気なくチェックした携帯電話の受信トレイにあった二通のメールを開くかどうか考えていた。

涼介は最後に窓を開けた寝室から出る前に、昨夜自宅に戻つて以来一度も触つていなかつた携帯電話をハンガーに掛かつたワイヤーシャツのポケットから取り出し、金曜の夜からベッドの脇に置きつ放しだつたドキュメントバッグを持って、ダイニングテーブルに置いてあるパソコンの前に座つていた。

ドキュメントバッグの中には、明日の月曜日に行われる会議に必要なレポートを完成させる為の資料が入つていた。

(・・・・・)

涼介は煙草に火を点けた。そして涼介は再度受信トレイの画面を眺めながら、仕事を終らせる前にメールを開封しても、レポートを作成する集中力を維持する自信があるのかどうか、自分に問い合わせていた。

受信メール

おはよー いつまで寝てんの〜っ！！

今BUSの中だよ(^ _) -

「一ヒー作り過ぎちゃったから飲んでね

あのさ、リョウって私の事好き以上でしょ！(>_<)

・・・ん？何？・・・聞こえない！・・・(^ _) (

(^ _) - !

やつぱりね！

エリカ

2003/09/28

8:45

受信メール

昨日は有難う(^ _ ^)

もつと一緒に居たかったね f ^ _ ^ ;

今日は何してるの？

ずっとメールが来ないから、

何だか心配になっちゃった・・・。

ひょっとして仕事中？

まゆみ

2003/09/28

11:20

(^ _ ^)

涼介は携帯電話をテーブルの上に置き、漫然とパソコンの電源を入れた後、立ち上がった。

(^ _ ^)

涼介は開け放たれている窓を閉める為、部屋の中を歩きながら考えていた。

(^ _ ^)

キッチンに戻った涼介は、立ち上げていたパソコンにネットワー

クパスワードを打ち込み、会社のパソコンに保管してあるデータにアクセスした。

涼介は部屋の中を歩きながら、明日の月曜日、新規事業に関する企画会議に提出するレポートの概要をイメージしていた。

(・・・・・)

涼介は会議用資料を液晶に表示する前に、パソコンに届いているだろうメールを確認した。

十通近く受信していた業務メールの中に、恭子からのメールが一通あつた。

(・・・・・)

涼介は恭子からの業務メールを読みながら、エリカとまゆみの事を考えていた。

(ふう・・・・・)

後回しにした他の業務メールを読み終えた涼介は、大きな息を一口吐いた。

涼介の頭の中には、三人の女性の姿が居座っていた。

(・・・仕事だ仕事・・・・・)

涼介は再び全ての業務メールをチェックし始めた。

涼介はマウスを動かしながら、企画開発部の課長代理として軽んずる事の出来ない責任の下、プロジェクトに参画している部下をチームとして結束させる統率力を發揮し、新規オープンするレストランを優良店舗として軌道に乗せる使命を担っている事を自分に言い聞かせていた。

パソコンに届いていたメールは、恭子を含め、全て来春オープンするレストランに関するものだった。

涼介の会社は、2004年3月、小倉北区大手町にイタリアーレストランをオープンする予定だった。

涼介はマーケティングに関する全ての情報の処理や店舗運営に

関する人事、スタッフ教育の段取り、関連業者との折衝、店舗のデザインやメニューの選定、広告のレイアウトや備品のチェック、関連グッズの手配や日程の管理、新店舗をアピールする為のイベントや横浜本社で行うプレゼンテーションの為のソフト作成など、プロジェクトのリーダーとして一つ一つの業務を統括し、確実に処理して行かなければならぬ立場にあった。

涼介は横浜本社復帰を諦めていなかつた。故に涼介はプロジェクトの指揮を執る役割を上層部が自分に与えてくれた事に感謝していた。

涼介はチャンスを与えてくれた上層部が、百万の立派な能書きよりも雄弁な、たつた一つの結果を自分に求めている事を理解していた。そしてその結果に因つて失つてゐる中間管理職としての信頼を取り戻し、横浜本社復帰という3年越しの念願を論理的に自分の手で現実の物にせよという、暗黙の叱咤激励を受けていた事も理解していた。

(・・・・・)

涼介はパソコンに届いていた業務メールを全て読み返した後、考え始めた。

涼介は明日の会議の為にプロジェクトの進行状況を全て掌握し、俯瞰し、検証して置く必要があった。

ダイニングテーブルの上には携帯電話があつた。

明日の会議には支店長も顔を出す予定だつた。

涼介はミスが許されない状況を理解していた。

「まつたく・・・。」

涼介は仕事に集中出来ていないので、恭子からのメールをもう一度読み返す為に、マウスに手を掛けた。

恭子から届いていた一通目のメールには何枚かの写真やグラフのクリップと共に、大手町にレストランをオープンする必然性を説いたロジックが書かれてあつた。一通目には10月10日に行われるプロジェクトの中間報告を兼ねた部署間の親睦会の概要が書かれて

いた。

恭子は一通目の最後に“最近食事に誘つてくれないんですね”と書いていた。二通目の最後には“佐久間課長代理は一次会ですぐ抜けちゃうから、今回は最後まで付き合つて下さい”と書いていた。“ぬるいな・・・”

涼介は仕事を後回しにした自分にそつ一言吐いて携帯電話を手に取つた。そして新たにコーヒーをドリップする為に立ち上がつた。

(・・・・・)

涼介は芳醇なコーヒーを味わいながら、恭子が二通目のメールに記していた、“最後まで付き合つて下さい”的葉に隠されているだらう意図を考えていた。

恭子は涼介の部下だった。涼介が小倉に戻つて来た1年後、恭子は新卒で入社し、6ヶ月間の実務研修に出た後、企画開発部に配属されていた。

恭子は管理職らしい仕事振りや、管理職らしからぬ気さくな態度を時折見せる涼介の人柄に惹かれていた。

恭子は涼介との接触を重ねる内に、自身の魅力で涼介を振り向かせ、独り占めしたい欲望を心に秘める様になつていた。

恭子は世代を超えて持てる女性だった。それは恭子の恋愛を何時も男性を選ぶ側に居させる事となつていた。そしてその事実は、言い寄つて来る男性に対して、“自分はそんなに簡単な女ではない”という戦術を身に付けさせる事に繋がつっていた。

恭子の男性に対する理想と要求は遠慮なく押し上がつていた。涼介はそんな恭子の前に現れた、何処か距離を置いている様な眼差しで見つめて来る最初の男性だった。

恭子は涼介の洗練された行動や落ち着いた物腰に、激しく心を突き動かされていた。

恭子は恋をしていた。その恋はある意味恭子の素直な部分を引き出していた。故に恭子は涼介との関係が今年の2月、ベッドと共に

して以来進展していない事に焦つていた。

(・・・・・。)

涼介は恭子の誘いに乗つてみようかと考えていた。

恭子はその行動に“切れ”のある、頭の良い女性だつた。甘える事や人任せにする事を嫌う性格でもあつた。仕事に対する負けん気が強く、プライドも高かつた。それは隙の無いファッショングやスタイルの良さにも表れていた。

(俺の恋愛は何処に行こうとしてるんだろう・・・。)

涼介はパソコンの画面をおぼろげに捉えながら、女性に対してけじめの無い自分が何時か支払う事になるだろう代償の大きさを考えていた。

(・・・先ずは恭子からか・・・。)

涼介は心でそう呟き、コーヒーを一気に飲み干した。

- - - - - Original Message - - -
To : 岡部恭子
From : 佐久間 涼介
Sent : Sunday, September 28, 2003, 01:45 PM
Subject :

お疲れさん。

資料、的を得たいい内容だつたよ。
簡潔になつてるしね。

一つ、

岡部が店のコンセプト作りの為に氣を使った
ディテイールがあつたじゃん、

何故そこに拘つたのか、

理由を抽象的でいいから言葉にしてみてよ。

出来るだけ数多く。

考え方としては付加価値をつけるイメージだね。
余り難しく考えない様にな。

岡部：りしさが重要だから。

それと、

週末はなるべく付き合つよ。

じゃ、明日。

- - - - - Original Message - - - - -
- - - - - Original Message - - - - -
n d - - - - - E

涼介は続け様にまゆみにメールを送信した。

- - - - - Original Message - - - - -
From : 佐久間 涼介
To : 松岡まゆみ
Sent : Sunday, September 28, 2003, 01:51 PM
Subject :

おはよう。

さつき起きたよ。

昨日は帰りたくなかつたんだよ、実はf^__^;

今週末は小倉に来るんだつたね、
楽しみにしてるよ。

心配しなくていいよ、

結構夢中なんだから(^__^)まゆみに。

今日はさ、これから仕事なんだ。
そんな感じかな。

n d - - - - - Original Message - - - - -
E

(・・・・・)

涼介は考えていた。

涼介はエリカへ送信するメールの文面を、ゆっくりと時間を掛け
てイメージしていた。

- - - - - Original Message - - - - -
From : 佐久間 涼介
To : 芳野エリカ
Sent : Sunday , September 28 , 200
3 , 02 : 06 PM
Subject :

おはよう&お疲れ。

今、オレの事考えてたろ?

エッチなヤツだな^ ^

今朝起こせば良かったのに。

ま、エリカの優しさで良い目覚めだつたし、
コーヒーも美味かつたし。

やるもんだね(^ー^)

そんなにオレを好きにさせてどーすんの?

仕事頑張れ^ ^

- - - - - Original Message - - - - -
End - - - - - E

(・・・暑いな。)

涼介はエアコンのスイッチを入れる為に立ち上がった。

パソコンの画面は送信済みアイテムのページを映し出していた。

ダイニングテーブルの上には会議用資料が散らばっていた。
資料の上には、エリカのリングが置かれてあつた。

18・渦巻く戦術

10月10日金曜日の夜、魚町店が企画したオリジナルデザートフェアを紹介する広告の打ち合わせの為に、涼介は部下の広山と堅町にある広告代理店に居た。

涼介は広告への拘りが人一倍強かつた。あらゆる場所に於いてあらゆる人々に接触する最初のきっかけとなり得る広告は、その会社の資質やセンスが問答無用で問われる部分だと涼介は思っていた。それ故に涼介は、広告代理店から提示された各パーソのレイアウトやキヤツチコピの決定には、スケジュールに捉われる事無く時間を掛けていた。

「スイーツつて言葉をどつかに入れといてね。」

「・・・どの辺りか指示してもらえませんか？」

会議室のテーブルの上には、コンテンツや色合いの違う広告の叩き台が散らばっていた。

「美味しそうな所に入れてよ。」

「・・佐久間さん、何時もそうなんだから。」

担当者は笑っていた。

「だつて、それを俺が決めたら意味無いじゃない。」

「まあ、そうですけど。」

「手を抜いたら次は無いよ。」

「きびしつすね、分かりました。」

「何故そうなつたのか説明して貰うからね、じゃないと納得も手直しも出来ないから。」

「分かりました。」

「じゃ、来週の水曜日、5時にウチで。」

涼介はそう言って広告の打ち合わせを締めた。

広山は涼介の隣で予定表に忙しく何かを記入していた。

会議室の壁に掛かっている時計は、午後7時30分を指そうとしていた。

「課長代理、打ち合わせが終つたら直接店に来いって部長が言つてるらしいんですけど。」

広山は会議室を出てエレベーターに向かう途中、打ち合わせ中に恭子からメールを受信していた事と、その内容を涼介に告げた。

「・・・大手町用の備品リストがさ、全部仕上がりてるかどうかチェックしてから行くぞ。」

涼介は今日中に終らせて置きたい仕事の事を考えていた。

「あつ、すいません、そのリスト、岡部が全部仕上げて部長のサン貰つたって、メールに書いてました。」

「マジか?」

「はい。課長代理に報告しといて下さりつて書いてました。ほんとすいません、忘れる所でした。」

「そう・・・。」

涼介は何かを考えている様な顔で広山に返事をした。

二人はエレベーターの前に立つていて。

二人はすでに部署間の親睦会に30分遅れていた。

「・・・でも一度会社に戻るつ。・・・歩いて行こう。ビツセ15分も変わんないんだから。」

「・・・そうですね。」

「広山、場所知ってるよな?」

エレベーターの扉が開いた。

「はい。」

「堺町ぐらいだろ?」

「そうです。」

「二人は自身の体を着実に車に近づけながら会話を続けていた。
「じゃあ決まりだな。」

「分かりました。」

「広山、帰り運転してくれ。」

「はい。」

「代理、明日から三連休ですね。」

広山は運転席のドアを開ける前にそう言った。

「そうだな。」

「何処か行くんですか?」

「どうして?」

涼介はそう言って助手席のドアを開けた。

「・・・いや、代理は三連休あつたらどんな休日を過ごすんだらう
なあつて、単純に。」

運転席に座つた後、広山はその質問をしながら車のキーをイグニ
ッションに挿した。

「普通だよ。」

涼介はそう言って助手席のドアを閉めた。

「その普通に興味あるんですね。」

広山はエンジンを点火し、ギアをリバースに入れた。

「・・・そう言えば広山、明日から食の祭典じゃないか。」

「そうなんですよ。」

「・・・しょうがないな、持ち回りだしな。」

「結構疲れるんじゃないかなって思つてるんですけど・・本社の人間
余り知らないし、部長と一緒にだし。」

広山は車を駐車場から出す為に、ハンドルを切り返していた。

「・・・・・」

涼介は広山の言葉を拾わずに、広告代理店での打ち合わせ中に受信していた一通のメールを開こうとしていた。

「・・・代理とだつたら楽しかったんでしううけどね、横浜地元みたいなもんでしょうし。」

広山は喋らない涼介にそう言葉を付け足した。

車は旧電車通りを199号線に向かつて走っていた。

「・・・今年もランドマークだつたよな？」

一通のメールを読み終えていた涼介は、ふと思いついた様にそう言つて話の続きを切り出した。

「えつ？・・ええ、TOTTOさんのショールームです。協賛して貢つてますし、TOTTOさん結構メリットあるみたいですよ。それに今年は東京電力も入ります。」

沈黙を続けていた涼介が突然発した問い掛けに、広山は少しひくりしていた。

「・・・だつたな・・・ホテルは・・・？」

「最終日だけインター・コンチです。他は本社近くのビジネスです。」

「そつか・・・インター・コンチ、いいじゃないか・・・。」

「そうですね。」

「・・・北九州空港からだよな？」

「そうです。福岡と熊本の社員は福岡空港からみたいですね。」

「朝一か？」

「いえ、11：30発ですね。」

「まあ、オブザーバーみたいなもんだし、広山、お前本社に仲のいい奴居るんだろ？」

「それが居ないんですよ、みんな移動になっちゃって。」

車は西小倉駅前で赤信号に捕まろうとしていた。

「・・じやあ俺が同期の奴に、いいキャラクラ連れてく様に言つといてやるよ。」

「ありがとうございます。」「

広山は笑顔を見せていました。

「まあ、勝手も知ってるし、旅行みたいなもんだからな。」

「そうですね……でも、部長に付き合わされるんだろうな。」「

「…………。」

涼介は携帯電話をスクロールしながら笑っていた。

「変なスナックとかに行つて歌いまくるのだけは勘弁して欲しいんだけどなあ。」

「……部長、そんなにカラオケ好きだつたか?」

涼介は広山にそう話し掛けながら、携帯電話を耳に当てた。

「好きみたいですよ。」

「お前はどうなんだ?」

「いや、僕も好きですけど……。」

「…………。」

涼介は広山との会話を止め、ブツシュしたダイヤル先の声を待つていた。

車は赤信号から開放されていた。

「…………。」

広山は携帯電話を耳に当てている涼介を見て、反射的に息を殺していた。

「…………。」

涼介は雑踏を眺めながら待っていた。

広山は涼介が作った予期せぬ静寂に、息を殺し続けていた。

「……もしもし、お疲れさん。……大丈夫だよ、普通の飲み会だから。……家に帰つたら電話するよ。……じゃ、また。」

涼介はそう言つた後、携帯電話を左手で握つたまま何かを考えていた。

車は新勝山橋を渡りつとしていた。

広山は初めて見た涼介のプライベートに、言葉を探せないまま運転していた。

(・・・・・)

涼介は安心させる優しい言葉ではなく、聞き分けの無い駄々つ子を黙らせる様な言葉を、懃々留守番電話サービスに放り込んだ自分に“甘さ”を感じていた。

涼介が電話を掛けたのはまゆみだつた。

まゆみは今夜が親睦会だという事を知つていた。

まゆみは10月4日に決まつていていた小倉でのデートを自身の事情によつて前日にキャンセルしてゐた。涼介とのデートを断腸の思いで一度キャンセルした事のあるまゆみは、二度目のキャンセルに耐え難い切なさを感じ、涼介に変な誤解だけはされたくないと痛切に思つてゐた。故にそんなまゆみは10月4日から毎日の様に、今からでも小倉に行きたいという趣旨のメールを夜中でさえ涼介に乱打していた。同時に電話ではキャンセルせざるを得なかつた理由を延々と伝え、謝つてゐた。

まゆみは切実だつた。しかしその切実さは心の何処かで時間を作ろうとしていた涼介には逆効果だつた。

まゆみは何度も涼介に会いたい気持ちを伝えていた。しかし涼介はその都度、仕事の延長線上にある“飲み事”が流動的に入る平日の夜は約束をしても守れないかも知れないと、まゆみを柔らかく宥めていた。

まゆみは涼介に気持ちを受け入れて貰えない事に焦つてゐた。その焦りは明日に迫つた涼介とのデートを前にして、まゆみから冷静さを奪う事となつてゐた。

まゆみは昨夜から今夜にかけて、涼介の携帯電話に束縛めいた言葉を何度もメールで送信してゐた。

(・・・・・)

涼介は打ち合わせ中に届いたまゆみからのメールを再度開いていた。

まゆみはメールの文中に一度、“羽目を外さないでね”と書いていた。最後には“何時になつてもいいから電話して”と書いてい

た。

車は魚町交差点で信号待ちをしていた。

(・・・・・)

魚町交差点で信号待ちをしている事に気付いた涼介は、メール画面から視線を外し、広山の横顔のずっと先で輝きを放つている場所を見つめた。

涼介の瞳の先には、エリカが働く美容室があつた。

「・・・彼女ですか！？」

広山は涼介からじつと見つめられないと勘違いし、沈黙を破つた。

「・・・そうだね。」

涼介は視線をメール画面に戻し、そう答えた。

「大変ですね・・・。」

広山は初めて見た涼介のプライベートに驚き、困惑していた。そして状況をどう取り繕つていいのか分からぬまま咄嗟にそう喋つていた。

「・・・そうだね。」

涼介は広山の顔に一度も焦点を合わさないまま、打ち合わせ中に届いたもう一通のメールを再度画面に映し出した。

受信メール

お疲れ　　！！元氣い～！？（^__^）

今から合コンなんだー

ちょっと飲んで来るね～～～！！

チユツ（^__^）・

エリカ 2003/10/10 19:05

(・・・・・)

エリカのメールを読み返している涼介の瞳は穏やかだった。

「・・・ひょっとして・・違う・・女性ですか？」

広山は涼介の左手にある携帯電話を覗き込みながらそう言った。

「・・・ そうだね・・・。」

涼介は広山の視線を気にする事無くメールを作り始めていた。

新規メール作成宛先エリカ

お疲れ。

合コン、いいねえ。

ナンパしないように(^ー^)

つーか、オレも今日は飲み会なんだ。

堺町あたりウロウロしてるかもだよ。

じゃ(^ー^)

サブメニュー編集戻る19:45

「・・代理・・やっぱ凄いですね。・・・それじゃあ代理の中で岡部は何番目なんですか・・・?」

広山は驚いている表情に好奇心を携え、何気なくそう聞いた。

「岡部?」

涼介は広山の顔を鋭く見た。

「! ? ・代理・・岡部と付き合つてるん・・ですよね・・・?」

広山は涼介の表情に少し焦つていた。そして余計な事を口走ったかもしれない不安に駆られていた。

「会社じやそんな風になつてんのか?」

涼介はメール画面の送信終了表示を確認し、携帯電話をワイシャツのポケットに仕舞いながらそう聞いた。

「・・ええ・・皆・・そつ思つてます・・・。」

「なるほど・・・。」

涼介は恭子に対する認識の甘さを思い知らされていた。

「・・・付き合つてるんじゃ・・ないんですか?」

喋る気配の無くなつた涼介に広山は恐る恐るそう切り出した。

「広山、有難う。・・でも、まあ、いいじゃないか、ノーコメント

つて事にしといてよ。」「

「何かありますね。」

「いや、別に普通なんだけど、まあいいじゃない。」

涼介は親睦会の前に広山と一人だけの時間を与えてくれた、目に見えない“何か”に感謝していた。

涼介は自分を見つめ直す機会を与えてくれた広山にも感謝していた。広山が涼介の一拳手一投足に興味を示さず、また示していたとしても気を使って黙していたならば、今夜恭子が考えているだろうしたたかな戦術に嵌っていたかもしれないなかつた。

涼介は気付かぬ内に過信していた。

十一日前、自宅のダイニングにあるパソコンから恭子にメールを送信した時、涼介は恭子の誘いに乗つてもいいのではないかとねるく考えていた。それは関係のあつた女性と揉め事を起こす程恋愛が下手ではないとする考えに起因していた。故に今夜、恭子に誘われるまま一夜を過ごしていったならば、涼介は知らず知らずの間に自惚れていた事を最悪の形で思い知られ、取り返しのつかない耐え難い問題を抱えていた可能性があった。

涼介は男女の関係以前に存在する、蠢く思考の連鎖の中で成り立つていて、目には映らない人の心の存在を忘れていた。欲しい物を手に入れる為には手段を選ばない人や、周到な策略でターゲットを囮い込む人も居るという、醜くもあり、至極当たり前でもある人の繋がりを忘れていた。更には涼介自身が、そのどちらも日常で駆使している事実すら忘れていた。

(・・・・・)

涼介は恭子に対する意志を明確にした。同時に、自分は持てる男なのだと勘違いし、行動に誠実さや謙虚さを欠いていた事を振り返つていた。

二人を乗せた車は会社のあるビルの地下駐車場に入ろうとしていた。

車の中は、再び静寂が訪れていた。

(・・・誰だろ？・・・)

涼介は静寂を嫌う様に始まつた携帯電話の振動を感じていた。
広山は黙つたまま運転を続けていた。

(まゆみかな・・・・。)

涼介は親睦会に合流する前に、もう一度まゆみに電話をして置くべきかどうかを考えながら受信メールを開いた。

受信メール

ナンパされないよーに！

エリカ 2003/10/10 19:50

(まつたく・・・・。)

涼介の顔は緩んでいた。

広山は涼介の様子に無関心を装つていた。

「お疲れ様です！！」

「お疲れさん！」

「！・・・おう、お疲れ！」

広山が親睦会の扉を開けて発した挨拶は、上司が座る席へと向かう一人にこだまとなつて跳ね返つて来ていた。

「お疲れ様です。」

涼介は言った。

「おーっ、お疲れさん。やつと來たか。」

「すいません、遅れました。」

「・・・どうも、お疲れ様です。」

広山は涼介の後に続いた。

「おお、お疲れさん。」

一人は支店長に挨拶をした後、支店長を囲む様に座っている部長や他部署の上司に挨拶を始めていた。

「課長代理！こっちこっち！」

涼介の背中に一人の女性社員の声が刺さった。

「・・・・・。」

涼介はその声に振り向いて小さく手を上げた。

親睦会には30人近くの社員が集まっていた。それは現場を除いた、小倉支店に勤務する約八割に相当していた。

「ほぼ全員来てんじゃないですか？」

広山は用意されていた席に向かう途中、涼介に耳打ちした。

「みたいだな。」

涼介はそう言いながら腕時計を見た。

一人は1時間10分程遅れて親睦会に合流していた。

「お疲れさん。」

「お疲れ様です！」

涼介の一言に、複数の女性が挨拶をした。

「・・ありがとうございます。」

涼介は席を用意していた女性社員達に礼を言いながら、珍しく座敷ではない雰囲気のあるダイニングに、上司に対する女性社員の頑張りを見た様な気がしていた。

涼介の両隣には、部内に五人在籍している女性社員の内の三人が座っていた。

二つ隣の席には恭子が居た。

「課長代理、どうぞ。」

隣に座っている女性社員が満面の笑みを浮かべて涼介にグラスを渡し、ビールを注ごうとしていた。

「あーあー、佐々木は人気あんなあ！」

「代理持てますねえ、相変わらず・・いいよなあ、まったく。」

少し離れた席に座る同期と後輩の声が、ビールで満たされ行くグラスを持つ涼介の耳に届いて来ていた。

「・・・・・。」

涼介はその二人に対してグラスを持ち上げ、お互いを良く知る友だからこそ成り立つそんな“挨拶”に、心地良く乾杯のポーズを取つた。

「本当ですよー！」

同じテーブルの向かい側に座っていた涼介の部下が、勢い良く身を乗り出してそう叫んだ。

「あのさあ、皆言つとくけどさあ、課長代理は駄目だぞ・・・だつて今日も待たせてんだから・・・3人ぐらい・・・ねえ、課長代理！少し酔いが回つているだろ？ その部下は、そう言つて涼介の方に身を投げ出した。

「そ、うなんだよ、大変なんだよ、・・・なあ、広山。」

涼介は正面に座つた広山にそんな“振り”とビールを差し出した。
「えつ！？ あつ、有り難うござります・・・ええ、・・・まあ、・・・代理、勘弁して下さいよ、ボケは苦手なんですから。」

広山は涼介にビールを注がれながら、そう言つた。

「ははつ、広山、ここは乗つて突つ込むんだよ。」

涼介は優しい眼差しでそう言つた後、広山に一人だけの乾杯を促した。

「お疲れさん。」

「お疲れです。」

一人が鳴らしたグラスは、上司と部下の関係を超えた響きを放つていた。

親睦会は涼介と広山の合流によつて更に雰囲気が良くなつていた。それは一人が会社に貢献している事を誰もが認めている証でもあつた。

「皆聞いてくれ！・・・おい、皆聞いてるか！ 改めて乾杯するぞっ

！・・・佐々木！ 頭とれ！」

全体を見渡せる位置に座っていた部長が徐に立ち上がり、その全体に響き渡る野太い声でそう言った。

「・・・それじゃあ・・・。」

涼介は部長の言葉にゆっくりと立ち上がり、その全会場には冷やかしの歓声と拍手が溢れていた。

「代理、そう言えばこの前、タカハシフーズの女の子が合コンしようとつて言つてましたよ。」

広山は少し酔っていた。

親睦会は整然から雑然へと変わっていた。

「おいおい広山、俺をダシに使うなよ、俺じゃないだろ？ 最近顔出してないんだから、タカハシさんとはさ。」

広山は涼介の話を聞きながら焼酎のお湯割りを一気に空けた。

「いや、代理ですよ、間違いないっすよ。」

「合コンですか！！」

広山の涼介に対する羨望は、涼介の両隣に座っている女子社員の素早い反応によつて羨望のまま区切られた。

「合コンするんですか？」

恭子も反応していた。そして会話に参加をする意志を、落ち着いた表情と共に涼介に見せた。

恭子の一言が大きなかかけとなつていた。涼介の周りに居る女子社員達は、普段話せない恋の話を、ここぞとばかりに涼介に集中させていた。

涼介は田の前で飛び交い始めた女子社員達の惚氣話や、彼氏に対する愚痴に少し辟易としていたが、涼介は相槌を打ち、宥め、誉めていた。

恭子はその輪の中に加わつてはいたが、笑いながら話を聞いているの方があまかつた。

(ここに居る皆は、俺が岡部と付き合つてゐると思つてんだよな。)

涼介は時折そんな事を考えながら、作り笑いを見せ続けている事

に切なさを感じていた。

(しかし岡部は全然そんな素振りみせないな・・・皆も氣を使ってる様だし・・・。)

涼介はトイレに立つタイミングを計っていた。

「だよねえ！」

「ねつ、課長代理！そうですよねつ！」

「・・・かもしんなないな・・・。」

涼介は話の一つ一つに穏やかな声で答えるながら、何時まで経つても終りそうに無い、蒸し暑い梅雨時の湿気の様に纏わり付く女子社員達の惣氣話や愚痴にうんざりしていた。

(ふーっ・・・)

涼介はやつと得られた開放感に息を一つ吐いて、細い通路をレストルームまで歩いていた。

(岡部は何時もと変わらないな・・・。)

涼介はそんな事を考えながらドアを開け、レストルームの中で携帯電話の受信メール一覧を開いた。

涼介は親睦会の最中に携帯電話の振動を左の腿に何度も感じていた。

(岡部?・・・。)

涼介は思わず声を出しそうになっていた。

3通のメールを受信していた。メールは、まゆみ、恭子、エリカの順で届いていた。

涼介は二つ隣の席にずっと座っていた恭子からのメールに、ある種醒めた興味をそそられていた。

(・・・・・。)

涼介は恭子からのメールではなく、最初にまゆみのメールを開いた。

受信メール

たつきばごめん、会議中だったの（^__^）；
留守T E Lが入ってるなんてびっくりした！

：涼介に会いたい…

私たち付き合ってるんだよね？
だつたら束縛してもいいよね？
そんな気持ちなの…。

私の事好き？（^__^）

まゆみ 2003/10/10 20:22

まゆみは涼介との恋愛に付き纏つて離れない、嫌な予感を払拭し
様とする感情をそのままメールに乗せていた。

送信メール

お疲れ。

今夜は遅くなりそうだけど心配しないで。

好きだよ（^__^）

まゆみ 2003/10/10 21:05

涼介はまゆみからのメールを読み終えた後、間髪を入れずに感情
の伴わないゆるい情熱をまゆみへ送信した。

受信メール

お疲れ様です。

あんまり飲んでないようですね

何かあったんですか？

課長代理の事だから心配してないですけど（^__^）

二次会、途中でまた抜けるんですよね？

みんなにバレないように私も抜けて

静かな所で一緒に飲みたい かな（^__^）

課長代理の行く所に連れてつて下さい（^ー^）

岡部恭子 2003/10/10 20:45

（・・・広山のお陰だな・・・。）

涼介は次に開いた恭子からのメールを読み終えた後、広告代理店から会社へ戻る車の中で、広山とプライベートな話をする機会をくれた“何か”と、広山にもう一度感謝していた。

恭子は自身が望む最高の結末を迎える為に、ベテラン俳優に演技指導する脚本家を兼ねた新人監督の様に、自らが書いたシナリオの出来の良さを涼介に分かつて貰おうとしていた。

（・・・やっぱ苦手だな、こういう飲み会は・・・。）

涼介の冷静な瞳はレストルームの鏡に映る自分を見つめていた。
（・・・・・。）

涼介は滅入る気持ちを払拭しようと、最後に残して置いたエリカからのメールを開いた。

「佐々木 っ！佐々木は何処だーっ！」

涼介の耳に部長の声が届いた。

（・・・何だろっ・・・。）

涼介はその声に携帯電話を閉じた。

店内では全員が立ち上がって一次会を締め様としていた。

「課長代理来ましたっ！」

男性社員の誰かがそう叫んだ。

「よーし、佐々木、最後締めてくれ！」

部長の声は野太かつた。

「はい、分かりました。」

涼介は笑顔を見せながら、親睦会を見渡せる場所に歩いた。

（・・・・・。）

恭子は何時涼介と視線が絡み合つてもいい様に、ずっと見つめて

いた。

親睦会を終えた一団は、決まり事の無い小さな集団を路上で幾つか形成しながら分散しようとしていた。

(・・・・・)

涼介は歩きながらメールを作っていた。

日頃プライベートな部分を見せない涼介の人目を憚らないその堂々とした行為は、廻りと一緒に歩く仲間を驚かし、無口にさせていた。

「代理、彼女ですか？」

酔っている広山の声はよく通った。

「そうだよ。」

涼介は後ろから近づいて来た広山にそう答えた。

「いいなあ、代理は！」

広山の声は大きく響いた。

「・・・・・。」

涼介は広山に笑顔を見せながら作り終えたメールを一度保存し、エリカから届いていたメールをもう一度開いた。

受信メール

リョウ、今どこで飲んでる??まだ飲むの?
エリはカラオケ行こうって誘われてるんだけど、

なんだかつまんない!!

みんなリョウよりいいオトコなのにね(^ _ ^)

リョウのせいだからね 責任とつて!

この前行つたBARで待ってるから、

Hリに会いに来なさい (^ _ -) -

エリカ 2003/10/10 20:53

「何かハートマークついてますよっ！」

広山は涼介の携帯画面を覗き込んでいた。

「だな・・・。」

涼介は広山の直ぐ後ろを恭子が歩いている事を知っていた。その上で涼介は広山の行動を受け入れていた。

「・・・・・。」

涼介は保存していたメールを呼び出し、送信キーを押した。

送信メール

お疲れ。

会いに来い！？

了解、助けに行くよ。

オレもエリに会いたかつたんだ。

じゃ後で。

エリカ

2003/10/10

21:20

19・・・優越の崩壊

19・優越の崩壊

涼介はステージに上がり同僚や部下の前で歌つていた。

涼介がカラオケボックスで歌うのは小倉支店に配属された年以來の事だつた。

カラオケボックスの中は、涼介が歌う姿を久し振りに見た部下達のピーキーな反応で盛り上がつていた。そしてその盛り上がりは選曲リモコンを叩く部下達を更にエゴイステイックにさせていた。

「どうも。」

歌い終わった後の涼介の一言はカラオケボックスの中に歓声と拍手を響かせた。

涼介の“場”の雰囲気を察知する嗅覚は、ある意味役者だつた。

「・・・・・。」

ステージから降りた涼介は恭子の隣に座つた。

「課長代理、歌上手いんですね。」

恭子は涼介の歌を初めて聞いていた。

「そう?」

涼介はそう言つて水割りを口に当てた。

「昔、結構歌つてたんでしょ?」

恭子は、底を見せない涼介の器に興味を募らせていた。

「そうだな、ナンパしちゃあカラオケ行つてたからね。」「そなんだ。」

「でもつて強引に口説いてホテルだよ。」

涼介が上げたカラオケボックスの中のボルテージは、二人に顔を寄せて話せる程になつていた。

「・・・遊んでたんですね。」

恭子は涼介が歌い終わつた後、自然に自分の隣に座つてくれた事を素直に喜んでいた。

二人はリラックスした表情で会話をしていた。

「岡部、大手町用の備品リスト、有難う。」

「えっ！・・・いえ、とんでもないです。」

「助かつたよ。」

「そんなん・・・。」

恭子は照れていた。

「広山にも岡部ぐらいの“切れ”があれば言つ事無しなんだけどな。」

涼介はマイクを片手にはしゃぐ広山に慈愛の微笑を向けていた。

「・・・課長代理はもつと部下に仕事を押し付けてもいいと思ひます。」

「そりかな？」

「だつて・・・頑張り過ぎだもん。」

「・・・そう？」「

「だつて・・・でなきや 今日だつて親睦会、まだ遅れて来てたと思うし・・・。」

恭子の瞳は、上司と部下の関係を超えた親密さを涼介に放つていた。

「・・・そりだな。」

涼介の瞳は冷静を放っていた。

恭子と涼介以外の瞳は、ネクタイを緩め、ステージで歌っている

広山を見ていた。

「・・・岡部、歌わないのか？」

「えーっ、私はいいです。」

「そう・・・じゃ、俺は行くから。」

「えつ！」

涼介を独り占めしている事に優越を感じ、この先も独り占め出来ると確信し始めていた恭子は、穏やかな表情のまま何の脈略もなくそう言つた涼介に驚いた。

一週間前からずっとこの日の事を強かに考えていた恭子は、二人の時間を作れるだろう一ヶ月の数十分間を、涼介の心を完全に自分へ向かせる為に必要な、非常に大切な空間として捉えていた。

（代理は私のメール見てないのかな・・・。）

恭子は親睦会の最中に涼介へ送信したメールの事を考えていた。

涼介が恭子に見せた退散の意思表示は、限られた時間の中で涼介との間に良い雰囲気を作り出し、その雰囲気を壊す事無く待ち合わせ場所を決め、何時もの様に涼介に一ヶ月を早々と抜け出して貰つた後、優雅に合流する策略を実行しようとしていた恭子にとって、文字通り想定外だった。

「岡部、今夜一緒に飲みに行けないんだ。」

黙つている恭子に涼介はそう付け加えた。

「・・・。」

恭子は涼介のその一言で、親睦会中に送信したメールを涼介が見た上で、涼介が退散の意思を突き付けている事実を理解した。

「・・・。」

涼介は恭子が口にする言葉を待つていた。

「またあ、どうしたんですか？いきなり。」

恭子は局面を開ける為に、焦燥と混乱をࢤ（おぐび）にも出さず咄嗟に明るく振舞つた。

「約束があるんだ。」

涼介は一次会に入る前の路上で、エリカにメールを送信した時の

気持ちを思い起こしながらそう言った。

「約束？」

恭子はこのままの状況で時間が経過する程、自分が救われない女になってしまふかもしぬない事を脳裏に過ぎやらせた。

「そりなんだ。」

涼介の顔は穏やかなままだった。

「・・・約束つて・・女性ですか？」

恭子は辛うじて笑顔を作り、状況を覆す為の時間を稼ごうと画策した。

「・・・・・。」

涼介は黙つたまま頷いた。

「・・・その女性つて・・・さつき課長代理がメールしてた人ですか？」

恭子は無意識に発した“女性”という自分の言葉で、路上でメールを送信する涼介の姿を思い出していた。

「・・・・・。」

涼介はもう一度黙つたまま頷いた。

「・・・・・。」

恭子は自分の顔から笑顔が消えている事よりも、涼介が二次会に入る前に路上でメールをしていた相手にどうすれば勝てるのか、そして自分のどんな魅力をぶつければ涼介の気持ちを逡巡させる事が出来るのかを考えていた。

恭子は自身のプライドも守らなければならなかつた。

「・・・でもそ・・」

「岡部、俺達は何も始まつてないし、始まる事もないんだ。」

涼介は恭子の言葉を止めた。

「・・・・・。」

恭子はじつと涼介を見つめていた。

喧騒の続くカラオケボックスの中は、愛を語り合つてゐる様に見える二人に無関心を装つていた。その事実は、ある意味恭子の策略

通りだつた。

「・・・・・。」

恭子は開き直りに限りなく近い感情を心に溜めていた。

「じゃ、俺は行くから。」

涼介はそう言つて立ち上がろうとした。

「あのセックスは何だつたんですか?」

恭子は冷めた声で涼介の動きを止めた。

二人の間には歌声が乱舞していた。

「何も始まつてないし、始まる事のない人に、佐々木涼介って言つ

人間はそんな事が出来るんですか?」

恭子は体を更に涼介に寄せてそう言つた。

「・・・・・。」

涼介は恭子を間近で見つめさせられていた。

「課長代理は始まる事の無い人にも、その気にさせる様な優しさを見せられるんですか?」

恭子は言葉でも詰め寄つた。

恭子の正直な感情には、凛とせざるを得ない哀しさと、振り向かせるべき男性をずっと振り向かせて来た意地と、涼介が今から会いに行こうとしている女性に、自分が負けている訳がないと思うプライドが詰まつっていた。

恭子を見つめる涼介の瞳は、恭子から“あからさま”にされた自身のするさとぬるさを素直に認めていた。

恭子は同僚達の視線を感じていた。しかし“眼差し”で涼介を責める事は止めなかつた。

「岡部・・・ごめんな。」

「課長代・・・」

涼介は喋ろうとする恭子の左肩を押さえた。

「・・岡部が俺に望んでいる関係は、こんな形からは生まれないと思つんだ。それは岡部も気付いてる筈だよ。」

涼介は恭子に優しく語り掛けた。

「・・・恋する事に形つてあるんですか？」

「・・・形は結果論であつて欲しいな。」

「だつたら私との・・・」

「岡部つ！何か歌えよ！――」

一人の男子社員の声が、突然一人の会話に割り込んで來た。

「！・・・えーっ・・・。」

優越という崩れ去る寸前の離壇の上で、涼介との関係を仕切り直しする機会を探しつつも途方に暮れ掛けていた恭子は、その声に因つて自分が救われ様としている事を直感し、振り向いて照れ笑いを浮かべた。

「・・・・・。」

涼介はゆっくりと立ち上がりながら、その声が引き分けを告げた審判の声に思えていた。

恭子は声を掛けて來た男性社員と何か喋つていた。

涼介は広山の傍に寄り、帰る事を耳打ちし、二次会の費用を渡そうとしていた。

「じゃ、俺は行くから。」

涼介は恭子の元に再び近寄り、そう言つて笑顔を置いた。

「課長代理・・・。」

恭子は“場”的空氣を無視してでも涼介を引き止めたいとする気持ちを抑え、ドアへ向かつて歩いて行く、涼介を見つめる瞳に愛しさを込めた。

恭子は意識的に自身の性質たちをカラオケボックスの中に振舞つていた。そしてその姿は同僚達に、一人の関係が前向きに進んでいる事を連想させていた。

20・魂の魅力

(・・・・・)

涼介はネオンの中を少し早足で歩きながら、通りを吹き抜ける冷たい夜風に頬を叩かれていた。

「しようがない。」

涼介はカラオケボックスの中で恭子に見せた自分のぬるさを棚に上げた。そしてポケットの中の携帯電話を取り出し、恭子とのやり取りの最中に受信していたメールを開いた。

受信メール

もしも　　し、今ドコ??

応答せよ!

早く来なさい!!

エリカ 2003/10/10 21:35

(やつぱりか・・・)

涼介は納得と共に、メールの返信画面ではなく着信履歴に残るエリカを開いた。

(・・・・・)

涼介は発信ボタンを押した後、左耳でエリカの声を待つた。

「・・・もしもし・・・お疲れ。・・・ごめん、悪かつたよ。・・・今向かってるから。・・・そうだね、後5分位だから・・・よろしく。」

涼介はエリカに早く会いたいとする正直な足取りのまま、躍りそ
うになる声を理性で押さえ付けていた。

連休を控えた金曜日、夜の10時を過ぎた小倉の田抜きは店を変
えて楽しもうとする人達で溢れていた。

堺町公園の脇に並ぶ露天では、黒いベロアの上に並ぶイミテーシ
ョンが通りのアクセントとなっていた。小文字通りには当たり前の
様にタクシーが二重駐車をしていた。

(・・・・・)

涼介は逸る気持ちを押さえながら信号待ちをする人波に紛れてい
た。

横断歩道を渡り、1分も歩けばエリカの待つBARがあつた。

(長えな・・・・)

涼介は既に一次会での出来事を葬っていた。

(・・・エリカなのかな・・・・)

涼介は横断歩道を渡りながら、10年前のあの日、マキと待ち合
わせをした“司”まで歩いた数分間を思い出していた。そして涼介
は愛し続ける事も守る事も出来ず、決して忘れる事など出来ない女
性となつたマキとエリカを、心の中で重ね合わせていた。

(・！・・・・)

その振動は涼介の心に無遠慮に届いた。

涼介は、エリカの待つBARがある通りへ出る最後の角を曲がる
うとしていた

(誰だろう・・・・)

エリカでは無い事を涼介は直感していた。

(・・・・・)

涼介は恭子の顔を思い浮かべながら、Yシャツの胸ポケットに在る携帯電話に触る事無く歩き続けていた。

涼介の目の前にはエリカの居るBARのネオンが迫っていた。

涼介は足取りを変えず歩いていた。

メールの送り主には、今の涼介を立ち止まらせる程の威力も魅力もなかつた。

(・・・・・)

涼介は枕木を敷き詰めた狭い階段を昇り、飾り気の無い、朽ちた様な無垢板を縦に並べた質感のある扉を開けた。

店内に繋がるコンクリートが打ち放されたホールには、晚秋を先取るライティングが施されていた。

(・・・・・)

涼介はカウンターが見渡せる場所までゆっくり歩いた。

「L字に象られたカウンターには、十人程の人影があつた。

(・・・・・)

涼介は立ち止まり、カウンターの人影をゆっくり目で追つた。

「待ち合わせですか？」

貴祿のある、支配人という言葉を連想させる身形の男性が、涼介の後ろから声を掛けて來た。

「ええ。」

涼介は初めて見るスタッフにそう言つて、カウンターに座つている筈のエリカを探した。

(・・・・・)

涼介は闇を演出する光の中で静かに揺れる人影から、見覚えのある背中に焦点を合わせ事が出来なかつた。

別のスタッフが涼介の席を用意していた。

(しようがない、メールを打とう。)

涼介はそう考へながら用意された席に向かおうとした時、L字力
ウンターの中央に座っていた女性の横顔を一瞬瞳に映した。

(・・・・・)

涼介は見惚れていた。

「すいません。」

微笑みを取り戻した涼介は、ドレッサーな後ろ姿を持つ女性から
視線を外し、後ろに立っていた支配人らしきスタッフにそう言つて
席への案内を断つた。

「お疲れ。」

涼介は上品な黒のスレンダードレスを纏つた女性の肩先にそつと
近づき、そう声を掛けた。

「・・・遅い。」

「・・・ごめんな。」

「・・・ま、いつか。」

「エリカは柔らかい瞳で涼介を見上げていた。

「隣に座つてもいいかな？」

エリカのドレッサーな一面に初めて触れていた涼介は、降参して
いる気持ちを悟られまいと気障に振舞つた。

「許そう。」

エリカは笑つた。

「・・・気付かなかつたよ。」

「暗すぎて？」

「・・・エリ。」

「何？」

「美人だな。」

「・・・遅い。」

「・・・そうだな、悪かつたよ。」

「違う、気付くのが。」

「・・・なるほど、それも悪かつたよ。」

二人の間にある空気は滑らかに融合していた。

エリカは笑い、涼介は根こそぎエリカに攫われようとしている自分の心を笑顔で傍観していた。

「それ、何？」

涼介はエリカの前で静かに佇む、色もグラスもシンプルなカクテルの名前を聞いた。

「ダイキリ。」

「・・やるじやん。」

涼介はエリカに攫われた心と引き換えに、何処かにあるだろう別の世界の誰から、自分の居場所を教えられた様な感覚を貰つていた。

エリカはエレガントだった。ブーツカットやツインテール、タイトなカットソーやキャミソールをセンス良く着こなしている時とは違った気品や聰明さを漂わせていた。

「ね、乾杯しよ。」

エリカは自分のグラスを持ち上げた。

涼介の前にはラムバックが運ばれて来ていた。

「OK、・・じゃ、今夜のエッチに。」

涼介は自分のグラスを持つてそう言った。

「ははっ、・・了解。」

エリカは照れ笑いを浮かべていた。

「じゃ、乾杯。」

二人のグラスは、他の誰にも邪魔の出来ない距離を更に縮め、透き通る音を一度立てた。

エリカは涼介が見せる仕草や選ぶ言葉に居心地の良さと安らぎを感じ、同年代では無理かもしれない涼介との距離感を気に入つていた。

エリカは男性を選択する側に居る女性だった。それは理想の恋愛

を追う事を許される資質と魅力を持つている事を意味していた。故にエリカは涼介と知り合つてからも、新たな出会いやセックスを幾つか重ねていた。しかしエリカはその度に涼介の洗練された立ち居振舞いや、自分の“間”を決して崩さない涼介の落ち着きに魅力を感じている自分を思い出していた。

エリカは今夜途中で抜け出した合コンでも、とろける様な優しさを都会的に振舞う格好良い男性達に出会っていた。しかしエリカはその場面場面で、涼介の持つウイットやクールさに思いを馳せている自分が居る事に気付いていた。

「何か今日のリョウ、格好良いね。」

「おっ、どうした？ 急に。・・・それは愛の告白ってやつか？・・・それとも何か欲しい物でもあんのか？」

「んー・・・どっちでしょ？・・・」

エリカは肩を竦めた。

「・・・いいよ、言つてみ。」

「あらつ！」

「・・・で？」

「じゃあねえ・・・エルメスのガムケース。」

「・・・了解。」

涼介は穏やかな笑顔でエリカを見つめていた。

午後11時を過ぎた店内は更に照明が落とされていた。

二人の前にはアルコールランプの灯が揺れていた。

壁際にさり気なく置かれたピアノは、誰の手も借りずに綺麗なメロディを奏でていた。

「・・何か、良いよね、こいつの。こんな時間が毎日の嫌な出来事忘れさせてくれるよね。」

「相手が俺でも？」

「もちろん。」

エリカは涼介を愛している事実を実感していた。

「・・ねつ。」

エリカは涼介を見つめた。

「何?」

「さつきのは愛の告白だつたんだよ。」

「・・・じゃあ、乾杯。」

涼介はマキと別れて以来、未だ見ぬ女性とエリカが重なりつつある現実を実感していた。

B A Rを出た二人は細い路地を歩いていた。

路地の両側に雑然と立ち並んでいる店の看板や、ビルの壁や窓に張り付いたネオン管は、多彩な光を二人の体に降り注いでいた。

「なあ、エリ、ゼノンの逆説つて知つてる?」

涼介はエリカに切り出した。

「何? それ。」

エリカは涼介の右腕を捕まえていた。

「・・昔、イデアを追求するストア派の哲学者がいてね。」

「? ? ? ? ? ちゃんと日本語で喋つてよ。」

エリカは涼介を見上げた。

「ははっ、了解。・・・じゃあさ、エリが俺にキスしたいと思つたとするさ、でもキスをするには、先ず俺の唇までの距離を半分縮めなきゃいけないだろ?」

「うん!」

エリカはそう言って、涼介の右腕に抱きついた。

「いいかい、今一人の唇は50センチから25センチに近づいた訳だよ、な?」

涼介はエリカの瞳を優しく見つめていた。

「うん! ! !」

エリカはそう言った後、今度は左の頬を涼介の肩に預けた。

「でもさ、エリが俺にキスをする為にはさ、今ある25センチの距離を取り敢えずまた半分縮めなきゃだろ?」

「うんうん！」

「つて事は、今二人の脣の距離は12センチぐらいになつてる訳だよ。」

涼介はそう言って立ち止まり、エリカに向き合つ事を誘つた。

「・・・・・。」

エリカは名残惜しそうな瞳で涼介を見つめたまま、涼介の体から離れた。

「さすがにそれ位の距離になるとき、エリがキスしたがつてるって俺も気付く訳さ。」

一人は路地の中央で向き合つていた。

涼介は笑顔で頷いたエリカを優しく見つめていた。

エリカは茶目つ気たつぶりに踵を二、三度浮かせ、キスをせがむ仕草を見せ始めていた。

「・・でもエリが俺の唇を奪うにはさ、今ある距離をまた半分縮める事が先決じゃない。」

涼介はそう言いながらエリカの肩に両手を掛けた。

「・・・・・。」

エリカはキスを待つていた。

「・・そうなるとさあ、キスまでの距離には必ず半分の地点が永遠に存在してる訳だから、どんなにエリが俺の唇を奪いたくつても、ゼノンさんの許可が下りないんだよな。」

涼介はエリカを優しく見つめていた。

エリカは微笑を浮かべ、待つていた。

「・・・ま、そういう事かな。」

涼介は割と大袈裟にエリカの両肩に掛けた手を離し、優しい笑顔のまま、さらりと踵を返して歩き始めた。

「えーっ、キスしてくんないのー！」

エリカはその場で少し拗ねた顔と声を涼介の背中に投げた。涼介はゆっくりと歩いていた。

「・・・ねえつてば・・・・。」

エリカは拗ねた声に甘さを混ぜ、もう一度涼介の背中に投げた。

「…………」

涼介は立ち止まり、振り向いた。

「…………」

エリカは拗ねた顔のまま、振り向いた涼介の許へ歩き始めた。

「…………」

涼介は、愛を捧げる女性を悟った時の様な瞳でエリカを見つめ、エリカを待っていた。

音の無い時間が路上の一人に流れていた。

涼介の胸に飛び込んだエリカの唇と、エリカを受け止めた涼介の唇は、愛情を深くお互いに伝え合っていた。

エリカの両腕は涼介の首に絡まり、涼介はエリカを強く抱きしめていた。

二人は心に仕舞い切れない大切な想いを、何度も何度も重ねる唇で伝え合っていた。

「…………な、でもキスは出来るんだよ。」

「…………当たり前じやん…………」

エリカは潤んだ瞳を涼介に見られまいと小さく顎を引き、声を少し震わせながら照れていた。

二人はお互いの魂に情熱を注ぎ合い、魅力を放ち合い、心を美しく輝かせていた。

路地の両側から降り注ぐネオンの光は、二人を引き立てる役に徹していた。

「半分の地点の人・・名前何てつたつけ・・・・・」

「ゼノンだよ。」

二人は向き合つたまま、お互いの体を優しく抱き合っていた。

「…………そのゼノンさんって人、持てるでしょ？」

エリカは恥らう心を隠す様に、涼介を見上げていた。

「・・・・・」

涼介は微笑みながらエリカを包んでいた腕をゆっくりと解き、右肘をエリカの前にそっと差し出して、腕を組んで下さいといふ素振りを見せた。

「・・・・・」

エリカは涼介のその仕草に微笑で答えた後、態と得意顔を作り、涼介の腕に全身で巻き付いた。

夜空の低い位置にはオレンジ色の月が出ていた。

真っ直ぐ延びる路地の遠く先には、リーガロイヤルホテル小倉の明かりが見えていた。

二人は路上を彩る景色に抱かれながら、体を寄せて歩き始めた。

夜風は凪いでいた。

一人の背中には、言葉ではなく心で会話を交わせる男女の暖かさが溢れていた。

虚飾の無い愛情をぶつけ合い、情熱を糧に主役を務めた路地に一人は別れを告げ、タクシーのテールランプが連なる199号線に出ていた。

「乗るよ。」

「うん。」

一人にはそれ以上の会話は無かつたが、心と体の行き先は同じだつた。

「ちょっと待つて。」

エリカは涼介にそう言つてタクシーから降りた。

(・・・・・)

涼介は眩し過ぎる明かりの中に消えて行つたエリカから視線を離し、何かを考え始めていた。

市街から抜け出そうとしていたタクシーは、平和通りバス停の傍

にあるマシモトキヨシの前でハザードランプを点滅させていた。

(・・・・・)

涼介は携帯電話をゾシャツのポケットから取り出した。

受信メール

リヨウスケ、楽しく飲んでそうだね。
メールも電話もないから、ちょっとショック(ーー、)
私も一緒に飲みたい…。

まゆみ

2003/10/10 22:09

受信メール

ワイン飲んだら眠くなっちゃった。
もう寝ます。。。。

今日はラ・フランスだつたのかな?私(^ー^)

ちゃんと家に帰つてね!

じゃ、明日(^ー^)

おやすみ

まゆみ

2003/10/10 23:45

「洋梨“用なし”か・・・。」

涼介はBARを出た直後に受信していたメールが予想通りまゆみ
だつた事に納得しながら、そう一言呟いた。

まゆみは一通のメールにて、涼介の行動に歯止めを掛けたいとする
願いと、来ないだろう返信を見越した自棄と、ささやかな批判と抵
抗を乗せていた。

「BARに入る前のメールもまゆみか・・・。」

涼介は更に一言呟き、何かを直感した様なタイミングで入つてい
たまゆみのメッセージをゾシャツのポケットに仕舞つた。

(・・・・・)

涼介は考えていた。

夜が明け、日が昇れば、涼介が指定したまゆみとのデータの日だつた。

(・・・・・。)

涼介は再び携帯電話を取り出し、まゆみに送信するメールを作り始めた。

車内にはハザードランプの点滅音だけが響いていた。

(・・・・・。)

メールを作り終えた涼介は、携帯電話を握った左手をシートの上に置き、再び考え始めていた。

“コンコン”

涼介はタクシーの窓を叩く音に、泳いでいた瞳の焦点を強引に合わせられた。

「お待たせっ。」

車内に漂い始めていた重い空気を、明るい声と共にタクシーに乗り込んで来たエリカが動かした。

涼介の鼻先に、動いた空気に乗ったエリカの甘い香りが届いていた。

「ごめん、待たせちゃったね。」

エリカは涼介が左手で握っていた携帯電話をさり気なく畳み、スースのポケットにそつと仕舞つた事に気付いていなかつた。

「全然。」

涼介の瞳はエリカを慈しんでいた。

タクシーは平和通りを下る車の流れに紛れていた。

エリカは買つて來た物の一つを、パッケージから取り出そうとしていた。

(・・・・・。)

涼介は、まゆみ宛に作つたメールの送信も、保存もさせてくれなかつたエリカの香りに感謝していた。

涼介はタクシーに乗り込む前から、すでに待ち合わせ迄1-2時間を切つているまゆみとのデートは延期だと決め、延期の報告を何時まゆみにすべきかをずっと考えていた。そしてタクシーの中での一ときりの時間という、予期せぬ形で訪れたチャンスを最大限利用しようとして携帯電話に手を掛けていた。しかし突然で、しかも制限時間のあるチャンスでは説得力のある延期の理由を探せず、戯言の様な理由と謝罪を送信画面に打ち込んでいた。そして涼介は、僅かな時間を利用して、心で燃^{くすぶ}っていた懸案を処理出来るだろう文章を一応完成させたという安堵感が齎す客觀と冷静で、文章の中に断腸の思いをもつと強く据じ込むべきかどうか考え始めていた。しかし涼介に訪れた客觀と冷静は、文章を推敲している頭の片隅に、今夜このタイミングでまゆみにメールを送信すれば、これから過ごすエリカとの時間にまゆみが介在してしまいかもしれない事實を気付かせ、焦り、迷い、瞳を泳がせる事となっていた。

涼介はエリカの香りに、今夜起こり得るまゆみとの現実を避け、謝罪を重ねる煩わしさを先送りにする決断を下していた。そしてその決断の底には、まゆみの恋心を遊び、蔑ろ^{ないがし}にしても胸に痛みを感じない、自分を愛する事が最優先だとするぬるく醜い姿が隠されていた。

21・・・弄(いじ)れる情熱

21・弄れる情熱

恭子は10月10日に行われた部署間の親睦会以降、今迄以上に気さくな態度で涼介と接していた。仕事中、遣り過ぎではないかと思ふ程馴れ馴れしく涼介に接している事もあった。

過去、恭子の恋愛は何時も男性から情熱的に追い掛けられる立場だった。その事実は恭子に恋愛の主導権を常に握らせる事となり、そしてある意味当然の如く、その主導権に男性を見下すという歪んだ感情を付け加える事となっていた。

恭子にとって涼介は、自身の経験が生かせない、洞察や分析も、予測や憶測も空回りしてしまう最初の男性だった。

恭子は一人の関係に結論を出した涼介を受け入れていなかつた。それ故に恭子は、何時か必ず涼介を完全に振り向かせたいと思っていた。

「岡部。」

涼介は恭子を呼んだ。

(・・・・・)

恭子は反応しなかつた。

「岡部!」

涼介は再度、強く恭子を呼んだ。

「……はいっ……。」「

恭子は我に帰つた。

「どうした？らしくないぞ。」

涼介の落ち着いた口調が会議室に響いた。

「すいませんでした。」

恭子は立ち上がり、頭を下げた。

「サンプルリストを皆に渡してくれないか。」「

「はい・・・。」

恭子は席を離れ、資料を配り始めた。

恭子は大切な会議中、周囲の音が聞こえなくなる程一人の男性の事を思い詰めてしまっていた。プライベートでの憂鬱を仕事に持ち込んでしまう女性を常々批判して来た恭子にとって、それは耐え難い失態だった。

（・・・・・。）

恭子は、尋常ではない動悸が顔を赤く染めていない事を祈りながらテーブルの周りを歩いていた。

10月17日、企画開発部の会議室だった。

涼介の背中越しに見える向かい側のビルの窓で、夕日が乱反射していた。

恭子は平静を装つていたが、何か理由を付けてこの場所から立ち去りたい位、悔しさと恥ずかしさで押し潰されそうになっていた。

あの日から一週間が過ぎていた。

（・・・・・。）

まゆみは自分のデスクで仕事をしながら、明日、10月18日の土曜日、涼介とのデートを万全の状態で向かえる為に、今夜やらなければならぬ肌や爪の手入れを始めとする行動のシミュレーションをしていた。

まゆみは10月4日の土曜日、涼介とのデートを自身の所用で一

週間延ばしてしまった事を後悔していた。故にまゆみはその後悔を笑い飛ばせる筈の、涼介が指定した10月11日のデートを心待ちにしていた。しかしその日のデートは涼介の仕事の都合に因つて延期になっていた。

まゆみは11日の朝、気持ちを整え、身形を整え終わつた矢先に届いた涼介からのメールに、世界の終わりが来るかの様な絶望感を味わっていた。そしてまゆみはその日一日中脱力感と戦いながら、涼介とのデートを更に一週間待たなければならなくなるだろう事實を、甘んじて受け入れざるを得ない自分を嘆いていた。

(・・・・・)

仕事が手に付かないまゆみは、この一週間の間に届いた涼介からのメールを順々に溯つていた。

(長かつたな・・・・・)

急遽部長の代わりに横浜に行かなればならなくなつたという、たつたそれだけの言葉で、デートの延期を告げた涼介の、11日の朝届いたメール迄まゆみは溯つていた。

10月17日の金曜日、渡辺通り一丁目にあるオフィスビルの一室に構える設計事務所の中に、容赦なく夕日が差し込んでいた。

(でももう明日なんだから・・・・・)

まゆみは受け入れざるを得なかつた現実に耐えた自分を慰めながら、ブラインドを下ろす為に席を立つた。

事務所にはまゆみしか居なかつた。社長の鈴木周五郎も一級建築士も現場に出ていた。

(・・・・・)

まゆみは窓の傍に立ち、朱色に染まる街を眺めながら、このまま定時が過ぎ、事務所の電話を鈴木周五郎の携帯電話に転送し、“そつと”会社を出たいと思っていた。

まゆみは自身の全てを涼介に受け入れて貰つ為に、そして永遠に続けたい二人の関係の象徴的な一日とする為に、明日の土曜日はねるい行動やつまらないミスは許されないと考えていた。

恋愛の理想という“森”をずっと見続けて来たまゆみは、たつた数ヶ月の間に涼介という“木”だけを凝視してしまっている事に気付いていた。そして逃がしたくない恋を掴む為に自身が想い描く理想の輪郭を何度も修正し、一步間違えば薄くて痛い感情の持ち主として誤解され兼ねない陳腐な行為を何度も繰り返していた事にも気付いていた。

(・・・あと30分何事も無い様に・・・)

まゆみは壁に掛かる時計を見た後、夕日をブラインドで遮った。

(ほんと、長かったな・・・)

まゆみは自分のデスクに戻りながら、追い求めて来た理想の恋愛の終着点が、心を弄られ続けている涼介であつて欲しいと願い続けた一週間を、再び振り返るつもりしていた。

あの日から一週間が過ぎていた。

(・・・・・)

涼介はまゆみとの会話を振り返っていた。

まゆみはこの一週間、涼介にメールを乱打する事を止めていた。そして涼しくもある隙の無い文章で、涼介好みの話題を時折メール画面に挟んでいた。電話では多彩な表現を積極的に試み、少ない時間的有效に使おうとするいじらしさを醸し出した。

まゆみは一週間の間に、涼介に対して自身の違つた一面を確実に披瀝していた。

(・・・・・)

涼介は明日の土曜日に控えたまゆみとのデートを前に、客観的に若々しく、スタイルも良いまゆみとエリカを初めて比較していた。

(・・・・・)

涼介は考えていた。

涼介はまゆみとのセックスト、今後まゆみに対してどう立ち居振舞うのかを決める最後の判断材料として位置付けていた。涼介の気

持ちは当然エリカだつた。しかし涼介は、自身の殻を一枚破つた様な言動を見せ始めたまゆみとのセックスに因つて、まゆみとの間に存在する嗜み合わないリズムをも凌駕する様な、まゆみに対しても用意してある答えを書き換えなければならない様な、画期的な新機軸が打ち出された場合の事を貪欲に考えている自分を俯瞰していた。

「課長代理！」

広山の声が会議室に響いた。

「！！！！」

涼介は広山の声で我に返つた。

何分か前、涼介が恭子を注意した会議中の出来事だつた。

「・・・そ、うだな・・・じやあ・・・絞り込んだメニューのネーミングの・・・リストアップだな・・・広山、続けてくれないか。」

涼介は広山が何度も声を掛けて来たのか知りたい思いに駆られながら、誰とも視線を合わさず、資料に目を落とし、何時もより押さえた声で広山にそう指示をした。

「分かりました。」

広山はプロジェクトの準備をする為、席を立つた。

(・・・・・)

恭子は広山の動きに呼応する様に席を立つた。

向かい側のビルの窓で乱反射する夕日は、更にその輝きを赤く増していった。

(初めて見たな・・・代理のあんな姿・・・代理は何を考えてたんだろう・・・)

恭子は電動カーテンのスイッチを押した自分の指先に、胸の鼓動が波打つ様に届いていた事に驚いていた。

(代理も何か悩んでる・・・)

閉まり行くカーテンを見ている恭子は自己の情熱を強烈に弄り始めていた。そして恋を攫おうとする女性に有りがちな、手前勝手で無遠慮な主觀で涼介の心の内を覗こうとしていた。

(・・・・・)

席に戻った恭子は涼介を凝視し、涼介が見せた散漫な姿の原因が何なのか、猛烈な速さで詮索を始めた。

（私の事で悩んでるのかも・・・。）

そう考えた瞬間、胸に走った痛みを恭子は信じた。

ほんの何分か前、恭子は涼介の事を思い詰めていた。そしてその数分後、恭子の姿を焼き映したかの様に涼介の心は何処かに泳いでいた。その事実は男性から情熱的に追い掛けられ、恋愛の主導権を常に握つて来た過去を持つ恭子の恋心にとつて、見逃す事の出来ない現実だった。

暗い会議室に広山の声が響いていた。

明るさを放つスクリーンの横で、涼介の姿がシルエットとなつて浮かび上がっていた。

（・・・・・。）

涼介が“岡部恭子”という女性を愛する事を遠慮していると結論付けていた恭子は、シルエットの涼介を見つめる瞳の奥で、今夜その涼介に渾身の力を振り絞つてアプローチをする為の手筈を俊敏に整え始めていた。

22・・・姑息な思惑

22・姑息な思惑

二人は居酒屋のカウンターで肩を並べていた。

「我儘を叱るのは愛だし、許せるのは恋だし、怒るのは体だけかも知んないぞ・・・我儘の質にも因るとは思つんだけどさ。」

涼介は広山の相談に答えていた。

「広山、彼女の我儘を怒っちゃつてのは、今んとこ体だけで繋がつてんのかもしんないな。」

涼介は立て続けにそう言つた後、広山を見て“冗談だよ”と言つた。

「・・・以外とそなんですかねえ・・・。」

広山は苦笑いを浮かべていた。

「心配すんな、大丈夫だよ。」

涼介は広山のグラスにビールを注ぎながらそう言つて笑顔を見せた。

企画開発部の会議後、30分程経つていた喫煙室だった。

「課長代理、ちょっと相談したい事があるんですけど・・・仕事終わつたら付き合つて貰えませんか?」

涼介を追う様に喫煙室に入つて来た広山は、立つたまま余所余所しく涼介にそう切り出した。

「どうした？・・シリアルスだな。」

「ええ、まあ、ちょっと・・・。」

「仕事の事か？」

「ええ・・いえ・・あの、今からタカハシフーズさんの所に行かなきやいけないので・・・代理、すいません、今夜お願ひします・・ほんとすいません。」

広山はそう言つて涼介の問い掛けを恐縮しながら誤魔化し、逃げる様に喫煙室を出て行つた。

(・・・・・)

涼介は煙草を燻らせながら椅子の背凭れに深く体を預け、広山への遭遇に何か問題が無かつたか振り返つっていた。

「岡部。」

広山は恭子のグラスにビールを注いでいた。

「あっ、すいません。」

恭子は両手でグラスを持ち上げた。

広山の隣には恭子が座つていた。

(・・・・・)

涼介は居酒屋のカウンターで三人が肩を並べている事に胡散臭さを感じていた。そして若し本当にこの状況を恭子が設定したのであれば、恭子の“だし”に使われている事になる広山に申し訳ないと思つていた。

涼介と広山は仕事を午後7時30分に切り上げていた。

一人が会社を出てテナントビル1Fのエントランスを歩いている時、黒崎に在る取引先との打ち合わせ終了後直帰する筈だった恭子が、正面玄関附近で他部署の社員と立ち話をしている姿を広山が見つけていた。

三人はそれぞれの挨拶を交した後、広山は恭子と仕事の話を始めた。

涼介は少し離れた所で広山と恭子の話を聞いていたが、“お前も来いよ”と広山の言葉がエントランスに響いた直後、“代理、岡部も一緒にいいですか？”と、恭子を居酒屋に連れて行つてもいいかどうかを訊ねられていた。

涼介は前を歩く二人を追い掛ける様に街頭を歩きながら、相談事のある広山が何故岡部を誘つたのかを考えていた。そして涼介は、“俺は構わないけど”と恭子の合流を受け入れた時、広山が恭子に見せた絶妙な笑顔と、その広山に一瞬呼応した恭子の笑顔を思い出していた。

涼介は時折後ろを振り返り、その都度笑顔を残す恭子を訝っていた。そして喫煙室で広山が見せた態度に端を発している一連の出来事を振り返つていた。

涼介は二人の後ろで、恭子が広山を巻き込んで何らかの知恵を働かせていると仮定し、納得出来る推察を一つ心に落としていた。

「そう、結婚考えてんのか。」

「はい。」

「付き合い長いのか？」

涼介は広山の話を真剣に聞き、真剣に問い合わせていた。

「付き合いは12月で・・・まる2年ですね。」

広山は彼女との間に在る悩みを涼介に相談していた。

「そう・・・。広山、バランスとタイミングは大切だぞ。・・・そ

うだな、俺が思う結論を言つと、女性は眞実より誠実を選ぶぞ。」

「・・・・・。」

広山は黙つていた。

「良く聞く話だと思うんだけどさ、大切な女性は失つて初めて、本当に大切な女性だったんだって気付くんだよな・・・。広山も色んな恋を経験してるだろうし、俺がどうこう言つ話じゃないんだけどさ。」

広山と彼女の関係や、彼女を想う広山の心情を初めて具体的に聞いた涼介は、穏やかであり真摯だった。

「・・・まあ、俺にそんな話をするって事はさ、例えば勢いで結婚を申し込んだ時に動かなかつたか、動けなかつたつて事なんだろうな。」

涼介はそう言いながら広山にビールを注いだ。

10月17日の金曜日、午後8時30分にならうとしている店内は満席になっていた。

三人は鳥町食堂街に暖簾を出している、広山が行き付けている居酒屋に居た。

三人が店に入った時には、店の出入口の傍から細く真つ直ぐ延びている、後ろに人が一人やつと通れる程のスペースしかないカウンター席の奥に構える座敷は全て埋まっていた。広山は申し訳なさそうな顔を見せて、店長に笑顔を見せながら、まだ誰も座つていなかつたカウンターの一一番奥に涼介を座らせ様としていた。しかし涼介はその気遣いを断り、至極自然に恭子を奥に座らせ、広山を真ん中に座させていた。

「岡部。」

「はい。あつ、すいません、ありがとうございます。」

恭子はグラスを持ち上げた。

涼介は広山にビールを注いだ後、そのまま岡部のグラスにビールを近づけていた。

「・・・・・。」

恭子は何か喋らうとしていた。

「広山。」

涼介は恭子のグラスにビールを注ぎ終わる前に広山に声を掛けた。

「はい！？」

話し掛けられると思つていなかつた広山は、少しひっくりしていつた。

「バランスはほんと大切だぞ。一方的で極端じゃ相手も息が詰まつちやうからさ。」

「はい・・・。」

「恋つてのは何時だつて激しくて情熱的じやない。でも愛はその逆で喜怒哀楽が穏やかで魅力的だろ？恋愛つてのはその二つがくつついでる訳だからさ、お互い意思の疎通に戸惑つ時があると思うんだよ・・・彼女の事が大切なら、甘え方とか、叱り方とか、そんな様な物に隠れてる思い遣りとか、素直さとか・・まあ何て言つか、愛情を彼女に出し惜しみしない様にな。」

「・・・そうですね・・・。」

広山は頷いた。

「・・・大切な時期だぞ、今。」「

「そうですね・・・。」

「広山、悩んだり迷つたりしてゐる時に隠れてるからな、二人の行く末を決めるタイミングがさ。そして突然試されるぞ、思いの深さを。・・・広山、お前結婚考えてんのなら、そのタイミングを外さない為にもさ、守るべき人を絶対守るんだつていう強い意志を常に心の真ん中に置いとけよ。間違つても俺は常に愛情を注いでるから大丈夫だつて気にはなるなよ。彼女は広山以上に悩んでるかもしんないんだから。」

涼介は語る程に、自分の痛い過去を蘇らせていた。

「・・彼女つてそんなに我儘なのか？・・怒り方が間違つてるから彼女が意地になつてゐるつて事はないのか？・・まあ、広山なりでい

いとは思つんだけど、愛してんなら何故怒んのか、そのロジックを完成させなきやな。」

「ロジックですか?」「

「そう。・・・風が吹けば桶屋が儲かるって知つてるか?」

「・・・聞いた事ありますね。」

「今の広山の態度はそのタイトルに似てんじやないか?」

「・・・?」

「真ん中を端折っちゃつてて事だよ。」

「・・・言葉が足りないって事ですか?」

「そうなんじやない?」

「・・・そうなんですかね・・・。」

「例えばさ、我儘を怒るのは愛してるからなんだって事を論理的に繋げてみろよ。そして繋げた部分を彼女に見せてあげんだよ。ある意味それが誠実つてやつだからさ。もうすれば展開変わつて来る筈だから。」

「・・・なるほどですね・・・。」

広山は遠くを見つめる様な声でそう呟いた。

「彼女に取つちやと、付き合つて2年だつて? それなのに何時も怒られててさ、その理由が“愛してるからなんだ”みたいな一言だけで簡単に片付けられちや、何時か広山がロマンティックな状況を作つて結婚申し込んだつて、彼女即答出来ないだろ?..」

「・・・・・。」

広山は真剣に涼介の話に耳を傾けていた。

「そういう感情に行き着く広山の心の内を具体的に会話しまくんなきや駄目だと思うだ。そつすれば広山が許せないと彼女の一面もきつと減つて来るだろ? しそうなれば怒る事も減るだろ?..まあ、ちょっと、俺は真ん中を端折らせて貰うけど、それを続けば何時からか怒りが叱りに変わつて、お互い素直になつて、最後は気持ちを伝え合う事に手を抜かなくなるんだよ。」

「・・・代理、勉強になります。」

広山は言った。

「・・俺には出来ないんだけどな。」

涼介は饒舌の後、そう言って笑った。

「・・・でも、ほんと勉強になります。」

広山は涼介からビールを注がれていた。

「・・・そう?・・でもそう言つてる内は駄目かもしないな。」

涼介は広山にビールを注し返されていた。

「そうですか・・・。」

「勉強つて言うより“そんな事分かつてます!”位、言つて欲しかつたな。」

涼介は笑つていた。

「なるほどですね・・・。」

広山は夕方の喫煙室で涼介と会話した時と同じ様に恐縮し、同じ苦笑いを見せていた。

「彼女との事をさ、俺にこんなに好き勝手に言われて考え込んでる様じやあ、彼女もきっと広山との将来考え込んでるぞ・・・。」

グラスのビールを空けた後、広山にそう付け加えた涼介は、大切な女性を守れなかつた過去の自分の痛い姿と、その痛い姿に耐えていただろうマキの顔を思い浮かべていた。

「・・・なるほど・・・そうですね・・・誰に何と言われ様と、守るのは僕なんですね・・・。」

「・・・誠実な情熱は伝わるからさ・・・。」

涼介は独り言の様にそう言って煙草に火を点けた。

「広山さん情熱ですよつ、頑張つて下さいね。」

居酒屋に入つても殆ど喋る機会が無く、二人の話に加わるタイミングを計つていた恭子は、此処ぞとばかりにカウンターに身を乗り出し、笑顔で広山を覗き込み、場に新しい空気を流し込もうとするかの様に涼介の言葉を拾つた。

「頑張れ?・・まあ、岡部に取っちゃ対岸の火事だよな。」

涼介は恭子の言動に反応し、棘のある言葉を放つた。

「えつ！そんな事ないですよ・・・広山さん仕事に誠実ですし・・・尊敬しますし・・・そんな広山さんに幸せになつて貰いたいって思つてます・・・」

恭子は涼介の不意打ちに毅然と反駁した。

「・・・岡部さ、今夜俺に何か言いたい事があつたんぢやないのか？」

涼介は更に恭子の意表を突く様な質問を棘に混ぜた。

「えつ！・・・あ、いえ・・・別に・・・」

恭子は続け様に放たれた涼介からの棘に慌てた。

広山は“ばつ”が悪そうに背中を丸くしてビールを飲んでいた。

涼介は煙草を燻らせながら恭子の言葉を待つていた。

三人の間には居酒屋では似合わない沈黙が訪れていた。

(・・・・・)

恭子は混乱していた。

恭子は涼介をもう一度自分に惹き付ける為に、今夜涼介に女の弱さや“しおらしさ”という武器を見せ付け様と画策していた。故に今日の夕方行われた企画会議の直後、広山に今夜涼介を連れ出して欲しいと無理矢理頼み込んでいた。更に状況を見て広山に途中で抜け出していく涼介に“武器”を使う機会を見つけられず、広山の話題に入り込む余地も見つけられず、企てた筋書きが思惑通りに展開しない場面の連續に焦り、苛立ち、戦術を変えるべきかどうか迷い始めていた。しかしそんな矢先、恭子は突然涼介に核心を突かれ、しかも座の中心に君臨出来るチャンスまで与えられ、何か喋らなければとする思いに自分の心を搔き乱し、逆に言葉を失つてしまつていた。

居酒屋の店内は賑わっていた。

三人だけには重い沈黙が続いていた。

(・・・・・)

恭子は自分の思惑が全て涼介に見抜かれているかもしれない現実に、言動を封じ込まれたままだった。

「……じゃあ悪いけど、俺、明日早いから先に帰るよ。」

涼介は恭子に考える“間”を充分に与えた後、煙草を消した。

「……明日早いって……ゴルフですか？」

黙つている恭子に痺れを切らした様に広山が喋つた。

「ゴルフ？……そういう方法もあるな。」

涼介は広山に笑顔を見せながら立ち上がり、まゆみとのデートが待つている自分にそう言つた。

「…………」

広山は涼介の言葉を理解出来ないまま、反射的に立ち上がつていた。

「じゃあな、広山。……それじゃあな、岡部。……気を付けて帰れよ。」

涼介はそう言つて、二人がこの後暫くは飲んでいられる位のお金を広山に渡し、踵を返した。

「お疲れ様です。」

広山は涼介に軽く頭を下げた。

「じゃ。」

涼介は振り向いて手を上げた。

「…………」

恭子は座つたまま会釀するのが精一杯だった。

広山は涼介の背中をずっと追つ追つしていた。

（…………）

恭子は涼介の姿が居酒屋から消えた瞬間、涼介に対して用意していた言葉や仕草の数々が永遠に封印された事を悟つていた。そして涼介が見せた居酒屋での振る舞いや、付け入る隙の無かつた鮮やかな去り際にある種感動すら覚えていた。

「…………ごめんな、途中抜けらんなくて。」

広山は涼介が去つた後、恭子にそう言つた。

「そんな事ないですよ広山さん。私の方こそ無理言つてしません

でした。」

恭子は気丈に、そして素直に謝った。

「・・俺が言うのも何だけどさ、代理に姑息な手段は通用しないんじゃないかな・・・。」

「・・・・・。」

恭子は不細工に引きつっているかもしれない笑顔をからうじて広山に向けたが、返す言葉は無かった。

「・・・出ようか。」

広山は座り直し、グラスに残っていたビールを飲み干し、恭子に言った。

「・・・そうですね。」

恭子はカウンターの隅で、狙い落とそうとした涼介の強さに完全に打ちのめされた事を自覚していた。

「・・・情熱は誠実でなきや伝わんないらしいぞ。」

広山は言った。

「・・・そうですね・・・。」

恋を実らせ、愛を育もうとする情熱は潜在的であり、その本質は純粹だという事に恭子は気付き始めていた。そして女王様やお姫様を気取り続け、情熱を不純に扱っていた過去の自分のぬるい恋愛に物悲しさを感じていた。

「岡部、悪かつたな。」

「何言つてるんですか広山さん、悪かつたのは私です。そんな事言わないで下さい。」

「・・・落ち込んでないよな?」

「落ち込んでなんかないです。全然大丈夫です・・・っていうか課長代理もつたといないなあつて思つてたんです。私、結構いい女なのになあつて。」

恭子はそう言つて、広山に向けた自分の笑顔が不細工でない事を再び祈つていた。

(・・・・・)

涼介はBARのカウンターで煙草を燻らせながら、午後9時を少し過ぎている腕時計の針を確認した。

(まだ早いんだよな・・・・・)

涼介は心中でそう呟き、携帯電話のアドレスを開いていた。

エリカに出逢う前迄の涼介であれば、居酒屋を出た後に誰彼の区別なく女性に電話をし、今から一緒に飲まないかと誘っていた筈だった。そして隣に来てくれた女性をベッドに誘う為だけの優しさを精一杯見せていた筈だった。

(・・・ぬるいな。)

涼介はエリカの名前が出ていた画面を閉じ、携帯電話をカウンターに置き、自分を鼻で笑った。

店内には普段流れている自動ピアノの美しい音色ではなく、緩やかなジャズが流れていた。

(・・・・・)

涼介は一杯目のラムバックを飲み干した。

「・・何時も有難う御座います。」

涼介の顔を知るバー・テンダーが涼介に近寄り、灰皿を交換しながらそう話し掛けた。

「・・・マイヤーズをストレートでくんないかな。」

「かしこまりました。・・・珍しいですね。」

「・・そんな日なんだよ。」

店内には街の喧騒とは無縁の空気が流れていた。

間接照明が映し出す客のシルエットは、涼介意外全てカップルで括られていた。

(・・・・・)

涼介は何処を見つめるでも無く、左手で携帯電話を玩んでいた。涼介はエリカからのメールを欲しがっていた。そしてエリカにメ

ールを送信する事をずっと考えていた。

(・・・・・。)

涼介は煙草に火を点けた。

「作りますか？」

バー・テンドラーが涼介に声を掛けた。

「・・・帰るよ。」

L字に延びるカウンターの一番奥でストレートグラスを二度空にしていた涼介は、そう言って点けたばかりの煙草を消した。涼介の心中は居酒屋で恭子を見せた自分の態度と、明日に控えたまゆみとのデートの事が入り乱れ、今夜エリカに会いたいとする気持ちに絡み付いていた。

「・・・有難う御座います。」

バー・テンドラーは、それだけを涼介に言つた。

(・・・・・。)

涼介は会社の駐車場に戻る途中の路上で、恭子との過去の出来事を振り返っていた。

(申し訳ない事をしてたよな、まつたく・・・。)

涼介は恭子の事を、同じ匂いをさせている女性だと感じていた。そして鬱積している自身の美学の捌け口として、不安定な情緒を救ってくれる女性として冒流し、プライドを守れる“いい女”という位置付けで接していた事を思い出していた。

(しかし今夜はあれで良かつたと思うんだけどな・・・。)

B A Rに入る前から恭子に対する罪悪感に包まれていた涼介は、恭子に晒し続けていた自分の自惚れた態度を反省していた。

(・・・何処にあるんだ・・・?)

涼介は夜空を見上げた。

(・・・曇つてんのかな・・・。)

涼介は出ている筈の月を探しながら、明日に控えるまゆみとのデートの行方も探し始めていた。

(・・・・・)

まゆみはさり気なく腕時計を見た。

テーブルの下で確認した時間は、午後8時10分を指していた。

「松岡、明日博多の森に行かないか？」

「えつ！？」

「アビスパの試合見に行こう。」

鈴木周五郎は臆する事無くそう言った。

二人は地下鉄中洲川端駅を押さえ付ける様に建っている、リバレーイン五階に在る叙々苑という焼肉店に居た。

「・・・社長、すいません。・・・明日は実家で姉夫婦の子供の世話が待ってるんです・・・。」

まゆみが搾り出した嘘は、思い付きにしてはリアルだった。

「・・・。」

鈴木周五郎はまゆみを見つめながら何かを考えていた。

午後6時過ぎ、まゆみは事務所の電話を鈴木周五郎の携帯電話に転送し、退社時のチェック事項を何時もより時間を掛けて済ませ、事務所を出ようとしていた。

（よし、これで大丈夫。）

まゆみは電気を消した。

明かりの消えた事務所は、降ろされたブラインドの隙間から差し込む夕日の朱色が映えていた。

（さあ、帰ろう。）

まゆみはバッグの中から鍵を取り出し、明日のデートの為に今夜やつて置くべき事を頭の中で整理しながらドアに向かった。

“ガチャッ”

(・・・・・)

まゆみがドアノブに手を掛ける寸前、ドアノブはまゆみの手から逃げた。

ドアは勢い良く開いていた。

まゆみは突然目に飛び込んで来た現実に愕然としていた。

「おおっ！お疲れさん！」

鈴木周五郎は目の前の思い掛けない現実に驚き、高らかに声を上げた。

「・・お疲れ様です・・・。」

まゆみは後退りながら困惑していた。

「はい、お疲れさん。・・松岡、電気点けてくれ。」

「・・はい・・・。」

まゆみは言われるがまま、消したばかりの電気を点けに戻った。

「帰る所だつたのかい？」

鈴木周五郎は目で見れば分かる事実を嬉しそうに言葉にした。

「はい。」

まゆみは此処しか無いとばかりに強い意志を込め、返事を事務所に響かせた。

「そつか・・・でも、申し訳ないけど、これを入力してくれないかな。設計変更の打ち合わせ記録なんだ。」

鈴木周五郎はまゆみの顔を見ず、鞄の中を弄つていた。

「・・・あの・・・でも・・・。」

まゆみは返事をする事が出来なかつた。

「頼むよ。」

鈴木周五郎の口調は柔らかだつた。しかしその言葉はお願いではなく命令だつた。

「・・・分かりました。」

まゆみは従わざるを得なかつた。

一人は暫くの間、無言のまま残務処理をしていた。

まゆみは後5分早く会社を出でていればと梅やみながらパソコンに向き合つていた。

「なあ、松岡、お腹空いただろ？」

鈴木周五郎は嬉しそうだつた。

「えつ？・・・いえ、今日はお昼が遅かつたので、まだ余り・・・。」

まゆみは動搖していた。

「そつか？俺は今日昼飯を食べてないから腹ペコなんだ。」

パソコンの画面を見ながら鈴木周五郎はそう言つた。

「・・・・・。」

まゆみは何も喋らなかつた。

「・・・・・そだなあ、それじゃあ残業のお詫びを兼ねてビール奢らせてくれないか・・・そつだ！焼肉にしようつーーリバレンインに美味しい店があるんだ！」

「・・・ええ・・・。」

まゆみは濶んだ。

鈴木周五郎は事務所の入り口でまゆみを引き止めた時、このチャンスを逃すまいと思つていた。そして此処迄は女性に対して不器用で強引な自分をまゆみには悟られず、自然体で食事に誘えていると思つ込んでいた。

「どうした！元気ないな。体調でも悪いのか？」

「えつ？・・・いえ・・・。」

「じゃあ行こうづー。」

「・・・はい・・・。」

まゆみの頭の中は明日のデータの事で一杯だった。しかしまゆみは折れた。

「松岡、残りは月曜日でいいぞ。」

鈴木周五郎は残務処理を止め、すでに立ち上がつていた。

「・・・はい・・・。」

まゆみはパソコンの液晶をみつめながら、鈴木周五郎の術中に嵌つた事を悟つていた。

「じゃあ行こう、腹ペコなんだ。」

「・・・はい。」

まゆみはそう言ってパソコンの電源を切る手順を踏み始めた。

まゆみは明日の為に立てていた今夜の予定を鈴木周五郎に因つ大幅に変更しなければならない事実を強いられていた。しかしまゆみはその事実に思つた程苛立ちを覚えていない自分が居る事に少なからず驚いていた。それは一己の女性として誰もが持つてゐる、幸せな家庭を築きたいとする本能が、鈴木周五郎という男性を完全に拒む事をさせない為の姑息なシグナルを、恋愛を司るまゆみの神経に働き掛けている所^{じせ}為かもしれなかつた。

「今日はデートだぞ！」

「えつ！？」

「冗談だよ、冗談！」

鈴木周五郎は上機嫌だつた。

鈴木周五郎は粘っていた。

「ええ・・・でも、無理だと思います。お母さん最近体の調子良くないみたいだし、子供達にも遊びに連れてくつて約束してあるし・・・」

「・・・」

「そうか。・・・じゃ、俺が子供達を遊園地にでも連れて行こうか?」
鈴木周五郎は食い下がつた。

「そんな事出来ないです!社長にそこまでは・・・」

まゆみは一向に良くならない状況に焦りを感じていた。

「俺なら平気だから。・・・そうだ!そつじよつ!」

「・・・・・・」

まゆみは鈴木周五郎の圧力に、このままでは寄り倒されると感じていた。

「な、いいじゃないか、ドライブを兼ねて遊園地に行こう。そうすればお母さんも楽だろうし、俺は子供好きだし、お子さんは一人だろ?なら四人で家族みたいでいいじゃないか。」

鈴木周五郎は詰め寄り、まゆみは土俵際まで押し込まれた。

「・・・ええ・・だけど私一人じゃないんです。友達を一人呼んでるんです。大学の同級生なんですけど、二人とも子供が居て、皆と一緒に遊ぶ事してるんですけど・・・」

まゆみは土俵際で、自分でもびっくりする様な嘘を言い放った。

「・・・・・・」

鈴木周五郎は考えていた。

「すいません、社長・・それにその日は皆家に泊るので、日曜の夜迄ずっと一緒にです。」

まゆみは、鈴木周五郎が言葉を発する前に、そう嘘を被せた。

「・・・そうか・・・」

「皆久し振りに会つし、女だけだし、私も結構楽しみにしてたから・・・」

まゆみは必死で、更に嘘を放つた。

「・・・そうか・・・なら、余り無理は言えないな・・・」

「すいません。折角のお誘いなんですけど・・・」

「残念だけどしょうがないな。俺の誘いが急過ぎたしな。」

「・・・ごめんなさい。・・・あの・・・でも社長、近い内見に行きましたよ、サッカー。・・・私、サッカー好きなんです。」

まゆみは引き際を知らない二流芸人の様に、余計な事を勢いで喋ってしまった自分に“はつ”としていた。

「！・・・そうか、サッカー好きなのか！そりや知らなかつたな！」鈴木周五郎はそう唸つた後、ジョッキに三分の一程残っていたビールを一気に飲み干した。

「・・ええ・・・」

まゆみの声から勢いは消えていた。

まゆみは土俵際で鈴木周五郎を綺麗に“うつちやつた”と思つていた。しかし、そう決め込んだ事で軍配が上がる前に勝敗への集中力を欠いてしまっていた。そして当然の様に鈴木周五郎はその隙を見逃さなかつた。

二人の勝負には“物言い”が付いた。

「良かつたよ、サッカーが好きな女性と付き合つのは初めてなんだ・・趣味が合う事は大切な事だからね。・・・そうかあ、じゃあ近い内にチケット買っておくよ。何処のファンかい？アビスパだと嬉しいな。・・・すいません！生一つ！」

鈴木周五郎の瞳には輝きが戻つていた。

「ええ・・・」

まゆみの背中はまた丸くなり、新たな言い訳を探し始めていた。

「・・違うんだな？じゃあ、マリノスとかレッズかい？・・松岡は都会的だもんな。・・・そうだ！！大阪や横浜に見に行つてもいいな。面白いぜ、きっと！」

鈴木周五郎は水を得た魚になつていた。

「・・・ええ・・・」

サッカーが好きだと称する事が痴おこがましいぐらい、まゆみが知っているクラブチームの名前は限られていたが、まゆみは取り敢えず

笑顔を作った。

「楽しみになつて來たよ。」

鈴木周五郎の心は跳ねていた。

「・・・そうですね・・・。」

まゆみは涼介とのデートの前日に余計な憂鬱を抱え込んでしまった事を後悔していた。しかし鈴木周五郎への詰めの甘さを悔やむより、今はまだ乗り込むべき船を一艘用意していても問題は無いとう、幸福な未来が約束されている訳ではない涼介との現状に一抹の不安を抱いている、もう一人の自分が画策する思惑に妙味を感じていた。

「ワールドカップのアメリカ大会でさ、バッジヨがPK外してさ、松岡は見てたか？あの試合。」

「・・・バッジヨって、人気ありましたよね・・・。」

鈴木周五郎は生ビールを美味そうに飲みながら、サッカーについて延々と語り始めていた。まゆみは断片的に知っているサッカーの事を時折会話に挟み、鈴木周五郎の機嫌を伺いながら明日の昼迄に大蒜の臭いを消す方法を考えていた。

“物言い”が付いていた二人の勝負の軍配は、取り敢えずまゆみに上がった。しかし今後あるだらう取り組みで、鈴木周五郎が同じミスを犯す事は考え難かつた。

「・・・ベルギー戦の稻本は切れまくつてたよな。」

「そうですね・・・。」

まゆみはさり気なく腕時計を見た。

時間の針は9時5分を指そうとしていた。

鈴木周五郎にとつては合格点が与えられる夜となっていた。まゆみにとつては、甘くてぬるい恋の駆け引きを一つ披露しただけの夜となっていた。

23・・・最後の幕開け

23・最後の幕開け

（大学生の時以来だな・・・。）

涼介は煙草が吸えない苛立ちと共に、明るい時間に座れない場所で女性と待ち合わせるという、自分のスタイルの中には既に存在していないデートの始まり方に戸惑っていた。

10月18日土曜日の午後、涼介は小倉駅新幹線改札口の前でまゆみを待っていた。

（こまま知つた奴に会わなきやいいな・・・。）

涼介は往来の多い連絡通路と改札口の間にあるスペースの壁に寄り掛かり、人通りに背を向けていた。

涼介は小倉に来た事が無いまゆみの希望を全面的に受け入れた事の後悔も、心の中に溜め始めていた。

（・・・それにしても遅過ぎるな。）

涼介は左肩を壁から離し、組んでいた腕を解いてサングラスを一度右手で触り、改札正面にある時計を見た。

時計の針は午後2時15分を指していた。

（何かあつたのかな・・・。）

“今から新幹線に乗るね”というメールを40分位前にまゆみから貰っていた涼介は、既に姿を現していなければならぬ筈の時間を20分程過ぎている事実に、ある種別次元の不安を搔き立てられていた。

(「の中に居なきや電話だな・・・。）

涼介は新幹線から降りて来た人達が、ホームからロビーに繋がる階段を一団となつて下りて来る光景を見つめながら、今度こそこの人波の中にまゆみが居て欲しいと思つていた。

(まつたく・・・。)

散け行く一団の中にまゆみがない事を確認した涼介は、シャツのポケットから携帯電話を取り出した。

改札正面の時計は午後2時30分を指していた。

涼介の周りには、涼介と同じ様に携帯電話を取り出している人達が何人か居た。

「お待たせっ！！」

「・・・・・。」

涼介は突然耳元で響いた声にゆっくりと振り向いた。

「びっくりした？」

まゆみは笑顔を弾かせていた。

「・・・来てたんだ・・・。」

涼介は携帯電話を閉じ、何時もより低く落ち着いた声でそう言つた。

「あれ？驚かなかつた？」

まゆみは涼介の冷めたりアクションに拍子抜けしていた。

「・・・そうだね・・・。」

涼介は無表情でそう言つた。

待ち合わせの時間過ぎても連絡の無いまゆみに何かトラブルでもあったのではないかと心配していた涼介は、まゆみの不意打ちに人間らしく反応する事以前に、不安や苛立ちが自分の顔に齧もたらしてい
る筈の厳しい表情を消す事に精一杯だった。

「何だ・・・。」

まゆみはがっかりした仕草を見せながらも、涼介の傍に居る事の嬉しさをはつきりと表情に浮かべていた。

「・・・何時から居たの？」

涼介は自分の目に出でているだろつまゆみに対する冷ややかな感情が、サングラスで隠れていて欲しいと思いながらそう聞いた。

「さつきメールした時にはもう小倉に居たの。ちょっと街をぶらぶらしてた。」

まゆみはそう言って、意地悪な自分を優しく叱つて欲しい素振りをちらつかせた。

「そう・・・」

涼介は既に小倉に来ていたまゆみを改札口ですつと待っていた、ある意味滑稽な自分の姿を思い浮かべて冷笑した。

「・・・待たせちゃつてごめんね・・・。」

涼介の表情に何かを察知したまゆみは、加える予定の無かつた甘さを声に混ぜた。

「いや、いいんだ。・・・じゃ、行こうか。」

涼介はまゆみの変化に反応する事無く、小倉駅北口方向に踵きびすを返した。

涼介はまゆみを置き去りにして歩き出した事を気にしていました。しかしその事に対しての効果的なフォローを考えるよりも、涼介はサングラスの奥の瞳に柔らかさを取り戻す事が先決だと思つていた。

「涼介、歩くの速い・・・。」

「・・・ごめんな。」

涼介はまゆみの声に振り向き、落ち着いてそう言った後、露骨に歩く速さをまゆみに合わせた。

10月にしては降り注ぐ日差しの強い午後、二人は肩を並べて小倉駅北口のメイン階段を降りていた。

まゆみは涼介と久し振りに並んで歩きながら、これから始まるデートに胸をときめかせていた。しかし涼介に行使した策略が成功だったのかどうか、心の隅で振り返つてもいた。

涼介はデートの幕の開け方についての感想を何時まゆみに聞かれ

てもいい様に、心の準備を急いでいた。

「此処に停めてたんだ。」

「そうだよ。」

涼介は自分の車にゆっくりと向かっていた。

二人は小倉駅北口の直ぐ目の前にある駐車場の中を歩いていた。
日差しは容赦無く駐車中の車を照り付けていた。

「・・・余り喋んないのね。」

まゆみは涼介の後ろを歩きながら、少しずつ緊張し始めている今
の自分の状態をそのまま涼介に向けた。

涼介とのデートを待ち侘びていた三週間の間、涼介への思いをよ
り一層強くさせていたまゆみは、初めて迎え様としている一人きり
になれる空間を前に、思考を微妙に固くしていた。

「何時もと変わんないよ。」

涼介はそう言いながら、ポケットから取り出していたキーを車に
向け、ハザードを一度点滅させた。

「この車？」

「そうだよ。」

「・・日本車じゃない・・よね？」

「そうだね。」

「格好いいね。」

「・・・・・。」

涼介は薄い笑顔を見せながら、ドアに手を掛けた。

「何て車・・だつたつけ？」

まゆみは助手席側に回り込みながらそう聞いた。

「・・BMWだよ。」

「そつか、BMWだよね・・・BMW・・W！」

まゆみは車の屋根越しに見える涼介に向かつてそう叫んだ。

「・・・・・。」

涼介はまゆみに一度笑顔を見せて、車に乗り込んだ。

(やつちやつた・・・。)

まゆみは笑顔を引きついでながら、何あんな話をしたのだろう
と思っていた。

「ふう・・・。」

まゆみは恥ずかしさを誤魔化す様な溜息を吐いた後、助手席のドアを開けた。

「・・暑いねつ。」

涼介に見せた醜態を取り繕う事だけを考えていたまゆみは、駐車場で50分近く日差しに晒され、かなり上昇していた車内の温度を率直に言葉にした。

「ごめんな。」

駐車場の出口ゲートにコインを入れ様としていた涼介は、その動作を止め、エアコンの温度を下げた。

「いや、そういう意味じゃなかつたんだよつ。」

まゆみは慌て否定した。

「分かつてるよ。」

涼介は笑つた。

「・・・・・。」

まゆみは言動の一つ一つが裏目に出ていた事に焦つっていた。

二人を乗せた車はKMMビルとリーガロイヤルホテル小倉の間を抜け、199号線に出ようとしていた。

車内は静かだった。

まゆみは落ち着きを取り戻そつと必死になつていた。

「・・・涼介の車に乗れて嬉しい。」

まゆみは慎重に言葉を選んだ。

「そう?・・・初めてだつけ?」

「うん。」

「・・ようこそ。」

涼介は少し気取つて見せた。

「えつ、あ、こちらこそ・・・。」

「ははつ、“こちらこそ”つて、お洒落な返しだね。」

「え？・・そう・・かな・・・。」

まゆみは予期せぬ会話の流れに照れていた。

「・・・映画だよね？」

涼介は穏やかな笑顔を一瞬まゆに向けた後、そう言つた。

「映画・・・うん・・・。」

まゆみは涼介の至極自然な振舞いに、余計な緊張から解放され様としていた。

「・・散歩したかったんだよね？」

「えつ！？・・・うん。」

「了解。」

「・・・優しいね・・・。」

紫川手前を左に曲がり、ガードを潜つていた車は小倉の田抜き通りに向かっていた。

車内の空気は心地良く乾き始めていた。

まゆみの表情には柔らかさが戻つていた。

「こんな風になつてるのね。」

まゆみは目の前に広がつた予期せぬ景色に少し感激していた。

涼介は北九州市役所の地下に広がる市営駐車場に車を停め、市役所に隣接する勝山公園の中に出られるエレベーターを使い、まゆみを地上に誘つていた。

肩を寄せ合つている二人は、中央図書館や市民プールを囲む様に形成された緑豊かな場所に背を向け、勝山公園の直ぐ横を流れる紫川沿いに向かつて歩いていた。

木漏れ日が張り巡らされた芝生の上に落ちていた。

「涼介、ありがと。」

「…こちらこそ。」

「もう…。」

まゆみは話す必要の無い沈黙を楽しんでいた。

「ね、何考える?」

まゆみは沈黙に充分浸った後、涼介にそう聞いた。

「…・昼間のデート、苦手なんだよ。」

話す事が無く、何も考えていなかつた涼介は正直な気持ちを選んだ。

「…・そう言つてたよね…。」

まゆみは涼介の言葉に困つていた。

一人は紫川を見下ろせる桜並木の中に居た。

対岸には小倉を彩る建物が林立していた。

「…映画館に入るのも10年振り位なんだ…煙草吸えないし。」

涼介は遠くを見ながら、正直な言葉を被せた。

「…・そう…。」

まゆみは更に困つっていた。

涼介は遠くを見たまま歩いていた。

「…・らしいって言うか、涼介って不思議な人ね。」

まゆみは涼介を見ながら、心の中を忠実に言葉にした。

(・・・不思議な人か・・・。)

涼介はまゆみの言葉に笑顔だけで答えながら、擦れ違つて行つた女性が必ずその言葉を放つていた事を思い出していた。

一人は桜並木を抜け、紫川に掛かる太陽の橋を渡つていた。

「ここだよ。」

涼介は太陽の橋の欄干を建物の一部にした様な、紫側の土手も敷地の一部にした様な、そんな位置に建つ東京第一ホテル小倉を見上げ、まゆみにそう言った。

「・・・うん・・・・」

ずっと手を繋いで歩きたいと思っていたまゆみは、その思いを通り道で実現させ様と自分に誓った後、涼介に笑顔を向けた。

映画館は東京第一ホテル小倉の地下に在った。

「・・・次は4時10分か・・・。まだ1時間以上あるな・・・口ヒーでも飲もうか。」

涼介は映画館専用のエントランスには向かわらず、ホテルの中に入り、ロビーの脇に在る室内階段を降りて映画館の前迄来ていた。

「・・・うん。」

まゆみは降りて来たばかりの室内階段へ踵を返した涼介の背中に返事をさせられていた。

一人は東京第一ホテル小倉一階ロビーにあるラウンジに居た。

「博多の方が良かつたろ?」

涼介はサングラスを外しながらそう言った。

二人は窓側の席に案内されていた。ラウンジと紫川の間にはホテルの中庭が美しく広がり、中庭の一角を占めるテラスにはオープンカフェ用の白いパラソルが綺麗に立ち並んでいた。紫川の向こうには一人が歩いて来た公園の木々が風に揺れ、その先では小倉城とリバーウォーク北九州の斬新なビルが、時代を超えて描かれた一枚の絵画の様な趣で寄り添つっていた。

「ううん、そんな事ないよ。」

まゆみは窓の外に広がる景色を見ながらそう言った。

「・・・まあ、ゆっくりしようよ。」

涼介はそう言つた後、窓の外に顔を向け、まゆみや小倉という街に愚かな態度で接している自分の心をぬるく見つめていた。

「・・・・・。」

綺麗な姿勢で座っているまゆみは、優しい瞳で涼介を見つめていた。

二人の前には飲み物が運ばれて来ていた。

涼介は窓の外を眺め続けていた。

(最低の男だな……)

涼介は長い沈黙をそのままにしている自分を苦笑いで区切り、コーヒーにゅっくりと手を掛けた。

「何故笑ったの?」

カップをソーサーに戻し、煙草に火を点け様としていた涼介にまゆみは聞いた。

まゆみはコーヒーを飲む前に涼介が一瞬浮かべた穏やかな笑顔を見逃していなかつた。

「？・？いや、何でもないんだ……」

涼介は煙を一息吐いた後、まゆみの質問に対してもう答える事が出来なかつた自分に未熟を感じていた。

窓から差し込む太陽の光は、涼介の顔に漂つ氣まずさをまゆみに晒していた

まゆみは涼介の顔を見つめたまま、次の言葉より沈黙を選んでいた。

「・・・あそこに行つてみる?」

涼介は窓の外を指差し、まゆみの心を探る様にそう言つた。

テラスには十本近くの白いパラソルが傘を広げていた。そしてその中の一組のパラソルに、笑顔を弾けさせている若い男女の姿が見えていた。

「・・・此処でいい。」

まゆみは柔らかい風の様な声で涼介の誘いを断つた。

「そう・・・。」

涼介はまゆみと出会つて以来、初めて受身に回つている事に少しだけ焦つていた。

まゆみは綺麗な姿勢で涼介の顔を見つめていた。

涼介はまだ幾らも吸つていらない煙草を消し、まゆみの視線を避け

る様に窓の外を眺めていた。

まゆみに他意は無かつた。まゆみは椅子に深く背を凭れ、時折頬杖を付き、時折眩しそうな表情を見せる涼介に心を奪われ、このまづつと涼介を見つめていたいと思つていただけだった。

涼介は場所を変える事も会話も欲しがつていないまゆみに困つていた。そして自らが自由に操れない沈黙を嫌つていた。

(・・・・・)

涼介は眩しさを嫌がる素振りを見せながらサングラスを掛けた。まゆみは幸せを感じていた。

涼介はまゆみと目を合わそうとしなかつた。

パラソルの下では、若い一人がはしゃいでいた。

(・・・・・)

涼介は立ち上がった。

まゆみは涼介を目で追つた。

「・・・トイレに行つて来る。」

涼介はそう言つてまゆみに笑顔を残し、歩き始めた。

(・・・ほんと駄目だな、俺は・・・)

涼介は自分を見つめ続けるまゆみから逃げる様に席を立つた事に辟易としていた。

涼介はまゆみから“何故笑つたの？”と問い合わせられた時、テラスではしゃぐ若い二人の聞こえる筈のない声を心に感じていた。そしてその声に因つて忘れる事の出来ない一人の女性との過去が振り起こされ、脳裏にその女性の顔を鮮明に蘇らせていた。

涼介は窺い知る事など到底出来る筈の無い心の内をまゆみに見透かされたと思い込み、動搖していた。

「最低だ・・・。」

涼介は歩きながら呟いた。

涼介はテラスに咲いたパラソルの下で無邪気にはしゃぐ若い二人に、圭子と過ごした羽田東急ホテルでの一日を思い出していた。そして第一ホテル東京シーフォートで圭子に晒した、ぬるく不甲斐無

い自分の姿も思い出していた。

(・・ほんと最低な奴だ・・・。)

涼介は何処迄もまゆみに対して失礼な自分を嘆きながら、まゆみとのデートの幕開けを東京第一ホテル小倉の地下に在る映画館にしようと考えていた一週間前、意識の片隅にはつきりと圭子が居た事を振り返っていた。そしてその時に、心の中でずっと封印していた圭子との想い出を、まゆみの前で振り返えつてしまつかもしないと考えた自分を思い出していた。

24・不細工な葛藤

古川純一と涼介は大学生の時に知り合っていた。

深町圭子は、2002年の5月、古川純一の妻になっていた。

純一と涼介は、昔から語り継がれる“親友”という概念を全て満たしている様な関係を今に繋げていた。

涼介は純一の二つ年上だったが、涼介はそんな事を意に介さず純一に腹を割り、敬意を払っていた。

純一は“浜っ子”だった。それは横浜の大学を選んだ涼介に絶大なメリットを与える事にもなっていた。

2001年の春、転勤で生活の拠点が生まれ育った小倉に戻った涼介は、年に一、二度、纏まつた休日を取れる時にしか純一に会えなくなっていた。しかし二人の関係が変わり褪せる事は無く、逆に遠く離れた分、今迄以上に取り合う連絡は増えていた。

涼介は折りに触れ電話やメールで交わす純一との会話に横浜の匂いを嗅いでいた。そしてその匂いは涼介が小倉での生活で蓄積している心の疲労を取り去り、横浜本社復帰という信念を貫く為のモチベーションを蘇らせていました。

1992年、マキと涼介が蜜月だった夏、純一には彼女が居なかつた。その年、社会人2年目だった涼介は、仕事とマキの存在に因つて大学生の頃の様に純一と遊ぶ時間を作れてい無い事に気を揉んでいた。そしてそんな涼介の思いはマキとのデート中に時折純一を誘う事となり、純一と二人で飲んでいる時には自然とマキを呼んでいた。

純一は実家のある桜木町から神奈川大学に通い、マキは根岸からフェリス女子学院大学へ通い、涼介は本牧から関内へ通勤するという生活環境の下、三人は大らかな時間を1年近く共有していた。

純一と涼介はマキを介在し、絆を更に深くしていた。

1994年の春、横浜駅のすぐ傍に本社を構えた、住宅設備機器を取り扱う会社の相生町支社で社会人2年目を迎えていた純一は、イベントコンパニオンをしている知り合いの女性から圭子を紹介され、付き合い始めていた。

圭子は大倉山に住む、明治学院大学の一年生だった。

初夏を迎えていたある夜、純一は涼介を花咲町に在る行き付けのBARに呼び出し、圭子を紹介していた。

涼介はミディアムのナイトブルミューズレイヤーをティーブラウンに染め、無彩色のタイトな洋服にシャープなアクセサリーをコーディネートしている圭子の強い瞳をBARで初めて見た時、内面を絶対人に晒すまいとしている様な尖った若さを感じていた。

マキと涼介の出逢いから終わり迄の日々を誰よりも傍で接していた純一は、1993年の冬にマキと別れた涼介が、南青山にある広告代理店で働いているマキの日常を事ある毎に耽り、思いを馳せ、酷く落ち込み、現実を直視出来ないまま淡々と日々を過ごしている姿に触れる度、悲しみ、苦しんでいた。故に純一は2年前の自分が涼介にそうされていた様に、圭子との食事の時には涼介を誘い、涼介と居る時には躊躇い無く圭子を呼んでいた。

純一と涼介の間に居る女性は1年間の空白を経てマキから圭子へ

変わり、三人は文字通り“若い”と形容出来る行動力を活かし、秋口には頻繁に遊びに出掛けた様になっていた。

当初、デートにも拘らず頻繁に涼介を呼ぶ純一に対して露骨に不機嫌な態度を見せていた圭子は、時間の経過と共に窺い知る涼介の内面や、空気を読んでいるかの様な気さくな一挙手一投足に、三人で居る事の楽しさを感じる様になっていた。

圭子と涼介は余り会話をしなかつたが、“うま”は合っていた。客観的に三人の言動は至る所で不自然に映っていた。しかし三人は三人の関係がどんな風に思われていても気にしなくなっていた。そして街中にクリスマスソングが溢れ始める頃には、主語を使わないままで成立させていたる純一と涼介の会話に、圭子も付いて行ける様になっていた。

1995年の春、純一と涼介の会話の中に時折出て来るマキと言う女性がどんな人物だったのか、圭子は好奇心を抱き始める様になっていた。そしてその頃から圭子は三人の時間を作る事を積極的に仕切る様になり、真夜中でも涼介に電話を掛け、涼介の過去の話を聞き出そうとし、涼介が持つ世界観を自身の心に取り込む様にもなっていた。

圭子は純一や涼介から受ける刺激に因つて物の見方や考え方を変遷させていた。そんな圭子の“若さ”的特權とも言える貪欲な吸収力は、当然の様に自身の恋愛にも影響を及ぼしていた。

1996年の夏、圭子は心中に涼介を想う気持ちが確実に存在している事に気付いていた。その事実は三人で過ごす時間を減らす事に繋がり、何かに託して涼介と一人で会う時間を増やしていた。

涼介は夏以降続いている親友の恋人の行動に悩んでいた。しかし涼介は親友の恋人の行動を受け入れていた。

北風が街を乾かし始める頃、圭子は涼介に心をもつと近くで触つて欲しいと思い始めた。

涼介は圭子の思いに気付かない振りを続け、純一は変わらず圭子を愛し、涼介を信じていた。

1997年、三人が一枚のカンバスに同じ色を塗り始めて3年目の8月、三人は昨年の夏と同様、羽田東急ホテルで思い切り遊ぶ事になっていた。

大学生最後の夏を迎えていた圭子は、もう一度三人で羽田東急ホテルに遊びに行きたいと何ヶ月も前から純一に強請っていた。当然純一はそんな圭子の気持ちを受け入れ、プールサイドバー「ベキュー」というオプションが付いた羽田東急ホテルの宿泊券を一枚、再び会社のコネクションで手に入れていた。

圭子は昨年の夏に味わった、最高に楽しかった一泊一日を、しかし心の何処かに不思議な感覚が残つた一泊一日を、もう一度味わいたいと思っていた。

(・・・・・)

涼介は歩道に立ち、煙草に火を点けた。

トイレには行かずホテルの外に出ていた涼介は、堰を切った様に蘇り続ける圭子との出来事に歯止めを掛けられないまま、先生に叱られている中学生の様に俯いていた。

蒸し暑い朝だった。

開け放たれた窓から蝉の声が聞こえていた。

「エアコン入れた方がいいんじゃねえか？」

涼介は純一に言った。

「任すよ。」

ベッドに座つていた純一は、辛そうにそう言った。

羽田東急ホテルに遊びに行く当日、純一は風邪を拗らせていた。

「・・・・・。」

涼介は未だ荷解きされていないダンボール箱の上に座つたまま動かなかつた。

高島町のワントルームで一人暮らしを始めたばかりの純一の部屋は、

収まる場所を待つてゐる荷物が散乱していた。

「……涼介、行つて来いよ。」

ベッドの上に座つていた純一は自分なりの結論を出した後、そう言つて体をベッドに横たえた。

(・・・・・)

前夜からずっと純一の看病していた圭子は、純一の隣で一人の会話を黙つて聞いていた。

「……今何てつた？」

「……券がもつたいねえだろ。」

純一は朝になつても下がらない熱に少し苛立つていた。

「おいおい、お前何考えてんだよ。もう今日は中止なんだよ。」

「……お前こそ何言つてんだよ……圭子はほの口をずつと楽しみにしてたんだぞ……。」

「……もうこいよ純一、今日はやめよ……。」

圭子はそう言つて心配そうに純一を見つめていた。

「……いいから行つて来いよ、俺のせいでもじやつまつのは辛いんだよ。」

純一は涼介を見つめていた。

「……純一、それは違うよ。」

「違うかもしないけど、いいじゃないか。」

「ぼしゃるとかじやなく、それ以前だろ。」

「……俺は大丈夫だから。今日一日寝てりやいいんだし。」

純一はそう言つながらベッドから抜け出した。

「……。」

涼介は純一を田で追いながら言葉を探してゐた。

純一はキッチンで一人に背を向け、涼介が持つて來た風邪薬を飲もうとしていた。

シンクの横には少しだけ手を付けた跡が残つてゐる、圭子が作った朝食が置かれたままになつてゐた。

純一の背中では、純一には辛過ぎる沈黙が続いていた。

「やつぱ止めよう。」

涼介が言った。

圭子は純一の背中を見つめていた。

純一は涼介の言葉に、水の入ったグラスを左手に持つたまま動きを止めていた。

「・・・圭子は行きたいんだよ・・・だから連れてってやってくれよ・・・」

純一は一人に背を向けたまま、涼介でも圭子でもなく、置かれた現実と向き合つ自分に、そう静かに語り掛けた。

「ふう・・・。」

涼介は純一の言葉に、息を一つ逃がした。

圭子は俯いていた。

「・・・何一人共暗くなつてんだよ、よくある事じやんかさ、普通に行つて来いよ、いいじやんそれで、な。」

純一は風邪薬を胃の中に入れ、何かを吹つ切るかの様に力強くそう言つた後、窓際へゆっくりと歩き始めた。

純一は圭子の事を強く愛していた。それ故に圭子の心が涼介に傾いている事をずっと前から気付いていた。

純一は心を葛藤させていた。しかし愛情といつ崇高な感情に真摯に向き合つている純一の純粹は、愛する圭子の心を束縛するのではなく、愛する圭子の信じる愛が、信じるがままに成就して欲しいと願っていた。

「俺は大丈夫だから。」

窓を閉め、ベッドに戻つて来た純一は圭子の肩に手を触れ、そう言った。

「・・・でも・・・。」

心の中に決して小さくはなく涼介が居る圭子は、やつぱつたまま動けなかつた。

「・・な、涼介、そうしてくれ。」

純一は“でも”と言つたまま動かない圭子を見つめながら涼介に
そう言つた。

締め切られた部屋には、蝉の鳴き声の代わりに純一がスイッチを入れたエアコンの音が響いていた。

純一はベッドに横たわり瞳を閉じていた。

圭子は純一の顔を見つめていた。

涼介は圭子に対する心の有り方と、純一の本心を察しながらも田を瞑ろうとしている心の有り方を不細工に葛藤させていた。

「何考えるの？」

ラウンジに戻つて来ても何も喋らひとつせず、窓の外を眺め続けている涼介にまゆみはそう問い合わせた。

「・・・俺にもあんな時代があつたなつて。」

まゆみの不満を見越していた涼介は、言い訳を落ち着いた声で届けた後、パラソルの中の若い二人に再び目をやつた。

「・・・・・。」

まゆみは仕方なく窓の外に顔を向けた。

「・・・・・。」

涼介はまゆみとの間に態と沈黙を置いていた。

ほんの何分か前、涼介はまゆみの何気無い問い掛けに動搖し、まゆみの前から逃げ出していた。しかし涼介は動搖した事に因つて、不埒な策略を閃いていた。

（あの日圭子を抱いてたらどうなつてたんだろ・・・。）

涼介はまゆみとの間に流れている不自然な空氣を無視し続けていた。

涼介は純一を部屋に残し、圭子と出掛ける事が間違いではないのだと、何度も何度も自分の心に言い聞かせていた。

横羽線を飛ばす涼介は、胸を締め付けられながらも純一の事を頭の中から消そうと努力していた。そしてそうする事が圭子に対する礼儀だと思い込んでいた。

圭子は涼介の気持ちを察し、助手席で明るく振舞つていた。

照り付ける太陽の下、圭子の黒いビキニは涼介の瞳に余りにも眩しく映つていた。

プールサイドに並ぶ白いビーチパラソルの中、二人はビールで乾杯し合い、プールの中では付き合い始めたばかりの恋人同士の様にはしゃいでいた。

時折二人は芝生の上に並んだデッキチェアに体を横たえ、頭上を低空で頻繁に横切るジェットの巨大な体が残す轟音を、昨年とは明らかに違う感覚で聞いていた。

ディナーの時の圭子は、肩紐の細い花柄に染まったニットのワンピースを纏い、昼間と違つたしあらしさを見せていた。

圭子の日に焼けて赤くなつた頬と肩は、甘いカクテルでその赤い色に優美さを加えていた。

涼介は潤いを増す圭子の瞳に、純粋に“恋”を感じていた。

圭子は部屋へ戻るエレベーターの中で、もう少し酒が飲みたいと涼介に強請つていた。

純一は昨年と同様、ツインとシングルを予約していた。

圭子は極自然にツインの方に涼介を招き入れていた。

涼介は仰々しく気取りながら、何処かの映画を真似てシャンパンと苺のルームサービスを頼んでいた。

圭子は気持ちを整理していた。

涼介は純一の姿を圭子の笑顔に常に重ねていた。そしてその姿を絶対消しては駄目だと思っていた。

午後11時を回った頃、涼介はシングルの窓から羽田空港の夜景を眺めていた。

涼介は純一の姿を搔き消す寸前迄だった自身の心と、圭子への想いを見つめ直していた。

ほろ酔いの体をベッドに伸ばし、天井をぼんやりと見つめていた涼介の耳にドアがノックされる音が届いていた。

涼介はドアを開ける前に、圭子の覚悟を受け止め、圭子を守り抜く強い意志が在るのかどうか自分自身に問い質していた。

圭子は左手に持ったシャンパンを笑顔の横で揺らしながらドアの前に立っていた。

圭子の瞳は艶やかだった。

壁に掛けたブラケットの柔らかな明かりは、ベッドの上で肩を寄せて語り合う二人に恋人同士のシルエットを与えていた。

圭子は涼介から瞳を外さなかつた。

涼介は圭子を見つめ、髪に触れていた。そして心も体も圭子に渡してしまいそうな自分を許して欲しいと何かに祈っていた。

二人は情熱を押し殺した穏やかなキスで、唇から胸の鼓動をお互いに伝え合っていた。

圭子は情熱を押し殺した分、重ねた唇を離そうとはしなかつた。

涼介は圭子を強く抱きしめてしまわない様、情熱を押し殺していった。

ナイトテーブルの上からテレビのリモコンが落ちていた。涼介は沈黙を引き裂いたその音に体を縛られていた。

涼介は圭子の唇を自分から遠ざけていた。そして抱きしめていた両手を圭子の肩に掛け、自分の額を圭子の額に付けたまま動こうとしなかつた。

涼介は静かな部屋に響いた音の中に、圭子を愛する純一の声が混じっていた事を微かに感じていた。

涼介は圭子を見つめ直し、柔らかいキスを一度贈った後、圭子の刺さる様な視線を外して立ち上がっていた。

涼介は背負う“もの”の重さと戦い、敗れていた。

涼介は窓の傍に立ち、部屋からは見えない海を眺めていた。圭子の心は途方に暮れていた。

涼介は黙つたまま、窓の外を見つめ続けていた。
圭子には見つめる場所が無くなっていた。
涼介は圭子へ掛ける言葉を探していた。

圭子は涼介が作る沈黙に必死で耐えていた。そして圭子は今夜涼介が守つた“もの”以上に、近い将来、涼介は絶対に力強く自分を守ってくれる筈だと信じていた。

「もう！また何か考へてる？」「

まゆみは少し拗ねた。

「・・・そうだね・・・大した事じゃないんだけど、シーフォートだつたんだよ。」

涼介は準備していた言葉でまゆみとの会話のテーブルに付いた。「シーフォート？」

「そう、天王洲に第一ホテル東京シーフォートってのがあってさ、そのロケーションが好きでよく使ってたんだよ・・・」こも第一ホテルだからね。」

涼介は言葉に乗る感情をコントロール出来て事に少し満足していた。

「・・・その時の彼女を思い出したって・・・事？」

まゆみは思いを素直に口にした。

「・・・そんなんじやないさ。」

涼介は意味有り気な柔らかい口調で否定した。

「・・・・・。」

まゆみは心の中に湯水の如く湧き出している質問を、一つずつ整理していた。

「・・・映画の時間、まだだよね？」

涼介はまゆみの顔を見つめたまま、そう切り出した。

「もう一杯何か飲む？」

涼介は何かを思い出した様に素早くメニューに手を掛け、素早く言葉を重ねた。

涼介は自身の過去の恋愛について遠慮無くまゆみに質問して貰つ為に、これ以上想い出には触れられたく無いという態度を故意に見せ、まゆみ的好奇心を煽つていた。

「・・・・・。」

まゆみは涼介の事を全て知りたいとする恋心を瞳に溜め、涼介を見つめていた。

「・・・・・。」

涼介は視線をまゆみからメニューに落としていた。

「・・・思い出すぐらい好きだつたの？」

まゆみは差し出されたメニューには興味を示さず、涼介を見つめていた。

「・・・シーフォートの話かい？」

「うん。」

「・・・古い話さ。」

涼介は意識して会話に“溜め”を作り、まゆみから目を逸らした。

「聞きたいな。」

「・・・よくある話だから。」

「綺麗な人だつたの？」

「・・・綺麗な夜景だつたね。」

「もう・・・。・・・ね、彼女、綺麗だつた？」

「・・・そうだね・・・でも、もういいんじゃない？その話は・・・。」

涼介はそう言つて再びメニューに目を落とした。

「・・・。」

まゆみは何処か安心した様な表情にも見える涼介をじっと見つめていた。

「・・・涼介の好きな場所つて興味あるな・・・。」

まゆみは放つて置けば何時までも続きそうな沈黙を避ける様にそう言つた。

「・・・そう？」

「そのシーフォートつて所に私も行つてみたい。」

「誰ど？」

「もう。」

「・・・すいません。」

涼介はまゆみに向けていた穏やかな笑顔のまま視線を変え、左手を軽く上げ、傍を通り過ぎ様としていたウェイターを呼び止めた。

「・・・。」

まゆみは涼介の横顔をじっと見つめていた。

「シャンパンでも頼む？」

「えつ？」

「…じゃあ、ワイン？」

涼介はウェイターを待たせたまま、そんな生ぬるい追求の仕方は全てを吐露する訳が無いとでも言いた氣に、まゆみを敢えて茶化した。

「ううん、…オレンジジュース…かな。」

「了解。…じゃそれとエスプレッソを。」

涼介は待たせていたウェイターにそう言い、まゆみに微笑み掛けた。

「…・・・・・。」

まゆみは涼介の微笑みに対し、ぎこちなく笑顔を作り返している自分の背中に走る悪寒を感じていた。

まゆみは涼介の笑顔に“目が笑っていない”という笑顔を初めて体験していた。しかも初めての相手が涼介だった事に愕然とし、更に“自分の身を守れ”と第六感から囁かれた事をはつきりと感じていた。

「…・化粧室は・・何処にあるの？・・・」

ゆっくりとした動作で煙草に火を点け様としていた涼介に、まゆみはそう声を泳がせた。

「出て右に真っ直ぐだよ。」

涼介は指に煙草を挟んだまま、その手でサングラスを外し、そういう言つた。

「ありがと・・ちょっと・・行つて来るね。」

徐に立ち上がったまゆみは、静かに涼介に背を向けた。

「…・・・・・。」

まゆみの言葉に軽く頷いていた涼介は、暫くまゆみの後ろ姿を追つた後、煙草の煙を大きく吐いて窓の外に目をやつた。

パラソルの中では、若い二人が変わらず笑顔を弾けさせていた。ラウンジに差し込む日差しは強さを維持していた。

（・・・・・。）

涼介は再びサングラスを掛けている。そして再び圭子との思い出を振り返ろうとしていた。

涼介は策略通りまゆみを混乱させていた。そしてその混乱という感覚は、近い将来涼介が唐突に別れを切り出したとしても、破局の予測という名目で、別際の場面に於て絶大な効力を発揮する事を涼介は見通していた。

まゆみは涼介の計算通り、涼介が経験した過去の恋愛の断片だけを舐めさせられ、撤収させられていた。それは今更ながら涼介が危険な男だという印象を、まゆみの潜在意識の中に植え付ける事となっていた。

涼介は羽田東急ホテルで圭子と交わしたキス以来、圭子は純一の彼女だと自分に言い聞かせている“自分”と向き合っていた。

圭子はキス以来、涼介しか見えなくなっていた。

二人は純一に対し異質の後ろめたさを感じていた。圭子は純一と別れる決心をしたまま純一から抱かれ続けている事に苛まれ、涼介は圭子を奪い去りたい衝動を、純一に見せる親友^{づら}面の下に隠し続けている自分に辟易していた。

9月、圭子は大学が夏期休暇中に行う集中講義や就職に関するセミナーに出席すると純一に嘘を言い、涼介と会う為に品川まで頻繁に出向いていた。

圭子は涼介が仕事で品川駅の近くにある直営レストランまで車を走らせるスケジュールを把握していた。そして涼介の元に突発的に入った東京での仕事も、その殆どを逸早く掴んでいた。

圭子は純一や涼介と共に8月が終る前に買った携帯電話で自身の生活を劇的に変えていた。

三人は初めて手にする携帯電話を片時も離さず、意味も無く声を

乗せ合っていた。そして誰に教わるでもなくショートメール機能を駆使し、メールで会話を成立さる面白さを貪る事に有頂天になつていた。

圭子は大学が始まると高輪台や台場だけではなく、携帯電話の俊敏性や機密性を巧みに利用し、横浜で一人きりになる事を避けたいとする涼介の思いを押し切り、涼介の住む本牧で密会する様になつていた。

圭子は携帯電話の威力に絶大な恩恵を受けていた。そしてその恩恵は日を追う毎に圭子の行動を大胆にさせ、その行動に連動していられるかの様に純一に対する嘘も大胆になつっていた。

毎日でも涼介に会いたいと思っていた圭子は、東京での密会を増やし続けていた。涼介はそんな圭子を愛しく思い、時間の許す限り一緒に居ようとしていた。しかし涼介は東京で圭子と会う度に、圭子ではない女性の姿を心の中で日々大きくさせていた。

涼介は圭子と東京で初めて会つた日、明治学院大学の在る白金台迄圭子を迎える為に、仕事先の渋谷から恵比寿の街並みを抜けていた。以来涼介は深まる秋も、木枯らしが舞う冬も、圭子との密会の為に走らせている車を、遠回りを厭わず恵比寿の街中に紛れ込ませていた。

涼介は恵比寿の街並みにマキを思い起こしていた。そして心の大切な部分で眠らせていたマキへの未練を蘇らせ、圭子に会う為の東京で、何時しかマキとの劇的な再会を期待する様になつていた。それは圭子を奪い去る勇気も、最高に愛していたマキの心をもう一度奪いに行く勇気も、ましてや潔く二人共忘れ去る勇気など持ち合つせていない、涼介の弱くて情けない心を象徴していた。

卒業間近、圭子は純一との付き合いを続けながら、涼介に早く体を奪つて欲しいと思つていた。、

圭子は証券会社に就職が決まつていた。配属先も横浜にある支店に決まつていた。

圭子が働く事になる支店は馬車道に面した尾上町にあつた。相生

町には純一の働く会社があつた。真砂町には涼介の働く会社もあつた。

圭子は、三人の距離が更に近づく春を恐れていた。

涼介は、恋人同士という関係や住んでいる場所だけではなく、働く場所までも至近距離になるという圭子と純一の繋がりに、軽々しく立ち入れない運命の様なものを感じていた。

純一はずつと悩んでいた。

純一は圭子が放つあざとい嘘に気付かぬ振りをする事に疲れていった。そして純一は半年近く続いている、今は未だ“さざ波”の様な圭子の嘘が、何時か大きな“うねり”となり、その一撃に眞実が眞実として白日の下に晒され、圭子を愛し続けて来た自分の全てが無になる事を恐れていた。

圭子の卒業式の前日、花咲町のBARで純一と涼介は素直になつていた。

純一は圭子を愛しているが故に、圭子から静かに身を引きたいとする心情を涼介に吐露していた。

涼介は純一の言葉一つ一つに、圭子の心を驚掴みにしている相手に対して、圭子を大切にして欲しいという願いが込められている事に胸を捩じられていた。

涼介の心は葛藤していた。しかし純一の心情に圭子を手放しては駄目だという思いを丁寧に置いていた。

純一はBARのカウンターに両肘を付いたまま少し俯き、涼介の言葉にゆっくりと頷いていた。涼介はそんな純一の姿に、ずっと前に同じ場所で、マキと別れては絶対に駄目だと、純粋な瞳で純一から説得され続けた場面を思い出していた。

卒業式の日、純一は予定より早く涼介を誘い、圭子には内緒で大学の近く迄車を走らせ、式典の終りを待っていた。

予期せぬ二人の笑顔に迎えられた圭子は、驚きの表情に喜びを滲

ませ、三人で居る時は何時もそつだつた様に自然と後部座席に乗り込んでいた。

運転席に涼介が座り、助手席には純一が座り、圭子は座り慣れた場所から一人の横顔と話す為に時折身を乗り出し、三人は忘れていた指定席の心地良さとドライブを無邪気に楽しんでいた。

夜、三人は久し振りに遅く迄グラスを傾け合いながら、三人で居事が最高に楽しかった3年前をそれぞれ思い出していた。しかし三人は暗黙の内に了解しているかの様に、その時代を口に出して迄は懐かしもうとせず、心の中で静かに浸っていた。

（・・・98年の3月つて言つと・・・もう5年前か・・・岐路だつたのかな・・・）

涼介は窓の外に顔を向けたまま、圭子の卒業を祝つた夜の、何処かぎこちなかつた三人を振り返つていた。

「・・・・」

テーブルに戻つていたまゆみは、涼介の横顔を少し寂し気につめていた。

圭子は三人で過ごした卒業式の夜をそつと終わらせ、次の日の朝純一に別れを告げ、純一の部屋を後にしていった。

圭子はどんな時でも優しかつた純一との思い出に心を痛めながらも、涼介と築く事になるだろう新しい日常への期待に、複雑な充実を感じる3月を過ごしていた。

涼介は圭子の卒業式を境に、圭子の事をきつく抱きしめたいといふ思いを募らせ続け、同時に純一への誠実を心の隅に追い遣り続け

る3月を過ぎていていた。

一人が交わした約束の日は、纏わり付く様な雨が降り続く寒い夜だった。

入社式が終わり、横浜支店での業務レクチャーも終えた圭子は、押さえ切れない気持ちを抱え、天王洲アイル・シーフォートスクエアのガレリアで涼介を待っていた。

緩やかな弧を描く、ガレリアを彩る階段から降りて来る涼介の姿を見つけた圭子は、何もかも全てが、此処からまた新しく始まるのだと胸を高鳴らせていた。

一人はアントニオといつイタリア料理店で、バジルの香りが漂うテーブルに少し甘めの白ワインを置き、会話を弾ませていた。

食後二人は第一ホテル東京シーフォートの28階で、ピアノの響きを背にカクテルを寄せ合い、珠玉の時間を過ごしていた。窓ガラスには雨粒が煌き、時折ガラスを伝う煌きは一人の前で流星の様に振る舞い、レインボーブリッジや東京タワーの光が、その流星の力を借りて情緒豊に瞬いていた。

圭子は視界に広がる新都心の夜景に心を奪われていた。
涼介は圭子の澄んだ瞳に心を奪われていた。

圭子は今夜涼介が全てを奪ってくれると信じ、今夜を境にずっと傍に居てくれると信じていた。

涼介は、“涼介”という人間の中で新たに呼吸し始めた圭子を守り抜こうとする魂と、“涼介”という人間の中で何かをずっと守り抜いて来た魂が、情熱を全身に纏う圭子を前にして不細工に葛藤し

始めている事に戸惑っていた。

涼介は紛れも無く圭子が好きだった。しかし紛れも無く純一も好きだった。そして涼介は、自分を好きで居る事に迷っていた。

雨は何時の間にか窓ガラスを音も無く叩いていた。

涼介は決断しなければならない時が迫って来ている事に怖さを感じていた。

涼介は一つ一つ丁寧に、心を込めて圭子に言葉を届けていた。

圭子は涼介から届き始めた言葉の一つ一つを、大切に心の中に仕舞っていた。

長い沈黙が続いていた。

ピアノの美しい音色が二人の間を緩やかに流れていった。
窓ガラスを叩く雨は激しさを増していた。

圭子の瞳は、涼介の瞳の奥に在るものを探かめ様としていた。

涼介は論理や秩序には程遠い不誠実な自己都合を、何時の間にか圭子に向かつて喋り続けていた。

圭子は溢れ出している涙を拭おうともせず、寡黙に涼介を見つめていた。

涼介は圭子に涙を拭いて貰う為に、戯言を繰り返し喋り続けていた。

圭子は頬を伝う涙もそのままに、気丈な瞳で涼介を見つめ続けていた。

いた。

圭子は人生の中の最も美しい転機となる筈だった夜に、一生忘れる事の出来ない傷を心に負わされていた。

圭子は目と耳に届く涼介の全てを必死に耐えていた。しかし心に届く涼介の私慾に塗まみれた情熱だけは耐える事が出来なかつた。

圭子は確信していた涼介の愛に実態が無かつた事に失望し、恋愛を司る感情を麻痺させながら静かにソファから立ち上がり、無言のまま涼介に背を向けていた。

涼介は圭子の強い涙に、圭子の心を1年半も遊び、切り刻んでしまつた自分の生ぬるさを思い知らされていた。

夜景は激しい雨に因つて搔き消されていた。

涼介には見つめる場所が無くなっていた。それでも涼介は圭子を追い掛ける事を迷つていた。

圭子は自分の体が何故震えているのか、なのに何処こんなに体が熱いのか、そして何故涼介を愛していたのかを自問しながら、シーフォートスクエアを飛び出していた。

強い雨は、海岸通りを歩く雨が嫌いな圭子を容赦無く叩き付けていた。

涼介はタクシーを捉まえ様としているずぶ濡れの圭子に追い着いていた。そして何かに縋るかの様に、掴んだ圭子の腕を離そとはしなかつた。

圭子は激しい言葉を涼介にぶつけ、涼介の全てを振り払おうとした。

ていた。

一人は田の前が見えない程の雨に叩き付けられていた。

圭子は只管涼介を拒否していた。

涼介は圭子に何をどう説明すればいいのか分からぬまま、唯、圭子の腕を掴んでいた。

圭子はタクシーの中で泣きじゃくっていた。

涼介は遙か遠くに霞み行くテールランプを目で追いながら、“手を離してよっ！”と叫んだ時の圭子の強い瞳に、初めて会った時の圭子を思い出していた。

1998年4月、圭子は涼介への愛情を第一ホテル東京シーフォートで拒否されて以来、涼介と過ごした膨大な時間を心の中から抹消し、今後一切涼介とは拘わらない事を心に誓っていた。

2001年3月、小倉支店転勤が決まっていた涼介が横浜を離れる前日、純一が企画した三人だけの送別会に圭子は顔を出さず、涼介は圭子に用意していた感謝の気持ちを伝える事が出来なかつた。そして次の年の5月、楽しみにしていた圭子と純一の結婚式に、涼介は仕事の都合で欠席する事を余儀無くされ、二人の傍で一人を祝福する事が出来なかつた。

涼介の心中に居る圭子は、あの夜から5年が過ぎた今も、頬を伝う涙を拭おうとしない圭子のままだつた。

「そろそろ行かない？」

まゆみは涼介に声を掛けた。

「・・・そうだね・・・。」

涼介は圭子との余情に心を向けたまま徐に立ち上がり、どんな内容の会話を、どれ位の間まゆみと交わしていたのか振り返ろうとしていた。

「ふーん、そうだったんだね、涼介って。」

まゆみは立ち上がった涼介を見上げながら笑顔でそう言った。

「・・・そうだね。」

涼介はまゆみが見せている笑顔と同じ位の笑顔を不自然に作り、何を肯定したのか分からぬままテーブルの上に置かれた伝票に手を掛け、歩き始めた。

「ふーん。」

まゆみは涼介の返事に満足しながら立ち上がり、涼介の背中に相槌を投げた。

「何か言つたかい？」

涼介は振り向いた。

「ううん。」

まゆみは少し気障な何時もの涼介が戻つて来ている事を喜んでいた。

ラウンジにはピアノの美しい音色が緩やかに流れていた。

窓側の席は全て埋まり、ロールカーテンが降ろされていた。

一人が背を向けたテーブルにだけ柔らかい午後の日差しが差し込んでいた。

窓の向こうには、パラソルの下で語らう若い二人の笑顔が見えていた。

「こんなに少ないもんかな？」

涼介は座席に腰を下ろした後、独り言の様な息遣いでまゆみに囁いた。

前評判の高かつた映画の封切り初日だといつのに、人影が疎らな館内に涼介は少し驚いていた。

「いいじやない、ゆっくり見れて。」

まゆみは一人の周りに誰も居ない事を喜んでいた。

明かりの落ちた館内は、煌びやかな映像をスクリーンに映し出していた。

まゆみは映像を追いながら、閑散とした館内に感謝していた。
涼介はスクリーンに圭子の幻影を映していた。

(・・・もう俺とは関わりたくないんだろうな・・・。)

5年前の春、第一ホテル東京シーフォートで圭子の気持ちを無思慮に打ちのめし、深く傷付け、その日から圭子という名前を口に出す事すら許されない日々が今も続いている現実に、涼介は罪の深さを痛切に感じていた。

映画は“サビ”から始まる音楽の様に、インパクトのある映像を序盤に配置し、観客を圧倒していた。

まゆみは自分の右手を肘掛に乗つている涼介の左手にさり気なく乗せ、少しだけ涼介の方に体を傾けていた。

スクリーンには路上で舞う砂埃を嫌いながら歩く主役の、背中を丸めた寂し気な後ろ姿が映し出されていた。

(・・・同じかもしんねえよ・・・。)

涼介は左手にまゆみを感じながら、自分が恋愛に晒し続けて来た情熱や、抱き続けている理想の行く末と、風に舞い、水に流され、暗い場所に吹き溜まる塵や埃の中を歩く主役の運命を重ねていた。

25・不純な純粋

25・不純な純粋

映画館を出た二人は、立ち並ぶビルに隠れているだらう落日が染めた朱色の空を真正面に見ながら、太陽の橋を渡ろうとしていた。

「男は愛さなくなつた女に嘘を言つて、本当？」

手を繋ぎたい衝動に駆られながら涼介の右側を歩いていたまゆみは、映画の中に在つたワンシーンを悪戯っぽく聞いた。

「・・その愛に因るんぢやないかな。」

「ふーん・・・。」

まゆみは笑顔の裏で、手を繋ぐきつかけを探していた。

「・・・男は愛してゐる女性にも嘘は言つよ。」

晴れやかな顔のまま黙つているまゆみに涼介はそう付け加えた。

「ほんと？」

「・・・悲しいけど、俺は嘘の無い恋愛をした事が無いんだ。」

涼介はまゆみの笑顔に誘われる様に一度微笑み、更にそう付け加えた。

「そうなの？」

「・・・恋愛に正直だと危険なんぢやないかな。」

「危険？」

「・・・女性の化粧と同じだよ。」

「・・化粧？」

「安心するでしょ？」

「・・そう・・よね・・・。」

「失礼、ちょっと意味が違つたかな。」

「…………」

ささやかな願いを叶えるきっかけが欲しかつただけのまゆみは、自分の何気ない質問が会話として続き始めた事に戸惑い、涼介の例え話にも戸惑い、少し焦り、笑顔を消していた。

「女は愛し始めたら男に嘘を言つつていうシーンもあつたよね、さつきの映画。」

黙つたまま喋らないまゆみに涼介は問い掛けた。

「・・うん・・あつたね・・そんなシーン・・・。」

涼介が放つだらう次の言葉にはしつかりと自分の意思を乗せ、涼介を満足させなけれどする観念に囚われていたまゆみは、恐る恐る相槌を打つた。

「まゆみは俺に嘘を付いてる?」

一人は太陽の橋を渡り終え様としていた。

眼下を流れる紫川は、文字通り紫色に濁っていた。

涼介はまゆみの答えを待たずに正面へ向き直つていた。

涼介は市営の地下駐車場から車を街並みに戻していった。
薄暮を過ぎた小倉市街は、至る所で渋滞していた。

「イタリアンでいいよね?」

涼介は信号機を隠す程の街路樹が立ち並ぶ通りを大手町に向かう途中、まゆみにそう聞いた。

「うん・・・。」

まゆみは躊躇う様にゆつくりと動く車の中で、涼介に喋り掛ける事を躊躇つていた。

映画を見た後の然り氣無さの中、涼介の問い掛けを上手にあしらえず、手も繋ぐ事すら出来なかつたまゆみは落ち込んでいた。

「・・・どうした?・・・元気無いじゃない?」

涼介は車に乗る前からまゆみが見せていた憂鬱な表情をずっと気にしていた。

「ううん、普通だよ。」

「そう・・ならしいんだけど。」

「・・・おなか空いちゃった。」

まゆみは気持ちを切り替え様としていた。

「そうだな、了解。」

涼介は明るく振舞つたまゆみを察し、まゆみが喜び、高揚する様な手段を考え始めていた。

「ごめん、あんなに渋滞してるとは思わなかつたよ。」

涼介はそう言つて静かな車内の空気を動かした。

「・・・でもそれは涼介のせいじゃないよ。」

「・・・ありがとうございます。」

「・・・うん・・・・。」

市街から抜け出し、大手町の閑静な住宅街を抜け、マンションが立ち並ぶ大通りの路上パーキングに車を停め様としていた涼介は、まゆみの思い遣りに感謝していた。

「・・・好きだよ。」

「えっ！・・・」

「あそこだから。」

涼介はまゆみの意表を突き、手段を実行し、柔らかな笑顔をまゆみに贈つた後、さらりとその場面を流した。

「・・・うん・・・・。」

まゆみは涼介の笑顔に安堵していた。そして萎えていたまゆみの心は、涼介の思い掛けない言葉に勇気を貰つていた。

歩道を挟んだパークィングエリアの真横には、成功者の優越を象徴しているかの様に聳^{そび}えるマンションがあつた。一階は全て店舗で流麗に間仕切られていた。涼介はその中にある、女性に評判だというイタリア料理店に行こうとしていた。

「じゃ、行こうか。」

涼介はそう言つて、助手席から降り様としているまゆみに手を差し延べた。

「・・ありがと・・・。」

たつた数メートルの距離でも、それが数秒で終わるとしても、涼介と手を繋いで歩ける珠玉にまゆみは胸を高鳴らさせていた。

2004年の3月、涼介の会社は大手町に在る商業施設の一角にイタリア料理店をオープンする予定だつた。涼介はそのプロジェクトのリーダーとして大手町界隈の市場調査を当然指揮していた。そして自らも五感を駆使し、集めた情報を^{ふる}分け、チームが集約したデータに融合させ、論理立てた方向性や戦略を客観的に検証し、新店舗の柱とする不变のコンセプトを創り上げる作業の真っ只中に居た。

「じゃ、ハウスワインの白を。少し甘いやつを下さい。・・・いいよね？」

涼介は仕立ての良い白いシャツの襟を立て、綺麗な姿勢で立つている女性スタッフにそう告げた後、正面に座つているまゆみに確認した。

「うん。」

まゆみは笑顔で頷いた。

「・・ね、どうして私に選ばせたの？」

相談しながらではあつたが、料理を自分で選び、注文し終えたまゆみは涼介に聞いた。

「・・まあ、それはさ・・・すいません、それとバジリコのフェットチーネを。・・スマールサイズをお願いします。・・・そうだね、まあ、そんな気分だつたんだよ。」

メニューに目を落としていた涼介は、女性スタッフがオーダーを復唱している途中に料理を追加し、まゆみにそう答えた。

涼介は職業意識の下、一度も足を運んでいなかつた人気の料理店をまゆみとのデートの場にする事をかなり前から決めていた。そし

て仕事に全く関係の無い純粋なスタンスを持つまゆみが、女性に評判だという店の雰囲気や味にどんな反応を見せるのかを知る為に、その取り掛かりとしてまゆみに料理を選ばせる事を決めていた。更には食事中、まゆみがどんな仕草や態度を見せても苛立たず、丁寧に穏やかに主導権をまゆみに譲れる続ける事も決めていた。

「・・・良いお店ね。」

まゆみは店内の壁に美しく並ぶ、淡い色使いの絵画を眺めながらそう言った。

「そうだね。」

涼介はまゆみに笑顔を向け、料理にも今夜これからまゆみにも期待していた。

用意周到なのが成り行きなのか全く推し量れない涼介の、緊張と安堵を繰り返し与えてくれる、何れにしても自信に満ち溢れた言動や立居振る舞いにまゆみは惹き込まれていた。そしてまゆみは、ともすれば遊び慣れている様に受け取られ兼ねない涼介のクールさに付き纏う危険な香りは、弱さや照れを隠す為に涼介が会得した技術なのかもしぬないと感じていた。

「美味しい。」

まゆみはワイングラスを唇から離し、ほっとした様な表情でそう言った。

「・・・・・。」

涼介は微笑んでいた。

「このお店は良く使うの?」

「いや、初めてだよ。」

「なんだ。」

「気に入つた?」

「うん・・・素敵。」

「一度来てみよつとは思つてたんだ・・・まゆみでよかつたよ。」

「えつ?」

「・・そういう事さ。」

涼介は二人の声が思いの外店内に響いている事を少し気にしながら、そう言って笑った。

時間の経過と共に一人は声を弾ませ合っていた。

涼介は多くを語り、その話題は趣味や学生時代迄遡っていた。
まゆみは若い男女で賑わう店内の雰囲気に同化した様に笑い、涼介はそんなまゆみに更に軽口を叩きながら、店内をさり気なく観察し続けていた。

「今日は涼介の色々な話聞いたやつたね。」

「そう?」

「うん・・・嬉しかつた。」

「そう・・・良かつたよ。」

「・・涼介って高校の時サッカーやってたんだね・・じゃ、サッカーの試合とかよく見るの?私も覚えなきや。」

「そうだね・・・ね、その話はまた今度にしようよ。そろそろ行こう。」

店内の客層に因つて見えて来た、この店が人気だという幾つかの要因を頭の中で整理し終えていた涼介は、まゆみが切り出した新たな話題を切り捨てた。

「・・うん。」

まゆみは想像以上に楽しい食事が出来た事に幸せを感じていた。

店を出た二人は歩道を横切ろうとしていた。
外は寒さを感じさせる風が吹いていた。

「次は美味しい所に連れてくよ。」

涼介はまゆみを見ず、料理に期待していた自分を嘲笑するかの様にそう言って、車のハザードランプを点滅させた。

「美味しかった・・よ・・・。」

まゆみは喋り終わる前に“はつ”としていた。

「・・そ、じやあ、取り敢えず良かつたのかな。」

「あ、でも・・そうね・・もう少しお肉が・・スペイシーでも良かつたかも・・・。」

「・・了解。」

運転席側に回り込んでいた涼介は、屋根越しのまゆみに笑顔を見せ、そう言った。

(またやつちやつた・・・。)

まゆみは縁石の手前で立ち止まっていた。

(・・・涼介！・・・ほんとはそんなに美味しいなんて思ってなかつたんだよ！)

まゆみは車に乗り込んだ涼介に向かい、心で叫んだ。

(もう・・・。)

味わっていた幸福感の為に、突然投げられた涼介の言葉を半ば上の空で聞いてしまった事をまゆみは悔いていた。そして不用意に発した自分の一言に因つて、涼介に味の分からない女だと思われているだろう事実に、再び心が萎えそうになっていた。

車は滑る様に街路樹が立ち並ぶ通りを走っていた。
涼介は黙つたまま運転していた。

「・・・次は涼介がよく行くお店に連れてつてね。」

まゆみは意を決し、明るくそう言った。

「ん？・・ああ、そうだね、了解・・・。」

まゆみでも、市場調査でも料理の味でもなく、天王洲アイルで過ごした圭子との一時を懐かしむ為に、店のメニューにあつたバジリのフコットチーネを敢えて注文した自分の哀しい性質を振り返っていた涼介は、耳に届いたまゆみの一言に虚を突かれ、少し慌ててそう言葉を返した。

「・・・・・。」

まゆみは、“了解”と言つた涼介の思いも寄らない笑顔に虚を突

かれていた。

涼介は食事をした店の直ぐ近くに在る大手町Ｉ・Ｃで都市高速道路に乗り、小倉市街から離れる車線でアクセルを踏み続けていた。

「ね、何処に行くの？」

涼介の穏やかな横顔に、路上で犯した自分の失態をもつと丈夫に繕わなければとする気持ちよりも、涼介を深く知る事が出来る今夜への期待に胸を支配され始めていたまゆみは、そう言つて車内に暫く続いた静けさを終わらせた。

「・・・コンビニに寄つて、ラブホに行こうとしてる。」「

涼介の心は不純な純粋に支配されていた。

「・・・そうなの？・・・」

「・・・却下して飲みに行く？」

「えつ、・・・そういう意味じゃないけど

「じゃ、何？」

「・・・コンビニは分かる様な気がするけど・・・リョウの家に・・帰るんじゃないの？」

「そうだね・・・でも、それは次にして貰いたいんだ。」

「・・・都合の悪い事でもあるの？」

「見せたくない物があるんだ。」

「・・・見せたくない物つて・・誰にも？・・それとも私にだけ？」

「まあ、両方だね。」

「そう・・でも・・そんな事言われると見たくなっちゃう。」「

「だろうね。」

「・・ねつ、何があるの？・・見せて欲しいな。」「

まゆみは明るくせがんだ。

「・・・・・・。」「

涼介は黙っていた。

「・・ひよつとして・・女性用の歯ブラシがあるとか？」

「ふつ・・・・。」「

涼介はまゆみの一言に少し吹き出し、含み笑いを見せた。

「・・・何故笑つたの？」

「・・・実はね、あなたが手ぶらで來ても一、三泊は出来る女性の物が部屋中にあるんだ。」

「もう、またそんな事言つて誤魔化そつとしてる・・・ね、本当の理由は？」

まゆみは笑顔でそう言つた後、故意に体を涼介に寄せた。

「本当だよ。」

涼介は前を見ていた。

「・・・本当の事言つて欲しいな・・・。」

「・・・・・。」

涼介は黙つていた。

「・・・涼介の部屋が見たい・・・。」

まゆみは体を綺麗な姿勢に戻し、正直な思いを口にした。

「・・今日はラブホの広い部屋でゆっくりしたい気分なんだ・・・。そんな理由じゃ駄目だろうけど、そんな理由なんだ。」

甲高いエンジン音が響く車内で、涼介は低い声をまゆみの体に押し込む様に響かせた。

「・・・・・。」

まゆみは涼介を見つめながら考えていた。

涼介はまゆみに横顔を向けたまま、自宅から遠ざかる方向にアクセルを踏み続けていた。

「・・・今度は絶対涼介の家だよ。」

まゆみは折れた。

「・・了解。」

涼介は真っ直ぐ前を向いたままそう答えた。

車はオレンジ色に光るナトリウム灯の下で速度を保つていた。車内には再び静けさが訪れていた。

まゆみは知らない街の夜景眺めながら、会話の途切れた空間を埋める話題を探していた。

（男は愛さなくなつた女に嘘を言う、か・・・。）

涼介は自宅に散らばるエリカの物を思い浮かべながら、昼間に見た映画のワンシーンを思い出していた。

涼介は横代I・Cで都市高速道路を降り、そのまま10号線バイパスを下っていた。

「何か欲しい物ある？」

左車線沿いに小さくコンビニエンスストアの看板が光っていた。

「私も降りる。」

まゆみは小さな笑顔を涼介に向けていた。

涼介はコンビニエンスストアを出て直ぐバイパスに別れを告げ、万が一でもエリカや知り合いと遭遇する事は無いだろう、自宅から遙か遠い場所に在るラブホテルに行き着く為に、旧10号線に続く県道に車を乗せていた。

涼介は淡々とスマートに車を動かしながら、ある意味純粋に、叶えられようとしている欲望を心の中で整理し始めていた。

まゆみは涼介に喋り掛ける事が出来ず黙っていた。

まゆみは今夜涼介のプライベートを覗き、涼介の生活習慣や癖を肌で感じ、涼介をもつと好きになりたいと思っていた。故にまゆみは車の中で、今夜何故ラブホテルなのがもう一度聞くチャンスを伺つていた。しかし涼介はそんなまゆみの思いを透かしているかの様に相変わらずまゆみに視線を向けず、近寄り難い雰囲気を醸し、“冷たい”と形容しても不思議ではない態度で運転していた。

「煙草吸つていいかな？」

涼介は言った。

「・・・いいよ・・・。」

走る車の周囲には“夜景”と呼べるもののがなくなつていた。

路面にはヘッドライトの輪郭がはっきりと浮かび上がつていた。

まゆみは時折独り言の様に喋り掛けて来る涼介と、車が向かって

いる遠い先にポツンと一箇所、煌煌と光を放つ建物が在る事に緊張を強いていた。

涼介が明るくした室内は、クールモダンスタイルの広い部屋だつた。部屋の中央にはキングサイズのベッドが配置され、バスルームはガラスの壁で間仕切られていた。

「お疲れ・・俺ん家じやなくてごめんな。」

涼介はラブソファーの前にあるセンター テーブルにコンビニエンスストアのビニール袋を置き、上着を脱ぎながらまゆみに向かってそう言つた。

「うん・・・。」

まゆみは車の中で余儀なくされた緊張を増幅させ続けていた。

「「めん、グラスいいかな？」

ラブソファーの上でビニール袋から白ワインを取り出し、コルクを抜こうとしていた涼介はまゆみにそう声を掛けた。

「うん・・・。」

部屋から見えるバスルームと、会話する素振りを見せない涼介に戸惑いの表情を浮かべて立ち尽くしていたまゆみは、何処かぎこちなくカッピボードの方に歩き出した。

（・・・・・。）

涼介は白ワインと一緒に買った氷の袋を破りながら、車の中に携帯電話を懸かねと置いて来た事が正解だつたのかどうか振り返っていた。そして願わくは今夜エリカからの連絡が無い今まであつて欲しいと思つていた。

（・・・・・。）

センター テーブルの上にグラスを置いた後、その流れの中で自然に涼介の隣に座る事が出来なかつたまゆみは、何となく窓の方へ歩き出し、居所無さ氣にカーテンを開け、見るつもりの無かつた夜景

を瞳に映していた。

「氷入れる？」

涼介は手元に携帯電話が無い方が、今夜入るかもしない受信や着信の全てに、明日、説得力のある言い訳が出来る筈だと自分の考えを括り、満を持してまゆみとの時間を動かし始めた。

「・・氷？・・・。」

ラブホテルに入つてからずっと涼介の優しさに触れたがっていたまゆみは、部屋の明かりに因つて窓ガラスに映り込んでいた涼介から目を離し、涼介の方へ振り向いた。

月が見えていた。

まゆみが開けたカーテンの間から、ラブソファーに座る一人の背中を見守る様な月が見えていた。

「・・・ごめんな。」

涼介はまゆみにグラスを渡し、そう言った。

「・・ううん、もういいよ。」

「コンビニで買つたやつで。」

「えっ？・・もう・・・全然大丈夫。」

ラブホテルに来た事を謝つているのだと思つていたまゆみは、そう言つて笑顔を見せた。

「・・・俺ん家じゃなくてさ。」

「え？・・ありがとう。・・・涼介らしいね。」

素直な気持ちをウイットで誤魔化す様な、少し照れ屋な涼介の一面に一瞬触れた気がしたまゆみは、強いられていた緊張から解放され様としていた。

「じゃあ、お疲れ。」

「・・・乾杯。」

まゆみは満面に笑みを浮かべ、グラスを鳴らしに行つた。

涼介は時間をゆっくりと流していた。

まゆみの瞳には柔らかさが戻っていた。

「・・・ワインに氷入れたりするんだね。」

「そうだね、たまにそうやって飲みたい時があるんだよ。」

「・・・今度涼介の家でご飯作ってあげる。」

「了解。」

「・・どんな料理が好きなの?」

「そうだなあ・・・。」

「私、結構料理得意なんだから。」

「・・そう・・じゃあ・・そうなると和食っていう流れだよな。」

「いいよ、煮物でも何でも。」

まゆみは涼介が自分の彼氏である事を実感していた。そしてまゆみはこのままずっと涼介と喋り、涼介との距離をもつと縮めたいと思つていた。

「了解。じゃ、よろしく。」

涼介は背中で優しく輝く月の様に穏やかだった。しかしその心中は、青く純粋な月に遠く及ばない不純な感情に支配されていた。

「しり・・・・。

涼介は突然人差し指を口に当て、心地良さそうに喋っていたまゆみの動きを止めた。

「・・・・・・。」

まゆみは涼介の強い眼差しに、浮かべていた笑顔に戸惑いの表情を加えた。

「・・・・・・。」

涼介はワインで少し赤く染まっていたまゆみの頬にゆっくりと近づいた。

ソファーに浅く座つていたまゆみは、涼介の圧力に因つて体を背凭れに倒す事を余儀なくされていた。

突然の出来事に、暫くの間まゆみは驚きの表情を浮かべたまま涼介のキスを受け入れていた。

二人の傍を時間が静かに流れていた。

涼介は重ねた唇を離そとはしなかった。

和やかに交わしていた会話が、何の脈略も無くキスに因つて突然終わるなどと考えてもいなかつたまゆみの心臓は、体中に激しい鼓動を伝えていた。

涼介は強いキスでまゆみを圧倒しながら、左手に持つたままだつたワイングラスを見えていないセンターーテーブルに置いた。

まゆみはからうじて両手を涼介の肩に掛けていた。しかしその両手は涼介を受け入れ様とする動きではなく、涼介の圧力から身を守ろうとする動きを見せていた。

涼介の左手はまゆみの腰を抱いていた。同時にまゆみの肩に掛けていた右手は、まゆみの髪を搔き乱し始めていた。

まゆみは身動きが取れなまま、涼介の激しいキスに全てを焼き尽くさんばかりの熱を体から発していた。

「はあっ、はあっ・・・」

唇を涼介に塞がれ、呼吸を乱し続けていたまゆみは、堰を切つて流れ出した水の様に声を出した。

まゆみの唇に自由を奪えた涼介は、穏やかな眼差しでまゆみを見つめていた。

まゆみは涼介を見つめられず、頬を赤く染めていた。

(・・・あっ。)

突然涼介にジャケットを両肘の辺り迄剥がされたまゆみは、心中で叫んだ。

肘まで落ちたジャケットに両腕を引っ張られたまま胸を強く掴まれているまゆみは、どうにかして涼介の背中を抱こうとしていた。

「ああっ・・・」

鈍い刺激に代わり、針で刺された様な刺激がまゆみを襲った。

涼介はオープンでチキンを焼く様にゅっくりと時間をかけてまゆみの胸を甚振った後、ニットとブラジャーを同時に摺り上げ、乳首を噛んでいた。

「あっ、ああっ・・・」

まゆみは自分の胸にある涼介の頭を両手で掴み、乳首から体中に走る羞恥を抑え切れず声を漏らし続け、大きく体をくねらせた。涼介はまゆみの胸を乱暴に可愛がっていた。

まゆみの体は、身を守ろうとする本能と快感を貪ろうとする本能

に因つて、どうしようもなく熱く濡れていた。

涼介の左手がまゆみの大切な部分に伸びた。

(ああ・・・駄目・・・。)

まゆみは恥ずかしい程濡れ溢れている自分の体を涼介に暴かれな
い様、反射的に両膝に力を入れた。

無駄な抵抗だった。

(ああ・・・。)

まゆみは涼介に乳首を噛まれたまま、右足をソファーの上に乗せ
られ、立膝を付かされ、脚を大きく開かされた。

膝の上で止まっていたまゆみのスカートは、右足の付け根まで擦
り上がっていた。

まゆみは滑らかに動く涼介の指先に為す術が無いまま、切ない声
を小刻みに漏らしていた。しかしその声は涼介の指先を更に自身の
大切な部分へ誘う事となつていた。

「ああっ・・うつ・・・。」

まゆみは体中に突然襲つた強い刺激に因つて零れた声を、涼介の
唇で再度強引に殺された。

涼介はストッキングを下げるパンツをずらし、当然の様に指先を
まゆみの奥深くで蠢かぶさかせていた。

まゆみは髪の毛の先に迄涼介の指を感じていた。

(ううっ、あっ・・・。)

まゆみは唇の自由を奪われたまま、ソファーの上の右足を背凭れ
に掛けられた。

両足を更に大きく広げられたまゆみのスカートは更に上へ擦り上
がつた。

まゆみは明るい部屋の中で涼介に両手の自由を奪われ、服を一枚
も脱がないまま大切な部分だけを曝け出されていた。

激しく動く涼介の指先は何度もまゆみを仰け反らせていた。

(はあっ、あっ、駄目・・・。)

まゆみは唇を塞がれたままソファーの上に倒れ込んだ。

ストッキングは左足首辺りで小さくなっていた。

まゆみは羞恥に焦がされた意識の中で、部屋の明かりを消して欲しいと切望していた。

「はあっ、はあっ。」

ジャケットを剥ぎ取られたまゆみは呼吸を乱したまま、涼介の胸を探した。しかしまゆみは涼介に抱き付く事を許されず、体を起こされた。

まゆみは寄り添いたい瞳を涼介に向けていた。しかし涼介はまゆみの瞳を見ず、両手でまゆみの髪を搔き乱しながらゆっくりと立ち上った。

「うう・・・・。」

その瞬間、まゆみは瞳を閉じた。同時にまゆみは両手で涼介の腰を強く掴んだ。

口の中で涼介が蠢いていた。

熱く、堅い涼介が喉の奥に刺さっていた。

「うぐう・・・うう・・・・。」

暴君と化した涼介の恥辱にまゆみは何度も咽せ返していた。

(・・・涼介・・苦しいよ・・・)

まゆみは痛め付けられていた。しかしまゆみは過去に経験した事の無い興奮を感じ始めていた。

「はあっ、はあっ・・・・。」

まゆみは口の中から溢れ出している唾液もそのままに、体を反転させられた。

両膝を床に付かされ、ソファーの背凭れに横顔を押し付けられたまゆみの呼吸は乱れ続けていた。

涼介はまゆみの両腕を取り、まゆみの背中で掴んだ。

(ああ、いや・・・・。)

まゆみは声にならない声でせせらやかな抵抗をした。

「あっ。」

まゆみは背中を丸める事が許されず、パンツを両膝まで下ろされた。

涼介は熱く濡れた敏感な部分を攻めていた。
まゆみは刺激と快感を声に変えていた。

(涼介・・駄目・・おかしくなっちゃう・・・。)

そう思つた直後、まゆみは涼介との最初の夜だからこそ最後まで守つていたかつた恥じらいを自ら剥ぎ取つた。

「あっ、あっ・・・。」

まゆみは辿り着けそうで辿り着けない頂点にストレスを感じ始めていた。

涼介の指は、まゆみの中で激しさと優しさを何度も繰り返していた。

(・・・涼介・・・もう焦らさないで・・・。)

まゆみは気が狂いそうな程の刺激に体をくねらせながら、滅茶苦茶にして欲しいと心の中で懇願していた。

「あっ、もう駄目・・・。」

まゆみは消え入りそうな声で涼介にそう訴えた。

「あっ。」

涼介が欲しいと思つた瞬間、まゆみは貫かれていた。

まゆみの体は激しく前後に揺れていた。

涼介は優しさとは無縁のリズムでまゆみの子宮を痛め付けていた。
強い刺激は電流となつてまゆみの体を駆け巡つていた。

まゆみは体が粉々になりそうな程涼介を全身に感じ、脳が痺れ、悦びを叫びに変えていた。

「はあっ、はあっ。」

まゆみは涼介に後ろから叩き付けられながら両腕を引っ張られ、上体を起こされた。

「うつ・・・・・。」

まゆみは唇を塞がれた。

乱れた髪が、まゆみの顔を覆っていた。

捩ねじれた体は激しく貫かれ続けていた。

胸は驚掻みにされていた。

(はあっ、はあっ、ああ・・・・・。)

まゆみは愛する人に犯される事に興奮していた。そして快感は貪るものだと覚醒していた。

(・・・ああ・・涼介・・駄目・・・・・。)

まゆみは涼介に未知の世界へ連れて行かされ様としていた。そしてその頂点は、過去のどの頂点よりも鮮明な記憶として体中に刻まれ様としていた。

「・・・・・・・。」

涼介は荒々しく傲慢なセックスをしている自分を、もう一人の涼介に俯瞰させていた。

涼介はまゆみに残していた最後のカードを自虐的に切っていた。最初で最後になるかもしれないリスク一な賭けだという事は理解していた。しかしそんなセックスが、唯一二人の接点を見つけ出す為の決定的な行為だと思い込んでいた。

涼介はまゆみを叩き付けながら、まゆみの見せる反応が視覚と聴覚から自身の脳に強く届いてくれる事を願っていた。そしてその反応に夢中になり、過去味わった事の無い興奮をまゆみと共に味わいたいと思っていた。

涼介はまゆみとの相性をセックスに委ねていた。そしてまゆみを愛する為に、自身に取つて都合の良い弁解の様なものをセックスの中に見つけ出そうとしていた。

ぬるい独善だった。

涼介はまゆみとのセックスに陶酔する自分が居るのかどうか確認する為に、言葉ではなく体でナルシズムを論つ^{あげつら}ていた。それは自身を最大限満足させる為の恋の条件として、収入や学歴をその人物の価値として崇拜する女性の心理と似ていた。或いは、たかが一つや二つの恋愛経験だけで悟り切つた様に恋愛論を振り翳す女性の心理と似ていた。

涼介はまゆみを貫き続けながら、もつと狂つて欲しいと思つていた。

まゆみは優しさが在るからこそ成り立つ極上のセックスとは別の極上に、何度も昇天つ^いていた。

27・呪縛との決別

27・呪縛との決別

(・・・・・)
涼介の畳に、ソファーに座つてテレビを見ているまゆみが映つて
いた。

(・・・何時だらう・・・・・)
丸一日眠つてしまつた様な感覚に襲われていた涼介は、ベッドの
上で体を捩じり、コントロールパネルの横に置いてあつた腕時計に
手を伸ばした。

(12時半か・・・・・)
涼介は今朝8時30分位に一度目が覚めた時、少しだけまゆみと
会話した事は覚えていた。

(・・・・・)
涼介は体を捩じつたまま腕時計を右腕に墳め、醒める前の脳が毎
朝行うルーティン通り、セブンスターの箱に手を伸ばした。

「おはよう。」

ベッドで煙草を吸おうとしている涼介に気付いたまゆみは、そう
言つて優しい笑顔を涼介に向けた。

「・・・おはよう。」

涼介は上半身を起こし、煙草に火を付けた後、朝の挨拶をまゆみ
に返した。

「良く眠れた？」

「まゆみは立ち上がりつた。

「最高に眠つてたよ。」

涼介はそう答えながら枕を背中に回し、ベッドをリクライニングシートの様に仕立てて足を投げ出した。

「・・・私もさつきまで最高に寝てた。」

まゆみはベッドに歩み寄りながら着ていたバスローブの裾を丁寧に重ねた後、涼介の足元に座り、嬉しそうにそう言った。

「そう。」

涼介は微笑んだ。

「・・・コーヒー入れる？」

「そうだね、ようしく。」

まゆみは涼介を背にし、カップボードの前でコーヒーを注いでいた。

開いているカーテンの間から差し込む太陽の光は、今朝涼介が目覚めた時の様にはつきりとした輪郭を作る程強さを保つていなかつた。

涼介はベッドから見える室内の光景を、時折煙草の煙で朧^{おぼろ}げにしながらまゆみとの事を振り返つていた。

「ティーバッグ式のコーヒーも結構美味しいね。」

「まゆみはソファに座つていた。」

「・・・そうだね。」

涼介はベッドの中に居た。

「涼介、コーヒー好きなんだよね？」

「好きだよ。」

「・・・コーヒー豆とか凝つてるの？」

「・・・ね、シャワー一緒に浴びようよ。」

涼介は砂糖の入つていたコーヒーの甘さと、鈍く続くかもしけな

まゆみとの会話を嫌つた。

「えつ、やだ、恥ずかしいもん。」

「そう?」

「だつて・・それに私、もうシャワー浴びちゃつたもん。」

「そう・・・。」

涼介はまゆみの拒否をあっさりと受け入れ、照れているまゆみに笑みを見せながら徐々にベッドを抜け出した。

「・・・・・。」

まゆみは涼介に何か言おうとしたが、全裸を気にする事無く歩き始めた涼介に俯いた。

ラブソファーに座り、綺麗な姿勢でテレビを見ているまゆみの後ろ姿がガラス張りのバスルームから見えていた。

「ふう・・・。」

涼介はまゆみから視線を切り、シャワーに顔を叩かせ、お湯を深い息で弾いた。

(・・・松岡まゆみ・・・真面目な女性なんだよ・・・それに比べて俺ときたら・・・酷い男だな・・・。)

バスルームの方を一度も見ないまゆみの心の中を勝手に覗き、二人の結論を頭の中で整理していた涼介は、そんな冷徹な自分が一端の孤独感に襲われている不条理に辟易していた。

「出ようか。」

身支度を整え終えた涼介は、上品な姿勢でベッドに座つていたまゆみに言つた。

「うん。」

既に隙の無い姿に自分を仕上げていたまゆみは、笑顔で立ち上がつた。

涼介はまゆみを待つていた。

まゆみは動かない涼介との距離をゆっくり縮めていた。

「・・・・・。」

まゆみは涼介の柔らかくて優しいキスをもつと感じていたいと思つていた。

「・・・・・。」

涼介はまゆみに贈つたキスを後悔していた。

「・・・・長居しちゃつたね。」

はにかみながらまゆみはそう言った。

「・・・そうだね・・・。」

まゆみに見せる笑顔の裏で、涼介は自分の行為の愚かさを嘆いていた。

ラブホテルの駐車場は冷たい風が吹き抜けていた。
まゆみは涼介の後を追いかける様に歩いていた。

(2時半か・・・。)

涼介は頬を撫でる風を嫌う仕草に紛れて腕時計を見た。

(本当に長居しちまつたな・・・。)

涼介の頭の中は、昨夜車の中に置いたままにして来た携帯電話に届いているだらう声や文字に飛んでいた。

「涼介。」

まゆみは運転席側に回り込んだ涼介を呼んだ。

「・・・?」

涼介は車越しにまゆみを見た。

「好きよ。」

まゆみは微笑を満面に浮かべていた。

「・・・了解・・・。」

“涼介の御株を奪つたよ”とでも言いた気なまゆみの屈託の無い笑顔に涼介は、“恋愛”というものに何時の間にかぬく思い上がつ

た態度で接していた自分を見つめさせられていた。

「何か欲しいものある?」

車に乗り込む間際、まゆみの前では携帯電話に触らない方がいいと直感していた涼介は、小倉市街へ繋がるバイパスに乗る前にコンビニエンスストアに寄ろうとしていた。

「・・・涼介が欲しい・・・ははっ。」

まゆみは涼介との時間を満喫していた。

「・・・・。」

涼介は作り笑いを浮かべた横顔をまゆみに晒し続けながら、シーホークホテル最上階のBARで同じ様なジョークを聞いた時に全身を襲った絶望的な鈍痛を思い出していた。そしてまゆみと自分の心の状態が真逆である事を改めて気付かされていた。

「・・・ね、コンビニに寄るの?」

「そうだよ・・・買つて来るよ、欲しい物があれば。」

「いいよ、私も降りる。」

「・・・そう?・・・でも煙草買うだけだし、直ぐ戻つて来ちゃうよ。」
まゆみを車に残し、コンビニエンスストアの中で携帯電話を開く事を画策していた涼介は、まゆみの意思に抵抗した。

「そうなの?・・・だつたら私が買つて来てあげる。」

まゆみは笑っていた。

「いいよ・・居なよ車に。ゆつくりしててよ。」

涼介は車内の雰囲気を壊さない様、優しい口調で穏やかに抵抗を重ねた。

「大丈夫。・・・ね、一緒に。」

「・・・そう?・・・じゃあ、悪いけど、セブンスターとボルビック、いいかな。」

「行かないの?」

当然一人で行くものだと思っていたまゆみは、涼介の答えに少し

驚いた。

「・・・一人で行く程の事でもないよ。」

「行こうよ。」

「・・・いや、いいんじゃない? どっちか一人で。」

「・・・何かおかしいよ涼介・・・ひょっとして・・照れる?」

まゆみは意味深な笑みを浮かべていた。

「・・・まあ、そんなとこかな・・・。」

涼介は予測していなかつたまゆみの粘りに、不自然な言葉を連ねて対応している自分に呆れていた。

「しようがないなあ・・・。」

まゆみは涼介をからかう様な仕草を無邪気に見せていた。

「・・・・・。」

涼介は苛立ちが顔に出でていなか気になっていた。そしてまゆみがこのまま女性特有の第六感を働かせない事を祈っていた。

上空は何時の間にかミティアムグレイの雲で覆われていた。
まゆみの居ない車内にはエンジンのアイドリング音だけが響いていた。

(何でこんなに会いてえんだよ・・・。)

涼介は携帯電話の画面を見つめ、そう強く思っていた。

携帯電話には純一からの着信が一度残っていた。メールもエリカからの二通以外に魚町店の店長と恭子から一通ずつ届いていた。しかし涼介はエリカ以外の連絡には見向きもせず、エリカのメールだけを何度も読み返していた。

(・・・・・。)

涼介は携帯電話を閉じ、ヘッドレストに頭を乗せた。そしてフロントガラスの向こうに見える店内の様子を漫然と瞳に取り込みながら、エリカに心を奪われている自分を客観していた。

「・・マキ・・・。」

エリカでもまゆみでもなく、そう呟いた涼介は重く広がる低い空に目を遣った。そして10年前、横浜の空の下、一人が蜜月だった

頃の元気なマキの姿を思い浮かべた。

涼介はマキから惜しみ無く注がれていた愛情を思い出していた。更にその愛情に答え様としていた自身の純粹な情熱を思い出していた。しかし同時に涼介は、その美しい時代を恋愛の理想とし、マキを心の中に君臨させ続けて来た自分自身と決別すべき時が来ている事を痛感していた。

「ふう・・・」

涼介は鼓動を落ち着かせる為に大きな息を一つ吐き、携帯電話を再び開いた。

日曜日の午後、涼介の立ち寄ったコンビニエンスストアの駐車場は車で埋まっていた。

まゆみは混雑しているレジの最後尾に並んでいた。
(・・・会いたい・・・)

涼介はその思いと共に、目に映るまゆみと脳裏を過ぐるマキの全てを消し去り、メール画面に心の声を綴り始めた。

新規メール作成 宛先 エリカ

エリ、昨日はごめんな。

会いたい。

今夜迎えに行くから。

サブメニュー 編集 戻る 14:46

降り注ぐべき太陽の光を遮られている街並みは薄暗さを増していった。

まゆみは商品を抱え、レジの前で自分の順番を待っていた。

涼介は液晶に綴つたエリカへの決心を見つめ続けていた。

「・・ふう・・・長い呪縛だつたな・・・」

自ら心に嵌めていた“マキ”という枷を外した涼介は、大きな息を一つ吐いた後そう呟き、店内のまゆみへ徐に視線を向けた。

「はあ・・・・。まつたく・・・・。」

涼介はエリカへのメールを左手で握ったまま、今度は深い溜息を吐いた。

(自業自得なんだよ・・・・。)

呪縛と決別し、一人の女性を愛する決心をした涼介の心には、まゆみとのぬるい関係の清算を専更等閑にする事の出来ない心理が齎もたらされていた。

涼介は徐々にまゆみから離れて行こうと企んでいた。しかし今の涼介にとってその企みは、左掌の中に在るエリカへのメールの価値を無にする事に等しかつた。

(・・・全部自分が蒔いた種じゃねえか・・・だから自分で刈り取るしかねえんだよ・・・・。)

涼介は目に映る現実を、半ば捨て台詞の様な言葉で嘆いた。

本来ならば、或いは客観的には、涼介はまゆみに晒し続けて来た愚かな姿を反省し、真摯な態度でまゆみに詫びを入れる場面を考える状況だった。されど主觀と客觀の狭間で自分を俯瞰している涼介の心は、誠実さが求められる客觀とは正反対の憂鬱な思惑に支配されている主觀の方に倒れ込もうとしていた。

(・・・何て男なんだ、まつたく・・・・。)

詰まる所、涼介はエリカへの愛情やマキへの感謝の気持ちを差し置き、まゆみから上手く逃れる術を探していた。更にはまゆみに対する罪悪感からも逃れ様としていた。

「ぬるい野郎だ。」

涼介は自分を切り捨てた。しかしまゆみに切り出す別れの場面を考える事は止めなかつた。しかもまゆみが自分に愛想を尽かす決定的な場面を貪欲に考えていた。

まゆみは支払いを済ませ様としていた。

涼介は考えを纏められなかつた。

「くそつ。」

涼介は下劣な自分に品の無い言葉を放つた。そしてまゆみから視

線を切り、携帯電話の液晶画面に視線を落とした。

「畜生・・・。」

涼介は一人の女性に愛を誓った時の高揚感や躍動感を享受出来ないまま、左手で握つたままだったエリカへの決心を送信した。

「お待たせ。」

まゆみは助手席に潜り込むと同時にさつさつと話した。

「ありがとう。」

「ここに置いとくね。」

まゆみはボルビックをドリンクホルダーに入れた後、セブンスターをコンソールボックスの上に置いた。

「・・・ありがとうございます。」

車を動かし始めていた涼介は、ハンドルを切り返しながらまゆみを見ずにもう一度そつそつと話した。

「ガム食べる?」

涼介を土曜日の夜から日曜日中、ずっと独占する事が初めて会つた時からの念願だつたまゆみは、その日曜日の午後、涼介が運転する車の助手席に座つていていた事に優越を感じていた。

「いや、いいよ。」

涼介はまゆみを見る事無く、旧10号線に車を放り出す為に左ウインカーを点滅させ、走る車の切れ目に視線を投げたままそつそつと話した。

(ここまま暫く付き合つ事も出来る・・・来週振られようと思えば

それも出来る・・・。)

涼介はハンドルから手を離し、瞼を閉じていた。

(ほんと腐つた野郎だ・・・。)

まゆみの気持ちなど丸で考えず、まゆみの心を踏み躡る場面だけを“いけしゃあしゃあ”と考えている自分のぬるい心に嫌気が差した涼介は、心の中でそう吐き捨てた。

(・・・今朝あんなに強い日差しで起こされたつてのに・・・)

自分の醜い算段から逃避する様に、涼介は目の前に重く広がる「

ディアムグレイの低い空に視線を投げ出した。

車は旧10号線からバイパスへ合流する交差点の最前列で信号待ちをしていた。

青く光っていた歩行者用信号は点滅を始めていた。

(・・・・・。)

視界の隅に入り込んで来た青色の点滅に一瞬目を向けた涼介は、再び瞼を閉じた。

(・・・両方とも駄目だ、今日別れよう。)

アクセルを踏み込む前に結論を下した涼介の心は、空の色と同じ位鈍よりとしていた。

(・・・涼介、何考えてんだろ・・・。)

綺麗な姿勢で助手席に座り、涼介が創る会話の無い空間を心地良く受け入れているまゆみは、時折澄んだ瞳を涼介に向け、この先ずっと涼介から貰えるだろう愛情に寄り添つて行く自分の未来を想像していた。

「俺、雨とデブ嫌いなんだよ。」

二人の間に続いていた沈黙を画す涼介の最初の言葉は、優しさとは無縁の、自身の感情をそのまま口にする事に吟味も躊躇いも無い安易な自己主張だった。

「・・・私も雨は好きじゃない。」

「なんかデリカシー無いでしょ？ 雨もデブも。」

「・・・でも好きでしょ？」

「・・・自信たっぷりね。」

「でも、好きでしょ？」

涼介はまゆみを一度も見る事無く同じ言葉を淡々と重ねた。

「・・・・・。」

涼しく核心を突く涼介の意地悪な問い掛けに、まゆみは恋心を更に心地良く捩じ伏せられ、涼介の横顔から視線を外せなかつた。

「・・・軽くメシでも食つとこつか。」

予想外に車の流れが滞つてゐるバイパスを嫌つた涼介は、会話の脈絡を無視し、再び安易な自己主張をした。

「うん・・・。」

「渋滞避けよう。」

「・・・うん・・・・。」

まゆみは穏やかな表情で涼介を見つめていた。

(・・・何であんな事言つちまうんだ・・・駄目だな俺は・・・。
くそつ、仕方ない・・・。)

涼介は再び自分を吐き捨てた。そして吐き捨てた自分を庇護し、開き直り、横顔に刺さり続けるまゆみの視線に笑顔を向けた。

「・・・・・。」

まゆみは涼介の笑顔に満面の笑みで答えた後、満足した様にゆっくりと街並みに視線を変えた。

「・・・・・。」

涼介はまゆみが残した意味有り氣な余韻に、暫くまゆみの横顔を見つめさせられていた。

(・・・恋愛つてのは夢とか希望とか、情熱とか理想とか、そんな様な物を振り翳してゐる内は空回りするだけかも知んないな・・・。
正面に向き直つた涼介は自分の傲慢な素性を棚に上げ、まゆみの意図的な行動に心の中でそう嘯いた。

車内は静かだつた。

まゆみはサイドブレーキの辺りに雑然と重ねられているCDを一枚一枚手に取つていた。

(・・・家まで送つてくなら西公園降りた辺りだし、駅迄なら食後の車の中だな・・・。)

涼介は視界に捕らえていたファーストフード店迄の距離を流麗に縮められない事に少し苛立ちながら、まゆみに別れを告げる場面を考えていた。

まゆみは中央区の唐人町に住んでいた博多の女性だった。涼介の住む小倉とは都市高速道路、九州自動車道と繋いでも70分近くの距離があった。

「ミスチル、好きなの？」

CDの中から“Mr.Children”を見つけて出したまゆみは、無邪気な笑顔を涼介に向かた。

「・・・そうだね。」

涼介は前を向いたまま笑顔を作った。

「何か意外だね・・私もミスチル好き。」

まゆみはそう言つて嬉しそうにCDをプレーヤーに差し込んだ。

（・・・降つて来たな・・・。）

涼介はまゆみの言葉を拾わず、フロントガラスに姿を現した雨に心の中で舌打ちをした。

涼介は一人の女性を傷付ける事の重大さを真摯に受け止め、同じ過ちを二度と繰り返すまいとする自戒の心を、然も当たり前の様にずっと等閑にしたまま、まゆみに切り出す別れ話のタイミングと、別れを告げた後、まゆみが車から降りる迄に交わすだろう言葉の選び方や使い方と向き合つていた。

まゆみは微笑を滲ませていた。

10月19日の日曜日、午後3時過ぎ、小倉市街へ繋がるバイパスは渋滞が始まっていた。

雨粒は街の至る所で弾け合い始めていた。

車内には“Mr.Children”的と、この先ずつと交わる事は無いだろう一人の思惑が漂つていた。

「・・・ぬるいな。」

邪魔な雨を拭うワイパーのスイッチを入れた時、涼介は心の声を思わず口にした。

「えっ？ 何か言つた？」

「・・いや、何でもないんだ。」

涼介は正面を向いたまま努めて自然にそう答えた後、まゆみと一度視線を交わし、ドリンクホルダーのボルビックにゆっくりと手を伸ばした。

28・物哀しい情熱

爽やかなBGMが流れている店内とは丸で別世界の如く、豪雨に悲鳴を上げる街並みが窓ガラスの向こうに見えていた。

テーブルの上にはハンバーガーの包装紙やナゲット用の余ったソースが、バスケットの中で賑やかに重なっていた。

(・・・・・)

涼介はコーヒーを片手に荒れる街並みを眺めていた。

(・・・・・)

まゆみは雑誌に落とした瞳を時折涼介に向けながら、涼介が創る無言の空間に幸福を感じていた。

まゆみは車の中で涼介が昼食を取ろうと言った時、何処か隠れ家のでお洒落な店に入るのではないかと思っていた。しかし涼介は何時ものクールさを纏う事無く、気さくな笑顔でファーストフードの店を選んでいた。まゆみは涼介のそんな行動に、過度の演出で格好良く女性をエスコートする時期の過ぎた、親密な関係になつた女性に対する搖ぎ無い親愛の証を感じていた。そしてその証には、不变の愛を一人で育もうという涼介からの無言のメッセージが込められていると信じていた。

(・・・・・)

涼介は雑誌を読んでいるまゆみの横顔を見つめながら、煙草をポケットから取り出す素振りに紛れて、まゆみに気付かれない様に携帯電話の電源を切った。

(・・・遣り切れない男だな・・・。)

食事にファーストフードの店を選んだ事が、一つの恋愛に結論を出し終えた男の、底意地の悪い投げ遣りな選択だと気分を滅入らせていた涼介は、何処を見るでもなく店内に視線を移し、心の中でそう嘆いた。

(・・・最悪な男だ・・・。)

涼介はこれから切り出さなければならない、今日を限りに一度と会う事はないだろうまゆみとの別れ話の最中に、突然割って入るかもしれない受信や着信を避ける為に携帯電話の電源を切った事にも気分を滅入らせ、自己都合だけで恋愛と向き合っている自分を更に嘆いた。

「・・・ね、涼介って何月生まれ?」

放つて置けば何処迄も続きそうな沈黙を、まゆみの明るい声が破つた。

「・・・ん?」

涼介はまゆみを見た。

「誕生日まだ聞いてなかつたよね?」

占いのページを開いていたまゆみは、活き活きとした表情で言葉を弾ませた。

「そうだっけ?」

涼介はそう言つて、手に持つたままだつた空のコーヒー カップをそつとテーブルの上に置いた。

「・・・ね、何月?」

「3月だよ。」

「3月何日?」

「10日。」

「10日かあ・・・魚座なんだね。」

「・・・そうだね。」

「魚座の男性ってロマンチストが多いんだよ・・・。」

まゆみはオレンジジュースを口に付け、笑顔を弾かせていた。

「そう?」

涼介は笑顔を作るべきかどうかを迷っていた。

「うん・・・だって涼介、ロマンチストだもん。」

まゆみにとつて、テーブルを挟んで続く会話は恋人同士以外の何物でもなかつた。

「・・・・・。」

涼介はまゆみの一言に笑顔を見せていた。しかし涼介にとつてその笑顔は、作り笑い以外の何物でも無かつた。

大粒の雨が乱暴に車を叩く音が、車内に流れるメロディを邪魔していた。

バイパスは家族連れの車が、地方都市の日曜日にありがちな渋滞に拍車を掛けていた。

涼介は小倉市街へと向かわせている車の中で相変わらず無口のまま、ATのクリープ現象だけで車を前進させていた。

「ね、マツキヨって小倉にあるの?」

ファーストフード店で空腹と一緒に心も満たしていたまゆみは、何かを思い出した様に突然涼介にそう投げ掛けた。

「・・・あるんじゃない?・・・」

涼介はまゆみの質問に、何時かの深夜、平和通りバス停の前で停めたタクシーの中で、マツモトキヨシに入つて行くエリカの後ろ姿に目を奪われていた自分を思い出していた。

「じゃあ行こ! 買い物付き合つて!」

まゆみはMr.childrenや雨の音に負けない張りのある

声を車内に響かせた。

「・・・・・。」

涼介は黙つていた。

「ねつ、行こ！連れてって！」

明るく強請るまゆみの瞳は輝いていた。

まゆみはずつと前から自分の事をもつと深く涼介に知つて貰いたいと思つていた。そうすれば涼介の心の中にもつと深く入り込めると思つていた。そして今、そんな思いを実現できる最高のタイミングが自分に訪れていると思つていた。

「・・・・・。」

涼介はまゆみの問いには答えず、CDを止めた。

「・・・・・。」

まゆみは笑顔で涼介の返事を待つていた。

車内には車を叩く雨音だけが残されていた。

涼介は時間が濁り行く様な沈黙に耐え難さを感じていた。

まゆみは一人の間に沈黙が来ているとは思つていなかつた。

「・・・このまま駅迄送るよ。」

涼介は落ち着いた眼差しでまゆみを捉え、心に決めていた事を口にした。

「・・・・そう・・・・。」

まゆみは微笑を浮かべ、涼介を見つめ続けていた。

(・・・涼介つてやつぱりあんな場所好きじゃないんだ・・・。)

幸福感に包まれているまゆみの心は、涼介の言葉にそんな解釈をこじつけた。

涼介は真っ直ぐ前を向いていた。

まゆみは涼介を見つめ続けていた。

(・・・でも、駅まで送るつて言つたよね？・・・つて事は、今日はこれでお別れつて事なのかな・・・。)

まゆみは南国で生活する人々が刻むリズムの如く、ゆっくりと涼介の言葉の意味を解きに掛かっていた。しかしまゆみの心のベクトルは涼介の言葉の意味を深く探る方向ではなく、涼介を思い遣る楽天的な発想の方に向いていた。

(・・・何かこの後仕事でも入つてるのかな・・・。)

まゆみはそう考えた直後、他愛の無い話の割には余りにも長い沈黙が二人の間に続いている事を意識した。

「・・・仕事、入ってるの？」

「・・・いや、仕事じゃないんだ。」

涼介は前を向いたまま冷静にそう言った。

(仕事じゃないんだつたら、何か用事でもあるのかな?)

まゆみは涼介の返事に対し、素直にそう考えた。

「・・・じゃあ、何か約束があるとか?」

「約束も無いんだ。」

「・・・?」

まゆみの心は、涼介が放つ現実に因つて次々と湧き出て来る疑問符に收拾を付けられなくなりつつあった。

「・・・じゃ、何?」

まゆみは仕事も約束も無い涼介が、何故データを早い時間で切り上げ様としているのか理解出来ないままそう聞いた。

「・・・・・。」

涼介は黙つていた。

「・・・ねえ、何?」

まゆみは少し悲しそうに見える涼介の横顔にもう一度聞いた。

「・・・もう会えないんだ。」

「? ? ? どういう事?」

まゆみは涼介の少し太い声に、唯事では済まされそうに無い雰囲気を感じた。

涼介は真つ直ぐ前を向いていた。

まゆみは真つ直ぐ涼介を見つめていた。

「・・・ね、どういう事なの?」

まゆみは無理に笑顔を作り、涼介の横顔に詰め寄った。

「・・・終わりにしよう。」

涼介はそう言って、アクセルを強く踏み込んだ。

(? ? ? ? 終わりにしようって? ? ? ? ? え? ? ? 何を? ? ? ?)

まゆみは急加速の反動に因つて、涼介の方に捩じつていった体をシートに引き戻されていた。そして混乱している心を如実に物語る様に、呆気に取られた瞳で涼介を見つめ続けていた。

一人を乗せた車は渋滞のバイパスに別れを告げ、都市高速道路横代IC手前の緩やかな上り坂を走っていた。

雨は相変わらず激しく、車の走行を邪魔していた。

「・・・終わりにしようつて・・・どういう事?」

声を少し張つたまゆみの顔から笑顔は消えていた。

「別れよう。」

涼介は近づいて来た料金所を前にアクセルを緩め、スーツの胸ポケットから財布を取り出し、その言葉を静かに放つた。

「えつ!?」

まゆみは事の重大さにやつと氣付こうとしていた。

「・・・・・。」

涼介は表情を変えずブレーキに足を乗せ、パワーウィンドウのスイッチを押した。

「別れようつて!?」

「・・・・・。」

涼介はまゆみの質問に黙したまま料金所で紙幣を渡し、おつりの硬貨と領収書を無造作にポケットに入れた。

「ねつ、涼介!・・・どういう事なの!?」

まゆみは再び詰め寄つた。

「・・・今日で終わりにしよう。」

涼介は加速させ続けている車のドアガラスが閉まり切る迄待つた後、その言葉を強い声で車内に置いた。

「・・・・・。」

まゆみは感情の欠片すら覗かせない涼介が口にした言葉を理解出来ないでいた。

「・・・・・。」

涼介は真つ直ぐ前を向いていた。

(分からぬ……何が起こってるの……?)

まゆみは言葉を見つけられないまま涼介を見つめていた。

(ねえ涼介、分かぬよ・・別れるってどういう事なの?・・・)

涼介と知り合って以来何度も不意を打たれていたまゆみは、無意識の中に過去の涼介の不意打ちを振り返っていた。しかしまゆみの胸の中に在る涼介の不意打ちは、ほろ苦くも幸せを感じられる微笑ましいものばかりだつた。

(ねえ、涼介……)

まゆみは微動だにしない涼介の横顔にどんな言葉を選べばいいのか、そしてどんな態度を見せれば涼介の言葉を打ち消す事が出来るのか懸命に考え始めていた。

(涼介・・ねえ、涼介、今日で終わりつて?・・・嘘でしょ?・・・)

冗談だよね?・・・ねえ涼介・・何か喋つて・・お願ひ・・・・)

涼介から受けた霹靂に混乱しているまゆみは精一杯平静を装い、心で涼介に縋つた。

「・・・愛せないんだ。」

涼介は黙り込んでいるまゆみに“駄目”を押しした。

「・・・・・・。」

まゆみは瞬きもせず、涼介に瞳を泳がせていた。

「ごめんな。」

まゆみの心情を無視している事を本人に分からせるかの様に涼介はそう続け、話を括りに掛かつた。

車は豪雨の中、九州道へと繋がる紫川ジャンクションを通り過ぎていた。それは氷の様に硬く冷たい心で別れを告げるタイミングを計算していた涼介が、まゆみを車から降ろす最適の場所がまゆみの住む博多ではなく、小倉駅だと弾き出していた事を意味していた。

「・・・愛せない・・つて?・・・・」

茫然自失になりそうな気持ちを堪え、涼介から突き付けられた言葉の意味を噛み碎く為に、心中で何度もその言葉を反芻^{はんすう}していたまゆみは気丈に聞いた。

「・・・・・」

涼介は黙つていた。

「・・・愛せないつて・・・どうい・・・事?・・・」

自分なりに考えていた二人の絆を強くする為の計算や口論見が、更には一人の未来を夢見る乙女心の様なものが、しかしそんなものより自分の存在 자체が涼介に因つて抹消され様としている現実が、今、目の前に確実に存在している事実にまゆみは切実だった。

「・・・何でなの涼介・・・何でこんな事になるの?・・・」

二人の付き合いを最初からやり直す事を、願わくは涼介にもう一度考へ直して欲しいまゆみは、心に漂い始めた绝望感を必死で払い除けながら、そう言葉を重ねた。

「・・・・・・」

涼介は無表情だった。

「・・・何で・・・答えてくれないの?・・・」

何も喋らうとしない涼介に三度重ねたまゆみの声は細く、小さかつた。

「・・・・・・」

涼介は横顔をまゆみに晒し続けていた。

「・・・・・・」

まゆみは心に途方も無い静寂を感じていた。

(・・・どうしよう・・・)

まゆみは心の中で呟いた。そして目の前に居る涼介の冷めた態度が意地悪な冗談などではなく、紛れも無い眞実である事をはつきりと認識した。

(・・・ほんとこどうしよう・・・)

まゆみは再度そう呟いた瞬間、顔から血の氣が一気に引いた事が分かった。

(・・・ねえ・・・涼介・・・)

背中を伝う搔いた事の無い冷たい汗に、まゆみは涼介との恋愛関係が修復不可能である事を直感させられていた。

車は小倉駅北出口に向かう車線で水飛沫を上げていた。

薄暗く濁つた視界の先には、同じ車線を走る車のテールランプが右曲がりで連なっていた。

二人の間には長い沈黙が続いていた。

まゆみは滲み始めた涙を絶望の淵で止め、涼介を見つめていた。涼介は横顔をまゆみに晒し続けていた。

「・・・涼介・・・何故・・私だつたの?・・・」

動搖と混乱を悟られまいと涼介に背を向けたまゆみは、胸に迫り来る慟哭を抑え、雨で霞む小倉の街並みに瞳を泳がせながら気丈に聞いた。

「・・・・・。」

涼介は黙つていた。

「・・・聞かせて・・・何故こんな風になつたのか・・・涼介の本心が知りたい・・・。」

まゆみは残酷な現実に震えそうになる声を必死に耐えていた。

「・・・私の・・・何がいけなかつたの?・・・。」

まゆみは涼介の沈黙に従順だった。そして涼介と重ねて来た時間を顧みながら、健氣にも自分を責めていた。

「・・・・・。」

それでも涼介は黙つていた。

「・・・何故・・・何も喋つてくれないの?・・・。」

「・・・・・。」

「・・・涼介・・・。」

「・・・ごめんな。」

「!・・・・・。」

涼介との恋愛に断腸の思いで終止符を打とうとしていたまゆみの恋心は、涼介の一言に“ぞつ”とした。

車は都市高速道路から199号線への合流を許す為に設けられている信号でアイドリングをしていた。

涼介は綺麗な姿勢で遠くを見つめていた。

雨で震む街並みを力無く見つめていたまゆみの瞳は、まるで別人の様な鋭さで再び涼介を映していた。

「……『ごめんって……何？』

まゆみの第六感は、一つの言葉と無言を判で押した様に繰り返す涼介の中を垣間見ていた。

「ねつ……ごめんって……何？……」

まゆみは涙が残る瞳で涼介を刺し、言葉で涼介の心の奥底を刺した。

「……」

涼介は黙っていた。

（……馬鹿にされてる……。）

まゆみはそう思った瞬間、“涼介”という人間を信じ過ぎていた自分を哀れむ事を止め、破局の原因は自分に在ると思う事を止めた。

「ねえつ、『ごめんって、何！？』

まゆみは語氣を荒げた。

まゆみは“ごめん”とだけしか言わない涼介の心に、恋愛という情熱的な行為を巧みに操る打算を垣間見ていた。そして人の心を蔑ろにしても痛みを感じない、想像を絶する悪臭を放つ腐った性根を垣間見ていた。そしてまゆみは垣間見たものに、過去に経験した事の無い怒りの感情を体中に沸き立たせていた。

「……もう私に用は無いって事？」

まゆみの瞳から涙は消え、さつきとは違つた震えを唇に感じていた。

「『ごめんな。』

涼介は間髪を入れず、判を押した。

「……」

まゆみは涼介のその言葉に、背負つていた哀れさや惨めさという重荷の中身を完全に瞋恚に変えた。

（じゃ、あのキスは！？あのメールは！？あの言葉は！？……）
短い時間だつたけれども涼介を愛して良かつたと思える幕切れを

望み、涼介にとつて都合の良い女などでは決してなかつたとしたがつた自分への愛情が呆れる程生ぬるく、世間知らずのお人好しだつた事を痛烈に思い知らされたまゆみの心には、涼介に対する攻撃的な思考が止め処なく溢れ始めていた。

「私に見せてた涼介の姿つて、全部嘘だつたの？」

まゆみは涼介から貰つた愛情表現らしいものの全てを振り返る前にそう言つた。

涼介はブレーキペダルに右足を乗せていた。

車は199号線に別れを告げる右ワインカーを点滅させていた。赤信号の右手にはリーガロイヤルホテル小倉が、左手には巨大なAIM小倉ビルが雨で霞んでいた。

「嘘じやないんだ。」

涼介は物哀しい情熱に因つて創造された“独善”の正当性を短い言葉にした。

「嘘じやない？・・・何が嘘じやないの？・・分からない・・もつと分かる様に話して。」

「・・・ごめんな・・・。」

涼介は我慢していた。車の中でもまゆみを無視し続けて来た事を台無しにしない為にも、傷付き怒れるまゆみの心を此の期に及んで無闇に刺激しない為にも、まゆみの気持ちを理解した風な中途半端な相槌を打ち、自分の複雑な心の内を滔滔^{とうとう}と言葉にする事を我慢していた。

「・・さつきから」ごめんねつて・・それだけ言つて置けば済むとも思つてるの？・・・ねえ涼介何で？何でそんなに格好付ける必要があるの？」

まゆみは涼介の狡賢い部分を最後の最後迄見抜けなかつた自分にやるせなさを感じていた。

「・・・・・・。」

涼介は黙つたままハンドルを動かしていた。

「・・また黙り込むの？・・ねえ涼介分からないつてば！何か言つ

てよ！・・・・何だつたのこの何ヶ月間・・何が目的だつたの！？
全部計算だつたの！？セックスをしなきや答えが出せなかつたつて
事なの！？それとも最初からセックス迄つて決めてたの！？ねえ！
！そのつもりだつたの！？その為に見たくも無い映画に付き合つた
の！！」

平然と構えている涼介の隣で体を震わせている事に耐えられなく
なつたまゆみは、自らの手で理性を粉々に砕き、涼介が創る沈黙を
切り裂いた。

「何で黙つてるのよつ！？」

まゆみは涼介を睨み、幾重あるのか分からぬ涼介の化けの皮を
最後の一枚迄剥ぎに掛かった。

「・・・・・」

涼介は前を向いたまま静かに呼吸をしていた。

「ねつ！・最初から嘘だつたの！？キスもメールも、好きとか愛し
てるとか、ついさつき迄“好きだよ”みたいな事言つといて、ねえ
つ！・何故！？」

まゆみの声は荒々しさを増していった。

涼介は心に訪れている葛藤を静かに押さえ込んでいた。

「いい加減にしてつ！・・黙つてたらその内私が大人しくなると
でも思つての！・それとも図星だから何も喋れないのつ！・・・
人の心を踏み躡にじつて、無視して、投げ捨てて・・そんな事が許され
るとでも思つてるの！・！」

嵐の様な雨が車を叩いていた。

車は路上でエンジン音を殺していた。

まゆみは呼吸を乱し、涼介を睨んでいた。

涼介は瞳を閉じていた。

「・・・・・」

もつときつい言葉で涼介を詰り、傷付け、泥々の世界に涼介を引
き摺り込もうとしていたまゆみは、涼介の向こう側に見える景色が
動いていない事にふと気付き、ゆっくりと周囲を見渡した。

「・・・はあ・・・。」

突然まゆみは、二人の間に続く無言の空間に大きな溜息を一つ吐いた。

瞳を閉じたままの涼介は、眉間に皺^{しわ}を加えていた。

助手席の窓の向こうに見える建物の壁には、“小倉駅”という文字が張り付いていた。

「・・・何だつたのよ涼介と私つて・・・。」

まゆみは涼介の仕打ちに愕然としていた。

「・・分からないよ涼介・・・何故こんな突然なの？・・・何が気に入らなかつたの？・・ねえ！何故！？・・・。」

弾き出した感情の欠片にすら触つてくれない涼介に、まゆみは思いを振り絞つた。

「・・・何か言つてよ！・・・。」

まゆみの心は虚無感に締め付けられていた。

「・・ねえ！何か言つてよ！・・・ねえつてば！・・・。」

まゆみは瞳に涙を滲ませ、涼介の体を揺すり、懇願した。

「・・・・・・。」

涼介は黙り続けていた。

「はあつ・・・。」

まゆみは涼介の沈黙に、完全に打ちひしがれた。

ワイヤーは動きを止めていた。

車内には車を叩く雨音の隙間に、ハザードランプの点滅音が微かに響いていた。

「・・・ごめんな・・・。」

戸惑いも躊躇いも、言い訳も反駁も、感謝も反省も、思い遣りや誠実さも、不埒な慰めや労わりや詭弁さえ、おおよそこんな状況の時に男として最低限見せるべき殊勝な態度や言葉を何も選ばず、涼介は二人の間に漂う重い空氣に低い声を置いた。

「・・・『めんつて・・・何よ・・・。』

まゆみは声を震わせながら“涼介”という遊び人に遊ばれた事を嘆いた。そして涼介という“遊び人”を真剣に愛した事が後悔の念となり、暫くは自分の恋愛観を荒らす事になるだろう現実が、直ぐ目の前に迫つて来ている事に唇を噛んだ。

涼介は瞳を閉じ、眉間に皺を寄せ、唇を一文字に閉じていた。

「・・・・・。」

まゆみは視線を涼介から切つた。

色取りどりの傘の群れが小倉駅に吸い込まれていた。

まゆみは濡れた瞳で、濡れた街を暫く眺めていた。

「・・・・・。」

まゆみは腹を括つた。まゆみにも最低限譲れない、引き際に対するプライドがあつた。

「・・・さようなら。」

まゆみはドアに手を掛けた。

涼介の視線を背中に感じていた。

車内には凛とせざるを得ない空気が流れていった。

振り向けない事は分かつっていた。

向き直れない事も分かつっていた。

「・・・・・。」

まゆみはドアを開けた。

左足を路上に降ろす事を躊躇つていた。

振り向きたかった。

もう一度向き直り、もつ一度話がしたかった。そしてもう一度、涼介に縋りたかった。

強い雨がまゆみの体を叩いていた。

まゆみは背中を涼介に向けたまま路上に立つていた。

強烈な孤独を感じていた。

傘の群れが不思議そうにまゆみを見ていた。

まゆみは知らない街の駅に向かって歩き始めていた。

歩き出すしか術が無かつた。

何故歩いているのか分らなかつた。

誰の意思で何処に向かっているのかも分らなかつた。

まゆみは頬を打つ雨に、惨めな心も体も溶かして欲しいこと忍び泣いていた。

「「めんな・・・。」

涼介は、雨の中をゆっくりと駅の構内に向かって歩いて行くまゆみの背中にそう呟いた。

「・・・本当に「めんな・・・。」

傘の波に紛れ行くまゆみに、涼介はもう一度そう呟いた。

29・・・捧げる決心

29・捧げる決心

とじまる事を知らない時間の中で
いくつもの移りゆく街並を眺めていた
幼な過ぎて消えた帰らぬ夢の面影を
すれ違う少年に重ねたりして

無邪気の人を裏切れる程
何もかもを欲しがつていた
分かり合えた友の愛した女でさえも

“Tomorrow never
knows” by Mr. Children

(最低の男だ・・・もう一度とこんな事やつちや駄目だ・・・。
涼介は罪の無いまゆみの心を粉々にし、最後まで口を開かず、下
劣で卑怯な男に徹したぬるく情けない自分にそつ吐き捨てた。)

償う事さえ出来ずに今日も痛みを抱き
夢中で駆け抜けるけれども

まだ明日は見えず

勝利も敗北もないまま
孤独なレースは続いく

“Tomorrow never k

n o w s ” b y M r . c h i l d r e n

涼介は遣り切れなさを紛らわす為にCDのスイッチを入れていた。
まゆみが選んだアルバムが車内に再び息吹いていた。

ワイパーは視界を確保する為に激しく動いていた。

涼介の心も、自身の恋愛の行く末を知りたがる様に激しく動いて
いた。

人は悲しいぐらい忘れてゆく生きもの
愛される喜びも 悲しい過去も

今より前に進む為には
争いを避けて通れない

そんな風にして世界は今日も回り続ける

“Tomorrow never k

n o w s ” b y M r . c h i l d r e n

涼介は激しい雨音に負けないぐらいボリュームを上げていた。

雨脚は前を行く車の輪郭を消す程酷くなっていた。

運転には煩わしさやうつとうしさを超えた集中力が必要にな
つていた。

(畜生・・・。)

涼介は耐えていた。不誠実な態度でまゆみに接し続けて来た数ヶ
月間を、そして人間として恥すべき態度で無視し続けたほんの数分

前を、涼介は耐えていた。

(自分らしいって何なんだよ・・・。)

涼介は考えていた。恋愛に限らず、誠実や思い遣りやバランスと
いう、生きて行く為に必要で大切な物の見方や考え方を満遍無く行
使し続けなければ、幸せな結末と向き合えないのかもしれない事を
考えていた。そして歳を取るに連れ、恋愛を重ねるに連れ、尚且つ
そこでまた新たに割り振られる自分へのあらゆる現象を受け入れる
事を良識とし、決してたじろがず、果敢に立ち向かわないスタンス
を守り、そんな知恵に自分らしさを融合させ、人間としての品格や
人生の秩序を見出すしかないのかもしれない事を考えていた。

果てしない闇の向こうに oh oh 手を伸ばそう

誰かの為に生きてみても oh oh

Tomorrow never knows

心のまま僕はゆくのさ

誰も知る事のない明日へ

" Tomorrow never know
news " by Mr. children

渋滞していた。

車は小倉駅南口へ抜けるガード下でアイドリングを長く続けさせ
られていた。

車内はガードのお陰で雨音の混じらない澄んだメロディが流れてい
た。

反対側の歩道に一組のカップルが雨宿りをしていた。

二人は雨宿りを楽しんでいるかの様に、笑顔で何かを話しあつて
いた。

優しさだけじゃ生きられない

別れを選んだ人もいる
再び僕らは出会うだろう
この長い旅路のどこかで

"Tomorrow never
knows" by Mr. Children

(・・・・・)

涼介はメロディを全身に浴びながら、現実から目を背け様としている瞳の中に若いカップルをずっと取り込み続けていた。

男性は苦笑いと嫌がる素振りを見せていた。

女性は男性の腕を終始笑顔で引っ張っていた。
車はゆっくりと前へ進んでいた。

一人の姿は涼介の瞳を独占していた。

(マキ・・・・)

意を決しただろう男性が、今度は逆に力強く女性の手を握り、ガード下から雨の街へ飛び出して行つた瞬間、涼介は心の中でそう呟いた。

(・・・マキか・・・・)

涼介は一人の背中を田で追いながら、もう一度脳裏にその名前を走らせた。

(あんな一人を見ちゃ、蘇つちまつよな・・・・)

ガード下で戯れ合つた後、雨の街に消えて行つた一人に涼介はまぶ濡れのマキを思い出していた。

梅雨明け前の渋谷だった。

涼介はマキの買い物に昼間から付き合っていた。

二人は一頻り遊び、夕食後、思い掛けず入つたBARで涼介はほ

ろ酔いになっていた。

知らない間に街は土砂降りに見舞われていた。

桜木町まで帰れる最終電車に乗る為に、二人は駅に続く道を走っていた。

「雨つ、もう嫌いつ。」

「・・・俺は？」

「好きつ。」

マキは笑顔で息を切らしていた。

涼介はマキの手をしつかり握っていた。

東横線のホームには発車を待つ電車が、各車両のドアを全開にして停車していた。

車内はすでに人で溢れていた。

二人は電車に乗る前にお互いのハンカチでずぶ濡れの体を拭き合っていた。

マキの濡れたTシャツからブラが透けて見えていた。涼介はマキのその姿に、車内でマキを守る方法をずっと考えていた。

涼介は自分達が最後の乗客になる迄ホームに残っていた。そして涼介は発車のベルと同時に満員の車内を背中で押し、作った小さなスペースにマキを抱き込んだ。

涼介はマキを他の誰にも触れさせない為にドアの隅に立たせ、車内に背を向けさせ、自分の両肘をドアに付けてマキを守っていた。

マキは涼介に包み込まれていた。

時折二人はドアガラスに映るお互いの瞳を見つめ合っていた。

「・・・・・」

元住吉を過ぎた辺り、マキはドアガラスに息を吹き掛け始めた。

「・・・?」

涼介はガラスに映るマキの笑顔に首を少し捻つた。

「・・・・・」

マキは少しだけ曇つた部分に“やるじゅん”と指を走らせた。

「・・・・・」

涼介はマキに笑みを返し、右肩に感じているマキの髪に頬を寄せた。

「・・・・・」

マキは涼介の頬に自分の横顔を寄せ、背中を預けた。

た。

「やるじゅん、か・・・。」

涼介は呟いた。

車は小倉駅から着実に遠ざかっていた。

ワイパーは賑やかに動いていた。

果てしない闇の向こうに oh oh 手を伸ばそつ

癒える事ない傷みならいつそ引き連れて

少しごらい はみだしたつていいさ oh oh 夢を描こう

誰かの為に生きてみたつて oh oh

Tomorrow never knows

心のまま僕はゆくのさ

誰も知る事のない明日へ

“Tomorrow never knows” by Mr. children

涼介はマキと決別し、エリカへの愛を誓っていた。しかしまきが涼介にとつて珠玉の女性である事に変わり無かつた。

(あの夜、何故愛してゐるつて言わなかつたんだろう・・・。)

涼介はマキと本牧の“司”で差し向かつた最後の夜、誠実や思い遣りといつう“愛情”を形にしなかつた事をすつと後悔していた。そしてマキ以降、“愛情”を曖昧な情熱としてでしか女性に届けられなかつた自分の性質^{たち}を後悔していた。

雨脚は強いまま街を叩いていた。

車は小倉市街に蔓延^{はびこ}つてゐる渋滞を抜け出そうとしていた。

(自分らしい恋愛つて何だろう・・・。)

一生“珠玉”に縛られ続ける事を覚悟し、しかも時が経つと共にその“珠玉”を物哀しい迄に理想化し、そして新たな女性との恋愛の中にその理想を投影し、そんな自分をぬるい男なのだと無責任に括つた挙句自分の恋愛に匙^{さじ}を投げ、しかしその度に何度も密かに自問自答して來た自分勝手な命題を、涼介はある意味何時も様に脳裏に浮かべた。

誰にも利用されず、誰にも指図を受けず、誰にも頭を下げるない、例えそれが物哀しい理想であつたとしても、涼介がそんな心のままの“自分らしい恋愛”を求める一己の人間で在り続ける為には、心を開く事を頭の中で一度整理してしまつ冷徹な感情の醜さを思い知る必要があつた。愛情の中に包括された自己犠牲や純粹な情熱は、計算の上に成り立つ訳が無いという事を思い知る必要があつた。そして涼介がそんな当たり前の事を本当に思い知り、自分の狡黠さを理解した時、一己の人間として尊厳を得られる“自分らしい恋愛”を必然として手に入れる事が出来る筈だつた。

(・・・誰も知る事のない明日へ・・か・・・。)

涼介はざらついている自分の恋愛觀にどんなけじめを付けなければいいのか分からぬまま、シャツのポケットに手を伸ばした。

道路は至る所に水が浮いていた。

激しい雨に抗^{あらが}う車の殆どがスマートランプを点けていた。

「止んでくれよ・・・」

涼介はフロントガラスを叩く雨にそつ咳きながら携帯電話の電源を入れ、受信メールを確認する為にセンターへ問い合わせた。

受信トレイ

15：54	<未開封>	岡部恭子	2003/10/19
15：21	<未開封>	エリカ	2003/10/19
11：30	<未開封>	岡部恭子	2003/10/19
11：05	<未開封>	魚町店舗中	2003/10/19
01：47	<開封>	エリカ	2003/10/19
22：15	<開封>	エリカ	2003/10/18
:	:	:	

コンビニエンスストアの駐車場で呪縛と決別し、遣り切れない思いを抱えたまま情熱をエリカに送信し、腐った男だと辟易しながらファーストフード店で電源を切つて以降、涼介の携帯電話は一通のメールを受信していた。

(・・ふう・・・。)

運転に必要な集中力を最低限維持しながらハンドルを握る左手で受信トレイを開いていた涼介は、一通のメールを開く為に息を一つ逃がした。

受信メール

お疲れー！

やつと応答したねっ！

昨日は誰とエッチしてたの？

ウソウソ^_^

携帯つながんないし(‘ー、)会いたかったんだよ！

今日はね、仕事早く終るから♪ 時に

迎えに来て(^ー-) - 待ってる(^ー^)

髪の色少し変わったよ

じゃね

エリカ 2003/10/19

15:21

(・・・エリカ・・・)

涼介は心の中で穏やかにエリカの名前を呼んだ。そしてバックミラーに目を遣り、アクセルを緩め、左ウインカーを点滅させた。

(・・・らしいな。)

エリカに誓つた愛情が今は未だお互いの結論では無い事に一抹の不安を抱えていた涼介は、素直な恋心が鏤められていたエリカのメールに心を打たれていた。

車は速度を落とし、道路の端に寄り始めていた。

左ウインカーはハザードランプの点滅に変わっていた。

普段の涼介なら何の躊躇いも無く運転しながらメールを作り始めている筈だった。しかし涼介は車を停め様としていた。それは雨が酷過ぎるからではなく、エリカの愛情を冒涜しない為の、エリカへ贈る愛情を陳腐なものにしない為の、無意識の内の行動かもしれなかつた。

「・・・エリカに救われたな。」

涼介は呟いた。

涼介は愛情が凝縮された様なエリカのメールに“自分らしい恋愛

”の結論を教えられた様な気がしていた。そして罪悪感で濁り切っていた心が徐々に澄み始めて行く感覚を享受していた。更にはエリカを愛する事に何の躊躇いも無い無防備な自分が存在している事をはつきりと認識し、その認識が齎す幸福感に因つて、失っていたときめきや愛する人を思い慕う気持ちが体中に蘇つて来た事に驚きを感じていた。同時に“恋愛”という人間にとつて必要不可欠な領域を泳ぎ回り、しかもどんな時でも泳ぎ切る前に別の領域を探していった身勝手な過去が愚の骨頂だつた事も思い知らされていた。

(・・・・・)

路肩に車を停めた涼介はエリカのメールと向き合っていた。

(エリ・・・・・)

ある種感動を覚えていた涼介は緩ませていた顔を一気に締め、諸手を挙げて捧げたい情愛と、理想を追う事に対する渴愛と、全てを包み込む慈愛を融合させた。

新規メール作成 宛先 エリカ
愛して

7時、美容室の前で。

サブメニュー 編集 戻る 17:05

(・・・・・)

涼介は再び顔を緩め、液晶に綴つた気持ちを眺めていた。
雨は車を激しく叩いていた。

曲を流し終えていたCDプレーヤーは、新たに曲を流すのかどうかのサインをオレンジ色の液晶画面に表示していた。

涼介は自身の全てをエリカへ惜しみなく永劫捧げる決心を、目に見えない何かに誓つていた。

(頼むから止んでくれ・・・・・)

涼介はそう願いを込めて、エリカへメールを送信した。

車内には雨を弾くロードノイズが再び響いていた
助手席に置かれた携帯電話は、メール操作の余韻を残す光をサブ
画面に灯していた。

（止んでくれ・・・。）

涼介はもう一度、ミディアムグレイの空に願いを放つた。
世の中に止まない雨は無かつた。しかし光の差し込まない恋愛は
あつた。されど涼介の恋愛に重く長く纏わり付いていた暗雲は、涼
介の心で躍動し始めたエリカへの真摯な愛情に因つてちぎれ去るう
としていた。

29・・・捧げる決心（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。

次章 「30・本質への回帰」
そして「最終章・最高の沈黙」
となります。

最後までお付き合いくれば幸いです。

「・・・長いな・・・。」

早く自宅に戻りたい衝動に駆られている涼介は、目の前の赤信号にそう呟いた。

車は左ワインカーを点滅させていた。
助手席のガラス越しには、涼介の自宅があるマンションが見えていた。

「ほんと、雨どデブと・・赤信号は・・・嫌い、か・・・。」
涼介は言い放とうとした言葉を途中で止め、ヘッドレストに頭を持たせ掛け、苦笑いを浮かべた。

(ふつ・・・デリカシーが無いのは俺じゃないか・・・。)
苛立ちを何時もの口癖で紛らわそうとしていた涼介は、そんな今迄の“痛い”自分を鼻で笑い、蔑さげすんだ。

「・・・休みなんだからゆつくり休むもんだぞ。・・・ん? そろか? 何か日本語変だったか?」

涼介は雨の駐車場を歩きながら恭子の笑い声を耳に当てていた。

「・・・まあ、そういう事だよ、『苦労さん。・・・了解、それじゃ明日改めて。』

エントランスの奥に在るエレベーターホールで涼介は恭子との穏やかな会話を閉じた。

マンションの駐車場に車を停めた後、開封していなかつた恭子と

魚町店の店長のメールに田を通していた涼介は、車の中で魚町店の店長と話し、続け様に恭子に電話を掛けていた。

(立ち会つてたのかよ・・・岡部らしいな・・・。)

エレベーターに乗り込み、八階フロアのボタンを押した後、一息つくように壁に寄り掛かっていた涼介は、休日出勤をして魚町店の厨房補修工事に立ち会い、その結果を然りげ無くメールで報告し、電話ではそんな自分の行動をアピールする事無く終始笑い声を絶やすなかつた恭子に、リーダーとしての資質が備わっている事を改めて感じ、敬意を表する微笑を浮かべていた。

「？・・・

目の前に長く伸びている室内共用廊下に遠慮がちに靴音を響かせていた涼介は、右手に持ったままだつたキークースの釦を玄関ドアの前で弾いた後、動きを止めた。

ドアレバー近くの隙間にメモ紙の様な物が挟まっていた。
(何だろ?・・・。)

涼介はその紙に手を伸ばした。

玄関ドアを照らすスポットライトが、ドアの前で動かない涼介の後ろ姿を照らしていた。

「あいつ・・・。

涼介は二つ折りにされていた紙に書かれていた文字に、そう一言呟いた。

「“どこにいるの!?”・・・か・・・。」

ソファの背凭れに上着を投げ掛けた涼介は、キッチンに向かいながらエリカの口調を真似る様にメモに書かれてあつた言葉を呟き、ダイニングテーブルの上にキーケースとメモを置いた。

(・・・参つたな・・・。)

涼介は徐に冷蔵庫の扉を開け、ボルビックに手を伸ばした。

(・・・まったく・・・。)

メールではメモの件に一切触れず、電話もせず、合鍵を持つているのにシリンドラーにキーを差し込まず、玄関ドアの隙間に会いたい気持ちを差し込んでいたエリカの昨夜の行動に涼介は魅力を感じ、愛おしさを募らせていた。

リビングは何時もと変わらない表情で涼介を包み込んでいた。キッチンからコーヒーメーカーのドリップ音と心地良いコーヒーの香りが届いていた。

涼介は体をソファーに深く沈み込ませ、センターテーブルに足を投げ出し、誰にも邪魔をされない一人の時間に目を閉じていた。（そうだ・・・。）

涼介は体を起こした。そしてソファに放り投げていた上着の内ポケットに手を伸ばした。

昨夜、車の中に置きつ放していた携帯電話をコンビニエンスストアの駐車場で開いた時、メール以外に純一からの着信が一度残っていた事を涼介は思い出していた。

キッチンはコーヒーの香りで彩られていた。

「もしもし・・・」

涼介はマグカップにコーヒーを注ぎながらそう言った。

「・・・はいはい・・どうよ?・・まあ、普通かな・・・。」

マグカップに一度唇を当てた涼介は、左耳に携帯電話を当ててままでつくりとソファーに戻り始めた。

「・・・そうそう・・・だよなあ・・・ああ、いいんじゃない。」

涼介は純一と交わすスローな会話が好きだった。

「了解。・・・ああ、そうだね・・・そういう事かな・・・。」

涼介は培つて来た二人の関係だけにしか成立し得ない、主語の無い会話に夢中になっていた。

「・・・はいはい・・・じゃ、よろしく。」

そう言つて電話を切つた涼介の顔は緩んでいた。

「・・・そつか・・・悪くないな・・・。」

純一の言葉を心に落とした涼介はそう呟き、センターーテーブルに投げ出していた足を下ろして右腕に目を遣つた。

(・・・5時40分か・・・シャワー浴びなきやだな・・・。)

エリカを迎えて行く迄の残り時間を確認した涼介はゆっくりと立ち上がつた。そして思いを行動に移す前にリビングの掃き出し窓に向かつた。

小倉の街は夜を迎えていた。

空には昼の名残が微かに残り、その明かりをバックに街の光が静かに瞬いていた。

「・・・このまま止んでくんねえかな・・・。」

ベランダに出ていた涼介は、目に映る雨が音も無く細くなつている事に期待を込めてそう言つた。

「コーヒーの香りはユーティリティ迄届いていた。

洗面台の廻りにはエリカのグルーミング道具やTシャツが無造作に置かれていた。

(・・・なかなかいいんじやない?)

涼介は服を脱ぎながら振り返つていた。

(・・・いいじゃん・・・。)

涼介は圭子とエリカを並べ、イメージしていた。

(・・・なるほどな・・・。)

更に涼介は圭子とエリカの横に純一と自分を加え、四人が食事をしているシーンをイメージしていた。

(・・・“彼女連れて来いよ・・・四人で飯でも喰おうぜ”、か・・・。)

涼介は純一と電話で話した内容を振り返つていた。

(圭子と会うのは何年振りになるんだろう・・・。)

涼介はシャワーを浴びながら、久し振りに中華街で年を越さないかと持ち掛けた純一の言葉を再度思い返していた。

涼介が圭子の顔を涙で曇らせた日から5年が過ぎていた。そしてその5年という年月の間には、圭子と純一が夫婦として今も穏やかに重ね続けている1年半が織り込まれていた。

(！・・・・・。)

涼介は“はつ”とした。

(・・・そつか・・・・。)

突然、思い掛けない強い衝撃を胸に受けた涼介は、シャワーを浴びている体を動かせなかつた。

(何やつてんだろうな俺は・・・自分の事しか考えらんねえのかよ・・・。)

純一の提案は圭子の賛同がなければ有り得なかつた。その事にやつと気付いた涼介は、シャワーに背を向け、天井に一つ息を吐き、人の心を察する事が今だ不得手な自分を嘆いた。

圭子は涼介の曖昧な恋心に因つて心に深い傷を残していた。しかし中華街で年を越そうという純一の提案を受け入れていた。それは圭子が持つてている涼介へのわだかまりや嫌悪を遠い昔の良き思い出として水に流し、心の傷を別次元の空間に昇華させた事を意味していた。

涼介は圭子の心に一生残るかもしれない傷を付けていた。圭子にとって当然それは許し難い過去だつた。しかし圭子は、涼介が過去の恋愛に対する懺悔の気持ちを事ある毎に心から引っ張り出し、一生引き摺り、苛まれ続ける事も許さなかつた。

(まだまだ・・だな・・・。)

涼介は電話口の純一や、電話中隣に居ただろう圭子といつ、自分の性格を知る二人から慮られている事実に、改めて自分の生き様が甘くぬるく情けない事を痛感させられていた。

(・・・・・。)

涼介はダイニングテーブルに一脚だけ差し込ませている何時ものエグゼクティブチェアに座り、濡れた髪をバスタオルで拭きながらポットに残るコーヒーをマグカップに移した。

コーヒーメーカーの横にエリカのクレンジングフォームが転がっていた。涼介の対面にある椅子の背凭れには、エリカが部屋着として使っているTシャツが掛けられていた。

涼介の自宅にはエリカの物が溢れていた。リビング、キッチン、玄関ホール、バスルーム、パソコンの横にもベッドの上にも、微笑ましくなる程エリカの物が散乱していた。

(・・・・・。)

涼介は煙草に火を点け、体を椅子に沈み込ませた。

深い自我の下、愛情の在り方を確立し、突き詰め様とするが故にその愛情を客観し過ぎていた涼介は、気付かぬ内に愛情が持つ本質から遠ざかっていた。しかし涼介は圭子や純一の思い遣りに触れ、まゆみやエリカに触れ、愛情其の物を素直に振り撒いていた頃の自分を思い返し始めていた。

(何時からこんな風になっちゃったんだろう・・・。)

涼介は瞳を閉じ、圭子や純一、まゆみやエリカに感謝していた。同時に四人の出逢いをくれた、必然や偶然という言葉で片付けるには余りにも運命的過ぎる、突き詰めて行けば論理的に説明出来るかもしれない、しかし人の五感に決して触れる事は無いだろう何かに感謝していた。

(・・・愛情ってのは何時でも容易く取り出したり受け取れたりする場所で宿つてんだよな・・・。)

涼介はコーヒーを飲み干し、幾らも吸つていらない煙草の火を消した。

(難しくも何ともねえじゃねえか・・・。)

涼介は更に心の中でそう呟き、携帯電話に手を伸ばした。

(・・・出会い系か・・・。)

打算的だつた自分を省み、失つていた大切な感情を蘇らせていた涼介は、何かを懐かしむ様に携帯電話にブックマークされたままになつていた出会い系サイトを開いた。

(・・・“包容力”・・“安心感”・・“同じ価値観”・・“思い遣り”・・“優しさ”・・“嘘を付かない人”・・・。)

涼介は殆どの女性が掲示板に書き込んでいるそんな言葉を田で追いながら、時に囁々しく、時に馴れ馴れしく、過剰な自虐の下、女性の気持ちなど丸で考えず出会い系サイトを泳ぎ続けていた頃の自分が思い起こしていた。

(・・・“煙草を吸わない人”・・“髪の毛の薄くない人”・・“太つてない方”・・“背が高い人”・・“若く見られます”・・“彼氏が居る様に見られます”・・“仕事が忙しくて出会い系がありません”・・・。)

涼介は椅子に体を投げ伸ばした格好で、身動き一つせず左手の親指と瞳だけを動かし、女性達の思惑を黙々と追い続けていた。

キッチンにしては多過ぎるダウンライトの光が、真夏の太陽の如く涼介に煌煌と降り注いでいた。しかしそのキッチンには雪が深深と降り積もる真冬の夜の様な静けさが訪れていた。

「・・・ふう。」

涼介は何かを見切つた様な大きな息を唐突に吐いた。そしてその気になれば何時迄も表示出来る出会い系サイトの掲示板を閉じた。

「ぬるいな。」

涼介は呟いた。

(ふつ、しかしまあ・・・それは俺の事だな・・・。)

愛情の本質など知る由も無く、しかし知らない間に愛情の本質を体中から溢れさせていた時代に回帰していた涼介は、“ぬるい”と呟いた自分を冷笑し、携帯電話の時計を見た。

「・・・時間だ。」

涼介は心をエリカとのデートに切り替える為に、その言葉を毅然と放つた。

涼介は出会い系サイトをスクロールしながら、反省という、同じ過ちを何度も繰り返さない為の誓いを心の中に導いていた。そして女性達が掲示板に残している男性への要求が、欲望を満たす為のプライド高き傲慢にしか見えなくなっている自分が居る事を冷静に見つめていた。更に涼介は、思慮深く、広い心で人を受け入れる事を包容力と言うのなら、気に掛かる事が無くなり、心を安らかにする事を安心感と言うのなら、相手の気持ちや立場を考える事を思い遣りと言うのなら、上品で美しい、素直で大人しい、親切で情が深く、ごつごつしていらない柔らかい感情を優しさと言つのなら、事実ではない事を言う嘘が嫌いだと言うのなら、そしてその中の一つでも誰かに求めるのなら、普段の生活の中でそれら全てを、先ず自分が率先して不特定多数の人々に示す必要がある筈だと、そしてそれこそが掛け替えの無い出逢いや珠玉の恋愛を享受する為の道理なのではないかという思いを、心の中に引き入れていた。

(・・・ん?)

その振動は椅子から立ち上がっていた涼介を振り向かせた。

「ふう・・・・・。」

涼介は一回の振動で止まつた携帯電話に直ぐ手を伸ばさず、天井にゆづくじと顔を向け、息を一つ吐いた。

受信メール

愛?・・・何??[^][^]

そんな事ずっと前から知つてたよ(^ーー)
でも今夜もう一度言つて!

エリカ
2003/10/19

18:20

(・・・あいつ・・・・)

涼介は久し振りに自分の鼓動を全身に感じていた。

「まったく・・・タイミング持つてるやつだな。」

涼介は自分の顔が“照れ”に因つてだらしなく緩んでいるだろう事を誤魔化す様に、そう呟いた。

涼介は崇高で尊い命の全てに与えられた“愛情”という、どんなに酷使しても壊れる事の無い、しかもどんな命をも決して傷付ける事の無い武器でエリカに心を射貫かれ、自分が救われた事を実感していた。

(・・・さて、と。)

涼介は誤魔化した羞恥を態^{おも}とらしく区切り、身支度を整える為に踵を返した。

ダウンライトの明かりは主の居なくなつたキッキンを照らし続けていた。
エグゼクティブチェアの肘掛けにはバスタオルが掛かつたままになつていた。

ダイニングテーブルの上には無造作に放り出された携帯電話があつた。そしてその傍で、昨夜エリカが残したメモがキーケースの下敷きになつていた。

最終章・最高の沈黙

最終章・最高の沈黙

長い沈黙にも慣れてきた
冷めた横顔が得意になる
ためらいは 癡になり
手紙を書くのも怖くなる

二人 腕をからめ歩いてた
遠いずっと遠い記憶
聞かせてよ あの頃の歌を
好きだった あの声

世界中の 誰より
私の心を照らした
愛をからだに感じてた
君がいた夏.. 忘れないよ I f e e l i n l o v e

“君がいた夏” by

小柳ゆき

「どうした？・・・具合でも悪いのか？・・・
「・・・この曲、いいね。」

助手席に深く凭れ掛かり、フロントガラスの遠い先を見つめてい

たマキが、運転している和明の方を向いてそう言つた。

10月19日の日曜日、第三京浜に夜が訪れていた。

一人を乗せた車は、オレンジ色の光を流麗に連ねたナトリウム灯に誘^{いざな}われる様に、横浜市街へ向かう首都高速道路に向かっていた。

「何だそだつたのか・・・話の途中で急に黙つちやつたから心配したよ。」

マキの沈黙が、マキの為に選んだアルバムに耳を傾けてくれていたからだと分かつた和明は安心し、素直に喜んでいた。

「曲、気に入つて貰えたみたいだね。」

和明は上機嫌でアルバムの話題を振つた。

「・・・ね、本牧で御飯食べない?」

マキはそう言つた後、悪戯っぽく微笑んだ。

「・・いいけど・・・中華粥の美味しい店、7時半に予約してるんじゃなかつたの?」

「・・・和食の美味しいお店があるよ。」

「・・・そつか、地元だつたな、あの辺り。」

「うん。」

「・・・じゃあ、案内して。」

「了解・・・。」

マキは嬉しそうな声を和明に届けた後、再び助手席に深く凭れ掛かり、笑顔を仕舞つた。

雨は止んでいた。

魚町交差点は信号を待つ人達が窮屈そうに肩を寄せ合つていた。交差点を囲んで立ち並ぶビルの壁に取り付けられたプロジェクターやメッシュージボードは、それぞれが鮮やかな映像や光のオブジェを映し出していた。

(・・・・・)

ちゅうぎん通りに車を向けて縦列駐車していた涼介は、正面に見

えている魚町交差点の雑踏から、助手席の向こう側に在る雑居ビルの一階に視線を変えた。

全面ガラス張りの店舗からは眩しい程の光が広い歩道に溢れ出していた。店内は昼間の様に明るく、スタイリッシュな女性達が動き回る姿がはつきりと見えていた。

車はスマートランプを点けたままアイドリングを続けていた。メインパネルに埋め込まれたデジタル時計は7時10分を表示していた。

(・・・・・)

涼介は美容室の様子を暫く眺めた後、煙草に火を点け、ドアレバ一に手を掛けた。

一人 頬杖をついていた

君が帰らない夜に

繰り返し口ずさむ歌は

好きだったあの歌

小柳ゆき

“君がいた夏” by

(・・・・・)

マキは何処にも焦点を合わさず、曲に身を委ねていた。

(リョウ、まだ本牧に住んでんのかな・・・)

マキは思い出していた。涼介を愛しているのに自信を失い掛けていた22歳の夏の終わり、涼介の部屋で一人頬杖を付き、涼介の帰りを待ち続け、弱気な心と戦っていた自分を思い出していった。

(逢いたい・・・)

2年前の春、涼介が転勤で地元の小倉に戻った事を知らないマキは、助手席の窓越しに流れる横浜の街並みを眺めながら心でそう呟

いた。

世界中の 誰より

私のすべてを照らした

愛は永遠に終わらないと

君がいた夏： 信じていた I feel in love

小柳ゆき

“君がいた夏” by

マキの脳裏には、ビーチパラソルの中で眠っている涼介にキスをした真夏の砂浜、炭焼き屋で酔っ払った後、涼介に悪戯ばかりして怒られた帰りのバスの中、ベイブリッジの上から一人で見下ろした大黒埠頭、涼介の家に先に帰っていたイヴの夜、日付が変わり、店のケーキとシャンパンを持つてやつと仕事から帰つて来た涼介に、少し拗ねてを見せた最初のクリスマスが、つい昨日の事の様に鮮明に蘇つていた。

「マキ、聞いてる？」

「・・・えつ？うん、聞いてるよ。」

マキは聞いていた。涼介を忘れられず、涼介を愛し続けている自分が居る事をはつきりと気付かせてくれたメロディを、マキは聞いていた。

「その美由紀って、そんなに仲良いいの？」

「えつ、美由紀？・・・あ、うん、・・・だつて私、美由紀には隠しが無いかも・・・。」

涼介に“さよなら”と背を向けた次の日、美由紀の前で泣きじやくつた事も思い出していたマキは、美由紀の存在自体や学生時代から続く美由紀との関係を、無意識の内に和明に語っていた自分に驚いていた。

「そりなんだ。」

「・・やるじやん・・つて感じなんだ、美由紀。最近なかなか会えないけど、結構相談乗つて貰つてる。」

マキは涼介の口癖を使い、今度は丁寧に美由紀との絆を和明に伝えた。

「へえ・・。マキって相談されるタイプの方だと思ってたよ。」

「・・・そんな強くないよ、私・・・。」

「そつか・・・。」

和明はそう言ってマキに微笑み掛けた。

(・・やるじやん、か・・・。)

マキは和明を見つめる瞳の奥に、渋谷から桜木町へ帰る東横線の最終電車、鮪詰めの車内で身を守り続けてくれた涼介を映し出していた。

エリカは美容室の同僚達と談笑していた。

ローライズのブーツカットが似合っていた。

涼介はポケットに両手を入れ、助手席のドアに背を凭せ掛け、エリカに視線を注いでいた。

「横浜公園で降りよつ。」

長い沈黙を続けていたマキが突然そう言つて微笑んだ。
マキの背中でランドマークタワーが大写しになっていた。
和明の横顔の向こうには、桜木町の駅が見えていた。

「・・・・・。」

涼介に気付いたエリカは、ゆっくりと談笑の輪から抜け出した。
同僚達はエリカの行動を目で追いながら、外の様子を伺う素振りを見せていた。

「・・・・・」

ガラスに張り付いたエリカは涼介に軽く手を振った。

「・・・・・」

涼介は両手をポケットに入れたまま、一度だけ微笑んだ。

「ん？ 本牧なら新山下の方がいいんじゃない？」

「かもしないけど、横浜公園で降りよつ。」

「・・OK。」

「ありがと。」

マキは元町から麦田トンネルを抜ける本牧通りの景色に思いを馳せていた。

街の雑音は遠慮なく涼介に降り注いでいた。
歩道を行き交う人達が、涼介の瞳に映るエリカの姿を時折遮っていた。

エリカは小さな会釈を始めていた。そして会釈の度、エリカは同僚達の輪から離れていた。

涼介は変わらず両手をポケットに入れていた。

君はずっと 輝いていた

空の星より奇麗に

過ぎる夏の日の想い出

ずっと見ていた この場所でずっと

“君がいた夏” by

小柳ゆき

(リョウ……“司”に居たり……する訳ないか……)
マキは久し振りに戻る本牧という町に、有り得るかも知れない微
かな必然を期待していた。

「・・・・・。」

美容室から出たエリカは歩き出す前に涼介と視線を重ねた。

「・・・・・。」

涼介は柔らかい眼差しをエリカに贈っていた。

「・・・・・。」

エリカは腰の後ろに回した両手でトートバッグを持ち、照れを隠す様に一瞬下を向き、零れてしまふ笑顔を隠そうとする様な上目遣いのまま、涼介の方へ歩き始めた。

歩道のインターロッキングは濡れ残っていた。

二人の間を多くの人達が行き交っていた。

「・・・・・。」

歩行者を避けながら涼介との距離をゆっくりと縮めていたエリカは、広い歩道の真ん中で一度振り返り、ガラスの向こうに居る同僚達に手を振った。

「・・・・・。」

涼介はエリカが見せている一連の仕草を瞳で優しく包み込んでいた。同時に涼介は、その仕草と珠玉の女性の姿を瞳の奥で重ねていた。

世界中の 誰より

私の心を照らした

愛をからだに感じてた

君がいた夏… 忘れないよ I feel in love

小柳ゆき

“君がいた夏” by

(逢いたい・・・。)

山下町のBARで涼介に言わせた“愛してる”的言葉、涼介に強請つて買って貰つたピーコート、青く澄んだ真冬の月の下、涼介の腕に絡まつて歩いた本牧の裏通り、そして“別れよつか”と意地を張り、涼介を一人残し“司”を後にした夜。マキは止め処なく蘇るそんな涼介との思い出に胸を締め付けられながら、10年という歳月が過ぎても色褪せない涼介を想い、再びその言葉を心の中で呟いていた。

「お待たせつ。」

「・・・お疲れ。」

「・・・元気つ?」

エリカは恥じらいを隠す様に言つた。

「・・・ちょっと・・落ち着いたな。」

「?・・リョウ、具合でも悪かったの?」

「似合つてるよ、髪。」

「えつ?あ、そうだったね、さつきメールで言つたもんね、ありがと。」

「・・・なあエリ。」

「何?・・・」

「・・・どうぞ。」

涼介はポケットに忍ばせておいたエルメスのガムケースをエリカに差し出した。

「うわつ、覚えててくれたの!—嬉しい!」

「・・誕生日おめでとう。」

「嬉しつ!—ありがと!—・・・でもリョウ、誕生日今日じゃない

よ。」

「・・・だよな。でも待てなかつたんだよ、26日迄。」

「えつ！嬉しい！それも覚えててくれたんだね、ありがと・・・。」

「だから誕生日は何もないぞ。」

「うそーつ！やだつ！」

「・・・25歳だつけ？」

「・・・うん・・・で？・・・」

「・・・うん・・・で？・・・」

エリカは更に“嬉しい”を強請る様な瞳で涼介を見つめ、茶目つ氣たつぶりに誕生日のプレゼントを貰う約束を取り付け様としていた。

「大晦日は仕事だよな？」

「・・・うん。・・・で？？」

エリカは後ろ手に持つたトートバッグを揺らしながら涼介の問い合わせを笑顔で流し、約束を強請った。

「・・・休んでくんないか？」

「えー、厳しいよそれ・・・。」

「横浜行くから。」

「うそつ！！」

「だから俺の為に。」

「・・・・・。」

エリカは涼介を見つめたまま、黙ってしまった。

「・・・どうした？」

「・・・何か嘘みたい・・・嬉し過ぎて・・・。」

エリカは照れていた。

「そつか？」

「だつて・・・リョウが住んでた横浜、リョウと一緒に行きたいって思つてたんだもん・・・。」

「・・・そつか・・・。」

「嬉しい・・・ありがと・・・。」

エリカの声は小さく、瞳は素直だった。

「それと、誕生日はちゃんと祝つから。」「リョウ・・・」

「でもそれは俺ん家でエッチするだけだぞ。」「・・バカ・・・。」

「エリカはそう言つて“はにかみ”ながら俯いた。

「・・おいおい・・どうした?」

「だつて・・優しいんだもん・・嬉しいんだもん・・・。」

少し冷たい湿つた夜風が街路樹を微かに揺らしていた。

エリカは変わり行く季節の感触を、心に確かに感じていた。

「・・・・・。」「

涼介は慈愛に満ちた眼差しでエリカを見つめていた。

「・・・なあエリ、ゼノンの逆説覚えてる?」

「・・覚えてる・・・けど・・やだ。」「

「ははっ。」「

「・・・だつて・・・今直ぐキスしたいんだもん・・・。」「

少し拗ねた素振りで涼介を見上げたエリカの瞳は潤んでいた。

「・・・エリ、それは俺の台詞だよ。」「

月が見えていた。昼間の豪雨が嘘の様な、輪郭の綺麗な月が見えていた。

プレゼントはエリカの右手にしつかり握られていた。

エリカの踵は浮き、トートバッグはエリカの足元に落ちていた。歩道を歩く人達は、二人のシルエットに優しい瞳を向けていた。

涼介は生涯最高の沈黙をエリカに贈っていた。

エリカは生涯最高の沈黙を全身で受け止めていた。

街を彩る無数の光は、一人を祝福するかの様に乱舞していた。

「・・・まだ足りない？」

「・・・・・・」

「・・・愛してるんだ。」

涼介はエリカの肩に両手を掛けたまま真摯に言った。

「・・・私も愛してる・・・。」

エリカは涼介と離れる事を惜しむ様に、涼介が着ているスーツの袖口を掴んでいた。

「・・・リョウ・・もう一度言つて。」

「・・・やだ。」

「・・・ケチ・・・。」

エリカは最高の沈黙の余韻に浸つていた。

涼介は笑っていた。

見つめ合う二人の瞳には、大切な人と創るだろう未来が映つていた。

「・・・彼女、先輩？」

涼介は自分達を見ているだらう一人の女性に気付いた。

美容室の店内に、忙しく立ち回つているスタッフをまるで気にせず、ガラスの壁に張り付いている女性が居た。

「・・・ううん、さゆり・・・この前リョウに会う為にじー飯断つた人・・・一番仲が良いの・・・。」

エリカは涼介から手を離し、美容室の方に振り返り、小さく手を振つた後、涼介にそう言った。

「・・彼女、大胆に仕事さぼってるな。」

涼介はそう言いながらエリカのトートバッグを拾い上げた。

「ううん、さゆりも早番で仕事は終つてるの・・・全部見られちゃつたかな・・・。」

エリカは“ばつ”が悪そうに涼介からバッグを受け取つた後、もう一度振り返り、今度は大きく手を振つた。

「・・・明日大変そうだな。」

驚いた様に手を振り返し、慌てて店の奥に消えて行つたさゆりを

見届けた涼介はそう言つた。

「大丈夫、もう慣れちゃつた。」

「おつと、それはどういう意味かな？」

「・・そういう意味よ・・・ねつ、それよりお腹空いちゃつた。」

店内の様子を眺めながら喋っていたエリカは涼介の方へ勢い良く体を戻し、茶目っ氣たつぶりにそう切り出した。

「なるほど、了解。・・じやあエリ、運転してよ。」

涼介は明るく切り返した。

「えーっ、何でーっ。」

「だつて横浜で年越すんだぞ。」

「何それ・・ほんと意味分かんないんだから。」

「いいじゃんかさ、たまには。」

涼介はその言葉と笑顔をエリカに残し、体を反転させ、助手席のドアを開けた。

「もう！・・・」

助手席に乗り込んだ涼介にエリカは頬を膨らませた。

涼介は穏やかな微笑みを浮かべていた。

仕方無さそうに微笑んでいるエリカの表情には、隠す事の出来ない幸福感が溢れていた。

「・・・じゃあ、焼肉。」

運転席に乗り込んだエリカはトートバッグを後部座席に置き、シートベルトを付けながら無邪気な瞳を涼介に向けていた。

「和食にしようよ。」

「やだ！美味しい焼肉！」

「・・・了解。」

「よし！」

エリカは“くしゃくしゃ”的笑顔を涼介に残し、イグニッショングループを回した。

「・・・エリ。」

「はい？」

「今忙しい？」

「・・何？」

エリカは動かし始めていた車の鼻先を見つめていた。

「俺の事好き？」

「・・・嫌い。」

エリカはハンドルを切り返し、車をバックさせていた。

「何だつて？」

「んー・・・やっぱ嫌い。」

エリカは忙しそうにハンドルを切り返していた。

「・・・やるじやん。」

「・・・あつ、そつそつ、指輪が一つ見当たんないんだけど、リヨウ

ウん家だよね？」

「・・・そうだな、あつたな、歯ブラシの横に。」「

・・・・・・・・・・・・おわり

最終章・最高の沈黙（後書き）

最後までお付き合って頂き、ありがとうございました。

感想、書評などございましたら、
お気軽に寄せ下さい。

続編（完結編）を執筆中です。内容についての「希望、」意見等」
をこましたら、どちらの方もお気軽に寄せ頂ければ幸いです。

ありがとうございました。

美位矢 直紀

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5325d/>

ぬるい恋愛

2010年10月10日06時26分発行